
タカシと愉快的な学友共めひれ伏すがいい。

吏

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タカシと愉快的な学友共めひれ伏すがいい。

【Nコード】

N2566D

【作者名】

吏

【あらすじ】

麻島青果店から始まる日常的な物語。現実には小説より奇なり。

【8月31日】

【8月31日】

日は高く、日差しは暑く、セミの声がうるさく、夏らしい夏の日。立っているだけで汗ばむというのに、肉体労働なんてしていたら滝のように流れ出てくる。

「ったく、あっちいな」

ぎつちりと野菜の詰まった段ボール箱を置いて、一呼吸。首に巻いた手ぬぐいで額の汗をぬぐいながら、タカシはそう呟いた。いくらそう呟いても、気温は下がってくれない。

「ミカコさん、今日も暑いわねー。トマトちょうだい」

日傘を差したおばさんがふうつと息をついて、店先の横に置いてある長イスに腰かけた。開店当初から置かれてこの古臭い長イスだが、意外と買い物客には好評だ。

「毎度どうも。タカシ、ちょっとそっちお願い」

「あいよ」

タカシがトマトののったかごを取り、ざつとビニル袋にあげて移し変える。ついでに隣のキュウリを1本手に取り、それも入れる。

「300円です。キュウリはおまけっす」

「ありがとう」

タカシはおばさんから500円玉を受け取り、エプロンのポケットから出したおつりと一緒にビニル袋を渡す。

「毎日おうちのお手伝いなんかして、えらいわねー。うちの子に見習わせたいくらい」

「いや、ま、そうっすかね」

タカシは無愛想ながら照れてみせ、おばさんのビニル袋に更にキュウリを一本詰め込んだ。

「あら、どーも。もうね、うちの子ったら今日の今日まで宿題ため込んでやって……それでも遊びに行っちゃうんだから」

「はーは」

おばさんが笑いながら店先から離れていくのを、タカシは乾いた笑みで見送った。その背後にはタカシの母、ミカコが立っている。

「そういやタカシ、あんたは宿題終わっただんね？」

「いやー、もうちつと……だな」

「店、もーいーから、さっさと終わらせてきな」

ミカコは笑顔で言うが、声は笑っていない。タカシは反論した。

「もーいーわけねーだろ。まだ開けたばかりだし、忙しくなるのはこれからだろ」

「だからって、店の手伝いを宿題の言い訳にしてほしくないんだわ」

「んなまねしねーよ。単におれがバカなだけだ」

タカシのバカ正直な答えに、ミカコはふうっとため息を吐いた。

「それでも、高校行かせてやってんだから。勉強は学生の本分だよ」

「おれは学生と同時にこの麻島青果の跡取りだ。宿題の残りは店が終わったらやる」

ミカコに引く気はないが、タカシも頑として聞かずにダンボール箱の野菜をかごに乗せる作業を始める。その背中には誰に似たのか、頑なオーラをまとっている。

「仕方ないね」とミカコが折れた。

「あんた、配達行ってきな」

「配達？」

タカシはトウモロコシを手に、その動きをぴたりと止めた。ミカコは「そ」と続けた。

「配達先はトライアングル。あんたの同級生の家だから、ついでに宿題見せてもらってきな」

「おい、親がそんなこと提案すんのかよ」

「乗るの乗らないの？」

ミカコがにんまりと笑うと、タカシは既に汗だくで使い物になら

ない手ぬぐいを首からはずした。
「行く」

【8月31日】（後書き）

1話1話の構成はなるべく短く区切っております。気楽に読んでくださると嬉しいです。

【トライアングル】

【トライアングル】

タカシは配達伝票に書かれている野菜を愛チャリ・ライ号の荷台に載せると、前のかごに宿題を入れる。行き先は同級生の家で駅から少し離れたところにある喫茶店・トライアングルだ。

「これでいいか」

冷凍庫から取ってきたアイスクャンデーを口にくわえながら、店先のミカコに「いつへくる」と言った。それからぐつとペダルに乗せた足に力を入れ、ライ号を進ませる。愛チャリを走らせると前から後ろに風が吹き抜けて心地よく、汗ばんだ肌がすうっと冷えていく。口にくわえたアイスで水分補給も完璧、内と外の両方から冷やしこんで夏を吹き飛ばす。

片道15分。とつとと行くか。

麻島青果店は駅前のアーケード商店街からも、住宅街からも離れたところにある。1階が店舗で、2階は住居。よくある個人商店で、斗葉高校2年の麻島タカシとその母親のミカコの2人で切り盛りしている。

「……あー、トライアングルかー」

今更のようにタカシは配達先の店名をぶつぶつと呟く。その表情から、段々乗り気ではなくなってきたようだ。

せつかくの野菜が痛んじまう。

喫茶・トライアングルはタカシの通う公立高校の同級生の女子生徒、朝来野力^{あきの}ナの家だ。シェフの彼女の父親が去年脱サラして始めたというその店の評判はなかなかで、元々料理人になりたかったという父親の執念という意地がきらりと光っている。

「トマトにキュウリ、ナス、スイカ、オクラ、エダマメ、セロリ、カボチャ、ピーマン、スウィートコーン……夏野菜の目白押しだな」
ビニルハウス栽培のある今では旬など関係なく野菜は手に入るよ

うになったが、総じて旬のものの方が栄養価が高いとされている。
夏野菜と言つが、この時期のトマトは少しはずれているが悪くはない。

……全部使う気か？　これ。

喫茶・トライアングルの自慢メニューは季節のシチューで、今夏は夏野菜たっぷりのトマトシチューらしい。暑い陽気にほどよく冷房の聞いた店内で熱々のそれを食べれば、不快な夏バテなんか一気に吹っ飛ぶとシェフ豪語している。実際、その季節のシチュー目当てに通う客も少なくなかった。

「ま、流石にスイカをシチューには使わねーだろ」

タカシは注文伝票を見ながらぶつぶつ言っている。その店が近づくほど、勢いついていたペダルをこぐ力が弱くなっていく。既に食べ終えたアイスの棒を上下に揺らし、ついにタカシは愛チャリから降りて歩き始めた。

「くそあちいな、こら」

そう言うくらいなら、愛チャリから降りずにさっさと配達先へ行けばいいのに、タカシの足取りはそれに反して段々遅くなっている。何か配達先に行きたくないような理由があるのだろうか。

「……」

暑さに耐えながら自転車をこいでいると、見覚えのある男の後姿が見えた。こぐ足を速め、その男を抜いてから、首を後ろに向けて顔を確かめる。タカシが声を出すより、相手の方が早かった。

「おー、タカシ、配達ご苦労さん」

「……やっぱミツルか。あいつは一緒じゃないのか」

「んなこと言つな。噂をすれば何とやらって言うだろ。……今だけでいい。静かな時を過ごさせてくれ」

同級生の甲藤ミツルがそう嘆願すると、タカシは黙つて了承した。確かにこの暑い中で、更に熱いものをわざわざ呼ぶことはない。タカシはミツルの歩幅と速度に合わせて、横並びになって話す。

「別に合わせなくたっていいぞ。暑いんだし、さっさと終わらせ

てくれればいいだろ」

「いーだろ、別に。それにアイスあつから平気だつつの」

タカシが無愛想な顔が更にムスツとする。出かけにくわえたばかりのアイスも、もう棒しか残っていない。

「それで、お前はどこに配達行くんだ？」

「……………」

「どうした。言いたくないのか」

「……トライアングル」

「朝来野の家か。なるほど、それでか」

様子のおかしいタカシに心当たりがあるらしいミツルはにやりと笑うと、タカシは機関銃のように一気にまくしたてた。

「べ、別にカナと会つのは、お得意さんの配達がいやで足取りが重くなつてんじゃないぞ。逆だ、ぎゃ違うつてんだつ。た、ただ配達行くついでに宿題見せてもらえたらとか不純な動機で、力……朝来野の部屋にあがれるかもなんてとかそーいう気持ちかな」

「わかつたわかつた。よくわかつてるから」

うつかりぼろを出したとわかつたタカシはぶつぶつと「そんなんじゃないよ。ねーんだよ」とぼやいている。ここまで動揺してくれるなんて、やはり読みは正しかったとミツルは悟る。

「ていうか、今更だろ。学校でも配達でも会つてんだから、クラスメイトや顔見知り以上じゃん」

「うるせーよ」

それでも、まだ友達と言える間柄でもなかった。それはタカシの普段の無愛想かつ不良的な態度が現れているからだろつ、とミツルは思っていた。

「ま、頑張れ」

「……もうお前の宿題見せてくれや」

ミツルがタカシの肩に手を置くと、そう返ってきた。

「そうきたか。だが、俺の性格を考えればわかるだろ？」

「自分の力でやれ、面白けりゃ何でもいいし、かよ。くっそ、わ

かったよ」

ミツルににべなく断られ、タカシは黙るとちようど分かれ道に差しかかった。

「じゃ、俺はこっから図書館行くから。朝来野によろしくな」

「……そーか。わかった」

タカシはすうっと大きく息を吸い、一気に声として吐き出した。

「アンナアつ、ミツルは図書館に行くぞおおつ」

ミツルはタカシに文句を言う前に走り出し、その場から逃げ出した。

「なつ、お前、ふざけんな！ 腹いせのつもりかつ」

「おー、アンナによろしくなー」

タカシは上機嫌で道を曲がると、走り去るミツルの姿はもう見えなくなっていた。それと同時に、背後から誰かの歓喜の叫びと悲痛な叫びが聞こえた。

「20秒かかんねーのか。すげーな」

それだけ言うと、背後を振り返ることなくタカシは再び愛チャリにまたがり漕ぎ出した。トライアングルまでもう5分もかからない。

【野菜の日】

【野菜の日】

トライアングルについたタカシは一呼吸置いてから、汗を一通りぬぐってから店の扉を押して入ろうとする。しかし、この気温だと汗はぬぐってもすぐにじむ。野菜の箱を抱えて、早々に入ることになった。

「いらつしゃーい。……あれ？ 麻島君？」

同級生のカナが、家庭的なエプロンをつけたウエイトレス姿で出迎えてくれた。不意打ちを食らったタカシは視線をそらし、暑そうにばたばたと片手で襟を上下させ冷気を呼び込む。

私服姿見んのも久し振りだな、そーいや。

今の時間は客もおらず、シェフもどこかに出払っているようだ。

つまり、タカシとカナの2人きりらしい。

「野菜届けに来た」

「そっか。ありがと。お父さん、今出てるから代わりに確認するね」

「おう」

ぶつきらばうにタカシはそう返し、片手で持っていた重そうな箱を床に下ろした。カナはかがんで、床に置かれた箱の中の野菜と注文伝票を見比べる。野菜の受け渡しはこの店には裏口などないから、いつも表口から入るよう言われているのだ。

ま、カナなら大丈夫か。

届けられた野菜の確認作業はシェフが自らカウンターの奥や調理場でやるのだが、今の状況では仕方ない。注文内容と配送物の確認、痛んでいるかどうかぐらいはカナでもわかるはずだ。

「……うん？ なんか多いよ、これ。頼んでないやつとか頼んだやつが倍近くありそう」

「⁸³¹バツカ、今日は野菜の日⁸³¹だろ。サービス、サービスッ！ 文句あるのか！」

「そ、そうなの？　へえー、初めて知った。わかった。ありがとう。きつとお父さん喜ぶよ」

その言葉と微笑みにタカシはなんともいえない複雑な表情を見せるが、カナは気づかない。

「そういえば、麻島君宿題終わった？」

「あ、あ……いや……」

タカシが言おうとして言えずに終わりそうだったことを、カナはあつさりと言った。突然の言葉に、うまい言葉が浮かばないようだ。

「まだなの？」

「あ、ああ……」

「ふーん」

他に何か言うことがあるだろうに、タカシは言葉がせり上がっても途中で詰まってしまふ。涼しい店内だというのに、やけに汗が流れる。

「じゃあ、頑張つてね」

「おう」

タカシはカナに見送られ、ぎくしゃくと両手足をほぼ同時に前へ出しながら店の外に出る。扉が閉まるのと同時にドアベルがチーンと鳴った。

【出会い頭】

【出会い頭】

結局、あれから再びトライアングルを訪ねるということもなくタカシは帰路についていた。愛チャリを押して進ませ、前のかごに入っている宿題をがたがたと揺らす。

「……うし、まあどうにでもなれっ」

半ばやけくそ気味に独り言を呟くと、宿題の重みでバランスが崩れてがたと愛チャリが揺れる。ハンドルを押さえ込んでなんとか転倒は防ぐものの、前輪で小石をビシッとはじいてしまったらしい。

「ん」

勢いよく跳んでいったそれが、ちょうどミツルと別れた曲がり角に突っ込んでいくのが見える。いつの間にかここまで戻ってきていたようだ。

「あ」

タカシは見た。跳んでいった小石が、ちょうど曲がり角から来た人に直撃した。

「だ、大丈夫かつ」

慌ててタカシは駆け寄るが、当たり所が悪かったのかその人はばったりと倒れてしまった。タカシも悪いが、この人も運が悪い。

「やべ……」

ここで逃げ出すほど、タカシは根性の腐った男ではない。愛チャリでさえ放り捨て、その人の元へ駆け寄る。

「大丈夫か」

その人は……その子は小学2、3年生くらいの女の子で、センスはあまり良くないが高そうな服を着ている。どこかのお嬢様だろうか。

反応ねえな。

タカシが呼びかけても、軽く頬をたたいても返事はない。たかが

小石、されど小石。……完全にのびてしまっている。面倒なことになってしまった。

「……とりあえず、ウチに運ぶか」

幸い、頭は打っていないようなので動かせる。タカシは愛チャリの後ろの荷台に女の子を載せ、落とさないように急ぎ足で店へと向かった。

【拾ってきました女の子】

タカシは愛チャリに異変を載せて店に帰ると、まずは店番をしていたミカコが迎えてくれる。

「早かったね。しゅくだ……」

「わりい。今はそれどころじゃねーわ」

ミカコは目を見張り、荷台に載せられた女の子を見た。

「どうしたんだい。この子」

「小石をはねたらこいつにぶつかっちまった。奥で寝かせとくら」

「あ、ああ……わかった。何か冷やすものとか準備しようか？」

「いや、おれがやるから」

タカシはそう言って、愛チャリから女の子をおろして背負い、店の奥に入っていく。ミカコはそれを見て、ふうと息を吐いた。

「……また拾ってきた」

【それは突然だった】

【それは突然だった】

店の奥へ行つて寝かせる前に女の子が目覚め、背負っていたタカシを蹴り飛ばしたのは。油断も何も予期していなかったタカシはそのまま前のめりに倒れ、そこを更に女の子が足蹴にする。

「何をするか、この無礼者めがっ」

「無礼はどつちだ、コラ」

ドスのきいた声に女の子がわずかにひるみ、タカシは立ち上がった。

「まあ、思つたより元気そうで良かったけどよ」

「良かったではない。まずはひれ伏せ、平民」

女の子が小さいながらにふんぞり返るが、タカシはまったく動じない。むしろ、この唐突な展開にあきれてしまっている。

「……お前、この暑さで頭がどうかしちゃったのか？ それとも小石の打ち所が悪すぎてそうなったのか？ 何かのごっこ遊びか？」

「ますます失礼な平民じゃ。しかしまあ、このワシを恐れぬとは大したタマよのう」

女の子がにやりと見下すように微笑むと、タカシは更に微妙な顔をしてみせた。それがどうも女の子の気に障ったらしい。

「な、なんじゃその顔は！ ワシに小石をぶつけたことを謝らないどころか、反抗的なその目つき！ 厳罰ものじゃ」

「ああ、そうだった。悪かった。おれの不注意で小石をぶつけちゃって」

タカシはまだ謝っていないことに気づき、深々と頭を下げた。それを見た女の子は下げた頭に自らの片足を乗せ、タカシを見下す目に加えて勝ち誇った笑みを見せた。

「殊勝じゃな。身の程を今さら知ったか、平民」

女の子は更にタカシの頭を踏みつけたまま、ぐりぐりと押さえつ

ける。

この振る舞いに、今までこちらに非があるからと耐えたタカシも爆発した。

「何様のつもりだ、お前はっ」

タカシがぐんと首に力を入れると、片足を乗せていた女の子はその勢いにのって跳び、縦に2回転半ひねり、華麗に着地して見せた。

「はっ？」

踏みつけられ、首を押さえたタカシは奇声に近いものをあげた。

恐ろしく運動神経のいい、妙な動きをする女の子は不敵に笑っている。

「ふっ、言うに事欠いて何様じゃと？　又シこそ何様のつもりじゃ」

その物言いにタカシは怪訝な顔を見ると、女の子は堂々と言ってのけた。

「ワシは魔王様じゃ」

【魔王降臨】

【魔王降臨】

女の子は腕を組み、ふふんと笑って言った。

「ワシは魔王様じゃ。世間知らずの痴れ者め、恐れ多いぞ」

「あ、そう」

タカシのその淡白な表情と返答に、魔王様はむっとしたようだ。

「小石を当ててしまったことは謝る。だが、子供の遊びに付き合う気はねえぞ」

「ほう、信じぬというのか？」

「信じるも何も、魔王って何だよ。今、そういうアニメやってんのか？」

タカシと自称・魔王様の身長差は50cmはある。どう見ても威厳も何もない小学生の女の子の不可解な言動に、タカシは首をひねる。まともに考えることではないのかもしれないが、この女の子に妙に満ち溢れている自信は何なんだと声に出さず自問する。

「魔王は魔王じゃ。それ以上でもそれ以下でもない」

「それがわからんから家に帰れ」
「だ。アイスやるから家に帰れ」

タカシはあきれ果て、もう相手にしないことに決めた。さっさと家の冷凍庫からアイスクャンデーを押しつけて家に帰そうと台所の方へ向かう。

「……帰る場所など無い」

ぴたっとタカシの足が止まり、女の子を振り返り見た。そうして顔を見れば、ふいとそむけてしまう。タカシは自らの額に手の平を押しつけ、げんなりした。

「家出少女かよ……」

【ワケあり少女？】

「じゃから、ワシは魔王じゃと言っておろうが」

家出少女は何故かふんぞり返って、げんなりしているタカシの方を見る。

「ああ、くそ、とんでもねえもん拾っちゃった」

「聞いておるのか、平民！」

げしつと一撃、家出少女はタカシに蹴りを食らわせる。しかし、体重差もあつてかダメージは無いに等しい。それでも、挑発には充分だ。

「……わあーった。話聞いてやる。聞いてやるから、お前、部屋行つてろ」

「ほう、ワシに命令する気が」

「いいから、行け。ここ真っ直ぐ行つたところ、奥の部屋な」

タカシはシッシと手を払い家出少女を奥の部屋へ追いやってから、台所ののれんをくぐつた。

「アイス残つてんかな」

冷凍庫を引き開け、中を覗き込んであさって見る。

「あら、あの女の子はどうしたの？」

そんなタカシの横からミカコがアイスをくわえて顔を出した。気配に気づかなかつたものだから、思わず見つけたアイスを床に落としてしまう。袋入りだからセーフだ。

「……家出少女だった」

「あ、そ」

タカシがそれだけ言つと、アイス片手にミカコはやれやれとため息を吐いた。

「昔からアンタは色んなもんを拾ってきたわねー。血かしら」

幼い頃から目つきの悪いタカシがふるえる小動物を抱えて帰ってくる姿は滑稽こっけいでもあり、困ったものだったとミカコはしみじみと語った。

「よけいなお世話だ。とりあえず話聞いてやって、気がすんだら親に電話かけてやる」

「ま、それでいいんじゃない。なんなら、夕飯ぐらい一緒にどうかしらねー」

ミカコは適当に答えて、さっさと表の店に戻っていく。ここへはアイスを取りに来ただけか。

タカシは「さて、どうしたもんか」と呟きながら、見つけたアイスを手に持って、家出少女のいる部屋に改めて向かうことにした。

【魔王鎮座】

【魔王鎮座】

奥の部屋は和室で、畳と障子の部屋だ。家出少女は何となく日本人離れしていたが、たぶん大丈夫だろうとタカシは思う。

ま、死にはしねーよな。

タカシは足でがらりと障子を開けると、部屋のだ真ん中で置いてあった座布団をすべて重ねた上で堂々あぐらをかいて座っている家出少女の姿があった。まるで杞憂だったらしい。

「こら、ざぶとん一枚ぐらいよこせ」

「いやじゃ。何が悲しくて平民と同じ視線に座らんとイカンのじや」

今まで同様、かなり高飛車で傲慢な物言いだ。タカシはあきらめて、アイス一本を家出少女に渡してから自らも畳にじかに座った。

「これは何じゃ？」

「アイスクャンディ」

家出少女は渡された冷たいものを持って余しているのを見て、タカシは「いい。食え」と言いながら袋を開けて自分の分をかじった。それでようやく家出少女もその真似して袋を開け、食べ始めた。

「う、うむ、なかなかの美味じゃ。冷たくて甘いう。この暑気にはもってこいの菓子じゃ。ほめてつかわずぞ、平民」

「へいへい」

お褒めの言葉の後は一心不乱にがじがじべるアイスをなめるのを見て、やっぱり子供かとタカシはため息を吐いた。

「さて、お前の話を聞かせてもらうぞ」

「ふむ、いいじやろう。今のワシはご機嫌じゃ。何でも話してやるぞ」

やっぱり子供だ・単純で助かる、とタカシは安堵した。この分なら、すぐ親元に帰せるかもしれない。

【名前】

【名前】

タカシはまず聞いておかなければならないことを聞くことにした。

「お前、名前は？」

「魔王になった時、それ以前の名は捨てた。よって本名が魔王じゃ」

家出少女は興奮からようやく落ち着いたのかぺろぺろとアイスをなめながら、悠然と答えた。しかし、タカシは納得していないようだ。

「ふざけてんのか」

「ふざけてなどおらぬ。役割や階級がその者の名になることは珍しくないじゃろ」

「……」

タカシは頭を抱えると、家出少女はふふんと笑った。

「平民。又シの名を聞こうか。ありがたく思え。勇者以外の平民の名を魔王に覚えてもらえるなど、めったな幸運ではないぞ」

「今度は勇者か。おれは麻島タカシ。この八百屋の息子だ」

「タカシか。面白い名じゃ。ふっ、響きも悪くないのう」

「そりゃどうも。こちらとしては、さっさとお前の本名を教えてほしいものだな」

「タカシは物覚えが悪いのう。ワシは魔王じゃと言うておろうが」

家出少女はそう言いながら、とうになくなったアイスの棒を未練がましくなめ続けている。ずいぶん庶民的、かつ貧乏臭い魔王様だ。

「タカシ。これのおかわりを持てい」

「そんなに食うと腹壊しそうだから駄目だ」

「ほほう、魔王に逆らうとはいいい度胸をしているのう」

「脅しても無駄だ」

家出少女は「なんじゃ、つまらん」とアイスの棒をぴんと指では

じいた。タカシは「きちんとゴミ箱に捨てる」と言おうとアイスの棒を目で追おうとするが、床には落ちていない。おかしいと思い、きよろきよろと部屋の中を見ると、なんとかそれらしいものを見つけた。

……まさかアレがそうか？

それは天井に突き刺り、根元近くまでめり込んでいた。

【住所】

【住所】

たかが少女の指ではじいたアイスの棒が天井に突き刺さる。タカシは言葉が出なかったものの、これは家の老朽化だな、とすぐに気を取り直した。

「……で、お前はどこから来たんだ？ 住所は？ あんま遠くねーとこだろ」

まさかバスと飛行機を間違えて乗ってしまい、迷子になったわけではないだろう。

「遠い以前にこの星や次元とは違うところじゃ。こちらの星の発音にするとアルデピマジウムイダというところにおった」

「いい加減、アニメから離れる。それとも漫画か？ そのしゃべり方もそうなのか？」

タカシは凄みをかけた声で、家出少女をたしなめる。が、まったく気にしていないようだ。

「あいにく、本当のことしか言っておらんのでな。しゃべり方は自前じゃ」

「……ああ、そうかい。じゃ、警察に連絡して親御さんに来てもらう」

もうラチがあかない・仕方ないと思い、タカシは立ち上がる。家出少女は右手の人差し指をタカシの肩にちょんつと触れた。

「タカシ、ちと座れ」

「な」

家出少女がほんの少しその指先を下へ押したかと思うと、タカシの身体がきしんで派手に転んだ。それは圧倒的な力で、その身体のバランスを崩したのか。何が起きたのか、わからなかった。タカシは起き上がるうにも、全身の力が抜けているように動かない。いや、動けないのだ。

「お前、何しやがった……っ」

「……仕方ないのう。一から話してやる。魔王直々にじゃぞ。光栄に思ふのじゃな」

【アルデピマジウムイダ】

【アルデピマジウムイダ】

家出少女は未だ立ち上がれないタカシを見下し、話し始めた。

「ワシのアルデピマジウムイダには2つの種族がいた。ワシら一族とその他の平民共。魔王とはワシら一族の頂点に立ち、平民を統べる者の名じゃ」

「なに、何だ、もう一度言ってみろ……」

「アルデピマジウムイダ。ワシが元いた国の名、またはその次元の全てじゃ」

タカシはその身体をぐぐつと起こそうとするが、腕に力が入らない。魔王はそれを愉快そうに眺めつつ、話を続けた。

「魔王は一族を代表してアルデピマジウムイダに住まう平民共と広い次元すべてを支配し、それらのエネルギーを魔王たる者の器に徴収する。そして、魔王は自らの器に溜まったエネルギーを^{なか}眷族に分け与える。一族は平民のエネルギーを糧^{かて}としている為、平民なくして生きること出来ぬ。故に魔王はその絶対的な力を使い、次元や平民共を流行り病をはじめとする災害から護るのじゃ。まさに持ちつ持たれつの関係」

「ふざけんな。平民は飼い殺してみてえなもんじゃねえかよ」

タカシは膝を立て、何とか身体を起こすと魔王は微笑んだ。その笑みは馬鹿にしているというより、嬉しそうなものだった。

「そんなことはない。アルデピマジウムイダ中の平民共から毎日のように徴収するのじゃ。1人1人の負担は呼吸による疲労と等しい。ま、大規模な災害で魔王の力を酷使すれば徴収もだいぶ派手になるかの」

「今、おれの身体に力がいんねえのもそのせいだよ……！」

「ふむ。まあそうじゃ」

あっさりとそのことを魔王は肯定する。

「この甘いものをよこさぬというから、少々イジワルもしておる」
魔王は天井に刺さったアイスの棒を上目づかいで見ながら、人差し指で自らの前髪をくるくると回した。段々、話すことに飽きてきたのかもしれない。

「今の状況を見てみい。ワシはざぶとんとやらを山ほど所持し、タカシは1枚も分けてもらえぬ立ち位置におる。この場を見れば、力関係は一目瞭然っ」

ぎゅっと握りこぶしを固め、魔王は力説する。それからズビシと力なくあぐら座りをしているタカシに向けて指を突きつけ、言つてのけた。

「すなわち、ざぶとんをすべて所持するワシはこの部屋の主であり支配者同然。じゃから、ワシ以外の平民からなら好きにエネルギーを徴収出来るといわけじゃ」

「ぐ……」

身勝手な理論に反撃しようとタカシは魔王からざぶとんを取ろうとするが、またしても指一本でそれを阻まれる。

「支配している空間において、魔王は絶対的存在。思うままにその力を振るうことも出来るのじゃ」

魔王がくふふふと不気味に、愉快そうに笑う。タカシは不快そうに、再び倒れそうになるのを堪えた。

「……タカシは平民のくせに、勇者でもないのになかなか面白いぞ」

【勇者】

【勇者】

「勇者つて。いい加減、アニメか何かから離れてくれ……」

タカシは魔王の話在未だ信じることが出来ないでいる。震え、揺れる身体を抑えながらタカシはそう悲痛な声をあげた。しかし、魔王は聞いていない。

「ウム。勇者とは……もし魔王が平民をいきすぎた支配で苦しめた時、または年老いた魔王の世代交代が近づいた時に平民の中から種族の突然変異と呼べる勇者という存在が複数人現れる」

むうと下唇を少しだけ尖らせ、やや不満ありげな魔王の表情をタカシは見た。

「そやつらは『魔王』という存在やその力に対して絶大的な抵抗力を持つており、現時の魔王はそやつらに始末される。……抗えども、次元のどこへ身を隠そうとも、必ず見つけ出され倒される。これまでのアルデピマジウムイダ史が物語り、例外はない」

「……勇者つてのがただけスゲーのかわからんが、なにも引退寸前の魔王を手にかけることもねえだろ」

いつの間にか話に乗ってしまっているタカシだが、それは魔王の話なさつたと終わらせるにはと思つてのことかもしれない。

「魔王になつた者は寿命で死ぬことは許されぬ。他の眷属とは違い、その身の内にある器に残存したエネルギーを肉体の死と共に暴発させてしまうからじゃ。じゃが勇者に倒された時のみ、エネルギーは現時なる魔王の魂と共に次なる魔王の器へと移行する。いわば魔王継承の儀式・儀礼みたいなもんじゃ……な」

そう言う魔王の顔はわずかに歪んでいた。ほんのわずかに湿り気を帯びた空気に、タカシは何も口には出せなかった。

「魔王を倒し、巨大なエネルギー移行の媒介となる勇者共は死ぬ。どれだけ若く力を持つとうとも、元は平民。耐え切れるものではない」

「そうやって次世代の政が開けるのじゃ」と魔王は感慨深げにつぶやく。

何かバツの悪そうな表情を見せ、魔王はその顔をふいとそむけ、タカシから視線をそらした。

「……ちよつと待て、お前、魔王なんだろ」

「先程からそうじやと、何度も言うておろうが。現にワシの力に屈服したではないか」

魔王の力か何かのせいで思うままに動けないタカシが、反論を試みた。

「まあ仮にだな、お前が本当に魔王なんだとしたら……どうしてこっちにいるんだ？ 何で来た」

タカシの言葉に、魔王の力がわずかに弱くなった気がした。

【核心】

【核心】

魔王が元いた次元から、わざわざこちらに来た理由について、まだ話してもらっていない。次元とやらを超えた侵略だろうか、とSF染みた思考がタカシの脳裏をよぎる。

「……勇者がいなくなったからじゃ」

「いなく、なつた？」

タカシは魔王をじろつと睨みつける。さっきまで言っていたことと違うのではないか。

「正確に言えば、平民が滅亡し、勇者が現れることがなくなった。それに伴って、糧を失ったワシの眷族も魔王であるワシを除いて……すべてが滅んだのじゃ」

魔王は自嘲気味に言う。タカシの目を真っ直ぐに見据えながらも、ぎゅうつと自らの服を握り締めていた。かすかに震えているのわかる。

「先代の魔王は祖父じゃった。賢魔王と平民から呼ばれるほど、良き支配者じゃった。それでも……寿命が訪れる前に、慕い慕われてきた平民が勇者共にその胸を突き刺され、心臓を抉り出されて、握り潰されて息絶えた。ワシの目の前で……のう」

目下のタカシよりも遠くを見るような魔王の目、震えた口調、悲痛のような魔王の叫びが聞こえた気がした。

「……頭の中では理解しておった。それでも、ワシは受け入れたくなかった」

魔王継承の儀式・儀礼。目の前で血の繋がりのある者が殺される現実。受け入れがたいのは当然だろう。

「じゃが、そんなことは言っていられなかった。勇者を通して祖父の魂がワシを次の器に選んだ」

ためらうことなく、そのすべてを受け入れた。先代魔王の魂と膨

大なエネルギーを以って魔王の名を捨てさせ、次なる器が魔王にした。

「ワシがすべてを受け入れ、魔王を継ぐまでのわずかな時間」
たったそれだけのことを言っただけで、魔王の表情が一変した。
哀しみから憎しみへ、その表情を一変させた。

「その間に、平民共に強力な疫病が流行った。ありえんつ。ワシが魔王の力を振るおうとした時には既に遅く、すべての平民に発症し……どうすることもなく絶滅させてしまった」

その声を途中で荒げるほどアルデピマジウムイダ史においても、ありえるはずがない。前代未聞の事象だった。

魔王にとって力を振るえなかったことよりも何よりも悔しかったのは、祖父から託されたすべてを無為にしてしまったことだった。

「平民という糧を失い、徐々に弱体化していく眷属もまた……魔王であるワシ以外を残して全滅した。必然的に、強制的にアルデピマジウムイダ史の幕は下りた」

……初めてかもしれない。魔王はタカシの目を見据えた。

「ワシ以外、誰1人として、生き残らなかった。……魔王は他の眷属とは違う。平民のエネルギー以外の糧でも生きていける」

魔王はざぶとんの山からふわりと降りて、タカシを見上げた。

「じゃが、すぐに飽きた。何もおらんのでは、支配も何もあったものじゃない」

誰も、何も存在しない支配下の次元・国。それは支配とも何とも言わない。孤独。そして、「1人はいやじゃ」という魔王の悲鳴が今にも聞こえてきそうだった。

「お前は……」

力無き平民と魔王の眷属に選択権も無く、力得た勇者は魔王を葬る義務を課せられ、力ある魔王は支配民ある限り放棄すること許されず。

「ワシはあの次元から脱け出した。祖父から託されたエネルギーを使って、魔王の力で次元の壁を超えた」

【乗り越えた先に】

【乗り越えた先に】

何があるかもわからない未知の試み。魔王の次元脱出などアルデピマジウムイダ史にも前例がないことだ。それでも、魔王は一步踏み出すことを決めた。

……ただ、ここ以上に何も無いことはない。そう信じて。

「そうして、ワシはここに来た。アルデピマジウムイダと隣り合った次元に」

魔王はすうと一息吸い込み、胸の内でそれをとどめる。

「思った以上じゃった。何より嬉しかったのは、支配するべき平民がいたこと」

いけしやあしやあと言つてのける魔王の表情はアイスを食べている時と同じぐらいきらきらと輝いていた。

「ちよつと待った。お前の言う平民とおれ達は違うだろ」

「否。ほぼ同じじゃ。タカシで試してみて、感覚的なものから確信に変わったぞ」

「おい」

そんなことで平民と断定されても困る。魔王は「隣り合つた次元は何かしら似てくるものじゃ」とわけのわからない理屈を述べた。

「まだ平民の生活文化には慣れておらんが、この国の言語はほぼ体得した」

いや、タカシはまだ魔王を異次元人と完全に認めたわけではない。その魔王の容姿だけなら、少し風変わりな帰国子女といったところだ。

「失敬な。この威厳と気品に満ち溢れたオーラを感じぬのか。タカシは不感症か」

「……わかつて言つてないだろ、お前」

タカシは眉をひそめ、何か違う魔王の日本語を指摘する。

「というわけで、タカシ、お前をワシの付き人にする。この家に住まわせる」

「断る」

魔王は本気でショックを受けたようだ。タカシは憤然として言った。

「話は聞いていたが、にわかには信じられん」

「なっ、それでは何も話を聞いていなかったのと変わらんではないか！」

まさにその通りだ。タカシは肯定するようにならずいた。

「……っ」

魔王の表情が哀しみ、怒り、そして諦めのものと次々に変化していく。

「もうよいつ。平民をアテにしたワシが愚かじゃった！」

くるりときびすを返し、魔王がタカシに背を向けた。

【呟き】

【呟き】

タカシに背を向けた魔王の背は、先ほどの自信に満ちたものとは大違いだった。なんて小さな背中だろう。

その背中よりも、もっと小さな声で呟いた。

「……ワシの話を最後まで聞いてくれたのはタカシが初めてじゃ」
次元移動から今日この時まで　話を聞こうともせずに魔王の振舞いや言動に戸惑い、逃げる人々。同情を受けても、他の誰からそれを無為にされた。

「菓子まで馳走になったのに力を振るって悪かったのう……ふざけが過ぎた」

ゆつくりと、一步一步部屋の外へと進む。魔王の足取りは、何かを期待しているかのようで。

情けない。

それはわざとらしすぎて、魂胆が見え見えとも取れる行為。……

魔王は恥じた。

「失礼する」

魔王はまた進む。今度は力強い足取りで。既に迷いや未練は断ち切って、部屋の障子に手をかけた。

「夕飯食ってけ」

「要らぬ」

魔王はぴしゃんと障子戸を閉めた。が、影が部屋の内側に透けて見える。

まだいる。

タカシもくると障子戸から背を向けた。背中越しに何となく感じる魔王の気配。

「……そういえば、ワシはタカシに小石をぶつけられたのう」
そうぼそりと魔王が小さく言っていると、タカシは少しむっとした。

「あやまつたろうが」

「愚民め。あのようなあやまり方では、仮にも魔王であるワシに對しての誠意が足らん」

タカシはぶすつとしながら、ぶつきらぼくに返した。

「……なら、おれはどうすればいいんだ」

透けて見える影は口調とは裏腹に、まだ小さく見える。

「うむ。万能のワシと違って平民に出来ることは限られておる。

ここはひとつ、どうじゃ。……精一杯の食事ともてなし、宿の提供で許してやろうではないか」

タカシは眉をひそめ、しかし安堵の息を吐いた。

魔王の話が本当なら……愛されていた祖父に愛していた平民に殺されるのを間近で見た後、迷う間もなく最高位の支配者・魔王の継承。護るべき平民と眷族の滅亡。誰もいない次元^{せかい}での孤独。

「……」

そんな小さな身体でよくここまで背負ってこれたものだ。いや、背負いきれなくなったから生まれ故郷である次元を、無理やり魔王の力で飛び出してきたのだ。

いや、マジで信じがてえよな。

それでも、魔王の誇りや尊厳を失ってはいけなさと意地をはる。魔王たるもの、同情やほどこしは受けず、ただ欲さずとも与えられて当然でなければならぬ・というのだ。

なんてメンドくさいヤツだ。

タカシは後悔した。何の因果で、こんな魔王と引き合わされたのだろうか。だが、乗りかかった船だ。それが泥舟が宝船か、降りるかどうかはもう少し様子を見てから決めてもいい。

「わあーったよ、魔王」

「様を付けんか、愚民」

タカシが再びくると向きを変え、障子戸の方を見た。それと同時にタカシの目の前で魔王が勢いよく障子戸を踏み倒し、ふふんと胸をはっている姿があった。

「しかしながら、殊勝な心かけであるぞ。のう、タカシ」
破いた障子戸の上で偉ぶる魔王にタカシはその頭をげんこで叩いたのだった。

【部屋のなかの2人】

【部屋のなかの2人】

「ぬう、タカシは乱暴者じゃあ」

「人の家を壊すやつが何を言うか」

魔王は叩かれた頭を抑え、じろりとタカシのことをにらみ続けている。その涙いっぱいの眼光の鋭さは人を射殺せそうだ。いや、魔王なら本当に実現可能かもしれない。

タカシはがたがたと音をたてながら、魔王が踏み倒した障子戸をはめ直している。

「……これでよしと」

はめ直した障子をスライドさせ、具合を確かめる。破れた障子紙も張り直さなくてはいけませんが、タカシはやったことがなかった。そもそも、ここ数年で大掃除でも貼り直した記憶が無い。

「しかたねえな」

「む、どこに行くのじゃ」

魔王が頭を抑えながら、がらりと開けた障子戸の向こうに行ってしまうタカシを引き止める。その顔は不満たらたら、行くなと目で訴えている。

「母ちゃんにお前のことを話してくんだよ。だから、おとなしく待つてろ」

「……そうか。なら、致し方ない。部屋の退出を許可する」

「へいへい」

どこまでも支配者を貫く気が。それとも寂しがり屋なのか、とタカシはにやりと笑う。

「　　っ！　もうよいっ、さっさと行ってしまえ！」

「おー、行くともさ」

その笑みに何を感じ取ったか魔王が強制退出を命じた。タカシはあきれながら、魔王に「これ以上、部屋壊すんじゃないぞ」と釘を

刺しながら、部屋を出た。

【とりあえず】

魔王を部屋に置いてきたはい。しかし、この後のことは何も考えていなかった。常識的に、身元も素性もわからぬ少女を家に泊めると言うのか。とりあえず話してくれた異次元の話で、ミカコを納得させることが出来るのだろうか。

「無理だな」

タカシはそうあっさりと認める。やはり断るべきだったか。まともに対応したから、向こうもつけあがってしまったのかもしれない。いや、まともには微妙なところだ。

「どうするかな……」

【……で、何が無理なの？】

【……で、何が無理なの？】

「なにつて……」

店先でぼかんとするタカシに対し、ミカコは笑っている。

いいのか、それで。

悩んでも仕方ないと言わんばかりに、タカシは唐突に今のところ理解しているすべてのことを打ち明けることを決めた。そして、客足の無い店先で思い切ってミカコに話しきった後の一言がこれだった。

「マジでウチに泊める気か」

「なにさ、あんたが言ったんじゃないか」

「そりゃそうだけだよ……。もつと魔王のことで反対するとかねーのかよ」

タカシはミカコに言ったことを自ら否定しだす。ミカコはそれを聞くと、ふつと微笑んでみせた。

「息子のあんたが決めたことだ。親の私は反対しないよ」

「どういう理屈だよ」

「信用してるってことさ」

ミカコはにかつと白い歯を見せると、タカシはあきれている。これがまともな親かと言わんばかりに、あきれかえった。

「じゃ、もうそろそろ店じまいして、夕飯でも作るかね」

店頭に並ぶ野菜はまだ残っているのに、沈む陽と共に客足は途絶えてしまった。ミカコは背伸びし、閉店の準備に入る。タカシは「あーあ」とひとつ息を吐き、ミカコと一緒に片付けを手伝う。段ボール箱を持ち上げたところで、ミカコが制した。

「あんたはその子んどこ行つてな。こっちに手伝いはいらなくてーの」

「はあ？」

「……まあ、あんたの言う通り、その子の言う次元だとか何とかわけわかんない。家出の言い訳にでたらめ言ってるのかもしれない。でも、わかるのはその子が不安だってことさ」

それはわかる。タカシの目からでも、その言動から見て取れた。

「なら、誰かついてやった方がいいだろ。片付けは私1人で充分さ。なにせ、あんたの図体がここまで大きくなるまでずっと1人でやってきたんだから」

そう言われてしまうと、タカシは反論することが出来ない。一時期は「こんな店、誰が継ぐもんかつ」とつつばねて、ミカコと1年近くも口を利かなかったこともあった。こういう風に手伝いを始めたのも、今年に入ってからのことだ。

「てなわけで、とつと行った行った」

シツシツと手を払い、タカシを追い払う。タカシの方はまた魔王につき合わされるといふことで、乗り気ではない。逆にミカコはほんの少しだけ額にしわを寄せつつも、嬉しそうだった。

「久し振りだね。3人で夕飯を食べるのは」

タカシは何も返さなかった。

【ここは平和と喧騒に満ち溢れ】

【ここは平和と喧騒に満ち溢れ】

タカシが部屋に戻ると、崩れた座布団の山に埋もれて魔王はすやすやと眠っていた。

不安も何もねえじゃん。

あきれつつだるそうに、魔王のことを起こそうかと思ったがやめた。魔王のほほに触れる寸前で、気づいたからだ。その一筋の涙に、気づいたからだ。

「……」

何からくるものなのかは、まだタカシにはわからなかった。それでも、タカシは魔王を改めて認識した。そして、とりあえず夕飯の支度に邪魔だな と思った。

【どこか何かがとんでいる】

「おら、起きろ」

タカシが寝ている魔王を足で揺り起こす。ミカコがそれを見てタカシをたしなめた。

「む、むう」

魔王は眠たい目をこすり、きよろきよると辺りを見回した。

「ここはどこじゃ」

「寝ぼけてんのか、おい」

そう言われ、魔王はむっときたようだ。

「そんなことはないぞ、そんなことは断じてないっ」

「あーそうかい。わあーったわあーった」

「ずえーったいわかっておらぬっ」

くだらない言い争いにミカコは「何やってんだい」と間に入った。魔王は寝起きもあってか、まだ少々不機嫌な様子だ。

「なんじゃタカシか」

「夕飯の時間だ」

魔王がふと見れば山ほど積んだ座布団は片付けられ、部屋の中央にちよこんと丸テーブルが置いてある。もの珍しそうにそばに近寄る。

「なんじゃ、これは？」

「折りたたみ式のちゃぶ台だが文句あるか」

「ここで飯を食うのか？」

「まあな」

台所から料理の載った大皿や炊飯器からわざわざ移し変えたおひつだとかを持ってくる辺り、近代化された平成の食卓には思えないだが、なんだか魔王は嬉しそうだった。

「そういや、お前、普通の飯は食えるのか」

「うむ、食えるぞ。眷族とは違うからのう」

「そう、それなら魔王ちゃん、いっぱい食べてね」

ミカコはにつこりと微笑むと、魔王もにかつと笑って言った。

「もちろん、そのつもりじゃ。なにしろ、久し振りに食べる食事じゃからな」

「ちよつと待て。お前、そういえばいつからこつちに来たんだ？」
その間、いったいどうやって過ごしてきたのか。また魔王の力とやらで何とかしたのかと、タカシの問いに魔王はふんぞり返って答えた。

「おぼえておらぬ」

「は」

「次元を乗り越えるのはやはり難儀であつての。その前後の記憶がどうも曖昧なのじゃ。朝が来たと思えばすぐ夜になる辺り、記憶がたびたび飛んでおるのかもしれん」

ふんぞり返る魔王にタカシはため息を吐いた。もしかして、小石程度がぶつかって倒れたのもそのせいなのか。

「まあ、大して気にしておらんがな」

「いや、そこは気にしとけ」

「漫才はいいから食べなさい」

2人のやり取りにあきれたミカコがそう言うと、魔王はふいつとタカシから顔をそらした。勝敗もつかぬまま終わるのはしやくに障るのだろつ。しかし、そらした視線の先でちやぶ台に並べられている温かな食事を見ると心なしか魔王の表情が輝いた。

【いただきますとごちそうさま】

【いただきますとごちそうさま】

「ま、食え。残さずな」

タカシがどっこいしょと、自分の場所に座る。魔王も自分の席だと思われる位置に腰を下ろすと、ミカコが茶碗にご飯をよそってくれる。

「おお、これが白米とやらか！」

「知ってんのか」

いや、それにしてもニュアンスがおかしい。魔王にツッコんで聞けば本や辞書などの文字媒体とそれらしきものを指し示している口の動きを真似ることで日本語を覚えたため、実物を見て覚えたわけでもないらしい。

「ずいぶん無茶苦茶な覚え方をしたもんだな。いや、それでそこまで話せるのは大したもんだ」

「ふん。当然じゃ。頼る者などおらんからな。すべて1人でこなしてやったわ」

魔王はぎゅっと箸を握り締め、どすつとご飯茶碗に突き刺した。それでは仏様のお供えだ。

「箸はこう持つんだ」とタカシが手本を見せると、魔王は5秒ほどその動きを見ただけでマスターしてしまった。この学習能力には感服する。それから魔王はとりあえずすべての皿のおかずを一口ずつ食べ、その表情をこころ変化させたかと思うと箸を置いてしまった。

「どーした」

「この甘いのと白米は食べてやろう。しかし、他は駄目じゃ」

「甘いのはにんじんのグラッセのことか。おいおい、メインはハンバーグだぞ」

タカシは魔王のことをじっと見た。

「アレルギーの問題でもあるのか？」

「ワシの嗜好の問題じゃ。甘いだけもらう。他は食わぬ」

「そんなわがまは許さん」

タカシは魔王の前に置かれたご飯も味噌汁もすべてお盆に載せ、立ち上がる。その行動に驚き、魔王は慌てた。

「ま、待て。ワシの食事をどこへ持っていくんじゃ」

「食わないんだろ」

「……っ！ 白米とにんじんは置いていって構わぬ」

「駄目だ」

「ワシは魔王で客人じゃぞ」

「ああ、そうだな」

魔王は抗議としてか、ぎつとにらんでその伸ばした足や手をばたつかせる。

「そんなことしてもダメだ。涙目も効かん」

タカシはあくまで非情だ。魔王はミカコに助けを求めようとしたが、その態度はタカシとほぼ同じだった。

「おぬしの方がよほど横暴じゃ」

「……いいか。この野菜は農家の人が丹精をこめて作ったもんだ。俺たちがうまくて栄養のある野菜を食っていけるのはその人たちがいるからだ。感謝もせず、それらを無駄にするようなこと、馬鹿にするようなやつに食わせる飯はウチにはない」

「目の前にあるじゃろ」

「やらん。全部、俺が食う」

タカシの言葉に魔王はにらみ続け、負けじと立ち上がった。

「……」

「魔王と平民は、持ちつ持たれつの関係って言ってたな。お前に魔王の経験が無くて、お前の爺ちゃんを見てそう思ったんだろ」

「む」

魔王は祖父のことを引き合いに出され、その言葉を素直に肯定する。

「そこに感謝の気持ちは生まれなかったと思うか。お互いが利用しあっていただけの、本当にそれだけの関係だったと思うのか？」

「う」

「違うだろ。そうでなきゃ、今までお前の爺ちゃんが愛されてたわけねえだろう。きつと、一方的じゃなかった」

魔王はタカシをじいつとにらみ続けている。その視線の先には温かな食事もあった。

「……」

「……」

「食べる」

「ん」

魔王はぼつりとそう言うと、タカシも小さくうなずいた。

「食べるぞ。ワシはハンバーグもにんじんでも食すぞ」

「そうか。なら、許す。悪かったな」

魔王がどかつと乱暴に腰を下ろすと、それを一言また注意してからタカシは食事を並べ直した。

「アレルギーの問題なら目をつむるが、好き嫌いは認めん。つー

か、ハンバーグが嫌いなガキなんて初めて見たぞ」

「つたく、あんたも乱暴者だねえ」

ミカコはそう笑うと、タカシはじろつとにらみつけてから、ようやく自分の食事にも取りかかった。魔王はその横でハンバーグを眉をひそめながら、むぐむぐと食べている。タカシの無愛想な顔とあいまりおかしくてたまらないのか、ミカコは笑いつぱなしだ。

魔王はハンバーグを先に食べ、ごっくんと飲み込んだ後にぶつぶつと文句を言った。

「ぬう……おぬしのそういうところだけはワシの祖父によく似てる」

「……そうか」

【お約束】

【お約束】

ちゃぶ台に載っていた料理がきれいになくなり、食後の日本茶を入れる。魔王はこれも苦手だったらしく、顔をしかめていた。

「苦いか」

「うむ。じゃが、ワシは全部飲むぞ。飲んでやるわい」

これはもはや意地だ。魔王の頑張りっぷりを見て、ミカコは冷えたようかんをお茶づけに持ってきた。

「これ、いただきものなんだけど」

「むむっ」

苦いお茶に難儀していた魔王の手が早速ようかんに伸びた。一口食べ、気に入ったらしく2つ目に手が伸びる。それも食べ終えすぐさま手が伸びたかと思うと、ぴしっとタカシの手刀で打ち落とされた。

「少しは落ち着け」

「ぬう、やりおる……」

魔王はようかんから目を離さずに、お茶を再び飲むとその相性の良さに目をくりくりとさせた。

「ところで、お前、湯船につかる習慣はあるよな？」

「風呂のことか。こちらでは水浴びしかしておらぬな」

タカシは眉をひそめ、ミカコと目配せした。

「……そうか。なら、先入ってこい」

「ぬ。タカシと一緒に入らぬのか」

「お約束の返答ありがとう。狭いからおれは後でいい」

「つまらん。狭くても良い。お供せい」

「断るつつてんだろ。聞き分けねえな」

タカシが今まで以上に頑ななので、魔王は何か察したようだ。

「はーん、さてはタカシ、おぬし照れておるな」

「誰がっ」

「案ずるな。平民のタカシと魔王のワシとでは蛙と人間ほども種族に格差がある。この2つが恋愛・思慕の関係を持つなどとあり得ぬことよ」

魔王はタカシのことを完全に見下し、高笑いしている。それにはムカついているようだが、タカシは何も返そうとはしない。そこへミカコがフォローを入れた。

「私が一緒に入ってあげるから、今日のところは勘弁してやんな」
「む。わかった。じゃが、次は一緒に入ってもらうぞ」

「入るもんか。ていうか、なんでお前はおれと一緒に入りたがるんだ」

「蛙がまともに風呂に入れるのか見てみたくてな」
「ちよつと待て、コラア！」

タカシが吼えるが、魔王は平然としている。ミカコはそれを面白そうに見ていたが、頃合を見計らって魔王の手を取り風呂場へ案内する。

「魔王ちゃんの部屋つくつといてあげなさい」

「わーってるよ。魔王、風呂場ではしゃいでどーなっただって知らねーからな」

「ふん。ワシはそんな愚かではない」

「どーだか」

タカシは意味ありげににやりと笑うと、魔王はむむつと何やら警戒を見せる。ミカコの手引きずられるようにして部屋を出て行くと、タカシはようかんをひとつつまんでから片付けに入った。

まとめて台所の流しに入れると、ふと悲鳴に近い声が聞こえた。風呂場の方だ。

「……さて、2階行くか」

タカシは無視して、タカシやミカコの部屋がある2階へ上がることにする。

【おれの部屋の隣のこころ】

【おれの部屋の隣のこころ】

「魔王の部屋にした」

「別にいいわよ。空いてたんでしょ」

タカシとミカコは足元のそれを見ながら、会話する。

「ついでに布団も適当に持ってきて、敷いておいた」

「いい判断ね」

ミカコが掛け布団の色を気にしていると、タカシはしゃがみこんでそれに言った。

「うちはちよいと手入れが面倒なひのき風呂でな。もの珍しがつて殆どのやつがはしゃいで、大体が滑って転ぶんだよな」

「うう」

魔王は悔しそうにタカシのことを見上げている。転んだ上、どうやらのぼせているらしく、反論も何も返ってこない。

「そーいやコイツの服はどうしたんだ？」

「あんたの小さい時の服だよ。色気のない男もんで悪いねえ」

それでもシャツやパジャマならばそう気にするほどでもないだろうし、魔王自身も何も言わなかったから良いだろうとミカコは言うが、のぼせた状態で嫌とはつきり告げられるわけがなかった。

【寝る前にすること】

「……あとで歯みがきはしろよ。ウチのせいで虫歯になったと言われても困るからな」

タカシはそう言って、「おれもさっさと風呂は入って寝るか」とあくびした。

「待ちな。あんたは宿題も残ってるでしょ」

ミカコの鋭い突っ込みにタカシはぴたりと止まった。完全に忘れていたといった感じだ。

「……勘弁してくれよ」

魔王の世話に半日近く費やされたタカシの悲痛な呟きだった。

【9月1日】

【9月1日】

「おはよ」

くあつと大あくびをしながら、既に制服に着替え終わったタカシが1階に降りてきた。台所に顔を出したが誰もいないので、もう店の準備をしているのだろう。

「……ああ、つたによ」

何やらぶつぶつと文句を言いながら、表に出てみるとちょうどミカコが業者から仕入れた野菜を冷蔵庫に入れているところだった。

「おはよう。宿題は終わったのかい？」

「あー、まあなんとか」

タカシはそう濁すと、ミカコは苦笑した。

「ま、信じてあげるよ」

「どーも」

会話している間もミカコは手を休めない。タカシは仕入れた野菜をひとつ手にとってみる。

「……今日からまた1人か。倒れねー程度にやれよ」

「客商売でそんなこと言っちゃいけないって」

ミカコは手をひらひらとさせてかわすが、女手ひとつで店を切り盛りするのは相当キツイ。というより、休むひまなんてない。疲労ひそつ困憊こんぱいで実際に倒れてしまったこともある。そうならないよう充分な人手を入れればいいのか、最近は思うように集まらないのが現状だった。

「なんなら魔王に手伝わせろ」

「あははは。それよりあんたは学校行っておいで。昼はどうすんだい。帰りは早いのかい？」

「今日は始業式だけど……授業あるから、適当に購買で食つよ」

「そーかい。んじゃ、行ってきたな」

「おう」

タカシは学生カバンを右肩に乗せ、さっさと歩いていく。ミカコに一声かけられ、振り向くとビニル袋に入ったトマトとキュウリが投げ渡される。タカシはうまく左手でそれを受け止めた。

【通学路】

【通学路】

麻島青果店からタカシの通う公立高校まで歩いて20分強かかる。自転車通学許可を貰えるのは歩いて30分以上かかる生徒だけだった。勿論、学校側に内緒でそれをしようとする生徒も何人かいたが今は皆無だ。

「あゝ、だりい」

自宅を意気揚々と出てきたはいいが、やはり慣れない勉強と徹夜をしたせいか眠くて仕方ない。しかし、このまま学校をサボるうにもサボれない理由がある。

タカシはビニル袋の中のトマトをひとつ手に取り、そのままかじった。じゅわつとしみでる果汁で少しだけ目が覚めた気がする。

「よお、タカシ。昨日はよくも売ってくれたな」

「タカシイッ！ 昨日はありがとうなああ、感謝してるぞおおっ！」

10分ほど歩いたところで、朝っぱらから騒音と愛を撒き散らすバカップルのご登場だ。

「ったく、やかましいぞ。アンナ」

「すまあああんっ、だがああ！ かしいいっ！ このミッルを愛する気持ちはご近所迷惑も考えないのだからああああっ！」

「あーもー勘弁してくれ」

アンナに抱きつかれ、耳元で叫ばれるミッルはぐったりとしている。タカシはなるべく他人のふりをしようと努めるが、もはや無意味だろう。

「タカシイッ、何を食べているのなあっ！」

「お前らも食つか？」

タカシはひよいひよいとトマトとキュウリとミッルとアンナに投げて渡す。受け取った野菜を2人はしげしげと眺めている。

「もしかしてこれがお前の朝食か？」

「まあな」

「ヘルシーで素敵じゃないかあつ！ さすが八百屋の息子おおっ！」

「別にそういうわけじゃねーけどな」

タカシは空になったビニル袋をくしゃくしゃにしてポケットに突っ込んだ。と、そのわずかな隙に公道の真ん中でキュウリ de ポツキーゲームをやるうとするアンナをすぐさま止めた。ここまでくると流石に振り回されるミツルに同情する。

「先行くぞ」

タカシはこれ以上は付き合っていられないと判断し、2人を置いて行こうとした。その行動の何がアンナの闘争心を煽ったのだろうか。

「負けるかあつ！ ミツルウウウウ、走るぞおおおおおとおっ！」

「ちょ、ま……」

ミツルの声と姿は、アンナの巻き起こす砂ぼこりと共にその場から流れるように消えていった。公道で何故そんなものが起きるのか、タカシにはさっぱり理解出来なかった。

まあ、今に始まったことじゃないか。

タカシは舞い上がった砂ぼこりを払いのけ、また歩き始めた。朝から異様に疲れる2人に出会ってしまった。しかも、あの2人が同じクラスと隣クラスというのは2学期初日から気がめいる。

【人違い注意】

【人違い注意】

「なあに沈んだ顔してんだよんつと」

背後からいきなり背中を叩かれ、タカシが顔をしかめた。

「つてえな、ハヤミ」

「おお、顔見なくてもわかるんですねっ」

「こんなことすんのはテーマーしかいねーよ」

タカシの言葉に、その横で軽快に笑う女子生徒は1年生の駿河八^{するが}ヤミだった。

「いやあ、照れますねっ」

「ほめてねえよ。それよか、お前は……朝練か」

「はい、今してるところです」

タツタツタツとテンポよく足踏みをしながらハヤミは答える。

鞆^{カバン}も持たず既にジャージを着ているところから察するに、いったん学校に行ったのだろう。それから朝練としてこら辺を走り回ったようだ。

「だって、陸上部ですから」

「あーそうかい。勝手にやってろ」

「はい、やってます」

にこにこ笑うハヤミは本当に楽しそうだった。

「それより、麻島先輩こそ遅刻しますよ？」

「あ？」

「ほら、始業式まであと7分」

ハヤミは自前の腕時計を見せると、タカシは目を見張った。余裕があったと思っていたのだが、あのバカップル漫才につきあったせいかもしれない。もしかしたら、急にあの2人が走り出したのこの所為だったのか、とも思える。

「げ」

「このままじゃ間に合いませんよ」とハヤミは首をかしげる。確かにタカシの足では間に合いそうにない。

「あ、じゃあ引つ張ってってあげますよ」

「は」

ハヤミはタカシの右手を取ると、本当にそのまま走り始めた。力も強く、こうなるとつられて走らざるをえない。あまりの勢いにつんのめりそうだった。

なんで、おれの周りにはこんなのしかいねんだよつ。

タカシはぐいぐいと引つ張られながら、そう恨み言をつぶやいた。

【始業式に】

【始業式に】

「よく間に合ったな」

「るせー……」

ミツルの言葉にタカシは弱々しく返した。朝から疲れることばかりで、良くも悪くもいつもの日常だった。

「今日は防災の日とかで午後は防災訓練らしい。その後、下校らしいぞ」

「そうか」

今は1時間目を潰しての始業式が終わったばかりの休み時間だ。タカシはここぞとばかりに椅子にもたれかかって寝ているが、ミツルは英単語帳とにらめっこしている。

「ま、よかつたじゃないか。今学期はにらまれてて大変そうだしな」

「るせーよ」

タカシはむくりとその身体を起こし、ミツルをにらみつけた。

「そっぴや、アンナが来ねーな。休み時間はいっつもお前のそばにいるのによ」

「流石に今日は勉強しとくように言っておいた」

アンナは幸か不幸かミツルの隣のクラスだ。おかげで休み時間になると「50分も離れていてさびしかったぞおおおっ！」などと言って、毎回ミツルのいる教室に突撃してくる。教室移動の時は更に切羽詰ったものになり、先生方から何百回も指導を受けているという話だ。それでも諦めず、懲りずに来るのはミツル一筋が愛ゆえだ。

そんなアンナがただミツルに「勉強しろ」と言われただけで来なくなるなんて、何かがおかしい。何かが間違っている。

「勉強ってお前……」

「おい、席つけ」

がらりと教室の戸を開け、担任教師が顔を出した。クラスの皆ががたがたといっせいに席に着いた。

「あ？」

「なんだ。やっぱりおぼえてなかったのか」

ミツルも自分の席に着き、前を向いた。担任教師が黒板に何か書き始めた。

「今日は長期休暇明けの実力テストの日だろ」

タカシが固まり、担任教師がテスト開始と終わりの時間を書き終えた頃にようやくつぶやいた。

「それを早く言えよ……」

【昼休み】

【昼休み】

「ミツルウウウ、一緒に愛妻弁当食べよおおおおおっ！」

「わるいな。おれは弁当より購買派なんだ」

「ほらっ、あーんだ。あーんするぞおおおおおっ！」

「頼むから1人で鏡とやってくれ」

「そんな冷たいことを言うなああああつ！ 見ろ、この冷めてるはずの弁当が温かいという奇跡をおおおおおおっ！」

「それって弁当として駄目だろ！ この陽気で発酵かつ、それとも腐ってるのかっ」

「無問題いいいいつ！ 納豆もヨーグルトもそうしてうまくなるのだああああああつ！」

「お前の殺人兵器と一緒にされた納豆とヨーグルト、ついでにシールストレミングに謝れっ」

ミツルとアンナの必死の攻防を横目で見ながら、タカシはしなびたキャベツが入ったコロツケサンドを食していた。ここの購買の惣菜パンのメインはよく出来ているが、付け合せの野菜がいつも駄目だなとタカシは常々思う。それからあのバカップルも駄目だとわかる。

最も、一番駄目なのはテストのことをすっかり忘れ、その結果もぼろぼろで終わったタカシだろう。

「あいつらもほんつと飽きねえよな……」

タカシはちらつと廊下側の席を見た。女子がグループでかたまっているなか、朝来野力ナは離れた自分の席で1人弁当を広げていた。

【防災訓練】

「……繰り返す、これは訓練ではないっ。これは訓練ではないっ」
「調子に乗りすぎだろ、校長」

スピーカー越しでもわかるノリノリな校長に対し、ウザそうにタカシはそうツッコむ。それからすぐ後に教師の言うことを聞かず、放送のテンションにつられて「ミツルウウウウッ！ 無事かあああああっ！」と絶叫するアンナが乱入してくるのだった。

【初日から】

【初日から】

登校にうんざりしながらタカシは帰路に着いた。八百屋で働くのと同じぐらい疲れる。むしろ、お客さんの笑顔があるだけ八百屋の方がマシだと思えるぐらいだ。

「お、おかえり」

「ああ、ただいま」

接客中のミカコがそう返すと、常連のおばちゃん達もおかえりを連発してくれる。なかには「愛しのタカちゃん値引きして」と言う人もいる。

「らっしやい。すぐ支度するんで」

「いいよお、別に。ていうか、カバンぐらい部屋に置いてきなよ」

「いーだろ。別に」

店の前でミカコと押し問答していると、頭上から誰かが声をかけた。

「……おお、タカシ。どうしたのじゃあ」

眠い目をこする魔王が、2階からひらひらと手を振っていた。常連のおばちゃん達はいきなり顔を見せた女の子に興味津々だ。

「やっぱりカバン、部屋に置いてくる」

「はいはい」

タカシはだかだかだかかと家の中を駆け回り、魔王のいる部屋に踏み込んだ。

「おいッ」

「タカシ、やかましいぞ」

「お前、まさか今まで寝てたのかっ？」

「うむ。らしいの……」

そう言う魔王はまだ眠そうだった。タカシは怒るのも何も諦め、ただあきれていた。

「もしかして、お前、記憶が飛んでるんじゃないかって……時差ボケみたいな起こしてるんじゃないか？」

「かもしれん」

魔王は今まで今までいた次元の生活リズムを思うままに守っていた為、日が早く昇ったりあつという間に夜が来たように感じていただけだったようだ。それよりも何故気づかない。

「ふん。魔王たるもの、環境の変化に自ら振り回されてどうする」
そう言うなら、既に振り回されているような気がするなとタカシは思う。しかし、眠そうな魔王はあくまでふんぞり返っている。

「ああ、わかったから下降りて来い」

「む？ なんじゃ、もう朝飯か」

タカシは肩をすくめた。

【つーわけで】

【つーわけで】

「店手伝え」

「む」

タカシはタカシのおさがりの大きめのシャツとGパンに着替えさせた魔王を引き連れ、店の方に顔を出した。常連のおばちゃんの姿は無く、ミカコがちょうど一息を入れていたところだった。

「なんでワシが」

「働かざるもの食うべからず」

日本人が好んで使う言葉に、魔王はぷうと膨れた。

「ワシは客人じゃぞ」

「いつまで家にいるかわからんやつを客人というか。居候だ、居候」

「せめて食客しよっかくと言え。その方が格好いい」

「どこでおぼえてくんた、そんな日本語」

タカシと魔王があーだこーだ言っていると、ミカコはまた笑っている。

「あー魔王ちゃん。いやならいーよ。でも、そんなに難しいことをさせるわけでもないから、ね」

ミカコの言葉にうぐ、と魔王が言葉に詰まった。要するに「魔王ちゃんなら出来ないわけない」と……これは魔王の性格上、断ろうにも断れないうまい言い方だ。

「うむ。それならば仕方あるまい。この魔王が直々に手伝おうてやろう！」

「きゃー助かるわ」

タカシはこの白々しい2人にあきれてものも言えなかった。

【接客】

「まずは何をすればいいのじゃ」

魔王に真島青果店が揃いのエプロンを着せる。思いのほか似合っていて、魔王も満更ではなさそうだ。

「そうねー。接客はしたことは」

「無い。魔王は常に威風堂々、媚こびを売る気にはなれん」

「それじゃ客商売失格だろ」

タカシがそう言うのと魔王が食いついてきたのをなんとか避ける。

ミカコは眉をひそめてはいるが、表情としては笑っている。

「かといって、お金を扱わせるわけにもいかないだろ」

「ま、そりゃそうだが……こいつに接客はなあ」

「むう、なんじゃ、2人して！」

魔王は怒ってその頬をぷりぷりしている。この態度じゃ確かに厳しい。

「ええい！ タカシとミカコはワシに何をさせたいのじゃっ」

しびれを切らした魔王がかんしゃくを起こし始めた。仕方ない。

「呼び込みやってくれ」

「呼び込みとはあれか。『らっしやい、らっしやい、今日はサンマが安いよ』というアレか」

魔王の挙げた例にタカシはため息を吐いた。八百屋なのに魚はないだろうと思うが、間違っではない。

「そーだ。そうやって人呼んで、お客さんが何か欲しいって言うたら俺か母ちゃんに知らせてくれればいい」

「ふむ。大してやりがいにはなさそうじゃのう」

どこことなく魔王には不満があるらしいが、客側の値引きなどを受けさせるわけにもいかないだろう。

「わかった。やってみようではないか」

魔王はずいっと店の前に仁王立ち、少しふんぞり返る。目の前の道行く人は少なく、声を張り上げたところで呼び止める人はいないかもしれない。

「……」

「……」

「……」

タカシとミカコが固唾^{かたず}を呑んで見守っていると、その魔王がくるりと振り返って言った。

「ところで、何を勧めればいいのじゃ？」

【呼び込み】

【呼び込み】

「じゃあ、私は夕飯の支度をしてくるから。忙しくなったら呼んで」と、ミカコは笑いながら奥へ引つ込んでいった。

「うむ。朝食は甘いものを期待しておるぞ」

「だから、違うつてーの」

タカシの突っ込みを無視して、魔王は張り切っている。ミカコも魔王を警察にどうかは考えていないのだろうか、とふと思う。

まさか、このままずっと置いておくわけにもいかなえもんな。

どこまで考えてくれているのか、タカシにはさっぱり理解出来ない。そもそも魔王のことも完全に信用したわけでもなかったから、頭と問題の両方を抱え込んでいる状況だ。

「さあこの小さき店に立ち寄って見るがよい。この魔王様が直々に立ち会おうというのだ。へいみ」

魔王の呼び込みにタカシは口を手で無理やり塞いで、それを止めた。もはやどこから突っ込むべきかが悩みどころだが、魔王はやはり不満そうだ。

「何がいかんと言うのだ」

「ったく……」

手伝いを頼んだのは失敗だったか。いや、言い出した手前、もうやらなくていいとも言いつらかった。

「もつと普通でいい」

「普通の定義を教える。ワシはワシなりに与えられた業務をこなしているではないか」

「……『いらっしやい、いらっしやい』でいい」

「なんじゃ、つまらん」

魔王がふつと息を吐き、その顔を横をそらす。あからさまな態度

からさっきの呼び込みは多少わざとだったのだろうと察するが、これ以上は何も言わないでおいた。

「そこな者、どれ、ひとつ買ってはいかぬか？ 損はさせぬぞ！」
タカシの言うことなどまるで無視した呼び込みだが、さっきのものより随分いい。魔王の容姿と口調もあいまって、人目を引いているようだ。

「はは、こんなかわいらしい子がこの店にいたのかい」

「誰だい、この子。新しいバイトさんかい」

わいわいと魔王を取り囲むように人が集まり、一気ににぎやかになる。こういう人ばかりが何よりの呼び込みになるのだ。

「た、タカシ！ 何とかせい、息苦しくてかなわん」

じたばたとする魔王が面白く、タカシはしばらくそれを横目で見ることにした。人をひきつけてくれている間にこちらは商売をするのだから、いちいち助けていられない。

「ま、頑張れや」

タカシは愛想笑いをしつつ、お客さんにおつりと商品を渡した。

【とりあえず】

【とりあえず】

「お疲れ」

「う、うむ……」

閉店まで散々撫^なで回され、もみくちやとおばさんパワーに圧倒された魔王が少し呆然としている。逃げようにも持ち場を離れることは即ち業務放棄、それは魔王としていかなものかという心構えから出来なかったらしい。

「疲れたろう。さ、夕飯だよ」

ミカコが茶碗に白米をよそい、魔王の前に置いた。今日のメインは何かの焼き魚のようだ。

「タカシ、これはどうやって食すのじゃ。何か口の中に刺さりそうでかなわん」

「魚の骨の取り方も知らんのか。どんな食生活送ってきたんだ、お前は」

「じゃから、ワシは本来このような食事は取らなくてもよかったと言つたろうに」

食事の形態が違うというのはまことに不便なことだ、と魔王はしみじみ語った。タカシに骨ははずして食べることを聞き、おそろおそろ一口食べてみる。

「……むう、タカシッ！　ワシは昨日のハンバーグよりこの魚の方が好きじゃ」

「そーか。そりゃ良かったな」

「魔王ちゃんは珍しい子だよ。普通、子供っていうのは肉の方が好きなんだけど」

「ワシを子供扱いするでない。魔王じゃからな」

「じゃあ、まずは子供にありがちな好き嫌いを無くそうな。魔王」
「うぐっ」

魔王が言葉ともののどにつかえたらしく、目を白黒させている。ミカコが慌てて水を差し出すと、一気にキューツと飲み干してしまった。タカシは「しゃべりながら食うからだ」とあきれている。

「むう。……ところでタカシはワシが寝ている間、どこへ行っておったんじゃ？」

「あ？ 学校だよ、学校」

タカシは魚の身をほぐし、それを口に入れる。確かに昨夜のハンバーグに比べると少しだけ甘く感じる。甘い物好きの魔王好みの味と納得する。

「この国の言語は学びはしたが、平民の生活事情には明るくない。もっと明確な目的も交えて話せ」

「勉強しに行つてんだよ」

「タカシ、それ、見栄じゃないかい？ 魔王ちゃんはあるが学校へ行く目的を聞いてるんだよ。バカのアンタが勉強目的で行くわけないだろうに」

「……それ、親としてどーなんだかな」

ミカコは笑ってごまかすが、魔王の方はまだ聞き足りないようだ。

【当たり前前に】

【当たり前前に】

「それでは、学校とは勉強しに行くだけなのか」

「色々だろ。部活動に燃えてるヤツとか、校風が気に入ってるヤツとか好きな人を追いかけて入ったっていう変り種もいるかもしれない」

平民の学校生活についてを、魔王は面白そうに聞いている。何しろ魚を食べる手が止まるほどだから、えらく気に入ったのだとわかる。

「タカシでも行けるくらいじゃ。さぞ万人に門戸が開かれておるのじゃろうな」

「オイ」

高校は義務教育ではないので入試があるし、お金などの問題で行きたくても行けない人がいる。万人に開かれているわけではないことをミカコが教えると、魔王はほんの少しだけ眉をひそめた。

「そもそもお前は学校に行ったことは」

「無いのう」

タカシの語尾をすっぱりと切り捨て、魔王はあっさり否定する。

「学力や金の問題ではない。ワシと同世代の子など眷族にはおらんかったし、立場の違う平民の子と遊ぶ機会も無かった。気を許したのも祖父だけじゃ」

魔王はそれだけ一気に言うと、一気に残っていた夕飯をかきこんだ。それからお茶をぐいっと一息で飲み干す。

「馳走になった。満足じゃ。先に部屋へ戻らせてもらっ」

ばたばたと駆けて行ってしまった。魔王のそのわかりやすすぎるぐらいの反応にミカコは心配そうに言った。

「……悪いこと聞いちゃったんじゃないかね」

「かもしれん。魔王の話が全部本当なら、よく耐えたと思うがな」

「全部本当って……まだ信じきれないのかい」

ミカコは意外そうに言った。当のタカシは箸を置き、2階を、天井を見上げた。

……。

その視線の先に、そこには取り忘れたものがあつた。

【ふん】

【ふん】

「……こちらの次元にも月はあるのじゃな」

魔王は窓辺に寄りかかるようにして、ぼんやりと輝く月を見ていた。昨晩は不覚にもものぼせてしまい、そのまま寝込んでしまったせいでここから月が見えることを知らなかったのだ。

「隣り合った次元の相違……か」

向こうとこちらの差に混乱しそうになるが、今はこうして落ち着いて月を眺められるようになった。ここに来る前はそのような余裕がなかった。

「それも……」

「なにたそがれてんだ」

びくんと魔王はその声に反応し、とつさに振り返った。それから反射的に魔王の力で、声の主を床に叩きつける。

「ってえな。なにすんだよ！」

「誰が入室を許可したか。この部屋は現在魔王のものであり、そのなかの支配権は得ている。故に存分に魔王の力を使えるというわけじゃ」

声の主、タカシが吼えるが魔王はつーんと無視を決め込んだ。いきなり入ってきたそちらが悪いのであって、こちらに非はないと言わんばかりだ。

「あーったく、風呂が空いたから入れて言いに来たんだよ」

「そうか。では、共に」

「行かねーぞ。もう入った後だからな」

タカシの反論にむくれ、魔王はその力を強める。変な体勢になっている上に、まるで相撲取りがのしかかってくるような圧力だ。いつまでも耐えられるものではないだろう。

「いいーからっ、さっさと入ってこいっ」

「むう」

タカシがなかなかネをあげないので、魔王も諦めたらしい。これ以上やると、タカシの身体がどうかしてしまうかも……というささやかな配慮だろうか。

「あーったく、ひどい目にあった」

「反省の色が全く無いのう。さ、お供せい」

「おれは声をかけに来ただけだろーがっ」

両者のにらみ合いがまた始まるが、すぐにタカシがそらしてしまった。

「やめやめ。疲れるだけだ。魔王、1人でちゃんと風呂入れたらいいーもんあるぞ」

「いいーもんとは？」

やはり食らいついてきた魔王にタカシはにやりと笑った。

「アイスだ」

「なぬっ！」

「それも風呂上がりのは格別にうまい」

「む、むう！」

魔王がじたばたと足踏みをし、もう待ちきれないというイイ表情をする。タカシは箸を置いた時に、魔王が天井に突き刺したアイスの棒を見たのだ。

「どーする」

「タカシなんかよりアイスじゃ！」

迷わず即決すると、魔王はどたばたと階下へ降りていった。これはこれでむなしいというか、腹立たしいものがある。

「ま、いいーか」

タカシは気にせず、慌ただしい魔王の後を追いかけるように階下へ降りた。

【スイカ】

【スイカ】

「アイスじゃっ」

風呂から上がった魔王が居間へ突撃、開口一番にそう言った。タカシはぷつと種を吐いてから返した。

「早くないか？」

「そんなことはない。きつちりと風呂に入ってきたぞ。さあ、アイスをよこせ」

ミカコはよいしょと立ち上がり、台所へアイスを取りに行った。魔王は自分の席にぺたんと座り、まだかまだかとそわそわをしている。

「アイスはずっと出しておくで溶けちまうからな。待つてろ」

「うむ。……ところでタカシが食しておるのは何じゃ？」

魔王はタカシの手とちゃぶ台の上に載ったくし切りにされた何かに興味を抱いたようだ。タカシは果汁にまみれた口をぬぐうと、また口から種を出した。

「これはスイカっていうんだ。でかいけど果物だぞ」

「ほう。これは面妖な……緑と赤の対比が見事じゃ」

「そーだな。今年のはよく出来てる。甘い」

自然が生み出す見事なデザインに感心し、タカシの最後の言葉に関心を示す魔王にミカコが台所から戻ってきた。

「はい、魔王ちゃん。アイス」

「ミカコ。これも食してみてよいか？」

そう訊ねる魔王にミカコは両腕でバツテンマークを作った。

「ダメ、ね」

「何故じゃあ！」

「食後に冷えたスイカとアイスなんて組み合わせ、腹壊すに決まっ
ってんだろ」

たしなめるタカシはぷぷつと種を出し、またしゃくつとひとかじりする。魔王はその動作をじつと凝視している。

「どうする？　アイスはやめてスイカにする？」

「う……」

ミカコの提案に、魔王は既に涙目になっている。ここで情に流され負けてしまい、体調を崩されても困るのだ。

「どーすんだ。早くしないとアイスが溶けるぞ」

「ぐっ……くっ！」

魔王はふるふると震える手で、ミカコの手からアイスを取った。

「むう、うまい」

「そりゃ良かったな」

魔王はアイスをかじりながら、チラッチラッとタカシの手の中のスイカも見る。どうしても気になり、見てしまうようだ。

「こちら、魔王ちゃんは明日よ」

「そうそう。取捨択一。二兎追うものは一兎も得ず」

「なんじゃ、それは。タカシのくせに生意気じゃぞ」

どうやら知らない日本語もまだあるらしい。タカシは余裕顔で2つ目、いや食べ終わった皮を見る限りだと4個目に入るようだ。

「く、食いすぎじゃあ！　ミカコ、ミカコオッ」

「おれはいーんだよ。腹、壊さないから」

「はいはい、魔王ちゃんの分はとっておくから」

「絶対じゃぞ。絶対じゃぞっ」

こうして必死に駄々をこねる姿は、魔王の威厳も何も無い。ただの子供だ。

どうすんだかな、これから。

タカシはぷぷつと種を吐き出し、あどけない魔王の横顔を眺めるのだった。

【9月2日】

【9月2日】

タカシが学校から帰ってくると、魔王は既に店の前に立って呼び込みをしていた。

「おお、帰ったか」

「……感心だな」

「うむ。労働というのなかなか良いものじゃ」

魔王はくるっとターンしてエプロンをふわっと浮かせる。かなりださいデザインだとは思うのだが、どうやら気に入ってくれたらしい。

「魔王ちゃんをよく働いてくれるよ。案外、力持ちだもの」

ミカコはそう褒めると、魔王はふふんとふんぞり返る。野菜の詰まった段ボール箱を持ち上げられるということに、タカシは素直に称賛した。周囲のおばちゃん達がそんな魔王とタカシ達のやり取りを見て、うふふつと笑いあった。

「むう、なんじゃ気色悪い」

「変な噂にならんといいがな」

ああいうおばちゃん達の口と手にかかって、どんな脚色をされて話が広まるかわかったものではない。ミカコは「大丈夫。分別はあるから」と言うが、怪しいものだ。

「そついや、お前、今日寝てないのか？」

「うむ。まだ馴染なじまぬようじゃ」

とりあえず、今日は寝て明日からタカシ達と同じように生活するように試みると言う。また、そもそも1日の長さ自体が違ったようだから、その調整は無茶なものにはなるが魔王だから平気と言うわけのわからない力押しの理屈を述べた。

「身体だけは壊すなよ」

「腹も壊しとらんから、今日こそスイカを食すぞ」

魔王は店頭に並ぶ今年最後のスイカをじっと見ながら言うと、タカシは肩をすくめた。

「タカシ、急ぎの配達行ってきた」

ミカコにそう頼まれると、二つ返事で了承する。魔王に一声かけ、愛チャリを取りに裏手へ行った。

【9月3・4・5日】

【9月3日】

「タカシ、今日はな、図書館とやらに行ってきたぞ」

「図書館。へえ」

魔王はタカシ達と同様の生活を試み、朝・昼・夕飯をしっかりと食べるようになった。その分、若干だが食べる量が減った。そういうところで調節しないと食べられないようだが、食後や風呂上がりの甘いものだけは欠かさない。

「何しに行ったんだよ」

「うむ。少しばかり調べものをな」

「お店の方は1人でも平気だったしね」と、ミカコがすっかりフオローを入れる。

「日本語か」

「それもあるが、まあワシの霸道成就の為のな」

「霸道？」

タカシの疑問には答えず、魔王はそれだけしか言わなかった。

なんかいやな予感がするな。

さつさと風呂に入りに行く魔王を見送りながら、悪寒を感じたタカシは熱いお茶をいれることにした。

【9月4日】

「タカシ、今日は学校とやらに行かぬのか」

「土日は休みだ」

そういうわけで今日と明日はほぼ1日中店の手伝いをすると言つと、魔王は微妙な顔をした。

「週休2日とは随分気楽な身分じゃのう」

「まーな。土曜にも授業がある学校もあるし、部活で学校行くやつもいるし、ほんとに色々だけだな」

タカシが空になった頑丈な木箱を店の裏手に持っていく。お客さんのなかにはこれを欲しがる人もいるが、それは状況次第だ。

「で、タカシは部活には入らんのか」

「……。ああ、そんなヒマねーな」

「ヒマさえあれば入るのか」

「随分突っ込んでくるな。……それでも、おれみたいなやつは入らない方がいーんだよ」

少し和らいだとはいえまだ厳しい残暑に、タカシは汗をぬぐった。魔王は何となく腑に落ちない、という顔をしている。

「ほら、お前は呼び込みやってろ」

「わかっておる。タカシのくせに生意気じゃぞ」

「へいへい」

2人とも裏手にいたらミカコや店の手伝いにはならない。さつさと魔王を表へ追い立てると、タカシは持ってきた木箱に座り込んだ。

……部活、か。

今となつてはどうでもいいことだ、とタカシは投げやりな口調でつぶやいた。

【9月5日】

「タカシには友人がおらんのか？」

「また、いきなり失礼なやつだな」

しかも、おばちゃん達の接客のなかで訊くような話かと突っ込んだ。案の定、魔王の質問の意図を読もうとおばちゃん達の目が輝いている。

「いるけど、何でだ」

「店にそのような者が誰も来ないのでな」

「ああ、そういうことか。1ヶ月以上来ない時もあるし、おれのこと知ってから1週間通い続けてくれたやつもいたがな」

クラスメイトだからといって、野菜を買いに来てくれる者は少ない。大抵はもつと家の近くで買う、と魔王に教えた。タカシの家を

知っている者も少なく、学校やそういう友人の家から割と離れたところにある、ということもあった。

「ほほう、では明日以降からは誰か来るであらう」

「何だ、そりゃ」

「魔王の勘じゃ」

そう言つて笑う魔王の表情の下、その言葉の意味はタカシにはわからなかった。わかつたところで、魔王を止められるとも限らない。

「変なことはすんなよ」

「うむ。正規の手続きは取つた」

タカシはこれ以上ツッコむのをやめた。

【9月6日】

【9月6日】

「どうした、今日はえらく早いじゃないか」

ミツルは始業チャイム前にいるタカシをからかった。その本人はふてぶてしく、机に足を乗っけている。

「ああ、なんかな……いやな予感がしてな」

「何だよ。気になるな」

タカシはミツル達に魔王のことは話していない。話そうにも、どこから話していいものか判断がつかねているからだ。

「それより、アンナはどうした」

「え、何のことだ？」

「……お前のどこがそんなに好きなんだかな」

「それは本人に聞いてくれ」

ミツルは深くため息を吐いた。実はこれで相思相愛なのだから、他人の恋愛というのはよくわからないとタカシは常々思うのだった。

「アンナは職員室だ。なんか用があるとかで」

「またお説教じゃないのか？」

「さあ。どうかな……」

タカシとミツルが噂をしていると、何とどうやら……本人のご登場のようだ。廊下側の窓ガラスがびりびりと響き、愛しい人の名前を絶叫している。今いるクラスメイトが避難する前に、教室のドアをそれこそ壊すほどの勢いで開けた。

「ミツルウウウウウツ！ 転校生が来るぞおおおおおっ！」

「へえ」

アンナが入ってきた勢いによってぶわつと強風が教室内を吹き荒れるなか、ミツルは平然と返した。

「正確には転入生な。わかってるか？」

「そんなことはどうでもいいんだあああああっ！ 問題はこ

のクラスに来て、しかも女子生徒だと言うから不安なんだあああああああつ！」

要するにミツルが転入生に浮気するんじゃないかと、心配しているわけだ。相変わらずだな、とタカシは苦笑した。

「安心しろ。興味ない」

「本当かあああああああつ！ 好きだあああああ、ミツルウウウウツ！」

アンナがぐわっしと抱きしめようとするのをミツルは何とか避けようとしたが、コンマ1秒遅かった。衝撃と共に強く抱きつかれ、ミツルの骨がみしみしときしみ始めた。

「ぐあ……………」

「……………つは！ ミ、ミツルウウウウウツ！ 死ぬなああああああつ！」

「あーもー、どこかよそ行ってやってくれ」

タカシはそのバカップル漫才にうんざりしているようだ。そう言われると、アンナは素直に聞き入れ……………ぐったりとしたミツルを引きずってどこかへ連れ出そうとする。

「なあーにを騒いどるつ！」

担任教師ががらりと普通にドアを引いて入ってくると、アンナのことをにらみつける。

「またお前か。いい加減にせんか。とつくにホームルームは始まっておるぞ。チャイムの音が聞こえなかったか」

「う……………すまん、ミツルウウウ、また離れ離れになるが……………な泣くんじゃないぞおおおおお」

「泣いてるのはお前だろ」

タカシの突込みなど聞かず、アンナは乙女ちつくな走り方で砂ぼこりを巻き起こして教室を出て行った。もしミツルと同じクラスにしていたらと思うと、教師達のナイスな判断に拍手を送りたくなる。

「やれやれ、ではホームルームを始める」

ミツルはよろけながらも自分の席に着き、机の上につ伏した。

いつもならすぐ回復するのだが、今回は相当キツかったらしい。

「最初に転入生を紹介する。入りなさい」

担任教師がそう促すが、誰もドアを開けて入ってこない。教室内がむやみにざわつく。

「入りなさい」

「ふん。ならば、おぬしがドアを開けよ。ワシの手をわずらわせる気か」

がたつとタカシが思わず椅子を引いた。担任教師はあきれて、そのドアを引いてやった。

冗談だろ。

開けてもらったドアから入ってきたのは見覚えのある顔と制服だった。しかし、問題なのは見覚えのある顔と制服が、何故一緒になっているのかということだ。

「このたび、平民の学校に入学してやった魔王じゃ。以後、宜しく尽くすように。のう、平民共」

【噂の転入生】

【噂の転入生】

タカシは放心していた。その理由は目の前で起きていることが理解に苦しみすぎ、脳の機能が追いつかなくなっただからだ。

「魔王……でいいの？ 苗字と名前は？」

「魔王は魔王じゃ」

「魔・王てことかね？ どのみち、日本人じゃないねえ」

「うむ。由緒正しき高貴なる一族じゃ」

魔王と担任教師は名前と出身で押し問答している。こんな状態や状況で如何にして入学出来たのか、とクラスの皆も不思議そうだ。

「ああ、じゃあ魔王の席だが」

「タカシの後ろが空いておる。そこに決めるぞ」

名指し、しかも呼び捨てとあって教室内が一気にざわめいた。当のタカシはあつけに取られているままだ。

「まあ、いいだろう」

「物分りがいいのう」

魔王はにやりと笑い、すたすたと教室を縦断していく。クラスの皆の好奇の視線を気にすることなく、魔王はタカシの前に立った。

「随分と驚いたようじゃな」

「……あとで話がある」

「ふっ、まあよい」

タカシの後ろの席に座ると、いきなり後ろから小突いてきた。

「まだ教科書とやらが揃っておらん。貸せ。どうせ、まともに見ておらんのじゃろ」

「ああ、いいとも」

タカシはカバンごと魔王の机に放ってから立ち上がる。

「お前、家から出ていけよ」

「なっ」

魔王に反論させる間もなく、面白そうにタカシのことを見ていたミツルの襟をつかんで持ち上げた。

「うおっ」

「すんません。おれとこいつ、腹が痛いんで欠席します」

「麻島っ」

「タカシッ」

担任教師と魔王の制止の声も聞かず、タカシはミツルを肩に担ぐようにして引きずっていつてしまった。廊下で待っていた1時間目担当教師も驚いていたが、誰も追いかけてくることはなかった。

「このまま逃避行か？ 男同士はぞつとするな」

「いーから来い。どうせ、魔王のことが聞きてえんだろ」

「ああ。タカシの口から聞けるんなら、これ以上の説明はないな」
待ってましたと言わんばかりににやりと笑うミツルを、何となくしやくに障ったタカシは一本背負いごとく放り捨てた。

「ミツルウウウウッ！ 無事かああああああっ！」

「ややこしくなるから出てくんなっ」

隣の教室の中から飛び出してくるアンナの脅威のミツル事変感知機能に、タカシは全力でツッコんだ。

【事情説明】

【事情説明】

「……へー、あの後にそんなことがあったのか」

「ああ」

陽当たりのいい屋上に上がり、タカシはミツルにことのあらましを説明する。それには勿論、魔王が別次元から飛んできた存在ということも話した。

「にわかには信じられないよな」

ミツルはごろりと横になってひなたぼっこをし、「こうして2人でサボるのは久し振りだ」とのん気そうだ。

「ま、お前の言うことだから信じるけどな」

「またそれか。どうなつてんだ、おれの周りのやつらは。少しは疑えよ」

「信用してるってことだろ」

「うるせーよ」

タカシはミツルに背を向けてどっかりと座り込んだ。照れてるわけでもなさそうだが、随分と気持ちに余裕が無くなつてきているらしい。

「まあ、全部ほんとならなんで魔王ちゃんは学校に入学してきたんだ？」

「知らねえよ」

「しかも、お前に内緒で」

「知らねえつつてんだろっ」

ミツルは寝転びながらタカシの方を向いた。いつも以上に口調が荒げている。

「だからって、いきなり追い出すこともないだろ」

「うるせーよ」

「次の時間、俺から魔王ちゃんに話聞いてみるよ。それからでも

いーだろ」

「好きにしろ。おれは知らねえ。知ったことか」

「そう投げやりになるなよ。別に魔王ちゃんがお前を信じてなかったわけじゃないと思うぞ」

タカシがじろつとにらむと、ミツルは怖い怖いとポーズを取って見せた。

「あーあ、2時間も連続で授業サボるなんてアンナ心配するだろーな」

「どうせなら一緒に連れてくりゃいーだろ」

「そうだな。そうするか」

ミツルはふつと笑う。この不器用な友人は大切にしたい、その大きな背中を見てミツルはそう思った。

【魔王連行】

1時間目終了のチャイムと同時にミツルはアンナと一緒に魔王のいる教室に飛び込むと、既に人だかりが出来かけていた。ミツルに言われ、アンナがその輪から魔王を無理やり引きずり出す力技を見せた。

「む」

「ミツル軍曹うううううっ！ 捕まえたぞおおおおっ！」

「よし、いいぞアンナ三等兵。そのまま連行しろ」

「イエッサアアアアアッ！」

「なっ、なんじゃあ！」

魔王がじたばたと暴れるが、構わず教室から連れ出す。

「次の時間、頭が痛いから魔王さんと俺休むから」

「ついでに私もなあああああっ！」

ミツルの言葉とその行動にクラスの皆は啞然とし、ただ見送るほかなかった。

【呼びつけるというか拉致】

【呼びつけるといつか拉致】

「ワシを呼びつけるとは、平民のくせに大胆不敵なやつじゃのう」
「いやいや、こちらこそ穩便に済んでよかった。魔王の力とやらを使われるかもしれない、って怯えてたよ」

革張りのソファ―に身を沈め、ゆったりとくつろぐ魔王がミツルのことを「食えぬ男じゃ」とにらんだ。

「とりあえず、はじめまして。タカシの友人が『甲藤ミツル』と言います」

「私がミツルの婚約者の日向アンナだああああああつ！」
アンナの叫びに魔王が思わずたじろぐ。ミツルもここが気づかれるから、もっと小さな声で叫べと無茶な注文をする。

「ここはあんまり使われない応接室でね。職員室からも離れてるし、周りは特別教室だから人も来ない」

「逢引きには持つて来いというわけだなああああつ！」

「だから、大きな声出すなよ。少し静かにしてくれ」

魔王がアンナの叫びに眉をひそめ、ミツルと向き合った。

「それで？ ワシを呼びつけた理由とは何じゃ」

「うん。タカシのことだね」

【ミツルの弁明】

「ほう。そういえば先ほど、家から出てゆけと言われ……シヨックを受けた」

意外にもしゅんと表情を曇らせ、うなだれる魔王にミツルは驚いた。

「なんで、また高校に、しかもタカシのいる学校に入学したんだい」

ミツルは聞いておきながら、この質問のなかに答えがあることは

察していた。

「うむ。ワシは少々ここでやっておかなくてはいけないことがある。その為に、1人でも出来ることじゃが、どうせならタカシをこき使ってやろうと思うてな」

タカシから聞いた通り、どうも素直とは言いがたい。いつそアンナくらいわかりやすくなつてほしいところだと、ミツルは肩をすくめた。

「多少魔王の力を行使したが、それ以外は正規の手続きを踏んだのじゃ。タカシごときにあのように言われる筋合いはないっ」

魔王が思い出したかのように激昂するが、ミツルは平然と無視した。

「それは魔王さんも悪いな」

「何故じゃ。誰にも迷惑はかけておらんぞ」

「かけてる」

「誰じゃ」

「タカシ」

「じゃから、タカシの手をわずらわせず一切をワシの手でやったではないか」

ああ、わかつてないとミツルはため息を吐いた。タカシが思うことは正反対なのだ。

「違うんだよ、魔王さん。タカシは、それがいやだったんだと思う」

「なに？」

魔王は理解不能という顔をしている。さすが異次元から来た魔王、いやこういう人はこちらの次元でもいるか。

「タカシはあの性格だから、魔王さんの身の振り方をずっと悩んでたんだよ。おばさんは気にしないだろうけど、ずっと家に置いておくわけにもいかないし、かといって警察で異次元の話をしたら笑われるだけだ」

アンナはミツルに言われた通りに口を閉ざして、何故か部屋の隅

で小さくうずくまっている。ぶるぶる震えている様子はなんだか愛らしい。

「ずっと魔王さんのことを気にかけてた。それなのに、魔王さんはタカシに何の相談もなく高校に入学した。……正直、裏切られたような気持ちだったんじゃないかな」

「……タカシのやつ、本当にバカではないか。なんじゃ、それは」
魔王はミツルの話を聞いて、ぷうとむくれている。その表情は制服を着ていても、確かに高校生には見えない。

「では、ワシにどうしろと言うのじゃ」

「さあ。どうしたもんかなあ」

ミツルは首をかしげて、困ったというポーズをした。魔王はむうつとなっている。

「でもさ、魔王さんがここに入学したのは少しまずかったろうな」

「まずいとはなんじゃ」

「いわゆる世間体つてやつだよ」

魔王はきょとした顔で、ミツルの顔を凝視している。部屋の隅にいるアンナのぶるぶる具合は先ほどの倍になっていた。

「健全な男子高校生の家に、同じ高校に通う同級生の女の子がいたらさ。まずいでしょ。同棲だとか、噂じゃすまない」

「ワシとタカシの間に何か起こるわけなかるう。タカシとワシの差は蛙と人間を比べるのと同じじゃぞ」

「うん。それでも世間は認めない」

「くだらん俗物根性じゃのう。よい。言わせておきたいやつには言わせておけ」

魔王はすっぱりと言い捨てると、ミツルはまずいと思ったのだが笑ってしまう。

「……ッ。あーあ、魔王さんは本当にいい性格してるよ」

「それは褒めてないな」

「褒めてる褒めてる。あー、おかしい」

ミツルは応接室の机に腰掛けると、魔王と向き合った。

「家を出ろ、っていうのはそういうことなんだ。勿論、怒もたらってることもあつたろうけど」

「なるほど。まあ、タカシの言いたいことは大体理解した。しかし、それを何故おぬしが語る？」

その指摘は尤もつともだ。ミツルは手のひらを魔王に向けて、やんわりと返した。

「今まで話したのは友人としての経験から、タカシはこう言いたいんだっていう推測。でも、9割方合つてると思う」

無愛想な友人を持つと苦労するよ、とミツルは軽口を言う。合わせて魔王もあきれ顔でため息をついた。

「やれやれ、他人に自分の弁護をさせるとは……」

「弁護つて言うか、ね。これは俺の判断でそうしたまでで、タカシは関係ないよ。念のため」

「結果的にそうさせるよう、タカシが誘導したものじゃろう」

ミツルは降参、とポーズを取る。本人達は否定するだろうが、この似たもの同士にはかなわないと悟った。

「ところで、これから本当にどうする気だい？」

ここまで話したところでミツルは魔王に訊きいた。

【解決策】

【解決策】

「別に高校に明確な目的があるなら、それでいい。でも、それなら世間体や都合上でタカシの家から出る必要がある。そもそも、タカシの家に居座り続けるなんてのは無理があることだし」

「むう」

「明確な目的の為、タカシの家から学校へ通わなくちゃいけないわけじゃないだろ？」

「うむ。そうじゃの。あそこは居心地がいいし、気楽におられるからのう」

魔王は正直に告白した。

「なら、1人暮らしを始めるしかない。そもそも学費はどうしてるの？ 魔王の力？」

「そのようなものじゃ。ミカコにも迷惑はかけておらん」

「ちなみにおばさんには学校のこと」

「昨晚の内に話してある。向こうは冗談に取ったやもしれぬが」
ミツルは天井を仰いだ。これは計画的なんだが無計画なんだか、つかめない話だ。そもそも魔王の目的が明確に話されていない。

「タカシは本当に世間体のことだけを気にしておるのか？」

「あ、いや……どうかな。さっき言った学費をおばさんに負担させてるんじゃないかと、色々あるとは思うな」

「そうか。世間体をどうにかすれば、ワシはあのままタカシの家にいられるのか？」

ミツルは指先でぼりぼりと首筋をかき、視線をそらした。

「……うん。あんまり大きな声じゃ言えないけど、タカシ、好きな子がいるからなあ。世間体より、むしろそっちの目が」

「気になっているというわけか」

ミツルは「かもしれない」と言葉を濁すが、それを聞いた魔王は

にやりと笑い、ソファから立ち上がった。

「なら、話は早い。タカシとその女子おなこをくつつければ、ワシはこのままでいられるということじゃな」

ミッルは開いた口がふさがらないといった状態で、思わず額に手をやった。

「今までの話を聞いてて、そういう発想が出てくるのは凄いな…」

完全にお手上げだ、この魔王様は俺の手には負える相手じゃない
ミッルはそう観念した。

【蛙】

【蛙】

「さて、タカシの友人とやら。協力してもらうぞ」

「その前に、俺の名前は甲藤ミツルだつて」

「そうか。平民は個々に名があつたのう。では、ミツルじゃな」
魔王がそう呼び捨てると、今まで部屋の隅でぶるぶるぶるぶる震えていたアンナが飛びかかってきた。

「ミツルウウウウウウウウウウウウツツ！ 浮気しいって約束したろおおおおおおおおおおおおつっ！」

今まで黙っていた反動か、物凄い雄叫び……いや雌叫びだ。

「アンナ！ こら、大声出すな！」

「うわああああああああああああああんつつ！ ミツルの浮気者おおおおおおおおおおおおおおおおつっ！」

ミツルが必死でアンナをなぐさめようとするが、襟を締め上げられ、がくがくと身体を揺らしては出来るものも出来ない。このままでは確実に三途の川を渡る。

「ぐ……うう」

「魔王おおおおおおおつ！！！！ ミツルを呼び捨てにしているのは私だけなんだあああああああああああつっ！」

アンナの必死な嘆願に、ミツルもどうにか目で訴えている。

「うう、わかった。わかったから、頼む、静かにしてくれえ……」

魔王は素直にそう聞き入ると、へたりと床に座り込んでしまった。どうやら、アンナの音量に相当参ったらしい。

「……ア、ンナ……ぎぶぎぶ」

「つつつ！ だ、大丈夫かああああああミツルウウウウウウウウツツ！」

アンナがはつと我に返り、ミッルをつかんでいた手を離した。解放されたミッルはげほげと咳き込み、何とか呼吸を回復させる。

「こうらッ、何勝手に入っとる！」

騒ぎを聞きつけ、とうとう教師が応接室にやって来たようだ。がちやがちやと扉を開けようとしている。

「やばい。見つかったっ」

ミッル達がつさに物陰に隠れたと同時に教師がばたんと扉を開けた。

「隠れてないで出て来いっ」

「誰が隠れると？」

魔王は堂々とソファに寝そべり、悠々と教師を見ている。隠れたミッルとアンナは絶句している。

「……ほう、逃げ出さないといい度胸をしている」

「何故、魔王が平民から逃げねばならぬ」

自ら名乗ってしまうとは、流石にミッルも予想外だ。

「開き直りか。それで許されると思うな」

「許す？ 何を馬鹿な。許しを請うのはお前の方じゃ」

教師はその女子生徒の態度に口元をびくびくとさせている。これ以上刺激するな、とミッルは必死に伝えようとした。

「この応接室で最も偉い者が座るのはどこか。知っておろうな」

「知ってるも何も、今、お前が座っているところだっ！」

教師がソファを占拠する魔王につかみかかるうとするのを見て、仕方ないかとミッルとアンナが飛び出そうとする。

「つまり、この応接室はワシが支配している。お前は反逆罪じゃ」

「な……」

ミッル達が飛び出す前に、教師がずしんと床に崩れ落ちた。身動きひとつせず、ただ蛙のように這いつくばっている。

「魔王の温情じゃ。少しばかりいじらせてもらう」

ぐりぐりと教師の後頭部を踏みつけた後、飛び出そうとしたポーズで固まっていたミッル達を見た。

「ほれ、何をしておる。もうこの応接室には用はないのじやろう」
「あ、ああ……」

正直、ミツルは魔王の言動に逆らえずにいた。これが場を支配した魔王の行使する絶対的に他を見下す力。

「案ずるな。こやつは、今見た聞いたことを他に口にする気はもう起きぬ」

「何でだよ」

そう訊くミツルに対する魔王の答えはシンプルだった。

「そうしたからのう」

ミツルはこの小さな少女が異次元の魔王であることを認識させられた。その目は明らかに今までとは別人、支配者のものだった。

「魔王おおっ！ 先生足蹴にしちゃ駄目だろおおっ！」

当たり前のことを注意して、ずびしつとアンナが魔王の頭に手刀を入れる。その光景にミツルは物凄いショックを受けた。それはサントクロースやスーパーマンのような、長い間信じ続けたことが嘘偽りだったと知ることには似たものだ。

「うう……何をするかあ」

「先生に謝れええっ！」

「……アンナ、もういい。行こう」

ミツルはアンナを止め、応接室の外へ出るように促した。魔王は打たれた頭を抑えながら、その後をすたすたとついていく。その間も、這いつくばっている教師は死んだように動かない。

「さて、早速タカシの想い人のおる教室へ案内してもらおうかの」
3人が応接室を出ると今までの出来事が無かったかのように、魔王はにっこりと微笑んだ。その笑顔を、ミツルはまともに見ることが出来なかった。

【モーゼのジャージ】

【モーゼのジャージ】

ミッルと魔王は2時間目終了のチャイムと同時に教室に戻った。
3・4時間目はアンナのいるクラスと合同での体育だが、タカシの姿は見えなかった。

「あ、魔王ちゃん、甲藤くん達とどこ行ってたの？」

「お、噂の転入生が帰ってきたぞ」

話題性はばっちりの魔王に他クラスの者までその顔を見に来てい
るようだ。出迎えに魔王が気分良くするが、着替えの時間もあるの
で長続きはしなかった。男子はアンナの教室で、女子は魔王のいる
教室で着替えるため男子はあつという間に退散していった。

「ワシはまだ着替えを持っておらんのか？」

「あ、それなら見学届けを先生に出せばいいの」

「む？ ワシは体育とやらに出たいのじゃが、着替えが無ければ
見学なのか」

魔王の言葉にその女子生徒が言葉を濁した。どうやらそれは女子
の体育においての当たり前になっているようだ。

「……あの、私のジャージで良ければ、貸しましょうか？」

「おお、そうか。そうさせてもらおうか」

既に着替え終わった女子生徒がおずおずとジャージを差し出すと、
魔王はそれを受け取る。その時にさつとモーゼのように人だかりが
割れた。

「ふむ」

「あ、先行ってますね」

女子生徒が机に身体をぶつけないように避けながら、それでも当
たるといっとろさを見せながら教室を出て行った。それだけのこと
で、さつきまで魔王のことで騒がしかった教室が少し静かになった。

「あ、そろそろやばいかな」

静かだった教室も休み時間の終わりが近づくと、また同じようなざわめきが戻り慌ただしくなる。魔王も借り受けたジャージを着ようと、まじまじと服の構造を見るとその胸元に名前が刺繍されていた。

「……成る程、あれがそうか」

人気がなくなった教室で魔王が呟き、モーゼのジャージをぎゅっと握り締めた。その胸元にあった名前は『朝来野』 タカシの想い人だった。

【屋上で】

【屋上で】

「サボるとはいいい身分だな。麻島タカシ」

1時間目から屋上にいるタカシが、その来訪者の方を見た。4時間目の始まりのチャイムまで、あと2分だ。

「……お前も授業はどうするんだ」

「一緒にするな。これだけあれば、遠く離れた体育館にでも間に合う」

来訪者は当たり前のように言うが、普通なら出来るわけがない。

「そーかよ。で、おれがいつサボりだって？　ここへは授業の合間に来ただけだ」

「既に各教科の担当教師に確認済みだ」

タカシは心の中で舌打ちした。よりにもよって、面倒な相手に見つかったものだ。と。この来訪者はその真っ直ぐな目で何でも見通している。

「お前は授業の合間にここへ来たと言うのだな」

「……」

「ならば、今から4時間目の体育に出ることだ」

くるりときびすを返し、その来訪者は屋上を出て行った。それから30秒もしない内にチャイムが鳴った。

台無しだ。

せつかく、久し振りのサボりだというのに邪魔が入った。これ以上、ここにいる気にはなれない。

「今から間に合うかよ。お前と一緒にすんな」

タカシはつぶやくと、そのまま屋上を後にした。それでも、午前の授業に出る気にもなれなかった。

「……ちっ」

タカシは舌打ちした。屋上の扉に手をかけようとした時、離れた

運動場から「魔王おおっ！　すすぎるぞおおっ！」と聞きなれた
叫び声がしたのは気のせいだろう。

【モーゼの正体】

【モーゼの正体】

昼休みに魔王とミツル、アンナは再び応接室を訪れた。その道中で、魔王が屈服させた教師とすれ違ったのだが、本当にミツル達に對して何も言つてはこなかった。

「流石に腹が減つたのう」

「あの体育の後だからなああつ！」

「魔王さんはなんか凄かつたらしいね。男子の間で持ちきりだつた」

女子生徒達から聞いた話は魔王が垂直に3m以上跳び上がったとか、残像が残るほどのステップを見せたなどのにわかに信じられないことばかりだった。しかし、当の魔王は平然としている。

「ワシと平民と一緒にするな。肉体構造から違ふんじやから、当然じゃ」

どうやら、あれでも手加減をしていると言いたいらしい。ミツルは肩をすくめ、少し震えた。

「……さ、食べるか」

「ミツルウウウウウッ！ あーんしてやるぞおおおおお おおおっ！」

「断る」

各々が弁当を広げ、買つておいたペットボトルのふたを開ける。

少し間を置いてから、魔王がミツルに話しかける。

「のう、甲藤。タカシの想い人は朝来野力ナで間違ひはないのじやな？」

「あ、うん。……まず間違ひないと思うけ、どおッ」

「あれだけわかりやすいものなああつ！ ミツルウウウウウッ！」

「こいつ、ほどつ、でもっないけどなああつ」

ぎりぎりぎりぎりミツルとアンナが力と技の弁当攻防戦という取っ組み合いを繰り広げ始めながら、答える。その横で平然と弁当という名のチョコレートを食べている魔王も、この愛の取っ組み合いを見て引かないのは流石の一言だ。そもそもこのバカップルにこそ、世間体云々を問いたいところだった。

「その力ナとやら、集団的疎外に遭つてはおらぬか？」

「は？」

ミツルがぼかんと口を開けると、そこにアンナが隙ありと黒い唐揚げのようなものを放り込んだ。いったん口にしたもの吐き出すとはせず、ミツルは嚙まずに飲み込んだ。

「な……そんなことあるのか」

「私は知らなかったぞおおっ！」

「少なからず、その傾向があるようじゃ。いわゆるいじめかのう」

魔王はやれやれとあきれ、首を横に振ってみせた。ミツルとアンナは信じられないという表情だ。

「ま、まあアンナはこんなだから気づかなくても無理ないが……

俺は同じクラスだぞ」

「クラスの皆が気づかない程度のもでも変わりはあるまい」

ようかんをご満悦で頬張る魔王は「まあ、タカシは気づいていたやもしれんな」と付け加えた。先程の着替えと体育の時間で、それは魔王のなかで予感から確信に変わったそうだ。

「ゆ、許せんぞおおっ！」

アンナが暴走し、そのまま問答無用で説教しに行きそうだったのでミツルは足首をつかんで転倒させた。その勢いに容赦なく、アンナはどべしゃんと倒れこんだ。

「で、そのことが魔王さんの生活問題とどう関係して来るんだ？」

「それを踏まえての案がある」

魔王はパンをかじるミツルや突っ伏したまま動かないアンナを見ながら、にやりと笑った。

【この魔王が直々に考え出した案】

【この魔王が直々に考え出した案】

「よし聞こう」

「うむ。まずはタカシを見つけて出す」

結局、午前中の授業……タカシはミツルのいる体育にも出てこなかった。今もどこかでサボっているのだろうか。魔王は「ミカコが知れば嘆くぞ」と言えば、ミツルは「おばさんなら笑って片付けそうだけど」と返した。

「で、見つけてどうする」

「うむ。あのクラスの長としていじめは見過ごせぬ。そこでカナがいじめられている現場を押さえ、タカシに助けさせるのじゃ。そこで告白させれば落ちるじやろ」

真面目な顔でぶつとんだ発言をする魔王にミツルが声を出さずにひいひい笑っている。

「た、タカシにそんなことやせんのか……っ」

「ぬ。稀に見るいい案ではないか」

魔王は笑うミツルをにらむが、当の本人は急に真顔になった。

「同感だ。やろっ」

「おぬし、本当にタカシの友人か？ 物分りが良すぎるぞ」

「ミツルがやるなら私もやるぞおおおおおおっ！」

顔面から倒れたアンナががばりと起き上がり、無意味に燃え上がっていた。魔王は何故か必死にお菓子の山を隠そうとしている。

「おぬしの連れを何とかせい。うるさくてかなわん」

「あー、そうだな。そうしたいところだが、こいつは性分らしい」

「厄介な性分じゃ。暑苦しいわ」

「ところで、そのお菓子の山は何だ？ デザートか？」

先程から魔王が食べているそれらを指差すと、魔王はゆっくりと浅くうなずいた。

「うむ。これはワシの昼食じゃ」

「……栄養偏るぞ」

「ふん。ワシにとってこのような食事は栄養を補給する為のものではない。平民共からエネルギーさえ得られれば、単なる嗜好しゅうこうから選んでもよいのじゃ」

魔王はアンナの弁当と自分のお菓子を見比べながらそう言つと、ミツルは眉をひそめた。

「話じゃそれってまともに得られてないはずだけど」

「まあな。さっきの教師で多少は得たがの」

要するに魔王が甘いものを食べただけなのだろう。つまるところ、ただの偏食だ。飲み物まで甘いココアとおしることきているから相当で、見ているミツルの方が胸焼けしそうだった。

「……うーむ」

「どうしたあああああつ？」

今まで嬉しそうに甘いお菓子を食べていた魔王が急に神妙な顔つきになり、伸びていた手も止まった。何か重大なことでも気づいたか思い出したか、ミツルより早くアンナが叫んだ。

「飽きた。これ、甲藤、おぬしのパンをよこせ」

「おいっ」

「させるかああああああつ！」

【偶然】

【偶然】

「んで、どうやってそんな風に持っていく気なんだ？」

昼食を食べ終えた魔王とミツル達は応接室を後にし、自分達の教室へ戻り始める。人目を構わずミツルの腕や身体に抱きつくアンナ、それを全力で阻止しようとするミツルに平然と気にしない魔王。廊下を並んで歩くと、なかなか目立つトリオだ。

「ふむ。コトは早急に進めたい。が、充分に策は練る必要があるな」

魔王は腕を組み、何を思ったかくるりといちゃつくミツル達に言う。

「敵を知れば百戦危うからず、と言うじやろう。まずはカナと親しくしている者から話を聞いてみようではないか」

「ああ、なるほど。悪くないな」

「じやろう？ おぬしら、誰か心当たりはおらぬか？」

そう訊かれ、今度はミツルが腕を組んで考え出した。首をひねり、ふと視線を上げると「ああ」と呟いた。

「朝来野さんと親しい人、心当たりがある」

「まことか！　して、それは誰じゃ」

「後ろ」

ミツルに指を指され、180度ぐるんと回転する。しかし、またぐるんと180度回転しなおした。

「ワシは何も見えていない。何も言っではおらんぞ」

「お前ら、何の話をしてんだ」

魔王の真後ろにいたのはタカシだった。

【肩透かし】

ミツルはにこやかに挨拶を交わしている。

「おのれ、甲藤め謀りおつたな？」

「謀るも何も、タカシと会っちゃったのは偶然だけど」

朝のやり取りもあつて、非情に気まずい空気が出来ている。

「朝来野のことなんじゃが」

「朝来野がどうかしたのか？」

……はずだったが、タカシと魔王は同時に発言した。はたとお互いの顔を見合わせる。

「いや、体育の時に服を貸してもらつてな。これを機に交友関係を広められぬかと一考しておつたのじゃ」

「そうか」

「そうじゃ。邪魔したな」

すつとタカシの横をすり抜け、魔王は立ち去ろうとする。ここで出会つたのはまずかつた、失態だと唇を噛んだ。

「……おれはてつきり、カナのいじめか何かの話かと思つたんだがな」

タカシの言葉に魔王がはつと振り返り、ミツル達も目を見張っている。

「何故」

「何故それをおおおおおおつ！」

アンナがミツルを押しつけ、叫びながらタカシに迫る。その本人は「ああ、やかましい」と露骨に顔に出した。

「薄々だがな。気づいてた」

「よく見てるな」

ミツルがにやりと笑つと、タカシはうつと言葉に詰まつた。

「……ともかく、だ。お前らが何を考へてるのか知らねえが、下手に手を出すんじゃないぞ」

「それは何かまずい理由があるんだな？」

「ねーよ」

タカシの否定にミツル達は納得がいけないようだ。深々とため息を吐き、じろりとにらむ。

「お前らなんか手エ出さなくても、勝手に解決すんだよ」

「……」

タカシはミツルの肩を軽く押し、道を作って歩いていってしまふ。ミツルは「午後の授業には出るよ」と声をかけると、タカシは片手を振って応えた。

「そもそも手を出してもらうのはタカシなんじゃが……」

「どういふことなんだあああああっ！」

アンナがそう叫んで、何の脈絡も無くミツルを抱きしめる。とつさに首との間に腕を入れたので、羽交い絞めにされることだけはまぬがれた。

「気になるのう。もはや、まだるっこしいこと無しで本人に訊くか」

「今から？」

近くの教室が時計を除き見れば、あと10分ほどで昼休みは終わリだ。充分に話を聞く時間はなさそうだった。

「仕方ない。放課後にするか」

【魔王の座学】

【魔王の座学】

「案外、簡単じゃのう……」

魔王はタカシの教科書をぱらぱらとめくり、そう呟いた。期待はずれ、そういった顔だ。

「もう少しレベルを上げてもらいたいものじゃ。のう、タカシ？」
魔王はすぐ前の席の男の子にそう話しかけた。先程から何度も呼びかけているのに一度も振り返ってほくれない。

「……うるせーよ。授業に集中しろ」

「ふん。教科書も見えないやつが何を言うか」

それはタカシが魔王に貸しているからなのだが、2人はぶつぶつと小声で言い争っている。その険悪な雰囲気は周囲はまた好奇の目を向けている。

「やれやれ……」

その様子を横目で見ていたミツルが微笑ましく2人を見ているが、同時に放課後という座学解放も刻々と迫っていた。

【待ちに待った】

今日一日の授業終了チャイムが鳴った。その直後に魔王はタカシの鞆を放り投げ、帰り支度しているカナの席に向かう。その間に魔王に近づこうとする男女子生徒は目にもくれない。

「少し時間を作れ。話が、ワシが聞きたいことがあるでな」

第一声で既に命令形だ。当のカナはきよんとしている。

「えーっと、魔王……さん？」

「なんじゃ。それとも火急の用件があるのか？　じゃが、それよりもワシとの時間を優先せい」

「うーん、じゃあ少しだけね。いちおう、部活動があるから」
カナの了承を得ると、魔王はうむと軽くうなずいた。それから形

式的な社交辞令でもするか、と魔王はカナに訊いた。

「部活動とは？」

「手芸部なの。家の喫茶店のコースターとか、少しでも手伝いたくて」

「タカシと一緒にか」

「麻島くん？ そうだね」

にこつと笑うカナに魔王はしたりとほくそ笑んだ。タカシへの印象はなかなか良いようだ。少なくともただの不良とは思われていない。

「聞きたいことつてもしかしてそれ？」

「いや、それとはまた別じゃ」

カナはふーんと首をかしげている。いちいちその様子が愛くるしいのは幼い顔立ちのおかげか、と魔王は冷静に観察している。

「じゃあ、移動する？ 掃除の邪魔をしちゃ悪いし」

「そうか。なら、話す場所は任せてやろう。ワシはまだ校舎内を把握しておらんな」

「あ、それなら校内も案内しながらにしようか。てっきり、甲藤くん達としてるものかと思ってたけど……どうかな？」

魔王はそのカナの提案に乗ってやることにした。タカシの動向は付き合いの長いミツルに任せることにしたのだが、それが吉と出るか凶と出るかまではわからなかった。

【校舎案内】

【校舎案内】

部活動があると言った割には、カナは丁寧に校舎内を案内してくれた。

「斗葉高校は4階建て普通科棟と5階建ての工・商業科棟、3階建ての部室棟に地下施設のある体育館の4つに分かれてるの。でもどの棟も渡り廊下みたいので繋がってるから行き来は簡単な」

ミツル達がこっそり使っている『あまり使われていない応接室』は普通科棟にある。工・商業科教職員室以外の校長室などの外来関係は普通科棟に集中しているようだ。

「その代わり工・商業科棟は作業場とか設備が充実してるけど、私達はあるまり使わないかなあ。あ、危ないから屋上へは行っちゃ駄目だよ」

以前はタチの悪い不良などのたまり場だったそうだが、今は別の抑止力のおかげで誰も行こうとはしない。行くとすればその抑止力を恐れない変わり者だけだという。

「平民の学び舎にしては広いのう」

「そうかな。こんなものだと思うけど……」

カナは自信無さそうに言うと、魔王はふんと鼻を鳴らした。実際、他の学校を見比べてきたわけでもないので適当に言っただけだった。

「もう良い。あとは案内板で詳細を確認する。本題に入るぞ」

「あ、うん。何かあるの？」

まだカナは魔王の思うところかわからないらしく、何を聞かれるのかと緊張している。

「ワシは遠回しに聞くだとかは嫌いでのう。カナは」

魔王が言いかけると、いつの間にかガラの悪そうな男子生徒にカナと一緒に囲まれているのに気づいた。どうも理知的な思考回路は持っていないさそうな連中だ。

「知り合いか」

「……はい」

カナは言葉を濁し、うつむいた。察するに何か面倒事が起きているのかもしれない。

「ふむ。おあつらえ向きの状況じゃな」

「え？」

「いや。それより、どうするのじゃ？」

「あん時のこと、覚えてるんだろーな」

困んでいる連中の1人がそう言くと、カナは小さくうなずいた。

魔王は置いてけぼりだが、この状況を楽しんでいた。

「なかなか面白そうな学校ではないか」

魔王はそう笑った。

【ものの2分で】

【ものの2分で】

「成る程のう。これが原因か」

魔王はふうとため息を吐いた。しかし、確かにこれは由々しき問題だ。

「タカシ。おぬし、本当の馬鹿者じゃな」

「うるせーよ」

先程までカナと魔王を囲んでいきがっていた連中は、いきなり現れたタカシに軒並みのされてしまっていた。その後ろで両手を上げていかにも「俺は手を出してません」というポーズを取るミツルと抱きついているアンナがいる。

「しかし、どうしてこんなことになったのかのう」

「麻島くんは悪くないんです」

そう弁明したのはカナだった。魔王は面白そうに「聞こう」と返した。

「ついこの前、私が町でこの人達にからまれていたおばあちゃんを助けようとして、間に入って……」

【9月2日の夕方】

「なんだよ、おめえは」

「何をしているんですか」

部活で少し帰りが遅くなったカナは、偶然見かけてしまったガラの悪そうな男子生徒達と見ず知らずのおばあちゃんとの揉め事に間に割って入った。

「こいつがよお、人にぶつかってあやまらねーんだよ。あー、いてえ」

「なんだい、わたしや道の左はじを歩いてたよつ。よそ見してたのはそつちじゃないか」

男子生徒達と強気なおばあちゃんの言い分がぶつかり合っているらしい。双方があやまればすみそうな話だが、そうは収まらないようだ。

「こっちはな、あいつらのせいでむしゃくしゃしてんだよっ！
くっそ、何が超だっ。ちきしょうめっ」

「何かと思えば八つ当たりかい。年寄りをいたわるとかいう気持ち
ちは無いのかいっ」

「おばあちゃん」

カナが興奮して真っ赤になっているおばあちゃんをなだめようと
しゃがむと、男子生徒の1人がおばあちゃんを蹴り倒した。

「いたわるって何よ。お前、オレ達に何かいーことしてくれたの
？」

「うぜーんだよ。しつけーのはてめーもだろ」

「もう行こうぜ」

「待ちなさい」

行きかけた男子生徒がガンとつけて振り返ると、ぱしんと頬に鈍
い痛みがはしった。カナの平手打ちが男子生徒にきれいに決まった
のだ。他の男子生徒はあっけに取られている。

「何す」

「どちらが悪くても、どっちかに明らかな非があっても、暴力は
いけないっ」

カナの震えるような声に、男子生徒の顔がたたかれたところ以外
まで赤くなっていく。

「テメ……ッ」

「ナニいい子ぶってんだっ」

1人が拳を固めると、1人が「おいっ、まずいって」と止めよう
と声をかけた。

「っるせー！　ここは校外だっ」

「いい加減、腹が立ってんだよお。何が超だっ」

カナが後ろを振り返ると、蹴り倒されていたおばあちゃんの姿は

もう無かった。この混乱に乗じて逃げたらしい。

「ああ、人を助けるって馬鹿だよな」

男子生徒が笑って拳を振り上げ、カナに殴りかかった。カナはそれをとっさに何とかカバンで防ぐが、力に押されてよろけてしまう。

「平手の分だけ返すだけだ」

だが、それだけではすまないような不穏な空気がある。何かしうとも反応が間に合わない。

「っ」

カナの目の前の拳を誰かの平手がバチンと受け止める。その間に入ったのは配達帰りのタカシだった。少し離れたところに乗り捨てられた愛チャリが放置されている。

「取り込み中らしいな」

「デメエ……」

男子生徒達の方はタカシの顔に覚えがあるようだ。カナはぽかんとタカシの横顔を見ている。

「何がどうなってんのか知らねーが、とりあえずこの拳はおれに向けとけ」

「んだと？」

タカシの物言いにきちんときたのか、男子生徒達はガンをくれオウと凄んでみせる。

「なに言ってるのかわかんねーよ。邪魔してんじゃねーよ」

「ワリイのはそのオンナなんだよっ」

「理由が欲しいのか？」

「あ」

タカシが表情を変えぬままにバシバシッバシンといい音を立て、男子生徒達を少しよろけるくらいに平手で押した。それを背に隠されるようにしているカナは啞然としている。

「……どういっつもりだ。ア？」

「これで悪いのはおれだな」

ぎりぎり男子生徒達とタカシがにらみ合いをしていると、カナ

がぐいつとタカシの手を引いた。それは無言の訴え^{うった}だった。

「今日のところはひいてやるよ。だけどよ、このままですむとも思ふなよ」

「ナメられたまんまじゃ終わらねえんだ」

タカシとカナの横を通り抜け、男子生徒が毒づいて去っていく。

それは突き刺さるような空気だった。

「で、何があつたんだ？」

今更のようにタカシはカナに訊^きくと、真っ直ぐに目を見て答えてくれた。

【余計だったか】

「余計だったか」

「タカシ、おぬしは無駄に臭くてかなわん」

「うるせーよ」

魔王がもの凄くイイ顔で拒絶する。ミツルは抱腹絶倒^{ほうふくぜつとう}、アンナはそんなミツルと一緒に転がっているだけだ。

「朝来野と絡んでたのはちよつと顔の知れた仲良しこよしでな。おれとのやり取りをクラスの女子が見てたらしくてな。そういうのに関わりたくなかっただけだ」と

「ああ、そんな日も経ってないしな」

カナの元にこうしてすぐ来なかったのは学校は同じとわかっていても、学科・学年・学級^{クラス}がわからなかったからだ。自分達からわざわざしらみつぶしに探していくのも面倒だと、放っておけば忘れてもくれたらう。

「そこへワシの校舎案内で色んなところに顔を出したせいで」

「見つかったんだよ。つたく」

人の噂も七十五日。タカシの言う勝手に解決するとは時の流れのことで、確かに下手に手出ししなければいずれまたカナと女子生徒の間は元通りになったはずだらう。集团的疎外ではあったがいじめではないからだ。

「で、何ゆえタカシがすぐ傍におったのじゃ。のう？」

魔王はちらつとミツルとタカシの方を見るが、流された。しかし、それで声に出しての追求をやめる魔王ではない。

「よほどカナが心配だったのじゃな。愛い奴め。つけおったな？」

「バカ言っんじゃないよ。たまたま、だ」

タカシはそう言うが、ミツルはその後ろで手を横に振って否定している。魔王の言う通り、校内を歩き回ると知って心配になったのだらう。案の定、見つかってしまったわけだ。

「麻島くん。ありがとうね」

カナはぺこりとお辞儀をしてみせると、タカシは目を合わせず「礼を言われるこたあねーな」と返す。

「でも、いいの。私は平気だから」

真っ直ぐにタカシのことを見て言う様や言葉も、あの時と同じだった。

「余計だったか」

「嬉しかったよ」

タカシもあの時と同じ様で言葉を返すと、カナも同じように返してくる。アンナは2人の空気に更に燃え上がり、ミツルと魔王はにやにやして見ている。2人は小声で話し合う。

「これは、のう？ 甲藤」

「ああ。予定とは違うが、状況は似たようなもんだな」

「もう一押しか」

ミツルは笑顔で「む、ぬおおおおっ！」と燃えるアンナを頭から押さえ込み、黙らせる。魔王は耳をふさいで少しだけ距離を置いている。

「じゃあな」

「うん。魔王さん行こう」

「そうか」

カナにつられて魔王が歩き、タカシも踵を返して元来た廊下を歩いていく。ミツルとアンナはいつものようにバカップルだ。

【ノッていこう】

【ノッていこう】

「……と、何を流しておるっ」

うつかり、そのまま校舎案内に戻ってしまふところだった魔王が突っ込んだ。タカシが訝しげに振り向いた。

「んだよ。まだ何かあんのか」

「何故じゃ。何故にここまで引っ張っておきながら、何も無しのじゃ！」

カナが首をかしげ、タカシは眉をひそめている。おそらく、9月2日もこうして何も進展しなかったのだろう。

「ええい、まだるっこしい奴めっ。生殖機能を充分有している年齢としのくせにっ」

ダンダンと地団駄じだんだを踏む魔王の隠さぬ物言いに、カナは目を白黒させている。ミツルは流石、魔王と言わんばかりのあきれた顔を見せる。

「タカシ、おぬしの意気地が無いことはよく理解した。しかしじゃ、それではワシが困るのじゃっ」

見事な自己中心っぷりの魔王を、タカシは冷めた目で見下ろしている。魔王はカナを指差し、「……お前、何考え」というタカシの言葉を遮った。

「カナ、時に聞くがおぬしはタカシのことをどう見るか！ 見知っている学友か、それとも男として独占したいかっ。さあ答え

」

「麻島くん？ クラスメイトだけど」

魔王の極端かつ究極の質問をカナはあっさりと返した。悩む時間もまるで無い。これには流石の魔王も固まっている。

「えっと、話って……それ？」

「あ、いや」

本当はいじられていることの自覚やタカシに関する意識調査だったのだが、どちらも終わってしまった。魔王は次の言葉が出ないでいると、代わりにカナが言った。

「麻島くんはね」

【カナの心】

「学校の授業はサボるけど家の手伝いはよくしてて感心するし、とろい私のことを気にかけてくれるくらい面倒見がいいし、暴力はいけないけど運動も出来るし、成績は悪いけど頭はいいし、ちょっと顔が怖いし厳しいところもあるけど本当は子供にも優しいし」

カナは指折り、タカシの悪いところと良いところを挙げてくれる。まるで家族自慢のように言ってくれた。

「……つまるところ、カナにとってタカシとは何じゃ？」

「いい人、かな」

「1人の異性として、精を受けたいとは？」

「えっ、そんな。考えられない」

魔王の直接的な問いに、カナはそうはつきりと返した。

「……今日はもういいぞ。ワシは疲れた。部活動とやらに行くがいい」

「そっか。うん。じゃあ、また明日案内してあげるね」

カナはぱたぱたと歩く速度で走っていくのを、残された魔王達はその背を見送る。カナは一度くるりと振り返って、魔王に手を振り、また走り出した。

「よくわかった」

そう魔王はしみじみと、腕を組んでカナを語った。

【どの辺がツボなのか】

【どの辺がツボなのか】

「いい女子^{おなこ}じゃ。幼顔じゃが、気性は穏やかで温かい。自らより他人のことを思いやり、正義を思えば毅然^{きぜん}と立ち向かい、損得なしで動ける。そこに他人の手を借りようとせず、自らでやろうとするその心構え。とろさを見れば無茶無謀と取れるが、他人に助けてもらえば礼も欠かさぬ」

魔王はふうつと首をゆっくり横に振り、ひとつ息を吐いた。

「タカシが惚れるわけじゃ。じゃが、脈は可哀想なほど無い」

ぶすつと無愛想なタカシを見上げ、きっぱりと言った魔王はにやりと笑う。

「むしろ、異性というより父親や兄的な存在と見ているようじゃ。少々気にかけすぎたようじゃのう」

「うるせーよ。八百屋と喫茶店の繋がりがあって、そもそもカナをどうとか思ってたねえつつの」

「ただのクラスメイトを呼び捨てにしてる時点でアウトだと思うけど」

ミツルがからかうのを、タカシがぎろりとにらむ。それから思い出したように魔王の方へ視点を下げた。

「で、お前らは何を聞いてんだよっ」

「む、ワシらはタカシの為を思ってた行動したまでじゃ」

「嘘つけ。ただで動くタマか、お前は」

「心外じゃな。そのように見られておるとは」

「人に何も話さねえやつはそう言われても仕方ねえだろ」

魔王はぐつとタカシをにらみつけるが、その相手はそれを無視して背を向けた。

「今日の夕飯の時に考えてることをきっちり話せ。家から追い出すのはそれからにしてやる」

タカシの言葉に魔王は狐につまされたような顔をしている。それから、いきなりミツルとアンナとがっしと肩を組んで円陣を作った。「正直なところ気持ち悪いくらいなの、この心変わり、どう思う?」「ミツルと私のように、その思いと一生懸命さが通じたんだああああああつ!」

「うーん、付き合いの長い友人からすれば、身勝手な魔王さんのタカシの為って言葉にキたのかもしれないな」

「ほう、それは単純な」

「マジで今追い出したるか」

冗談には聞こえない低い怒声をうなり出すが、魔王はふふーんと鼻を鳴らす。無愛想なタカシの頬と耳がわずかに染まり、いつもの迫力は無かった。

【面白ければ良し】

【面白ければ良し】

「カ……朝来野のことは、大方ミッル辺りから何か変なこと吹き込まれたんだろ」

「それこそ心外だ。俺がそんな大切な友人で遊ぶような真似は」

「今してんだろうが」

ミッルはH A H A H A H Aとオーバーアクションで笑うが、タカシは目も口も笑っていない。

「うーむ。こやつ、本当にタカシの友人か？」

「もちろん」

魔王もあきれて言うのを、ミッルが自信を持って微笑む。タカシは何だかぐつたりと疲れていた。

【いい感じ】

「ふむ。まあ、タカシと話し合いの場が出来ただけでも良しとするかのう」

「魔王おおつ！ 良かったなああつ！」

問答無用で追い出されるわけも無いだろうが、取り付く島も無かったのは確かだ。アンナが魔王の手を取り大きく振り回すように手放して喜ぶが、相手のその顔は引きつっている。

「先に帰えるからな」

こいつらとは付き合いきれん、疲れるという露骨な表情をタカシは見せている。それでも一声かける辺り、相手を思いやってはいるようだ。

「ぬ。ワシも帰るぞ」

「小学生と並んで帰る気はない」

「ふつ、手を繋げとは言わぬよ。ロリコンめ」

「誰がだ、変な言葉使っくんじゃねえ！ ミッルかつ」

「おいおい」

「ミッルウウウウッ！　そうなのかああああああああっ
！」

アンナが叫んで肩をすくめるミッルに抱きつき、さっさと逃げ帰ろうとするタカシの服のすそをつかむ魔王がいる。見れば微笑ましい光景だが、その周りに仲良しこよしの男子生徒達が放置されていた。

【2人揃って】

「お帰りだね。どうだった、学校は」

魔王とタカシが並んで帰ってくるのを、ミカコはいつもと変わらぬ笑顔で迎えてくれた。それに応えるように魔王は満足げな笑みだが、タカシは相変わらずぶすっとしている。

「うむ。なかなか有意義なものであったぞ」

「とりあえず言いたいことや訊きたいことが山ほどある」

「そうかい。んじゃ、夕飯前にひと働きしておくれ」

ミカコは笑顔のまま、仕事や接客をこなしていく。タカシはてきぱきと準備を進めるが、魔王は悠然と構えつついかにも「どれ、まあ働いてやるかのう」という緩慢な動きでエプロンを取った。

「おら、働く気がないなら奥引っ込んでろ」

「ぬう。上に立つ魔王が下の者と同等に、積極的に働いておったら幻滅するじゃろ」

「下って誰だ。下って」

タカシが突っ込めば、魔王がじつとにらみ返す。そして、ほんと嘲った。その意味は考えるまでも無く、タカシが吼えた。

「やれやれ」

この2人、魔王が来てから始まったやり取りにミカコは手伝ってもらったことをひそかに諦めた。

【夕飯会議開始】

「さて、話してもらおうか」

今夜の夕飯が並び、半分ほど食べたところでタカシが切り出した。魔王が味噌汁を一口味わい、箸を置いた。

「何を話せばいいんじゃ？」

「いきなり高校に通いだした理由と金銭的なものに関してだ」

「む。」「
そっか」

【魔王のプロフィール】

【魔王のプロフィール】

「そっぴゃお前、年いくつだ」

外見も中身も偉そうな小学生なのだが、実際は尋ねたことがなかった。そこでタカシは改めて訊いてみることにする。

「生きてきた年数のことか？ さて、ワシのいたアルデピマジウムイダはことはサイクルが全く違うからのう」

「魔王だろ。こつちの年数に変換出来ねーのか？」

「出来るとも。ただワシら一族はそこの平民の寿命の数十倍はあるからの。子でも産まぬ限り、滅多に老いることもなし」

不老不死に近いと言いたいのか、勿体ぶった言い方にタカシがいらつと訊いた。

「で、こつちでいう年は」

「17じゃ」

「……えらく現実的な数字だな、おい」

【ますます厄介な】

「てことは、タカシと同一年？」

「頭痛くなってきた……」

まだ数百歳というような非現実的な数字の方が慰められたが、半端に現実的だと相当厳しいものがある。タカシはうなり、頭を抱えた。

「勝手に年下に見る方が悪いのじゃ。人を外見で判断してはいかんぞ」

「いや、お前も言えよ！」

「大体、生きてきた年月は関係ないのう。要はどれだけものを見て、考えてきたかじやろう」

「いや、それもどうか」

「じゃあ、タカシの部屋の隣はまずいかねえ」

ミカコは的を得ているような外れているような発言で、タカシを更に呆然とさせる。そこが問題なのか、と。

「ふむ。その辺はワシは構わんど。蛙なぞ何の問題ない。試しに夜這いに来てみるか？」

「やっぱお前出てけ」

ビツとタカシが玄関の方を指差すと、魔王は「冗談じゃ」と真顔で返した。本当にどうにか出来るという自信に満ち溢れている。

「タカシ、あんたちよつと落ち着きなさい」

「そうじゃそうじゃ」

ミカコがタカシをいさめると、魔王はそれに便乗する。言われた本人も熱くなりすぎたと反省したのか、黙り込んだ。

「もうせい猛省しろ。猛省」

「うるせーよ。ほら、話せ。高校に行く気になった理由を、その口から」

魔王は砂糖入りの麦茶を飲み、一息入れて話した。

【こちらのルール】

【こちらのルール】

「ワシはここについてを図書館で学んだ。そしたら、意外とワシと似たような状況になっている者は沢山おった」

「待て。それ、本当か？」

「うむ。別世界から来た人間と一つ屋根の下に同居ということが書かれた本は多かったぞ」

「……それ、どんな本だ。ありえるかつつの」

タカシが訊くと、魔王は「軽くしゃべるコーナーにあった」と答えた。タカシとミカコは何かのテレビ番組ものと想像したが、恐らくそれは『ライトノベル』のシャレだろう。

「悪いが、それは嘘つつーか娯楽ものだろうから本当のことじゃねーだろう」

「そうか。……仲間がおったと思ったのに、あれは伝記ではないのか」

頭をかくタカシに、魔王が残念そうにつぶやいた。魔王からすれば、自分と同じ境遇の存在がいるというのは嬉しく夢中になって読んでに違いない。

「じゃが、別の本でこちらに関する重大なことも知った」

「だから、なんだよ」

魔王はタカシとミカコの顔を交互に見て、言った。

「ここは学歴や経歴が重視されるらしい、と。それはワシとて例外ではなかるう」

「あー？」

タカシとミカコが顔を見合わせる。学歴社会などと言われているが、それだけでもないはずだ。

「ワシは考えた。この次元に来た以上、ワシはここに適応しなければならぬ。その為にも、ここを知らなければならぬ」

ミカコはうーんと首をかしげ、タカシは黙って聞いている。

「ワシの存在がここに認められる為に、ワシがここをより詳しく知る為に、ワシは『年相応』に学校へ通うことにしたのじゃ」

「ああ、そうか」

タカシが危惧するまでもなく、魔王も自分の身の降り方をきちんと考えていたようだ。その為にこちらの世界の仕組みを知ろうとした。生活サイクルも合わせようとしていた。それは高校通学への布石だったのかもしれない。

「金と戸籍はどうしてる」

「奨学金とやらも利用してみたかったが、間に合わぬようなので魔王の力的なもので得た」

「犯罪ではないぞ」と魔王が付け加えるが、タカシ達には詳しく話さない。しかし、深く追求するのは話がすべて終わってからでもいい。

「戸籍も……似たようなものじゃな。目に見える書類は作らなかったが、まあ適当にやっておいた」

「……何でもありなのか？」

「天上のことは平民には理解出来ぬものよ。魔王じゃから可能な領域での」

「じゃあ、経歴も偽造すればいいだろうが」

魔王はフンと鼻で笑った。

【1行】

【1行】

「わかつとらんのう、タカシ。確かにそれは可能じゃが、所詮は表面上だけ。履歴を見ればたったの1行かもしれん。しかしその1行にその人間の数年間が詰められておる」

その1行は軽んじられも重んじられもする。魔王はそれも図書館などで見て、知ってきたという。

「そのような時間をとまなう思い出までは、ワシの力を以ってしてもどうにもならぬ。それでは意味が無いのじゃ」

ちやぶ台に両手を置き、魔王はその身を乗り出して語る。

「今からでも遅くはない。ワシは向こうで生きてきた礎の上に、ここで生きてきたという時間や証明を作らねばならぬ。ここで、更に生きていく為に――」

ミカコは頼杖ほおづえをつき優しい眼差しで魔王を見つめ、タカシはふうと息を吐いた。

「正直、意外だった」

魔王がここまで真摯しんしに考えていたとは、普段の態度からはなかなか想像つかないことだった。

「失敬なやつじゃ」

「ああ、失敬だった」

「そこは失礼でいいんじゃないかい」

ミカコがそう微笑むが、フォローにはなっていない。それからミカコはタカシの頭をぐしゃぐしゃと撫で回した。

「あんたはね、1人で抱え込みすぎなんだよ。もっと周りを頼んな」

「……」

タカシは撫で回されることに黙って、ぶすっとしている。魔王はにやにやと笑っている。

「ほんつと損な性分だね。難儀な子だよ」

「うるせーよ」

「タカシは本当にそればかりじゃのう」

「うるせーよ」

ミカコが撫で回してるのをどう見たのか、魔王も撫で回し始める。流石にこの扱いにはタカシもうなる。

「いい加減にしろ」

「ふーふーふふ」

魔王もミカコもどこか嬉しそうに撫なで回すので、タカシは手でそれを払った。

「で、お前はこれからどうしていくんだ」

「言うたろう。高校へ通い、最終的には卒業する気じゃ」

「自立するのね？」

「うむ。そのような気である」

少し頼りない言葉だが、魔王の気概はわかった。麻島家は結論を出した。

【麻島家の結論】

【麻島家の結論】

「としては、魔王ちゃんをこの家に住むことを認めます」

「うむ」

「もうちつとありがたれ」

ミカコの出した結論に魔王は満足そうにうなずき、タカシはたしなめた。

「恩着せがましいぞ、タカシ。この家はミカコのものじゃろうに」

「まあな。だけど、これだけは言わせてもらう。住まわせてもらう以上、店の手伝いはしっかりやってもらう」

「ぬ」

「その代わり、お前の衣食住と甘いものは保障してやる」

衣食住に付け加えられた甘いものに魔王は目を輝かせた。しかし、はたと魔王が真顔に戻って訊き返した。

「ところで有休と労災は申請出来るのか？」

「……お前もずぶといな」

「これくらいしつかりしてなきゃ、自立は大変よ」

ミカコは魔王を褒めると、「少しだけ月々のお給料も出すわ。」

「だけど、有休はタカシと交代でね。労災は救急箱があるから」と答えた。

「まあ給料って言うか、小遣いと同じだな」

「タカシも貰うておるのか」

「一応。店の手伝いしていると、使うことは少ないがな」

魔王はほうと感心している。タカシは別に感心するとこじゃねーだろ、と突っ込んだ。

「あと高校卒業したらこっから出るかどうかも考えとけよ。だから情性だせいでいる気だけなら追い出してやる」

「タカシもな」

にたりと笑う魔王は痛いところをついてきた。ミカコもタカシにそのまま店を継がせる気はないらしい。

「では、改めて、これから宜しく頼むぞ。ミカコ。タカシは学校生活共々な」

「はいはい」

「ああ」

返事も貰い、話し終えた魔王がすっと座りなおす。

「さて、食事を続けるところでしょうかの」

「飯が冷めちまったな」

「温めなおすかい？」

ミカコが腰を上げかけるが、魔王とタカシはこのままでいいと止めた。2人して声が揃うところにミカコは微笑んだ。

【魔王の思惑】

【魔王の思惑】

夕飯も食べ終え、各々が自分の部屋に戻っていく。魔王は一番風呂だったので、それも一番早かった。濡れた髪をふき、網戸に近づいた。

「面白いのう。これで血を吸う害虫を防ぐ、と」

そのつぶやきの通り、魔王はわかつているのにわざと網戸を開いた。ぷんというお馴染みの音を立て、蚊が数匹部屋に乱入してくる。蚊達は真っ先にその目の前の極上の獲物、魔王の湯上がりの肌に飛びついてきた。

「おぬしら、分をわきまえろ。誰の肌と心得るか」

魔王の言葉に、その周囲がチリチリチリと触れがたい空気と圧迫感に包まれる。ただ近づいただけで、蚊がふらふらと力を失くして畳の上にヘタれた。まさに虫の息という状態だ。

「……平民以外にも通じるか。同じ平民である教師にも通じたこの力、何故タカシには通じにくいんじやろう」

その圧倒的な支配者が許さない限り、立ち上がることなど出来ない。それが出来るのは勇者と呼ばれる部類のものだけだ。しかし、タカシはその支配下であらがってみせた。魔王はそのことが不思議でたまらなかった。

「隣り合っているとはいえ、ここは別次元。勇者の他に何かワシの力に抵抗するだけの要因があるのかもしれない」

それが今後の脅威^{きょうい}になりえる可能性が少しでもあるならば、早急に手を打っておく必要がある。魔王はそう考えていた。

「タカシの家にいられることになって、結果的に良かったのやもしれぬ」

何かと約束事の多い八百屋に下宿だが、その要因に最も近いかもしれないタカシを傍で見えていられるのだ。そう考えると、何も知ら

ずに自らの受け入れた麻島家に笑いがこみ上げてくる。

ワシは嘘はついとらん。嘘はついとらん。

ずくんと何故か胸がうずき、笑みも消えてしまった。そう、すべてを話していただいだけで嘘をついたわけではないのだ。だが、何かがひっかかったままで気持ち悪い。

「コラア、網戸開けっ放しにしてんじゃねー！ 蚊が入んだろーが！」

「うおっ」

魔王がびくんと反応し振り返ると、火のついた蚊取り線香を持つタカシの姿があった。タオルを首に巻いているところから、風呂から出たばかりなのだろう。

「仮にも魔王の部屋じゃぞ、扉ぐらい叩かんか。扉とは自と他の空間と心を隔てるもの。それでは何の意味もないじゃろっ」

「うるせー。なんか蚊が入ってくると思ったら、やっぱお前か」

蚊取り線香が煙たい。魔王はあまりこの匂いが好きじゃなかった。せつかくの風呂上がりなのに染みつきそうだからだ。

「それはワシの部屋からではない。大方、他の部屋からじゃろっ」

「ったく、こいつを置いてくぞ」

タカシが蚊取り線香を置いていこうとするのを止めたが、網戸を閉めようとしない魔王の言うことは聞かない気らしい。部屋に1歩2歩と足を踏み入れた。

「ちようどいい。今一度、試してみるか」

「あ？」

魔王がその力をタカシにも向けると、その身体がゆがんだ。それでも、タカシは立ち続けている。魔王は興味深そうに、面白そうに見ている。

「おら、ふざけてんじゃ……ねえ。またこ……れかつ。こっちは火イ持ってたぞ」

「やはり興味深いのう」

タカシの目と表情が段々厳しくなっていく。魔王は網戸を閉め、

タカシへ向けた力をといた。

「お前な、不用意にその力を使うんじゃないぞ！」

「のう、タカシ。何故、おぬしにはワシの力が効きにくいのじゃ？」

網戸を閉めたので蚊取り線香を置いていくのをやめてくれたタカシに、魔王が直接的に訊きいてみた。

「ん？ ああ……おれにわかるわけねーだろ」

「それもそうじゃ。魔王であるワシがわからんのじゃからのう」
その物言いにかちんときたのか、タカシが「あーあーあーあー」とやる気なさに声を出した。

「発声練習か？」

「心当たりならなくもねー……な」

「まことか！　して、それは何故か」

タカシはうーんと首をかしげ、眉をひそめ面倒臭そうに呟つぶいた。

「……なんつーかな、おぼえがあるからか？」

「何を馬鹿なことを。やはりタカシはあてにならん」

魔王はしっしつと追い払うように手を払う。タカシは何か言いかけたがやめて、慥然ぶぜんとした表情で魔王の部屋の扉を閉めた。

【9月7日】

【9月7日】

ダンダンダンダンと遠くの方から、何かの音がした。

「……むむう、むにやむにや」

これは何の音か。古き良き朝の家庭の音、ネギを刻む音なのか。それのおかげで魔王は目が覚めてきたようだ。

「良き朝じゃ。なんと清々しい」

寝起きの魔王が伸びをして、網戸を開けた。せつかく昇った陽や月を何かで遮るのは無粋であろう、というのが理由だった。

「さて、今日も一日やってやるかのう」

「何をやるんだ」

魔王が振り返ると、またタカシが扉を開けてそこに立っていた。再びタカシに魔王の力がのしかかる。

「おぬしも懲りぬ男じゃの。流石ロリコン。ミカコに言いつけるぞ。いや、もう言いつける」

「誰がだ！」

「ノックぐらいせんか。魔王であるワシとて女じゃからのう」

「ノックならし……たぞ」

言い訳をするタカシに魔王は更にその力を強めるが、相手はそれを堪えてくれる。

「いつ、じゃ」

「ず……つとだよ。お……前、それで起きれ……たんだろ。感謝さ……れてもいーん……たぞ」

これ以上は力の浪費と思ったか、魔王がその力をといた。解放されたタカシは腕を回すと、ごきごきと骨が鳴った。

「……あれはネギを刻む音ではないのか？」

「台所は1階だ。聞こえるわけねーだろ。何をとち狂ったこと言ってんだっ」

タカシはあきれていると、魔王はまだぼけーっとしている。どうやら寝ぼけと時差ボケのようだ。

「ああ、もう置いてくぞー!」

「いや、待ってくれ。ワシもすぐ行く。下で待っておれ」

頭が突然冴えたのか、魔王がいきなりシヤンとした。だが、タカシの姿はもうない。

「薄情者めっ」

魔王がそう毒づき、ばたばたと慌ただしく準備を整え、飛ぶように階下へ降りた。いや、本当にジャンプして降りた。

「ぐがッ」

「……おお、タカシ、ついにワシの下についたか」

「早くどけ」

階段の真下にタカシがいたのだ。魔王が飛んで、そのまま踏み潰したらしい。死にかけているタカシの手には何か包みがあった。

「なんじゃ、これは」

「……お前の弁当」

ようやくどいてもらい、げぼげほと咳き込んだ。魔王はちょこんと手に乗せられたそれを凝視している。

「何故じゃ」

「お前、ほっておくと甘いものしか食わんだろ。八百屋に居候して栄養偏りましたって広まったら困るんでな」

「素直じゃないのう」

「いらねえならおれが貰うぞ」

タカシが魔王の手から弁当を取り上げようとするが、魔王はふいっとその手から逃れた。

「いや、貰っておく。下々の者からの献上品は魔王であるワシが一番に得るものと相場が決まっておる」

「……お前も素直じゃねえよなあ。ほれ、遅れるぞ」

「ぬ。それは困る」

魔王がタカシの足を踏みつけ、ミカコに「行ってくるぞ」と声か

け麻島青果店を飛び出す。それを怒号どごうを上げ、タカシがミカコに「
行ってくる」と声をかけて追いかけるのだった。

「やれやれ……なんだかねえ、あの子達は」

まるで兄妹のようだ、とミカコは笑うしかなかった。こんなことを2人に言ったら、同時に否定するだろうことを思ってたまた笑った。

【朝の集い】

【朝の集い】

「そーか。仲直りしたのか」

「うむ。少なくとも卒業するまではあそこに居候出来る」

「魔王おおっ！ 良かったなああっ！」

アンナが本当に自分のことのように諸手を上げて喜んでいるが、魔王は一步引いている。朝からそのハイテンションに引いているのか、とミツルは苦笑していた。

「おい、魔王、あんまり言いふらすなよ」

「む。世間体か。気にしたところで、いずれ知られることじゃろうに」

「……まーな。だけどよ、色々面倒なんだよ」

威風堂々、悠然と構える魔王にタカシがぶすつとしている。

「逆に隠しとくから怪しいんだ。いつそ、周知の事実になれば平気だろ」

「なんて説明すんだ。異次元からやってきた魔王です、とでも？」

「ワシは別に構わんが、世には認められんじやろうな。それは本意ではない」

ミツルの提案にも一理あるが、魔王はあまり乗り気ではないようだ。

「じゃあ、話をでっちあげるのか」

「こんなのはどうじゃ？ タカシの遠すぎる親戚で、唯一の身寄りが亡くなり途方に暮れかけていたのをミカコが笑って迎え入れてくれたという、一時期外国に住んでいた経験もある魔王」

「却下」

「タカシの母方の叔母の娘の父方の祖父の孫娘の一人娘で身寄りが亡くなってしまった魔王」

「却下」

「タカシの祖母ちゃんの家の隣に住んでいた息子の嫁の祖母の叔母の娘の一人息子の従兄弟でええええええ……身寄りが亡くなった魔王おおっ！」

「却下。つか、お前ら最後の魔王で却下されてんのわかってんだろっ」

ミツルはともかくアンナはもう自分で何を言っているかもわからず、適当に叫んで誤魔化している。クラスメイトがちらちらと魔王の話ということで気にしているが、遠巻きに輪に入れない。無理もないことだ。

「おはよう。朝から元気だね」

カナが恐れずにタカシ達に声をかけてくると、タカシを除いた全員がにこやかに手を振り返して挨拶する。ミツルがこっそりタカシのすねを蹴り上げ、耳打ちした。

「お前な、こういう好意の積み重ねが肝心なんだぞ」

「余計なお世話だ」

タカシが照れ隠しにか、ミツルの足をおかえしに蹴る。アンナがそれを察知して「タカシイッ、何をしたあああああッ！無事かああッ、ミツルウウウウッ！」と騒ぐと、その渾身の叫びに魔王が嫌そうに耳を塞いだ。

「……なんだかお邪魔しちゃったかな。ごめんね」

「いや、別に。それよか、まだ……少し気をつけてろよ」

「ああ、うん。そうする。心配かけさせちゃってごめんね」

「あやまんな」

カナが申し訳なさそうに言うので、タカシの叱咤する言葉も強くなる。そうすると余計に申し訳なさそうにカナが頭を下げ、扱いに困っているタカシを魔王とミツルがにやにやと見ている。

「っ、おら、もう座つてろ。おれ達と関わりあいになるとろくなことが起こらねえ」

しっしつとタカシが手で追い払うようにすると、カナはまた一礼をして自分の席に向かった。そのバツの悪さにタカシは苦虫を噛み

潰したような顔になった。それをミツルが肩をすくめ、からかう。

「やれやれ。まだまだだねえ」

「うるせーよ」

ちょうど朝のホームルームのチャイムが鳴り、クラスメイトが少し慌ただしく席に着き始める。アンナはこの世の終わりかと思うくらい悲痛な叫び声を上げながら、隣のクラスへ帰っていった。

【弁当の時間】

【弁当の時間】

4時間目終了のチャイムが鳴り響けば、待ちに待った昼休みだ。我先にと購買に走ったり、仲の良い者同士が集まって昼食会を開くなど思い通りに過ごす。タカシや魔王達も例外ではない。

「つーか、なんでおれの周りに集まるんだよ」

タカシの言葉通り、ミツルやアンナがわざわざ近くの机を引き寄せて座っている。魔王は元々タカシの後ろの席なので、どうとも言えない。

「いーじゃん。友達だろ」

「悪友の間違いだ」

「友が付けば問題ない。それとも、魔王ちゃんと2人きりで食べたかったか？ それとも朝来野さんでも誘ってたか？」

「……」

魔王のおかげで1人で食べるという選択肢がなくなった。どうせ逃げようにも面白がって追ってくるだろうと、タカシは諦めた。無駄な労力を使つてまで避ける気もない。向こうもそれを承知しているのだろう。

「む、魔王おおっ！ その弁当は何だああっ！」

アンナが今日、魔王が持ってきた弁当に気づいたようだ。魔王は誇らしげにふふんと鼻を鳴らす。

「これが。これはタカシから貰ったのじゃ」

「へー」

ミツルがにやにやと笑うが、タカシは平然としている。

「大したもんは詰めてねーらしいぞ」

「ほう、らしいと言うことはミカコの手製か」

魔王がかぱつとふたを開けると、ぱこつと再び閉じた。もう一度ふたを開けるが、まもなくふたを閉じてしまった。

「どうしたんだあつ！」

「いや、なんじゃ……少しばかりあれでう」

「早く食えよ」

タカシが平然と魔王に言いつけると、魔王がぎつとにらみつける。ミツルが魔王の横から、弁当を開けてのぞきこんだ。

「……健康に良さそうな弁当だな」

「野菜たっぷりだなあつ！」

「うう。ピーマンがあ」

これが魔王の嫌がっていた理由か。その弁当は白米を敷き詰めた、その上に肉入りの野菜炒めと漬物がのつている。白米に肉汁が染み込んでいて、かなり美味しそうだった。

「せっかくの献上品だ。残すなよ」

「……ぐっ」

家主であるミカコの手製となれば、居候の魔王は白米一粒たりとも残すわけにはいかない。しかし、魔王の思うようにハシが動かない。

「肉ばかり先食って、後は平気なのか」

魔王がハツと気づいた時にはもう遅い。思うように動かないハシは野菜炒めの野菜ばかりのけている。

「見ものだな」

「……」

魔王が硬直し、自分の弁当とにらめっこを始める。タカシは既に食べ終え、魔王の苦難をペットボトルに入れた自家製麦茶を飲みながら見守る態勢に入った。ミツルとアンナは魔王の様子に苦笑しつつ、その四肢はいつもの弁当攻防戦を繰り広げるといふ器用なことをしていた。

「そっぴや魔王。苦手と言えば、お前さアンナ避けてるだろ」

何を急に、そんなわけが……と言わんと魔王がタカシのことを見た。

「それは本当かあつ！ 気づかなかつたぞおおつ！」

「割と露骨だったけどな」

「まあ、アンナはあれだから気にしてなかったみたいだけ」

そんなあほの子のように言われるアンナが何か叫んでいるが、魔王は何やらそれどころではないといった様子だ。弁当を持ったままそわそわと落ち着きが無く、浮き足立っている。こんな動揺をする魔王は珍しい。

「どうした？」

「いや、な……気のせいじゃ……」

「魔王おおっ！ 私のことが嫌いなのかあっ！」

魔王はアンナにがしつとその手をつかまれ、なおかつストレートに感情と質問をぶつけてこられたので更に慌てふためいた。タカシとミツルはしばらく傍観を決め込もうとした時だった。

「にぎやかですね」

騒動のなか、がらりと教室の扉をスライドさせ、堂々とクラスのなかに生徒が3人入ってきた。

【来訪】

【来訪】

「む？」

昼休み中に他クラスへの出入りは珍しくないし、騒ぐようなことでもない。しかし、その生徒3人が入ってきたというだけで、クラスメイトの間に一気にざわめきが広がる。これは何かの助け舟かと、魔王はその3人の方を見た。

「はじめまして。転入生の魔王さん」

その視線にすぐ気づき、中央にいた生徒が微笑んだ。だが、目が合ったとたんに魔王はすぐにそらしてしまった。

「……う」

「どうかされましたか」

魔王の狼狽ぶりに、タカシがずっと身を乗り出す。しかし、魔王をかばうというわけでもなさそうだった。タカシの表情が少し厳しくなる。

「何か用か。……生徒会長様」

「昨日はきちんと午後から授業に出席したようでは何よりだ。真島タカシ」

それは昨日、屋上でサボるタカシの目の前に現れた生徒だった。

【ご挨拶】

「転入生に一言挨拶をしようと思って来たのだが」

生徒会長とタカシに呼ばれた生徒が、魔王の方を見た。ほんの少し目を細め、腰をかがめて魔王と目の高さ合わせる。

「初対面だというのに、嫌われてしまったかな」

「よく言っぜ」

魔王がようやく毅然とした態度を取り戻し、今度は逆に生徒会長をタカシの肩越しに見つめ返した。

「……女子おんなこじゃな」

「そうだけど、何か問題があるのかな？」

生徒会長は自らのスカートの端に触れる。その後ろにいる2人も女子生徒だった。

「改めて、はじめまして、魔王さん。私がこの斗葉高校の生徒会長を務める豊泉院ほうせんいんカオルと言います」

「う、うむ、へ……なかなか殊勝じゆしやうな心がけじゃのう」

カオルが魔王へ左手を差し伸べると、魔王もおおずおずと左手を差し伸ばして握手を交わす。その表面上は和やかな光景を見ながら、ミツルがこっそりタカシに耳打ちする。

「なあ、昨日生徒会長となんかあったのか？」

「別に」

タカシはそう平然と返すが、この様子だと生徒会長と何かやり取りがあったのだ。午後から授業に出席するようタカシに促したのが、生徒会長のカオルなのだろうと推測出来る。

「目えつけられて大変だな」

「不良だからな」

真顔で言うタカシにミツルは思わず吹き出した。そういう顔での発言は反則だと、ミツルは笑う。馬鹿にされているようなので、タカシはとりあえず軽くミツルをこづいた。

「魔王おおっ！ 私のどこがいけなかったのか4文字で教えてくれええっ！」

空気の読めないあほの子のアンナが魔王に抱きつくと、カオルはすっと手を離れた。

「どうやらお邪魔のようです。また改めて」

「豊泉院会長、時間です」

「は、早く行かないとお客さん待たせちゃいますよう」

カオルの後ろにいた2人がようやく口を開いた。穏やかではつきりした声と茶目っ気がありおどおどした声に、凜とした声が応えた。
「わかりました。心配させてすみません。行きましょう」

カオルが動くと、クラスのざわめきがぴたと止まる。2人を引き連れ、カオルが教室から颯爽さつそうと出ていった。その毅然とした後姿にクラスの女子や男子達がほうと見とれている。

「まあ、なんつーか凄いお人だ」

ミツルが感心して言うつと、アンナが「浮気はああああああああっ！」と涙目でつかみかかる。タカシはやれやれと安堵していると、魔王がぐいっつとその制服のすそを強く引いた。

「タカシ。答えよ。あやつらは何者じゃ」

「あ？」

「答えよ」

【超・生徒会】

【超・生徒会】

「ていう、この高校の生徒代表メンバーだよ」

タカシの代わりにミツルがそう答える。

「超？」

「超凄いつてこと。歴代生徒会最強・無敵のメンバーって言われる」

「誰が言ってた」

魔王に妙なことを吹き込むな、とタカシがミツルの首を軽くしめる。しかし、彼女達がこの高校内はおろか町全体でそう呼ばれているのは事実だった。

「まあ、あいつらのおかげで少し荒れてたこの学校が静かになっただけだな」

不良達がたまり場だった屋上へ立ち入らなくなったのも、彼女達のおかげだ。カナと婆さんに絡んだ不良達も思うようにいかなかったか、「何が『超』だっ」とそれに腹を立てていた節がある。

「ごくわずかに残る反抗勢力もあるけど、生徒からPTA・町内会まで幅広く支持を受けてるのは確かだ」

ここの町長や市長の顔、区歌よりもはるかに知られているのだ。

「……ふむ。平民共に圧倒的な支持を受ける連中、か」

「気になんのか？」

タカシの言葉に、魔王が小さくうなずいた。その反応も少し妙なもので、ぶつぶつと何かつぶやいている。

「また何かたくらんでるんじゃないーだろーな」

「違うのう」

「何か悩みでもあるのかあつ！ 相談に乗るぞおおつ！」

アンナの力強い言葉に、魔王がちらつとその視線を向けた。何かを確認したのか軽くうなずき、タカシとミツルの顔を交互に見て言

った。

「あやつらから、勇者のにおいがする」

【勇者のにおい】

【勇者のにおい】

「なんだって？」

「じゃから、あやつらから勇者のにおいがするのじゃ」

魔王の突然の告白に、タカシがあきれている。

「お前な、何を」

「それとアンナ、おぬしからもしとる」

思わずミツルとタカシが振り返り見ると、アンナが必死に袖口のにおいをかいでみている。それは物凄い勢いだった。

「つーか、そんなのわかるもんなのか？」

「うむ。勇者は魔王の天敵じゃからのう」

「あー、だからアンナが苦手だったのか」

ミツルがようやく納得した、という顔で魔王の言うことを受け入れる。そういえばアンナは魔王が力を行使している時に、ミツルや教師のような影響を受けていなかった。それどころか、部屋の支配者・魔王を臆さずに手刀まで食らわせていた。

「あんなことが出来たのは、魔王に抵抗力を持つ勇者だから……」

「うむ。あやつらと出会えて、ワシもようやく気づけたわい」

魔王もどこか晴れ晴れとした面持ちで、ミツルに命令した。

「さて、その超・生徒会のメンバーとやらの詳細を話せ。において合う者共が確認したい」

「それはいいけど、何で俺？」

「おぬしが一番詳しそうでな。それとタカシはアテにならん」

きっぱりと言い捨てる魔王に「んだとコラ」とタカシが食ってかかるが、それ以上反論が出来なかった。

「オーケイオーケイ」

ミツルは笑いをこらえながら、メンバーについての情報をぶつぶつと小さな声で暗唱しまとめる。それから魔王に語りかけた。

【超・生徒会会長の豊泉院力オル】

【超・生徒会会長の豊泉院力オル】

「普通科の2年生。成績は1年次から各教科首位以外取ったことはなく、運度神経も一流の万能超人。常勝無敗。入学当初から圧倒的な支持で副会長を任され、その任期中に前会長が異例にも直々に彼女へ座を譲って今に至るカリスマ的存在」

「……うーむ。絵に描いたようなやつじゃのう。性格は？」

「凛^{りん}として毅然^{きぜん}。物腰は穏やかで優しく、秩序を乱すものには厳しさを見せる」

「うえ。とことんいやみなやつじゃのう」

「それを感じさせないのが豊泉院力オルの凄いところ。ま、現実離れしすぎてるからかもしれないけれど、カリスマ性は本物だ。恋人はいないとされてるけど、彼女を慕うファンクラブは校内外に複数ある」

「ちよつと待て、なんでそんなに詳しいんだよ」

ミツルの独壇場^{どくだんじょう}とも言える会話と流れに、タカシがようやく突っ込めた。実はクラスの中にいる生徒達もこの話から便乗して輪に入ろうと、虎視眈々と機会をうかがっている。

「詳しいも何も、この程度のことならみんな知ってるぞ」

さも当然、という顔でミツルは返した。アンナもそれに同意した。タカシも入学して即副会長になった異例は知っていたが、流石に校内外にファンクラブまであるのは知らなかった。

「で、魔王ちゃんの見解は？」

「む。こやつからは勇者のなかの勇者のにおいがする」

【勇者のなかの勇者】

「は。……勇者のなかの勇者って何だよ」

「勇者の鏡ということかああっ！」

「違う。勇者とはその絶大な力を持つて悪をはびこらせる魔王に、臆することなく果敢に立ち向かう意志と運命を持つて生まれた平民の亜種が総称。勇者のなかの勇者とはその分類を言うのじゃ」

「あー、平民科勇者属勇者種つてことか」

ミツルの言葉に思わずタカシ達は納得してしまった。確かにその例えはわかりやすい。

「勇者のなかの勇者、ねえ」

「ていうか、なんか間違いないじゃねーのか」

「魔王であるワシが間違えるものか。受け継いできた歴代の魔王の魂がささやき、本能的にわかるものじゃ」

軽く握りしめたこぶしを胸の上に乗せ、魔王がそう語る。

「で、副会長はどんなものかのう」

【超・生徒会副会長こと八鍬セイ】

【超・生徒会副会長こと八鍬^{やくわ}セイ】

「普通科の2年生。成績は豊泉院会長に次ぐように、常に上位には入っているかな。運動神経は常人より少し上、なかでも卓球が抜群にうまい。華道と茶道をたしなんです。彼女は生徒会選挙・信任投票で全生徒から半数以上の票と支持を得て、当選したんだ」

すらすらとミツルがそらんじるプロフィールを魔王は真剣な表情で聞いている。

「カオルの推薦や指名とやらではないのか」

「違うらしいね。ま、今は豊泉院会長の腹心だけど」

これは夏休み前、1学期の始めにあったことからタカシもよく覚えていた。カオルは既にああいう会長に確定しているから、それを知った上で副会長になりたい者はいるかというぶっ飛んだものだった。そこにたった1人だけ立ち上がった。

「どちらかというところ奥ゆかしさを魅せる大和撫子ってことで、豊泉院会長に劣らずの人気とファンクラブがある」

「確かに人形のような女子じゃったのう」

独特の雰囲気を持つという点では似通っているが、それは豊泉院会長にもないものだった。

「しかし、中身は勇者のなかのくえない賢者のおいがしたぞ」

「わかるわかる。参謀というか、良きナンバー2っていうか」

「おぬしは本当に、そこそこの話のわかるやつじゃのう」

魔王の言うことにミツルはいちいちうなずくが、タカシにはまったくわからない。アンナは魔王がミツルと仲良く話しているのが羨ましくて仕方ないという感じだ。

【超・生徒会書記が瀬川シイノ】

【超・生徒会書記が瀬川^{せがわ}シイノ】

「工業科の2年生。成績も運動神経も中の下な超・生徒会のトラブルメーカーだ。選挙でも周りがふざけて立候補させて、冗談のつもりで仲良しグループによる組織票をやったらマジで当選したらしい」

先程のシイノの容姿と挙動があいまってか、見たこともないのにその光景がありありと魔王の脳裏に浮かぶ。

「……あきれた話じゃのう」

軽はずみな当選がわかり、シイノは辞退しようとしたのだがカオルがそれを止めさせた。周りの顔色や反応から、本当は受かったんだからやってみたいという気持ちを押し殺そうとしているシイノを見抜いたのだ。

「まあ、そのおかげで無能だのお荷物だとよく言われるけど、違うんだよね。彼女が抱え込んだトラブルを豊泉院会長や八鍬副会長が完璧に裁量することで、超・生徒会の力量を周りに知らしめることが出来る……というわけさ」

「カオルが……最初から狙って入れたわけではないのか」

「うん。本人は真剣そのものだし、役に立とうと思えば思うほどに空回りして……結果的にそうなってる感じ。あと挙動から周りが放っておかないだろ。それで校内外の交友関係やそこからくる情報網は意外と広いな」

そのぶん、シイノにはどうしようも出来ないようなトラブルも引き寄せやすい。無敵の豊泉院会長の存在が、更に拍車をかける。悪循環とも言えることだが、これまで大事になったことはない。

「こやつからは勇者のにおいはしなかったのう。まったくの凡人じゃ」

「豊泉院会長と八鍬副会長に比べたら、なあ」

そもそもあの2人が規格外すぎるだけだ。他のメンバーは……と、ここでミツルもようやく思い出した。

「あと1人、女子がいたよね、そういえば」

【超・生徒会会計が喜久磨サオリ】

「商業科の1年生。あの3人に比べると相当影薄いんだよなあ。いつも教室か超・生徒会室に閉じこもって書類整理してるって話だし」

これまでべらべらしゃべっていたミツルが首をかしげる辺り、本当に情報が少ないのだろう。しかし、1年生である超・生徒会役員をまともに務めているのだから、隠れた実力者なのかもしれない。

「もつと他に情報はないのか」

「あとは生徒会に対抗する組織で斗葉高生連合つてのがある。昔から工・商業科をまとめあげてるけど、今じゃ超・生徒会の下位組織みたいなもんかな」

魔王が積極的にミツルに聞くが、この高校のすべてを把握しているわけではない。だが、魔王はその限界まで聞き出そうと身を乗り出している。これも魔王なりの社会勉強なのだろうか。

「それより、私はどうなんだあつ！」

【切実な乙女の叫び】

【切実な乙女の叫び】

アンナが半泣きで、必死にがっしと魔王にしがみついた。これまでよく横槍を入れず、ミツルに抱きつかなかったものだとかカシは心のなかで感心する。いくらあほの子でも、たまには空気が読めるのだ。

「ぬおっ、ええい、離さんかあっ」

「魔王おおっ！ 答えてくれええっ！」

「こ、この馬鹿力っぷり！ おぬしからは特別に色濃く勇者のなかの戦士のおいがするわっ」

抱きついて離れないアンナに、魔王は思い切り力をこめて引きはがそうとするがびくともしない。それだけ必死なのだろう。

「聞いたか。お前の彼女、生徒会長様と同じ勇者だよ」

「ああ。…… 人類の突然変異という点ではそうかもしれん」

タカシとミツルが何か達観したまなざしで2人を見守る。魔王と勇者の戦いに平民は首を突っ込まないのが身のためだ。

「どんなにおいなんだあっ！ ミツルの為に毎日、ちゃんと身体は洗ってるんだあああああああっ！ どうすれば落ちるうっうっうっうっ！」

「落ちるものかっ。平民にはかぎ分けられぬし、体臭ではなく魂のものじゃ。ある種の雰囲気と思っておればよいっ」

「本当かあああああああっ！」

「しっこいんじゃああ……」

魔王の語尾が少し弱くなっている。勇者に泣き抱きつかれ、魔王はほとんど困り果てているようだ。やれやれと、優しく微笑むミツルがアンナをつかみ、自分の胸元へ引き寄せた。

【抱擁と包容】

【抱擁と包容】

突然のミツルの行為に、周りの時間が止まったかのようだった。タカシや魔王、クラスのざわめきも一瞬だけ止まった。

「ちよつとは落ち着けよ」

「や、やめろ……私は勇者くさいんだああ……っ」

「ん？ アンナのどこがくさいんだ？ いい匂いじゃないぞ」

「ひゃ、ひゃううううっ！」

ミツルがアンナの髪を撫で、かき抱いてみせる。その包容力と見せつけぶりにタカシをのぞいた男子生徒達と慣れない魔王がひいた。女子生徒達はきやわきやわ言いながら、写メを取っているものもいるたくましさを見せてくれる。

「……」

何を思ったか、アンナから離れられた魔王が教室を飛び出した。

「おいっ」

昼休み終了のチャイムまで残り10分もない。タカシは舌打ちして、その後を追いかける。

「タカシも過保護だなあ」

「ミツルウウウウ……ッ！」

アンナが幸せすぎてとろけてしまいそう、という表情を見せる。ミツルがさりげなく押しやるが、アンナは離れようとはしない。そんな状況下だが、クラスメイト達は一斉に2人の方へ流れ込んだ。

「おい、魔王ちゃんと麻島はどんな関係なんだよっ」

「ねーねー、あの2人が一緒に住んでるって本当？」

「親同士が決めた婚約者っつーのはマジなのかっ」

「実のところ、腹違いの妹説も浮上してるんだが」

「いや、あれは小さいころに離れ離れになった幼馴染だよなあ？」

「麻島くんは朝来野さん狙いじゃなかったの？」

「げ、マジかよっ」

「魔王ってあの暗黒の力を使い、この世界を白光の浸食から守ろうとしている三大王が1人で今まで所在が不明だった彼女なのかい」

「麻島のヤロウ、ストーカーしてんじゃねーだろーなあっ！」

「ミツル君はどうなの？ 麻島君盗られちゃうよ？」

抱擁しているアンナは夢の世界なので、しらふのミツルがクラスの半数以上の興味と質問を一身に包容するはめとなった。それらのなかには発言そのものは電波ながらも、実は核心に迫っているものもある。

「ああ、もう俺は聖徳太子じゃないぞ」

「勿体ぶんなよな、オマエも」

「そーよ。いきなりあの関係じゃない。こっちは気になって仕方なかったの！」

その言い分にミツルが小さくため息を吐いた。

「なら、本人に聞けばいいーだろ」

そう返すと、ミツル達の周りに集まったクラスメイトが声を揃えた。

【近づけるわけないだろ】

【近づけるわけないだろ】

見事に声が揃い、ミツルは心の中で拍手を送った。それはタカシが怖いからなのか、魔王に近づきたいオーラでも出ていたのか、アンナとミツルという壁がそれらを強化していたからなのか。その周囲の揃いも揃って真剣な表情に、ミツルは苦笑するほかなかった。
「まあ、それなら代わりに教えてやるか」

【とりあえずさっきの言い訳候補を適当に混ぜてみよう】

「……実は魔王さんはタカシの母方の叔母の娘の父方の祖父の孫娘の一人娘で身寄りが亡くなってしまった帰国子女なんだ。そういうわけで、今、仕方なく他に本命がいる安全パイなタカシの家に居候してるんだって」

「な、なんだってー!」

ミツルの周囲から歓声があがる。よほど衝撃的だったのか、ありえなさに受けたのかのどちらだろう。冗談と思われるなら、いつそ本物の魔王である真実を伝えてもよかったのだ。

「うっそ、それ本当？」

「魔王さん、結構苦労してるんだね」

「うはっ、ゲームみてえ。麻島のヤロウ、羨ましいなあ」

だが、現実味が無いぶん、周りのクラスメイト達は思わずそれを感じてしまったようだ。これから、この設定に脚色という目にも耳にも鮮やかな尾ひれがついていくことだろう。それこそがミツルの狙いでもあった。

【臆さない憶測】

「でも、麻島くんの本命って？」

「知らない。けど、親友の勘がそう告げているんだ」

「じゃあ、魔王ちゃんにひつついてんのは変だろ」

「うーん、本命の気を惹かすためとか。ほら、やきもちみたいな
の」

「あー、案外姑息なんだ。麻島くんて」

「意外と方便なんじゃないか？」

口々に憶測が飛び交う。思った以上の効果が出始めた。よくわからないぶん、否応なしに要らぬ妄想や想像をかき立ててしまうのだ。
「世間的には、結局同じ屋根の下に若い男女が住むんだろ？　そういう男にフツー本命の女子はひかねーもんなの？」

「どうかねー。私だったらイヤかも」

「待て待て。本命が女子とは限らんぞ」

「いやーん、でも、なんかそれもイーなあ」

「麻島くんのイメージが変わった。……なんかずっと怖い人かと思ってた」

「そうそう。そうだよねー」

「いやあ、でも、あいつマジ怖いやつだったんだぜ？　中学の時
なんか……」

「そーねー。1年の時から甲藤くん達とはよくいたけど」

クラスメイト達によるタカシの評価がプラスやマイナスを行き来する。不良臭く不器用などの性分でマイナスイメージばかりだったタカシが、クラス全体の興味対象というものに変わっていく。

「タカシは本当にいいやつだよ」

アンナを抱きしめたまま、ミツルはそう語った。今までクラスメイト達はタカシのいいところを知らなすぎたのだ。必要なのは相互の距離と溝を埋めていくきっかけだけ。

「あ、でも……これ以上詳しいことは本人を問い詰めるしかない
な」

この魔王とタカシの設定は放っておくだけで、色々面白いことになっていくだろう。だから、地雷ともわかっていながら、ミツルはあえて踏んだ。あとでタカシに殴られそうな悪寒がするが、これ

は真の友情による親友の為だと開き直る。

「ミッルウウウウッ！ 好きだああああ……っ！」

「はいはい」

ちらりと時計に目をやると、あと1分でチャイムが鳴る。今や時の人となったタカシと魔王はまだ戻ってこなかった。

【時間は都合的に魔王とタカシが飛び出したばかりのところまでさかのぼる】

【時間は都合的に魔王とタカシが飛び出したばかりのところまでさかのぼる】

「どこいくんだよつ、お前は！」

校内を走り回る魔王をタカシが必死の形相で追う。昼休みで廊下の往来も激しく、ぶつからないように走るのはタカシには困難だったが、魔王は軽やかに避けていく。

「タカシは別についてくる必要はないんじゃないが」

「目え離すと絶対何かやらかすからな、お前は」

「信用無いのう」

「日頃の行いを恨め」

「大したものではあるまい」

これだけ走っていれば、自ずと目立つのは当然のこと。すれ違う教師に「廊下を走るなっ」というありがちな注意を受けるが、魔王は止まらない。とりあえず、昼休み終了時間を気にしているのかもしれない。

「とりあえず、どこ行くんだよ。校舎内、まだ把握しきってねーだろ」

「ふん。それはそうじゃが、なに、目的地はすぐわかる」

それだけ言くと、魔王は階段を駆け上がる。タカシもそれを追いつけるが、行き先がわからないので先回りすることも出来ない。純粹な脚力勝負なのか。

「なあに走ってんだよつと」

ばしんと背中をたたかれ、タカシは勢いづいて前へつんのめる。こんなことをするのは1人しかないない。

【走ってる時に背中たたくな】

「あぶねーだろーが！ ハヤミ」

「麻島先輩こそ、また走りこみ始めたんですか」

ハヤミは階段上りのトレーニングを昼休みにやっていたようだ。他に部員はいないから、これも自主トレだろう。

「ちげーよ。あのバカ追ってんだ」

「バカ？」

タカシはあごで前を指し示すと、ハヤミがああと小さくうなずいた。魔王の姿は階段から離れ、見えなくなるところだった。

「追いついて止めればいいんですか？」

「……まあ、な」

そう返すと、ハヤミは一言で表すならギアチェンジした。階段を跳んで上がり、廊下の直線で魔王の姿を再び捉えた。タカシではない追跡者に魔王も気づいたようだ。

「ぬ？」

「あなた速いね。陸上部にこない？」

ハヤミはつま先で思い切り床を蹴り、最後の加速を試みた。ぐんと魔王に近づくと、その体重をすべて乗せるようにタックルをかます。このタイミングなら、はずれないし逃げられない。

「やるのう、おぬしも」

しかし、魔王はひらりと避けてみせる。ありえない反射神経と体勢で、人間の領域では出来ないことを見せつけるかのようだ。

「じゃが、平民は平民じゃのう」

ハヤミがその魔王の身のこなしに見とれてしまい、受身を取り損ねた。頭から床にぶつかり、擦れるように滑っていく。その先にあるのは壁と柱の角だった。勢いは止まらない。距離が近すぎた。

【物事の謂れには理由あり】

【物事の謂れには理由あり】

「廊下を走るな、というのはこういう事故を未然に防ぎたいが為のものなのだ」

ぶつかる直前、何かがハヤミと柱の壁をさえぎった。それがクツシヨンになったおかげで、衝突は避けられたようだ。

「この階におることは鼻でわかっておった」

「私に何か用があるようだね」

ハヤミを救ったのは彼女の手だった。追いついたタカシが見たのは、敵対関係にあるべきが2人の対峙。魔王と力オールの姿だった。

【この2人を見てると頭痛くなるのはおれだけか？】

「正確に言えば4人ですけれど」

「いたのか」

タカシの呟きにセイが反応する。副会長として、会長の傍に居るのは当然という顔をしていた。しかし、きちんとシイノも数に入れている。

「大体、あの魔王という生徒は何者なんですか？」

「それはこっちが聞きてえな」

「そうですか。同棲しているというのに？」

流石と賞賛すべきだろうが、この情報収集能力の高さを。だが、言葉上はそれに近いものがあるが内容は全然別物といってもいいだろう。

「変な方に話を進めるな」

「たとえ恋愛感情がなかったとしても、世間的な事実でしょう」
鋭い指摘だ。タカシも今まで自分にごまかし続けていたが、それは変わらない。

「……まあ、わたくしにはあなたの世間体などどうでもいいこと

ですが」

「そりやどうも」

「ただし、それが学校の品位を貶めることとなれば、ただちに両者共退学してもらいます」

そんな権限が超・生徒会あるのかは知らないが、正しい処置だ。

間違っていないからこそ、魔王の諸事情も言いがたかった。無敵の生徒会長と副会長相手に同情を引けるかも未知数な上、信じてもらえるかも怪しい。

ここは黙っとくか。

いずれバレそうな気はひしひしとを感じるが、この場を早く切り抜けるにはこれが一番だろう。しかし、その間はずっと同棲関係と思われるのも学生としてどうかと思っではいる。

「……苦労してるんですね」

タカシが後ろを振り向くと、しくしくと泣くシイノがいた。どうやら、タカシから似た雰囲気ふびんというか不憫な境遇を感じ取ったらしい。あまり一緒にはされたくないのも、とりあえず無視した。

「つーか、本当に生徒会長探し出してどうする気だよ」

昼休み終了までもう時間が無い。タカシはともかく、カオルが授業に遅刻すれば他の生徒への示しがなくなる。しかし、そのことは少しも危惧をせず、カオルは足元のハヤミを抱え起こしていた。そこへ魔王が高らかに言った。

【ワシは宣言する】

【ワシは宣言する】

「アルデピマジウムイダ有史以来のかたきである勇者共を討ち倒し、魔王としてこの星の頂点に立つことを」

カオルを指差しての魔王の堂々たる宣言に、タカシは頭痛どころか脳の血管がぶち切れたんじゃないかと思った。

「その為に、この次元の平民について少しばかり知る必要があった。まあ、こちらにも勇者がいるとは少し計算外じゃったがのう」

ふと微笑んだカオルは魔王と向き合った。

「……私が勇者？ あなたが本物の魔王？ それでいてこの星の頂点に立つ、って本気なのかい」

「うむ。おぬしからは耐え難い勇者のなかの勇者のにおいがぶんぶんするぞ。正直、ここに居るのも嫌じゃ」

ふうと魔王が顔をそらし、息を吐いた。アンナのように振り回されないぶん、堪えていられるのだろう。

「勇者であるおぬしさえ攻略すれば、あとは容易いことじやろう」

「豊泉院会長、関わり合いにならない方が良さそうです。午後の始業まで、あと3分です」

「おお、そうかそうか」

魔王が余裕を見せつけると、セイは少しむっとする。カオルは変わらず涼しげな顔をしている。

「それで、私に言いたいことは終わりかな」

「否。我が覇道の礎^{いしすえ}として、手始めにこの学校を牛耳らせてもらう」

なつ、とセイの開いた口がふさがらない。シイノは頭痛で死にかけているタカシの周りをおろおろするばかりだ。

「それは、私達に対する挑戦なんだよね？」

「うむ。次元こそ違えど、魔王と勇者は戦うものじゃ」

「聞いてねーぞ、んなもん。世界征服って本気かつ」

タカシは無駄だとわかっていながら抗議する。それに対して魔王はくすつと笑っただけだった。

「さて、魔王からの挑戦を受けるか否か」

【カオルは一呼吸置いてから、答えた】

【カオルは一呼吸置いてから、答えた】

「私からは何もしないよ。この学校を私闘の賞品扱いするわけにはいかないからね」

「成る程のう。ま、よい。実力でおぬしらから支持を奪ってみせるぞ」

そう宣言すると、魔王はくるつと踵きびすを返す。それからタカシを叩くように触れ、「チャイムが鳴る前に戻るぞ」と促した。シイノは話がやっと終わってくれたようなので、少々慌てた様子でカオルの傍に戻っていく。

「豊泉院会長。お時間まであと1分です」

「わかった。間に合わせるよ」

セイが少しほっとした表情で、カオルの後に続く。どうやら校内を巡回していたらしいが、魔王のおかげですべて回りきれなかったようだ。無敵の会長、勇者といえど時間の流れには逆らえない。

「ああ、ひとついいかな」

タカシが魔王に文句を言い、それをハヤミがやんわりと止めていた時だった。カオルが振り向きざまに、魔王に言った。

「あまり妙なチカラは使わないように」

「！」

カオルは滑るように廊下を進んで行ってしまった。それから魔王はくくくつと笑う。

「相手にとって不足は無いのう」

「歯あくいしばれ」

頭上から降ってきた唐突な言葉に、魔王は聞きもしなかった。タカシはこぶしをぐんと魔王の脳天に落とし、さっさと階段の方へ走っていく。ハヤミは叩かれた魔王を見て、「大丈夫？」と声をかける。

「ぬう……いきなりなんじゃあつ」

「うるせーよ。世界征服目的で高校に入学するってどんな魔王だ」

「うう、別によいではないか」

「よくねーよ。ていうか、あいつらに堂々とケンカふっかけやが
って……無謀にも程があるだろ」

タカシはあきれるような、馬鹿にしたような、ため息混じりの声
を出した。

【強者は誰か】

【強者は誰か】

「しかも相手があれで、何なのかわかってんのかよ。無謀だ、ムボ―」

タカシは早足で階段を駆け下り、来た道とは違うルートで教室へ戻る。魔王はその後を追いつ、学年の違うハヤミとは途中で別れた。

「無謀とは何じゃ。出会った以上、避けては通れぬ道ぞ」

教室まであと少しというところでチャイムが鳴り始めた。魔王はもう道筋に見当がついたようで、タカシをさっさと追い抜いていく。

「あつ、テメエ!」

「もう用済みじゃ」

タカシと魔王の所属する教室が見える頃、ちょうど反対側から担当教師がのんびりと歩いてきていた。つまり、チャイムは鳴ったが、まだ出席は取っていないのだ。

「おお、なんと都合のいい! タカシ」

「あ」

魔王の後ろ回し蹴りがタカシの腹に吸い込まれるように、走りながらというのに見事に決まった。避けようのない速度に受身も出来ず、タカシの足が止まる。

「ふつ、そのまま遅刻となれ」

「お前というやつは……」

魔王が教師より速く教室に入り、すぐに自分の席に着いた。その後、教師が遅れて入ってくる。妙に細長い教師は出席簿と席順を照らし合わせてから、魔王のことを確認した。

「ええと、魔王さん。出席取る前でも遅刻には変わりませんから」

「なんじゃとお!」

「しかも、麻島くんを足蹴にしてまでいいわけないでしょう。減点ものですよ」

「ぐ……」

魔王がうなると、タカシが腹を押さえつつ教室のなかに入ってくる。それから開口一番に言った。

「腹が痛いんで保健室行ってきます」

タカシからすればサボリの言い訳だが、事の顛末を見ていた教師は仕方なしに許可を与えた。あとで書類提出すれば、授業には出れなかったものの他生徒を足蹴にしてまでの遅刻よりかはマシな評価が出るだろう。

「じゃあな、魔王。おー、いてえ」

勝ち誇ったという悪そうな笑みを漏らし、タカシはさっさと教室を後にした。してやられてしまった魔王にとっては屈辱だった。

「……よくわかんないけど、タカシの勝ちだね」

それだけ言々とミツルがシャーペンシルを握ったまま、ノートを取る形を取って寝に入った。昼休み後の授業というBGMはミツルに快い眠りを与えるのだった。

【不愉快じゃ】

【不愉快じゃ】

「タカシにしてやられるとは！」

「あー、そうなの」

「へえ」

5時間目が終わっても不機嫌な魔王の周りにクラス中の女子生徒が集まり、談笑している。ミッルによるタカシと魔王の話がまだ熱を持っているのだ。

「ねえねえ、昼休みは2人でどこ行ってたの？」

「む？ カオルに会いに行った」

「カオルって……豊泉院生徒会長のこと？」

魔王が「そうじゃが」と答えると、女子生徒がきやあつと一気に沸いた。耳の奥まで響くその声量に魔王は眉をしかめた。

「それってそれってどういうこと？ 会長相手に釘を刺しに行っただの？」

「いや、逆に釘を刺された」

無然として「やるなら実力で、とな」と返す魔王に女子生徒が一気に離れ、ひそひそと密談をする。その様子を離れたところからミッルが苦笑して観ているのを見つけ、魔王が席を立ててそちらへ向かう。

「やあ、人気者だね」

「これはどういうことじゃ？」

「さて、どういうことなんだろうねえ」

魔王はミッルに昼休みの終わり、カオルに別次元の存在であること、魔王は魔王として勇者に挑むこと、この学校を牛耳るという宣言をしてきたこと、既に魔王の力の存在がばれていたことを告げた。「……ああ、そうなの。でも、周りは違う取り方をしたんじゃない？」

タカシと魔王は同棲関係にあり、魔王は人気の高い豊泉院会長にタカシを奪るなよと言いに行った。そしたら、逆に「渡さないよ」とでも釘を刺された。更に「奪い返したければ実力で」とでも返されたのではないか……と女子生徒は勘違いしたのではとミツルは推測した。恐らく、この推測は間違っではない。

「とりあえずさ、タカシに夜道は気をつけるって言うておこうかな」

ミツルはH A H A H Aと外国人風に笑ってみせる。周りの勘違いながらも1人の男子生徒を複数の女子生徒が取り合う様は「これ、なんてギャルゲー？」だ。

「何がなんだか。まったく、平民というやつはよくわからん」

「ま、ま、そういう習性なんだよ」とミツルが軽口を言いながら次の教科の準備をする。アンナが来ないのは昼休みにたっぷり構ったから、その余韻に浸っているのだろう。

「タカシのやつ、戻ってこないのう」

「ほらほら、そういう心配を口に出すと」

女子生徒が耳ざとく聞きつけ、ミツルと魔王の周りにクラスメイトが一気に集まった。何か見当違いな方向にいつているのに気づいたのか、この際じゃ、と魔王が高らかに言った。

「言うておくが、タカシとワシは」

「おーい、席につけー」

扉を開けて教師が入ると同時にチャイムが鳴った。クラスの皆が口惜しそうに各々の席へと戻っていく。タイミングをはずした魔王もぶつぶつ言いながら、同じように席に戻る。

「欠席はまた麻島かー？　まったく、注意勧告も聞きやしねえな」
教師はぶつぶつと文句を言う。誰かが保健室行きましたーと笑いながら言うが、保健室で休んでいいのは1時間だけだ。周りもそのことはよく知っている。

「……たあーく、しょうがねーな。はい、教科書とノート開いてー」

一番前の生徒に「どこまでいったんだっけ？」とわざと聞き、それから教師は授業を始めた。ミッルは寝ないでノートにラクガキをし始め、魔王は退屈そうにそっぽを向くのだった。

【さて、授業も終わり】

【さて、授業も終わり】

「帰るとするか」

「魔王さんは部活とかしないの？」

帰り支度をする魔王の元に女子生徒が数人集まってくる。タカシがいないこともあり、クラスの女子生徒が気軽に声をかけてくるようになったのだ。魔王は首をひねった。

「うむ。その気はない」

「でも、呼んでるよ」

眼鏡をかけた女子生徒に促されると、廊下ににこにここと微笑むハヤミが立っていた。魔王が仕方なしに、そちらへ向かう。

「なんじゃ」

「陸上部の勧誘に来ましたー」

「やらん」

簡潔なやり取りできっぱりと言い捨てると、魔王はまた自分の席に戻る。ハヤミは教室まで入り込み、説得しようとするが相手にされない。1年生が2年生の教室に入ってまでする、という辺りからハヤミは相当入れ込んでいるようだ。

「走るの楽しいよ」

「ランナーズハイというやつか。あいにく、ワシはおぬしらとは身体の構造が違うのでな」

「……うーん、じゃあ、また今度来るね」

ハヤミはあっさり引いて、教室を駆け足で出て行った。今日は出直した方が良さそうだと判断したのかもしれない。

「引き際は知っておるようじゃな」

魔王が素っ気なくそう言つと、また周りの女子生徒が沸いた。

「ハヤミちゃんから勧誘されるなんてスゴくない？」

「む。そうなのか」

「確か大きな大会で上位に入ってるよ」

短く刈り上げた髪的女子生徒曰く「まだ1年生でありながら過去の2、3年生の記録を次々に打ち破っている。将来有望の選手だ」という。

「……またそういうやつがタカシになつておるのか」

ため息を吐きながら、魔王はあきれた。アンナとミツルといい無敵の超・生徒会といい、少しばかり常軌を逸した人間が集まる星の下に生まれてきたのかもしれない。そのなかに魔王もいるのだが、本人はまるで棚に上げている。

「あ、やっぱり部活やんないのって麻島くんと一緒にいられる時間が減るからなの？」

「おぬし、何を言いたいのかはつきり言わんか」

魔王のはつきりとした物言いにたれ目の女子生徒が戸惑う。はつきり言うも何も、周りからすればそういう風に取っているのだ。知らないのは本人達ばかりだ。

「ま、まあ勧誘が来るくらいだから入った方がいいよ。うん」

「ふん。……成績評価は関係あるのか？」

「ま、ケースバイケースだね。全国大会で入賞とかだったらあるかも」

それを聞いた魔王は少し興味が沸いたようだ。わずかだが目が輝いているようにも見える。

「……ま、気が向いたららのぞきに行つてやつてもよいか」

臆さず魔王に身体ごと突っ込んだという借りは返さねばのう、と魔王は更につぶやいたのだった。

【9月8日】

【9月8日】

「まったく、面白くも何ともない話ばかりじゃな」

タカシやミツル達の輪に入っただけの昼休み中、魔王がそう愚痴った。おそらくこの学校の授業のことだろう。

「これなら図書館に行っていた方がまだ有意義じゃ」

「なら、来なくていいんだぞ。元々お前は不法入学だしな」

弁当を早々と食べ終えたタカシがお茶一口飲んだ。魔王はまた野菜を後回しにし、アンナに「野菜を残すなああっ！」と突っ込まれている。

「不法ではない。きちんと魔王の力を使って、正規の手続きは済ませたわ」

「その辺が不法なんだっつーの」

「まあまあ、その会話も不毛っちゃ不毛だから」

タカシと魔王の弁当の中身はほぼ一緒に、周りはそれが気になっている様子だ。大して仲も良くないクラスメイトが輪に入ろうとして、ミツルと邪魔されずべたべたしたいアンナに追い返された。

「にしても、なんじゃこの学校は。勇者の育成機関か」

魔王が野菜を嫌そうに食べながら、そうつぶやいた。魔王をに対抗出来る勇者が3人も在籍しているのだから、運命と言えるものかもしれない。

「勇者ってのは……女性になるものなの？」

「その世代において強い方になる」

「納得」

単純明快な解答にミツルは苦笑した。今の時代、この世代においては確かに男性より女性の方が強いかもしれない。

「勇者が魔王を倒してくれるというなら、迷惑をこうむっているおれとしては非常にありがたい」

そう言うが、その原因の半分はタカシ自身にあるといっても過言ではない。魔王はふふんと鼻を鳴らした。

「それには勇者自身の手で、その力でワシの心臓を貫かんと駄目じゃぞ。その後、肉体から潰れた心臓をえぐりだして、両者を切り離すまでせんとな」

「食事時の会話じゃないなあ」

真面目に返す魔王の話に、からあげをつまんでいたミツルの手が止まった。しかし、それもポーズだけのようだ。魔王やアンナにいたっては一向に気にせず弁当を食べ続けている。

【魔王はこの憲法・法律は適用不可】

【魔王はこの憲法・法律は適用不可】

「ちなみにタカシは耐性はあっても勇者のにおいはいせんから、ワシの心臓を貫いたところで殺人罪として捕まるだけじゃ」

「ああ、そうか……」

い、と軽く受け流すはずのタカシの言葉が途切れた。魔王がイチゴミルクで弁当の野菜を流し込んだ。

「耐性？ タカシにか」

「うむ。おそらく、タカシにワシの力が効きにくいのも力オルが何らかの影響を及ぼしておるからじゃろう」

「おい待て。それはどういう意味だ」

「言葉の通りじゃ。タカシ、おぬしは不良じゃったのう」

こう正面切って聞くようなことだろうか。素行が悪いとされるタカシはとりあえず認めた。

「……それが何だよ」

「教師共の注意勧告を受けながらも、無視して授業をサボったりしたんじゃろ」

「だから？」

「さじを投げた教師共は人望と力を持つ生徒会長の力オルに任せることにした。違うか？」

「まおーさんスルドイっ」

ミツルがおどけるようにボーリングを決め、魔王の推測を裏付ける。タカシが「元ネタがわからん」とぼやいた。

「そうそう、それで最近は真面目に授業に出ようとかって気にはなってたんだよ。まあ、そう人間すぐには変われなかったし、もう元に戻ってるけど」

「うるせーよ」

何かと始業のチャイムを気にしたり、魔王の面倒を気にかけてい

たのも、生徒会長との接触を避けたいが為だったとも言える。しかし、それらも長続きはしなかった。

「魔王と勇者は違うものじゃが、そういう力への耐性は少しずつ身についたらしいのう」

【そもそも魔王の力に耐性が身につくなど考えにくいことらしいのだが】

「そもそも魔王の力に耐性が身につくなど考えにくいことらしいのだが」

「カオルと性交でもしたか？」

「冗談でもやめろ」

タカシが真顔で返すのを見て、魔王がふむとうなずき上を見た。

「そうなるのに一番、その可能性が高そうじゃと思っただんじゃが」
「最悪の可能性だ」

「……でもさ、これも同類だよな？」

本気でタカシが嫌がっているようなので、魔王が更にからんでやろうと身乗り出した。そこに、絡みつくアンナを示す、おどけていたミツルの表情がわずかに硬くなった。一度は屈服しかけ、その恐ろしさを知っているからこそ聞きたかった。

「勇者のなかの勇者は別格じゃ。それで言えばアンナはそう大したものではないしのう」

勇者のなかの戦士といわれるアンナでは耐性は身につかないらしい。始終一緒にいるミツルが魔王の力に耐え切れなかったのがその裏付けとなる。

「ま、代わりに馬鹿力だけはあるようじゃが」

「それは褒めているのかあつ！」

「ナルホドね。よーするに特化してるものが違うのか」

「うむ。例えるなら戦士は力、賢者は策略、勇者はカリスマ性を全面的に押し出した上ですべてを力バーといったところか」

「バランス取れてねーよ」

「言っただじやろ。勇者のなかの勇者だけは別格と」

それにしても他の勇者と扱いが違いすぎる。逆に言えば、それほどでなければ魔王を倒す存在として成り立たないのだろう。

「じゃが、タカシのように勇者でなくとも面白い平民は多々ある

のう」

「ふーん。いるんだ。そんな変人」

「お前もだろ」

さも「自分は部外者です」との態度を取るミツルにタカシが突っ込み、魔王がけらけらと笑う。

「他に知り合いなんていたか。お前に」

「失敬なやつじゃな。このクラスにおける者の氏名はすべて把握しておるぞ」

「おお、意外」

「意外なものか。上に立つ者としては当然じゃろう」

「なら敬語使えよ」

「敬えるやつがおらんだけじゃ」

魔王はきっぱりと切り捨てた。自分が上にいて当然かつ本当にそう思っていないければ出てこない言葉だった。

「あ、でも豊泉院生徒会長もそうだよな。全生徒の顔と名前と所属が一致するって」

「なぬっ。それは本当か」

「人の上に立つ者じゃ当然のスキルなんだろ？ それを羨む^{うらやま}つてことは、つまりそいつは下の者ってことだな」

「うるさいっ。たかが1000人にも満たんではないか。祖父はアルデピマジウムイダに生きる者すべての名前と顔と所在を把握しておったわ！」

「祖父ちゃんっ子なのはわあーったよ。でも別にお前が凄^{すご}いってわけでもねーだろ」

いちいち癪^{かん}にさわるタカシの言葉に魔王がかみついた。

「見ておれっ！ 今にワシはこの次元に住まう平民の顔と名前と住所と電話番号と趣味をすべて記憶してやるわ！」

「それはストーカーだぞおおっ！」

「おぬしに言われたくないわっ」

【すぐキレるのはカルシウムが足りない証拠】

【すぐキレるのはカルシウムが足りない証拠、弁当も野菜を無くして代わりに魚を入れたらどうかのう】

「で、タカシ以外に面白いやつっていたの？」

「私はミツルの愛の戦士だああああああっ！」と叫ぶアンナに息巻く魔王ヘミツルがにこにこ笑って訊く。こほんとひとつ息を吐き、取り乱した呼吸を整える。

「うむ。ハヤミというやつじゃ。あろうことが、ワシに体当たりをしてきおった馬鹿でのう」

「へー、度胸あるなあ」

ミツルが感心するが、それはタカシの指示だった。まさかハヤミがそこまでするとは思ってもみなかったことなのだが、わざわざ言うことでもないと考えたのかタカシは黙っている。

「それにしてもハヤミは足が速い。平民にしては、まずまずじゃな」

「ああ、確かに彼女は大きな大会で入賞してるって話だからね」

「なんじゃ、それしかわからんのか」

「運動部に入ってなければそんなもんじゃないかね。入賞しても校長が式の途中で引き合いにするぐらいだし」

かまってほしいアンナに思い切り腕を引かれ、抵抗の意思をみせるミツルの身体が骨と筋肉のきしむ音と共に斜めっている。愛の戦士の力にはかなわないようだ。

「というわけでタカシ、今日の放課後に陸上部へ寄っていくぞ」

「おれは寄らねえ。行きたきゃ勝手にしろ」

「ええい、風呂に付き合わんのじゃから、このぐらいお供せんか！」

「声がデケエエエツッ！ さっきからわざとかあああッ！」
キレたタカシの怒声も既に遅く、クラス中に波紋が広がってしまった

った。好奇の目が一斉にタカシに注がれる。

「おお、なにやら注目されてるぞ。のう、タカシ」

「……いじめか、これは」

「や、新手のプレイかもしれない」

真面目くさった顔で言うミツルに腹を立てる気力もなく、タカシは半ばやけになったようだ。ドガンと机を思い切りたたき、魔王に「絶ッ対エ行かねーからなっ！」と怒鳴った。

【人の噂も七十五日と言っじゃろつが】

【人の噂も七十五日と言っじゃろつが】

「くだらんくだらん」

魔王はあつけらとしている。タカシの頬の筋肉がぴくぴくと痙攣し、騒ぎの原因をにらみつけた。

「噂を捏造^{ねつぞう}して、広めてるやつらに言われたかねーよ」

「度量の小さいやつじゃのう」

「いや、彼にしては頑張ってる方だと思いますよ」

「うるせーよ」

「ファイトだあつー！」

アンナのはげましがどのように効いたのか、タカシは机に突っ伏した。それを見て何か思うところがあつたのか、いきなりミツルはアンナの頭を撫で始める。アンナはまるで猫のように目を細め、ごろごろとミツルに甘えている。

「……おぬしらは変な関係じゃのう。一方的に冷たくするかと思つたら、今はこうしてべたべた周囲の気温を上げおつてからに」

「はは」

「こんなんだから誰もついてこれねーんだよ」

ぼそつと机に突っ伏したままでタカシがもらす。自分の気持ちに素直で豪快に一直線なアンナに比べ、ミツルの方は気まぐれでわかりにくい。それでもめげることのないアンナは素敵だった。

「褒められた」

「誰も褒めてねえ」

HAHAHAHAと笑うミツルのお腹を抱きしめていたアンナが、幸せをかみ締めるようにぎゅうつと力をこめた。ぼぎゅんとかわいらしい音を立て、ミツルの背筋が折れてはいけない方向へ折れた。アンナを撫でていた手が力を失くし、そのまますり落ちた。

「ああ……イツたな、こりゃ」

「ミ、ミッルウウウウウウウ……ッ！」

「おぬしは加減を知らんのかっ」

魔王があきれて大声を出す、それでもクラスメイト達はミッルの容態に関心を持たない。それが日常茶飯事となっている何よりの証明でもあった。

【まあそんなこんなであつという間に】

【まあそんなこんなであつという間に】

「放課後じゃな」

「誰に言つてんだよ」

「さあ、タカシ、陸上部に行くぞ」

「行かねーよ」

魔王の制止を無視してタカシがさつさと先に廊下へ出た。魔王の力で止めることもかなわず、廊下の真ん中で憤慨した。

「なんじゃ、つれないやつじゃのう」

無然とタカシの背中を目で追っていると、そのすぐ横の教室からカオルが出てきた。何か問答をしていたかと思うとタカシをつかまえ、どこかへ引きずって持っていくてしまった。

「また何か仕事手伝わされんのかな？」

いつの間にかミツルがひよいと教室から顔をのぞかせ、タカシとカオルの様子を見てつぶやいた。超・生徒会のメンバー殆どが同じ2年生だということを魔王はすっかり忘れていた。

「いい気味じゃ」と笑う魔王だが、その言葉とは裏腹に表情に出るくらいイライラしているようだ。ミツルが達観したような、「あーあ」という表情でそれを見下ろしている。

「ああ、もう甲藤でいい。お供せい」

魔王が振り向いた時にはもうミツルの姿は既に遠く、アンナに引きずられているのが見えた。

「……。むう仕方ない。ワシだけでいくか」

「どうしたの？」

ふてくされる魔王に声をかけてくれたのはカナだった。それを逃すまいと、魔王はカナの手を取る。それから「え、え？ どこ行くの？」というか弱い疑問にも答えず、先駆者と同様にただ引きずっていった。

【陸上部の見学に行くだけじゃ】

【陸上部の見学に行くだけじゃ】

「なんだ。そうだったんだ」

「そうだったんじゃ。なのに、あやつらときたら」

ぶつくさと文句を言う魔王にカナは付き合っている。もう引きずり回してはいないが、繋いだ手は離してない。魔王が軽く握り返すとカナも同じだけ力をこめて返してくれるので、心地よいのだ。カナも恥ずかしがることはなかった。

「誰か陸上部で知っている人がいるの？ それとも入部？」

「ハヤミとやらに会いに行く。ついでに推薦とやらについても聞いておこうと思っただけ」

「ふーん。……私もついていっていいの？」

「勿論じゃ」

魔王は鼻息荒く、また力強くカナを引っ張って階段を下りていく。カナもそれに逆らわず、少し前のめりになりながらも何とかついていった。

「で、どこで陸上部は練習しておるのじゃ？」

「えっ」

「カナは知らんのか？」

「う、うーん。たぶん、校庭じゃないかな」

自信無さそうに言うカナに魔王は「そうか」と小さくつぶやき、急ぎ足で昇降口まで行くとする。結果的にぐいっと引っ張られる形になり、カナが前のめって転んだ。平坦な地面ならまだ良かったのだが、ここは起伏のある階段だった。

「あ」

上から落ちてくるカナを、魔王は背に負うこととなる。

「ぬ」

体勢が崩れた所為か、支えきれずにそのまま踊り場まで落下する

こととなった。階段は中腹を過ぎていた辺りだったのが不幸中の幸いだったようだ。

「ご、ごめんね、魔王さん」

「……良い。気にするな」

カナがおどおどするが、魔王は平然としている。「どこか怪我してない？ 痛くない？」と慌てるカナを魔王はどこも怪我をしていない。逆にカナの方が本人は我慢しているのか気づかない程度の痛みなのか、すり傷をつくっている。

「ワシより自分の身を気にしたらどうじゃ？」

「え、で、でも、私がとろかったから……」

「ワシも少々気はやりすぎた。手を離すか」

魔王が名残惜しそうに手の力を緩めるが、カナの方が離そうとしない。えへへと微笑むカナに魔王はぼかんとしていたが、やがてプツとふいた。

「ま、良いか。行くぞ」

「あ、うん」

服の汚れを軽くはたきながら、再びカナの手を握り締める。その時に魔王はカナに魔王の力を込める。手を取り、先導という支配の形だ。カナのすり傷が少しずつ回復していくのに、その本人は気づかない。否、気づかれないように魔王がしているのだ。

力を隠す意味などないが……ワシの威厳がそこなわれぬように、な。

ぱたぱたと2人は駆け足で、陸上部が練習しているだろう砂地の校庭へ向かった。

【陸上部といっても色々あるんだよ】

【陸上部といっても色々あるんだよ】

「短距離から長距離走、走り幅跳びに走り高跳び、ハードル走とかね」

「ほうほう」

「どれも私は苦手だなあ」

目を輝かせてのハヤミの説明に魔王はさもわかったような顔で頷き、カナが困ったような顔で笑う。

「どれも楽しいけど、競技が違えば練習も違ってくるからな。別に1つにしばらくなくちゃいけないわけじゃないけど、これはって思うのにうちこめたらいいよね。ね？」

「まあ、確かに個々に差はあるからのう」

「だけど、やっぱり全部楽しく出来たらいいよねっ」

「ええい、どっちなんじゃ！」

あははははと笑うハヤミに魔王が食ってかかるのを、カナが精一杯とめてみせる。しかし、その努力に気づかないのかハヤミはここにこしている。

「こ、こっちこそ練習の邪魔しちゃったよね？」

「だいじょーぶ。新入部員の為だもん」

「ワシは入らんと言っておるうが」

「そう？ 別に照れなくてもいいのに」

「照れてなどおらぬ！」

校庭周りを走り込みをしている陸上部員達を見つけ、更にそのなかから唯一の知り合いであるハヤミを呼び出すまで、何度こういったいざこざが起きたかわからない。遠巻きに見ていたが、改めて魔王のパワフルさとそれに付き合えるタカシとミツル達の凄さに気づく。

「じゃあ、何しに来たの？」

「うむ。陸上部ではなく、おぬしに興味があつてここに来た」

「そうなんだ。つてことは、入部してくれるの？」

「おぬしは何を聞いとるんじゃあつ！」

「おさえてゝ、魔王さゝん」

カナが後ろから抱きしめての必死の呼びかける。ハヤミは「冗談だつて」と笑う。

「仮にも目上の人間じゃぞ」

「見えないよね」

さらりと出た言葉に、魔王が燃え上がった。ハヤミもさすがにまずいと気づいたのか、全力で走つてその場から逃げだす。魔王はそれを、カナを背にぶら下げたまま追いかける。もはや、この2人を止めることはカナには出来なかった。

【ぶっあ・ふはははははは】

【ぶっあ・ふはははははは】

砂まみれで倒れているハヤミと魔王の笑い声が校庭に響く。魔王と共倒れになったカナもつられて笑う。

「やゝ、ほんとに足が速いなあ」

「おぬしものう。平民にしては速い方じゃろ」

「うゝん、そうかなあ……」

ハヤミと魔王がむくりと起き上がり、砂を軽くはらった。巻き添えを食らう形となったカナはまだ転がっている。

「うむ。こういうのはアレか、天性の才能と言うのか」

魔王の最後の言葉、才能にぴくりとハヤミが反応を示した。それを見逃さない魔王をぽけつと眺めながら、ようやくカナも起きあがる。

「走るの才能なんかないよ、私には」

【才能とその在り方】

「謙遜けんそんというやつか」

ふふんと見下すような魔王にハヤミは力なく微笑んだ。

「本当に無いんだって」

「そんなわけないよ。だって、すつごく足速いでしょ。私なんかとろくて」

カナが力強くフォローに回るが、ハヤミはゆっくりと首を横に振った。

「ただ走るのが好きなのと、ちょっと負けず嫌いなだけ」

「ふん。他の平民からすればイヤミにしか聞こえんじやろうな」

魔王の言葉にハヤミは困ったような表情をする。カナはどうフォローに回るべきかとおろおろするばかりだった。

「かもね。でも、ほんとに才能は無いと思ってるんだ」

「気のせいじゃ。でかい大会で入賞するやつが何を言う」

「ははっ、はつきり言うよね。でも……まあ、結果的にそうなんだけど」

ハヤミはと言うべきかとあごをぼりぼりとかきながら、思案している。

「おぬしがそこまで才能が無いという理由は何じゃ」

「走るのが好きだから」

魔王に劣らず、ハヤミも簡潔にきっぱりと言い捨てた。しかし、それが理由になるとは思えなかった。

「走るのが好きだから、この道を諦めようかと思ってるんだ」

【ワシの辞書には関係ないものばかりじゃのう】

【ワシの辞書には関係ないものばかりじゃのう】

「意味がわからん。才能とは関係ないし、好きならずっと走っておればいいじゃろ」

「うん。最初はそう思ってた。報われるかわからないから、努力もしてきた。努力の前に成功がくるのは辞書のなかだけって思ってた」

ハヤミがきゅつと自らの足を抱きかかえた。

「でも、辞書や現実には努力よりも成功よりも先に才能って言葉が出てきた。その前には壁って言葉もあった」

「諦めも先にくるのう」

魔王の言葉にハヤミは自嘲的に笑った。確かにその通りだ。

【話に入れないのに引き合いに出されてもなあ、とか】

「好きなだけじゃ、頑張るだけじゃどうしようも出来ないこともあるってわかった。才能とタイムを追い求める世界じゃ、私は生きてけないって」

「それだけ走れるのに、贅沢者め。カナを見る！ とろくても体育の時間は頑張っておるぞ」

「うん。それはそう。でも、私は……」

好きなことだから、続けていくことも諦めるのもつらい。好きな道で生きていけると思ったから、長く続けていけたこともある。だけど、いつかは才能の存在・有無に気づく。

「才能にも色々あるじゃろ。好きだということもひとつの才能じゃ」

「うん。だから、私に足りないのはこの世界で生きるだけの才能だって」

昨日は周回遅れにした人が今日には自らが追い抜かれていく。そ

れが努力以降の才能の世界だ。

「別に走るのが嫌になったわけじゃないし。ただ、少し……残念なだけねっ」

語尾を強くし、ハヤミはそうまくしたてる。

「無理をしとるのが見え見えじゃのう」

「魔王さんっ」

カナが魔王のことを再度止めようとするが、いかんせよ力の差がありすぎた。カナの腕を振り払うと、魔王はずいっとハヤミの前に立った。しかし、身長差で目の前には立てなかった。

「ワシの見込み違いじゃった。否。所詮、平民は平民でしかないか」

ハヤミは何も言わず、ただ少しだけ顔をそらした。カナはかける言葉が見つからないようだが、魔王は更に吐き捨てた。

「……ワシから見れば平民の才能なんて無いに等しいのう！くだらんことで悩むから、おぬしはその可能性を潰しとるんじゃ」

魔王の真っ直ぐで正しい言葉に、ハヤミは何も言い返せなかった。「自虐的になれば、誰かが優しい言葉をかけてくれると期待したか？ 才能という言葉は便利じゃのう。目に見えぬから、余計に使いやすいしタチも悪い。正直、それを連呼するやつはみつともないぞ。馬鹿の一つ覚えとはよく言ったものじゃ」

「……魔王先輩はっ」

こぶしを握り締め、ハヤミが何か言おうとした。その時にはもうそこに姿は無く、代わりに怒鳴られかけたカナがおるおるしている。

「あれ？」

「こっちじゃ」

声がする方を見ると、魔王が手招きをしている。いきなりの乱入者に困っている陸上部員達がいるそこは、スタートラインだった。

「ワシと競争してみんか？ 距離は100mじゃ」

【かけるものは何も無くはかるものも必要無い】

【かけるものは何も無くはかるものも必要無い】

「負けた方がどうこう言うものではない。ただ、並んで走るだけじゃ」

「さつき競争って言ってたじゃん。いいよ。走ろっ」

ハヤミが即答して、魔王の横に並ぶ。陸上部員達は一步下がって、観戦することにした。色々と話題になるこの2人の競争を見逃せるわけもない。カナはもはや蚊帳の外、陸上部員という蚊の質問に刺されまくっている。

「合図はカナに任すぞ」

「……えっ、あつ、はい」

任されてしまったカナがおろおろと辺りを見回し、近くにいた陸上部員からハリセンを必死に奪い取った。何故ハリセンがこの場にあつて、かつ陸上部員が持っていたのかは奪ったカナにもわからなかったが、きつと芸人志望なのだろうと勝手に思うことにした。

「よ」

ぐつとクラウチングスタートのポーズを取るハヤミだが、魔王は直立立ちしたままだ。腕を組んで、鼻歌を口ずさんでいる。

「よおい」

スッパーンとカナが隣にいた陸上部員の頭をハリセンでたたく。その場の勢いと思いつきとはいえ、その思い切りの良さは称賛に値する。

「んっ」

ハヤミがいいスタートをきった。スピードものり、いつもの調子となんら変わらない。

「ゴールじゃ」

まだハヤミは15mも走っていないというのに、魔王は既にゴールであくびをしていた。その移動速度は既に人のものではなく、瞬

間移動の類としか言いようがない。

「もう一度やるか？ ん？」

「うん」

魔王の挑発にハヤミは容易く乗ってくる。ユーターンしてスターラインにハヤミが戻るのとはほぼ同時に魔王がいた。どうやら一度きりの手品ではないようだ。

「なんかコツとかあるの？」

「しいて言えばワシだからじゃ」

カナのハリセンが炸裂し、ハヤミが勢いよく飛び出した。その真横を突風が駆け抜けたかと思ったら、ゴールにまた魔王がいた。ハヤミはその勢いに足がもつれ、転んでしまう。

「……もう一度やるか？」

「う、うんっ」

鼻先についた砂をこすって落とし、ハヤミは3度目のクラウチングスタート体勢に入る。観戦している陸上部員達はただ魔王に啞然とし、カナにハリセンではたかれるだけだった。

【何十回挑んだらうか】

【何十回挑んだらうか】

ハヤミがついに倒れた頃には既に陽が落ちかけていた。練習もままならなかった陸上部員達が駆け寄るが、自力で立ち上がる。

「どうじゃ？ 圧倒的な才能の前にひれ伏した気分は？」

「や、もう才能とかそういうレベルじゃないよアレは……」

「じゃが、ワシは走ることに興味が無い」

魔王はそうきっぱりと言い切った。

「じゃが、ワシから見ればおぬしら平民共の才能など無いに等しい。比べるだけ無駄というものじゃ」

けらけらと笑う魔王に疲労の汗も呼吸の乱れは微塵みじんも無かった。ハヤミはまたばったりと地面に倒れた。

「何もかかず、何もはかる必要は無い。ただおぬしはひたすら走っておれ。観戦と記録という名目にかこつけて練習をサボる者共よりよほど見込みがあるわ」

「あははっ、そりゃヒドイ。ここを占拠してたの私達じゃん」

「見るだけでは練習にはならんじやろ。……何度も言うぞ。おぬしはワシを越えられない。確実に、死んでも無理じゃな」

「そーだろーな」

「どれだけ走り込もうが、どれだけ才能があるうが、絶対に越えられない」

それは最終通告のような、冷たい断言だった。何もかも諦められ、終わらせてしまえそうな言葉だった。

「……なら、いつそ走り続けてワシ以下であり続けてるがいい」
え、とハヤミが思わず起き上がり、魔王の顔を見た。にたにたと見下し、笑う魔王の頬は夕陽のせいか赤く見える。

「ワシからすれば、世界記録を持っている者でも亀よりものろいカナも変わらん。すべてワシ以下じゃ」

魔王の話聞くカナは複雑そうな顔をしながら、ハリセンを陸上部員に返している。勿論、色々と平謝り付きでだった。

「走り続ける。ハヤミ。おぬしの気の済むまで、ワシを越えられないタイムの世界で生き続けてみせよ」

「はい……」

無茶苦茶な魔王のお言葉に、ハヤミは何だか涙が出てきそうだった。魔王はふてぶてしく、大きなあくびをした。

「これで遊びもしまいじゃ。ああ、疲れた。帰ったらタカシに肩と足でも揉ますか」

しゅると魔王がわざとその肩をさらけ出し、スカートを少したくし上げて足を見せるので、その場にいた陸上部員達とカナの目をむいた。ハヤミだけは大笑いしている。

「ああ、もう魔王先輩最高です！」

「ふっ、ワシの魅力に気づくのが遅すぎるわ」

魔王が自らの髪を撫ぜると、ハヤミは笑いすぎて出た涙を砂まみれの指でかすった。

「あー、もう麻島先輩は苦勞するだろーなー」

「そういえば、おぬしとタカシは友人か？ それとも片恋慕か？」
かたれんぼ

「うーん、私と麻島先輩ですか。憧れの人ってのが一番近いんじゃないかな……」

【魔王先輩は知らないですか、麻島先輩って元運動部員なんですよ】

【魔王先輩は知らないですか、麻島先輩って元運動部員なんですよ】

「ほう、それは初耳じゃ」

たびたび部活動についての話題に触れてきたが、タカシは一度もそのようなことを言っていなかった。意図的に隠していたのだろうか。

「所属は？」

「野球部です」

真剣な表情のハヤミだったが、魔王は嘖き出した。何がツボに入ったのか、ハヤミが訊ねてみる。

「ふははははっ！ 野球部！ 不良が野球っ！ 不良部員っ！
ベタ過ぎじゃ！ 却下っ！」

「いや、何ですソレ」

よほどウケたのか、魔王は笑い続けている。物静かにカナは再び陸上部員からハリセンを受け取り、そのままスッパーンと、笑う魔王の頭をたたいた。これにはたたかれた魔王もその周りの者もびつくりだ。

「……反抗期か？」

「なんとなく。……ごめんなさい」

カナがしゅんとうなだれる。何だかよくわからないが、魔王も気を取り直して、ハヤミと向き合う。

「もう少し教えてくれ。ネタにしてやる」

「えー、でも私もあんまし知らないんですよ。今年入学したばかりだし、麻島先輩その時にはもう辞めてましたから」

「？ じゃあ、いつおぬしは知ったんじゃ？」

「えーと、中学生の時。高校見学で、文化祭に来た頃だから……
去年の秋ぐらいですかねえ」

【魔王の知らない麻島タカシ】

「その頃はまだやっておったのか」

「あー、そうみたいです。野球部のユニフォームみたいなを着てましたし」

ハヤミはぼやとした顔でその時、その頃を思い出し続ける。そこにハヤミの先輩にあたる陸上部員が「ちょっといいか」と横槍を入れてきた。

「駄目じゃ」

「おいおい……。まあ、麻島はいい選手だったと思うよ。なかなかの強肩だったし、身体もがっしりしてたからな。外野とかキャッチャーの練習をよくやらされてたよ」

「え、えーと、外野とキャッチャーって両立出来るんですか？」

「どうなんだろ。ポジションの人数合わせとかじゃねーの」

横槍を入れてきた割には適当な受け答えだ。だが、タカシは間違はなくここの高校の野球部員であつたようだ。

「何故辞めた？」

「わかんね。家の事情とかじゃねーかなあ……。バッテリーが事故起こしたとかいう話もねーしなア」

使えない陸上部員に「役立たずめ」と魔王がのしり、「なーんだ」と、ハヤミがつまらなさそうに言った。自らのことはあまり話さないタカシについて、少しでも多く聞けるかと思つたら残念な限りだ。

「でも、私は麻島先輩に憧れて、ここに入学してきたんですよ」

「ほうほう、あの愚者^{かわず}のどこに憧れられる要素があつた？」

「……楽しそうだったからかなー」

野球をしている時のタカシの顔は今の八百屋を手伝っている時と同じぐらい輝いていたと、ハヤミは話す。そして、思い切つてタカシにこの高校生活について聞いてみたという。

【この学校ってどうですか？】

【この学校ってどうですか？】

「そいつによるだろ。自分の偏差値で入れるからってだけで選んだら後悔するかもしれないねーし」

簡潔かつ適当な受け返しだった。

「ま、俺は家から近いんで選んだんだけどな」

それで後悔はしていないのか。タカシが今言ったような損は感じていないのか。

「どーだろーな。何やつても完璧に後悔しない学校生活なんてねーだろーし」

高校生活はそんなものだ。そこには今までの義務とは違った教育が待っているのだ。

「俺はここで野球してんのが楽しい。ま、勉強は苦手だからそっちは苦勞するけどよ」

タカシは「それよりも陸上部行って話聞いてこい。野球部にいてもしようがねーだろ」とにべもない。ハヤミは何か間違ったかな、と首をかしげた。

「まあ頑張れ」

それだけ言い捨てて、タカシは白球を投げながら文化祭の催し物に戻っていった。毎年、野球部はグラウンドの一部を使ってそれに関するゲームをしていた。今年は部員のノックを取れたら賞品をくれるのと、定番のボール当てだった。

【なんて言うか】

「私は、こーいう先輩がいる学校に入りたいなーって思ったんですよ」

「惚れたのか」

「や、そういうわけじゃないですけど」

「いや、気づかぬフリをしとるだーけーじゃー」

愉快そうに笑う魔王がハヤミに迫る。砂で汚れたその頬が赤く染まる。照れか怒りかはわからないが、その慌てぶりから脈が無いわけでもないらしい。

「でも、ほんと麻島先輩とどうこうって思ってますんから！」

「ふつ、とか何とか言うて、なにかとタカシについてまわつとるではないか」

タカシの通学路とわざわざ走りこみのコースと時間を被らせたり、校内を走り回っているのもより多く自然に出会う為なのか。魔王の詮索にハヤミが顔をそらし、なんとか重圧に負けないよう耐えている。

「あ……あれは、その、麻島先輩……もー野球部戻らないのかなーって。楽しそーにやってたのに」

「ワシからすれば、そこでおぬしが野球部に入っていれば多少は説得力があつたんじゃがのう？」

「だって、私はその……麻島先輩より、走るのが好きだったし。

それに、私が麻島先輩見つけた時にはもう辞めてましたから……」

思慕より運動ということだ。野球部は女性選手を取らなかつたし、ハヤミ自身も走ることからまだ遠ざかりなくなかつたのだらう。

「なんじゃ。1年も保たなかつたのか。単にタカシの根性が足らんかつただけじゃな。間違いないっ」

「や、決めつけは良くないと思いますけど」と半ば諦めの表情でハヤミは魔王をさとす。

「ま、私も色々聞いたんですけど、麻島先輩、私のこと覚えてなくて……カオミシリやオトモダチから始めました」

半年も経っていたのだから無理ないことかもしれないが、憧れや追いかけてきた方からすればがつくりとくることだった。カナと陸上部員達は完全に話から置いていかれ、互いの顔を見合わせてみるしかなかった。

「あの朴念仁ぼくねんじんじゃから仕方がないのう」

「ですねー」

魔王がくだらなさそうに言い、ハヤミがくはあとため息を吐く。そろそろ魔王はこの話自体に飽きてきたようだった。

「そろそろ帰るとするか。カナ行くぞ」

「え、あ、うん……」

「不満か？」

「別に、ね。もういいのかなーって」

カナが少しおどおどと言うのを、魔王はつんと返す。

「まだいたいならワシに構わんでいいぞ」

「うーん」

少し迷っているようだから、魔王はカナを置いてさっさと帰ることに決めた。即決だ。

【ランナースハイとは別次元】

「陸上部もそろそろあがりがな。私はもうひとつ走りてこよーつと」

「元気だなあ、お前は」

軽いストレッチをするハヤミを、ここにいてついサボってしまった陸上部員達は苦笑する。

その走るのが大好きということ。それはタイムを追い求め、この世界で生き残る為の才能より、ずっと手に入れることが難しいもの。

その才能がある陸上部員達はハヤミの入賞よりも、そのことの方が何倍も羨ましかった。当たり前だからこそ、見失いがちになる大切な心。むしろ、ハヤミの入賞は当然ともいえる。

「ほんつと羨ましいよ、お前」

「へ？」

「どうでもいいことで悩みやがって。バツカじゃねーの」

いきなり悪態をつかれ、ハヤミがショックを受けているようだ。

だが、魔王は陸上部員達の心の内を察する。

「下手の横好きも、1年通せば存外ものになるものじゃ」

「なんか意味違うよー、それ」

魔王の冗談とも取れない言葉にがっくりとうなだれるハヤミを見て、陸上部員達が笑う。これほどハヤミに適した言葉が他にあるだろうか。

「あーあ、もう」

ハヤミがため息をついたところに、声がかかった。

【その声には聞き覚えがあつたし予感もあつた】

【その声には聞き覚えがあつたし予感もあつた】

「まだ練習してんのか？」

「え？ うん」

噂をしてから、だいぶ経つてのご登場だ。はつとハヤミが振り向いたところにはタカシがいた。それと同時に、タカシも陸上部に混じった魔王とカナの存在に気づいたようだ。

「……なにやってんだよ、お前は。朝来野まで巻き込んで」

「ぬ。巻き込んでおらんぞ」

というか、と魔王がタカシに指差した。

「おぬしこそなんじゃ。その横におるものはワシに対する嫌がらせか何か。このご両人め！」

これから帰宅しようとしているタカシの横に、魔王の天敵である豊泉院会長が……カオルが並んで立っていた。他に超・生徒会メンバーもおらず、2人水入らずの下校にしか見えない。

「ああ？ またわけのわからねーこと言つてんな、オイ」

「私から説明しようか？」

「いや、いい。疲れるだけだ」

カオルがタカシに臆さず聞くので、ますます怪しく見える。目と目で会話しているようにも見える。魔王がきいっとにらみつけた。

「ええい、話さんか！」

「うつせーな。生徒会長の仕事につきあわされたんだよ」

「麻島タカシは素行面に問題があるからね。多少の罰則を受けてもらった」

「へー」

ハヤミは割と寛大のようだが、魔王は子供のように文句を言っている。タカシの首筋に授業中には貼ってなかったシップのようなものがあり、それが何か2人の仲の証拠を隠しているようで怪しいと

いちゃもんまでつけはじめた。

「これじゃ。何をしとったかは知らぬが、これがワシに対する耐性を身につけさせたんじゃない！」

「……話になんねえ。じゃあな」

タカシがカオルと魔王を置いて、さっさと行ってしまった。誤解を招いたのを認め、かつ陸上部員達は表情も内心も穏やかではないものを感じ取り、早々に場を離れるのが賢明だと判断したからだ。

「待たんか！ タカシ！」

魔王がどたとタカシの後を追ひ、ハヤミが面白そうにその後を走ってついていく。残された陸上部員もいざカオルと同じ場にいると緊張も神経も保たなかったのか、いつの間にか姿を消していた。残ったのはカナだけだ。

「……えーと」

「朝来野カナ」

カオルが急に話しかけてきたので、思わずピッと背筋を伸ばしてしまう。普段から近寄りがたく、実際に近寄ることが出来ない人だから、反射的にそうしてしまった。

「麻島タカシとは親しいのか？」

「ええと、クラスメイトで、親同士の仕事上のお付き合いがある程度……です」

「そうか。ありがとう」

それだけ言うと、カオルも行ってしまった。質問の意図が読み取れなかったカナは、ただ首をかしげるほかなかった。

「うん？」

たっぷり一分思索したところで、カナも帰宅することにしたのだった。

【怪しいシッブが何かについて】

【怪しいシッブが何かについて】

「詳しく教えんかあ！」

「教える義理も義務もねーな」

「くうー！ タカシのくせに生意気じゃぞ」

「仲良しだね、ほんと」

カナコが笑うと、タカシと魔王が同時ににらんできた。

「冗談じゃねえ！」

「冗談ではないわつ。この根性無しの平民と魔王と一緒にするな
ど！」

「……はいはい」

2人一緒に帰宅してきたかと思ったら、夕飯を食べ終わった今までもずっとこの調子だ。お互い、何か気に障るようなことでもあったのだろうか。

「話になんねえ。先風呂もらうぞ」

「ぬつ、コラ待て、まだ話は終わつとらんぞ！」

「知らねえ」

タカシが居間から抜け出し、「風呂出るまで見張っててくれ」とミカコに言い残した。この調子だと魔王が風呂場に乱入してきそうな勢いだったからだ。いや、そうでなくとも構うことなどしないだろう。

「わかってるよ。しつかり抑えとくから、ゆっくり入ってきな」

ミカコが魔王の両肩をがっしりとつかんだ。魔王の筋力ならばミカコを振り払うなど造作もないことだが、流石に家主に強攻策は取れないようだ。

「タアカアシィーめえ！ 風呂から出たら覚悟せい！」

悔しそうに、ぐわあごつと魔王が吠えた。

【風呂場で一日を思う】

湯気が天井で水滴となり、ぱしゃんと落ちる。タカシは身体を洗い流し、一息ついた。その際に気をつけたのだが、それでもぴりつと首筋に痛みがはしった。

「いてえ」

はがしたシップの下にあった切り傷が染みたのだ。最初から血は出ていないが、わずかに肌の色が変わっている。

「まったく、散々な一日だった。」

タカシはため息を吐いた。妙に息が合っている魔王とミツルのテンションや嫌がらせには参ったものだ。本人達はそう思っていないのが実にこにくらしかった。

「どうにかなんねえもんかね、あいつらは……」

言ったところで聞きやしないだろうが、一度キツくシメといった方がいいかもしれない。だが、ミツルには勇者のなかの戦士ことアンナがいる。魔王は埋めようのない身体能力差と魔王の力がある。果たして、それらに対抗出来るものかどうか。

「この世の中どうなっちまったんだ」

最初からこうだったのか、魔王が来てから何かが変わりつつあるのか。少なくとも、タカシの身の回りは大きく変化したように思えた。

「まだ変化するのか？」

タカシは湯船につかって考えてみるが、なかなかそれらしいことが思いつかない。湯をすくって顔を洗うと湯船に波が立ち、また切り傷を刺激する。

「……やれやれ」

無駄と知りつつ染みる傷口を手で覆い、風呂場の天井を見上げた。

【放課後すぐに豊泉院会長に引きずられて来た先は】

【放課後すぐに豊泉院会長に引きずられて来た先は】

「どこだ、ここは」

「見ての通り、科目資料室だ」

ここには様々な科目の授業用教材や資料が置かれているのだが、この高校には科目ごとにきちんと準備室がある。つまり、ここは今は使われないけれどもいつか使うだろう・準備室には置けないからとりあえずここに置いておこう的なものが集まったていのいい物置だった。

「麻島タカシ。遅刻・無断欠席・素行面からの注意により、この部屋の整理を命じる」

「……マジか」

流石に薬品のような危険物は置いていないが、無駄に大きい地球儀や黄ばんだプリントの束のような重いものが所狭しと詰め込まれている。それを見ただけでタカシは既にやる気を失くしている。

「ところで、パソコンは扱えるか？」

「いや。授業でやった程度だな」

カオルは「そうか」と短くつぶやき、乱雑した資料室のなかに足を踏み入れた。

「ならば、フロッピーディスクの処理とその整理は私がやろう。」

麻島タカシは書類処理とその整理をしる」

「手伝ってくれんのか」

タカシの言葉には応えず、資料室のなかほどに置いてある旧式のパソコンを立ち上る。その間に周辺の整理や順列無視のフロッピーディスクを探し出すなど、てきぱきとカオルは動き始めた。

「……もし俺がパソコンを使えてたら」

「すべてやってもらうつもりでいた。罰則だからな。私が手伝うのはこれだけ。終わったら通常業務に戻る」

ようやく立ち上がったパソコンの前に座り、カオルはキーボード操作をしながらも画面を見ずにタカシの方を向いた。

「何をしている。今日中に終わらなければ、明日以降も延長する」

「へいへい」

逆らえない。観念して、タカシも資料室のなかに入る。書類処理とその整理といっても、この部屋の惨状ではどこから手をつけたらいいものかもわからない。

「とりあえず各教科ごとに分類し、それぞれの報告書を作成。後日、各教科担当職員に報告書に目を通してもらい、必要か不必要かのチェックを行ってもらう。ものを捨てるのはそれからだ」

「報告書も俺が作るのか」

「まずは分類作業から入れ。書類作成はその後で検討する」

カオルは画面の方に集中し、今度はタカシの方を見ようとはしなかった。タカシはどう見てもガラクタとは思えない器材を手に取り、空き箱に放り込んだ。

【それから1時間か2時間は経過】

【それから1時間か2時間は経過】

2人は黙々と作業をこなしていた。カオルはフロッピーディスクの中身を科目ごとにCD-Rに移し、タカシは無造作に積まれた黄ばんだプリントを科目ごとに分別している。

「どー考えてもいらねえだろ、これ」

「それを判断するのは教師の仕事だ」

「へいへい」

カオルならばその判断さえも任せられそうだが、それでも教職員の仕事と責任として頑なに譲らなかつたのだらう。この有り様を見れば、その気持ちはわかる。

「終わつたか？」

「いや、床のモンを片付けたぐれーだな。棚の方はこれからだ」

「そうか。こちらはもうすぐ終わる。下校の時間までもう間もない。残りの作業は明日以降にやつてもらふ」

話しながらも作業する手は止まることなく、カオルはひたすら画面に向かっていく。タカシが窓を見ると、外はもう赤くなっている。

「何だ」

「別に生徒会長様を見てんじゃねーよ」

タカシはふいつと顔をそらし、悪態をついた。カオルはさして気にもしないようである。

【カリスマの裏に】

「……そういや、他のメンバーどーした。生徒会長様の手伝いには来ねーのか」

「喜久磨サオリは会計業務。瀬川シイノは余計に散らかしてしまいそうだから外れてもらった」

「容赦ねーな、生徒会長様は」

しかし、その判断は正しい。シイノがこの場に来たら、何をしかしてくれるかわかったものではない。状況悪化はまぬがれないだろう。

「副会長は？ 腹心だろ」

「彼女は違うよ」

「あア？」

疑問符を浮かべるタカシに、カオルが応えた。

「彼女は腹心ではない。もっと容赦情けの無い、敵だよ」

「……どういうことだよ」

「単純な話、超・生徒会長の座を狙っている。私を蹴落とすのに都合良いから、副会長におさまっているだけ。背後には斗葉連合もいる」

整理中、ずっと無表情だったカオルがふっと笑ったような気がした。

「隙を見せれば落とされる」

「……女同士は怖えーな」

「それでも有能な、素直でいい人だよ」

タカシは腕を組み、今度は窓ではなくカオルの方を見た。視線に気づき、カオルも振り向いた。

「どうした？」

「いや、まさか生徒会長様からそんなことを聞けるとは思ってもみなくてな」

カオルはひと呼吸だけ間を置いてから、「そうか」とつぶやいた。もしかしたら、タカシよりもカオル本人が一番驚いていたのかもしれない。

「いや、すまない。失言だったやもしれぬ」

「別に俺は他言しねーよ。っと」

棚から箱を下ろし、中身を確認する作業をしながらタカシは言った。ぎつちりと紙が詰まった段ボール箱は重く、八百屋で鍛えているタカシでもキツイものがある。

「つーか、なんでこんなに溜め込んだんだ」

「前々から超・生徒会や委員会の方で片付けはしている。だが、教師たちの使用もあり、その状態維持はなかなか難しい」

「だらしねーやつが多いってことか」

おおむ
「概ねその通りだ」

片付けていて気づいたのだが、なかには明らかに私物やゴミと思われるものが混じっていた。とりあえずまた別に分けておいたが、それにしても酷いものだ。

「……つと、取れるか」

「無茶はするなよ」

タカシが棚の最上段に手をかけ、段ボール箱をずり下ろした。埃が舞い落ち、タカシの目をかする。そんな不意と不注意について、それは起きた。

「麻島タカシっ」

カオルが立ち上がり、思わず名前を叫んだ。ずり下ろしたダンボールの所為か、バランスを崩した棚がタカシの方へ倒れかかってきたのだ。

「っ！」

タカシが手で突っ張り、棚はガタンと止まった。しかし、棚の上に置かれていた段ボール箱は重力に逆らうことなく落下した。

げ。

埃が目に入り、片手で棚を突っ張り、逃げようがない。それでも、タカシは残った手でひとつだけ出来ることがあった。

「ちっ」

【残った手の使い道】

【残った手の使い道】

盛大な音を立て、タカシは段ボール箱と紙の束の角攻撃を食らった。あらかたものが落ちた棚は軽くなり、ようやく元の位置まで押し戻すことが出来た。

「また一からやり直しかよ……」

散乱した書類と形の崩れた段ボール箱を見て、タカシはげんなりした。身体の内側こちも痛い、あざ程度のもので済んだ。

「麻島タカシ」

そう名を呼ばれ、タカシはカオルの方を見た。

「どういっつもりだった」

「……んだよ。ちゃんと後始末はつけるって」

「どういっつもりだったと聞いているんだ」

カオルの言葉はあくまで丁寧なものだったが、そのかかる威圧感は魔王の力に似ていた。

「何故、私を突き飛ばした」

タカシは空いていた手で、こちらに駆け寄ってきたカオルの身体を突き飛ばした。その所為で上から落ちてくるものを受け止めることは出来なかった。

「そうでもしねーと、俺を助けにくんだろ」

「当たり前だ。私なら、容易く助けられた。タイミング的にも間に合っていたはずだ」

魔王に勇者のなかの勇者と言わしめる存在。カオルの言う通り、あのタイミングなら逆にタカシを棚の下から引きずり出すことも可能だったろう。

「別に」

「その大きな身体なら大丈夫と思ったか？ 多少の痛みなら耐えられると思ったか？」

カオルの言葉は容赦なく、タカシに突き刺さる。

「……別に。ただ、こつち来てほしくなかったただけだ」

「何故？ 助けられるものが助ける。助けられたから助けに入ろうとした。それだけの話だった」

ずくと痛む首筋を押さえ、タカシが盛大なため息を吐いた。

「別に。助けられたかもしれないし、助けられないかもしれない。どのみち、危険なことさせたくないかったんだっつーの」

「それは私が女性だからか」

「はつきり言っな。カツコぐらいつけさせろ」

【男の無用な意地は馬鹿や何かと同列】

【男の無用な意地は馬鹿や何かと同列】

「馬鹿だな」

真顔で言ってくれるカオルがタカシの傍に寄り、それから押さえていた首筋に触れた。

「紙で切ったのか」

「みてーだな」

「手当てした方がいい」

「後でいい。この程度、血も出てないしな」

よつこらしよと、タカシがしゃがんで歪んでしまった段ボール箱を拾い上げた。中身の書類も片付けた床に散乱し、台無しにしている。

「麻島タカシ」

「んだよ」

「馬鹿だな」

「何度も言うな。自覚してっから」

「……久々だ。私がそう扱われるのは」

物心ついた頃から何でも出来たカオルは、それを知る周囲の者すべてに頼られた。老若男女、あらゆる他人を惹きつけた。男女の境を越えて、カオルはひとつの超人扱いをされ続けてきた。

「だが、無用な遠慮はするな。私を頼れ。麻島タカシ」

常に全力を尽くす。助け合うのは人として当然であり、一方的なものでもそれは変わらない。性別や年齢の垣根など、その前には無に等しいのだ。

「だから、私は生徒会長を務めているのだ」

男以上に男らしいカオルに、タカシはまたため息を吐いた。どうやら、最初からかなう相手ではなかったようだ。それでも、貫き通したい意地はある。

「ふむ。しかしながら、ウチの書記並みに派手に散らかしたものだな」

タカシはがくんとうなだれた。あの超・トラブルメーカーのしかしてくれらることと同列に並ぶとは、まさに不覚だった。

「どのみち、棚の整理もこれからすんだし、丁度良い」

「残念ながら、下校の時刻だ」

わずかに傾いている時計は確かにそれを指し示している。カオルは散乱した書類を飛び越え、部屋の扉の前に立った。くすりと笑い、タカシの方を振り返り見る。

「明日、私は早朝より生徒会室にいる。その時に来れば、ここを開けてやるう」

「そりゃどーも」

ぶっきらぼうにそう返すと、カオルはタカシの手首を取った。

【勇者のお誘い】

【勇者のお誘い】

「さて、下校の前に保健室へ寄るぞ」

「このくらいでか。冗談だろ」

「安心しろ。麻島タカシ。何をどう言おうと、私は連れて行く」

力強く、カオルはぐいつとタカシを扉の前に引き寄せる。絶妙な力加減と体重移動のおかげだろうか。

「ちょ、待てよ」

「待たない」

「これくらいで薬使ったらもつたいねーよ！」

「なら、私が傷口をなめてやろうか？」

豊泉院生徒会長ファンクラブが聞けば、我先にと怪我をしてくるだろう。しかし、タカシには何故か拷問の誘いにしか聞こえない。カオルには魔王と同等以上に何か恐ろしいものがあつた。

「……わぁーつたよ」

「そうか」

タカシはカオルの手を振り払おうとしたが、がつちりと取られてしまっている。逃げの一手も防がれた。タカシは観念するしかなかった。

【それから保健室へ寄って傷薬やシップを貰う】

「無敵の生徒会長様が男連れとはね」

保険女医の生方ナエがいきいと椅子をきしませる。ナエ女医はきつちりとした白衣を身に着け、伊達眼鏡をすることでほぼ完璧な保険女医という外見を作り上げていた。

「浮いた噂は無いと思っただけど、やっぱり意外というか珍しいというか」

「私の力が及ばなかったが為、不要な怪我をさせてしまいました

ので」

「ちょっと待て。別に俺はわざわざ生徒会長様に助けてもらおうなんて思っただけだったんだが」

「それでも助けるのが私だ」

タカシとカオルが向き合い、男の意地と生徒会長の責任で互いに譲らない。

「あらー、おてて繋いで痴話喧嘩までして。どうしたの、あなたたち」

「別に」

「何でもありません」

2人は照れているわけでも、デレているわけでもない。ただ真顔でほぼ同時に言い返した。

「それと麻島タカシの手ではなく手首をつかんでいたのです」

「それだと違うものなの？」

「はい」

カオルの言葉にナエ女医は「んーっ」と考える。手を繋いだなら仲良しだが、手首なら一方的な連行ということだろうか。

「……なるほどなるほど。ならいいわ」

「何がいいんだ」

「これ以上はツッコまないであげる。首筋の傷は引つかき傷？」

ナエ女医が興味心身に、面白そうにツッコんできた。実に楽しそうに話しかけてくれるが、タカシもカオルも付き合いきれないといった表情だ。

「下校時刻ですので、これで失礼します」

「あらヤダ。もうそんな時間かあ。今日、見たいテレビがあったのに忘れてたわ」

時計を見て慌てて、帰り支度を始めるがすぐにやめてしまった。

「ま、いつか。ここで見てっちゃおう」

「教職員もすみやかに下校願います」

カオルがひとにらみし、たしなめる。おどけているが、耐性も何

もないナエ女医は気圧され、それだけで「わかりましたあ」と萎縮^{いしゆく}してしまう。この眼力にかなう者は殆どいない。

【かたいなあ、もう】

「では、失礼します」

「はい、お大事に」

かららつと扉をスライドさせ、カオルとタカシは保健室を後にした。廊下には来た時と同じで他に誰もおらず、隠す気は無いが2人で見るところは見られてはいなさそうだった。

「……さて、あとは運動部の者に声をかけるか。練習熱心なのは良いが、下校時刻は守ってもらわねばな」

「俺は帰っていいか」

「構わんぞ。明日、待っているぞ」

そう互いに挨拶を交わし、別れようとしたのだが、いつまでも2人は一緒だ。それもそのはず、この時間だと正面玄関しか鍵が開いておらず、出るところがないからだ。

冷静に考えたら、なんか変な感じだな。

成り行きとはいえ、こうして並んで歩くようなことが今までに一度でもあっただろうか。いや、無かったはずだ。

【唐突なのは自覚しているが】

「唐突なのは自覚しているが」

「ところで、転入生の魔王のことなんだが」

「呼び捨てか」

昼休みはさん付けしていたが、と指摘したら「他意はない」と返ってきた。初対面かつ普通聞かない名前だから、ある種の警戒をしていたのだろうか。

「お前の家に同棲しているというのは本当か」

「藪から棒になんだ、いきなり」

「もし、それが本当なら、それなりの措置を取る必要があるからだ」

どう考えても、同じ学年の男女が一つ屋根の下で暮らしているというのは世間的にまずい。学校側としては大問題だ。

「それを隠すならともかく、広めて回るのはどうかと思うが」

「いや待て。俺はそんな噂広めたつもりはないぞ」

タカシはしらを切ってみようとするが、カオルは即座に「超・生徒会の情報網を侮るな」とにらんだ。

「麻島タカシの親友である甲藤ミツルを発信源に噂は広がるどころか、魔王本人に店舗手伝いをさせているそうではないか。隠す気が無いとは思えんぞ」

結論からすれば、もはや隠し通すことは不可能だ。ここまで知られているのでは、申し開きも立たない。

「……同棲じゃねーよ。向こうが勝手に居候してるだけだ」

「同棲とは、血の繋がりもなく、正式に結婚もしていない男女が同じ家で一緒に暮らすことを言う。この事例に該当しないか」

辞書のように単純で明快な応答かつ正論に、タカシは詰まらざるを得ない。

「何か弁明はあるか」

「まともに話を聞いてくれんなら、ないこともない」

「聞こう」

カオルは足を止め、タカシを見据えた。その眼力は、たとえ耐性がある者でも逃れきれるものではない。

おいおい。

あの無敵と名高い豊泉院生徒会長が、あの与太話のようなものを聞く気にいる。まだミツルのでまかせの方が真実味があるというものだ。

「話してみるか……」

半ばやけ気味に、タカシはすべてを話してみることにする。後で魔王が何か言ってこようが、今の圧力の方が問題だ。

「引くんじゃねえぞ」

「猥談でなければな」

【似合わない冗談はやめろ】

【似合わない冗談はやめろ】

「本当にそんな話に通じるとでも思っているのか」

「思わねーよ」

タカシは大真面目で、現在の魔王の状況と保有する力についてすべて教えてやった。ただ魔王の故郷である次元名は忘れてしまったので、曖昧にしまったが問題ないはずだ。

「本気か」

「マジだ」

カオルはタカシの眼を覗き込み、その真実をつかみ取ろうとする。嘘についているとすれば同棲という事実をうやむやにしたいタカシか、タカシに嘘を吹き込み信じ込ませた魔王かのどちらかだ。

「……」

「……」

たっぷり1分はにらみあっただろうか。ふっとカオルが微笑み、目をそらした。

「どうやら嘘はついていないようだな」

「当たり前だ。こんなくだらねえ嘘つくか」

「単に嘘を思いつけないだけかもしれないが……」

真剣にそう思いだすカオルにタカシは「オイ」とツツコミをいれた。

「では、あとは魔王本人に確かめるとしよう」

「……それで？ 本当だったらどうする気だ」

「後日、適切な処置を取らせてもらう」

カオルの応答には迷いがなかった。タカシはもうどうにもならないという、自分自身の無力さを感じ取る。

「さて、早速会いに行くとするか」

「会って……魔王にか」

「他に誰がいる」

カオルは更に「麻島タカシの自宅に行けば会えるか」と訊いてきた。

「いや、確か……今日は陸上部の見学に行つてるとか言つてたな」「丁度いい。まだ陸上部は活動しているようだから、下校を勧めてこよう」

そう決めると、カオルは再び歩き始める。タカシがその後をのんびりついていくと、カオルは減速し、タカシのスピードに合わせてきた。

「んだよ」

「どうせそこまでだ」

「……離れて歩けよな」

「私と並んで歩くのは嫌か？」

確信犯だろうカオルに、タカシはお手上げだ。どうもこの手の人種が集まる星の下に生まれてきたらしい。

「どちらかつつーとな」

「そうか」

カオルは意外という顔もせず、それを素直に受け入れたようだ。しかし、一向に離れて歩く気配は無い。腕を組んだり、手を繋いだりすることも無い。ただ、並んで歩いているだけだ。

……疲れる。

一歩進むごとに体力が抜け、精神が磨り減つていきそうだった。あの傍若無人な魔王ですら、カオルが保持する勇者のなかの勇者というスペックの所為で耐え切れないのだ。豊泉院会長と平常心かつ無心に歩ける者など、この次元にはいないだろう。

【というわけで2人並んで陸上部の練習に顔を出したわけだが】

【というわけで2人並んで陸上部の練習に顔を出したわけだが】
結局、カオルを無視して先に帰ってしまった。いや、元々そうするつもりだったのだが、生徒会長としての処置を聞きそびれてしまった。

それにあの騒ぎで判断出来たものかね。

タカシは湯船につかり、陸上部員を巻き込んだの魔王の乱心を思いにはせた。やけに首筋の傷やカオルに対して反応していたが、どちらも勇者関連なのでカンに障ったのだろう。

「ま、もうなるようにしかならねーだろ」

ざぱつと水音をたて、タカシが立ち上がる。これからどう話が転んでいくかは、魔王とカオルに委ねられたに等しい。もうただの平民であるタカシが出来ることなど無いに等しい。

……今日のこと、魔王にや話さなくていいか。

今更知っても遅いということもあるし、話したら話したでまた騒がれると困る。更にその勢いでカオルの家に殴り込みをかけるという暴君に出ないとも限らない。実際、ありえそうで怖い。

「いつまで続くんだろうな」

そうつぶやくと、何やらどたばたと風呂場の外が騒がしい。何かと思えば、魔王が何かを叫んでいる。

「ええい、ミカコよ離してくれ。今日こそタカシにワシの背を流させることから始まり、あやつの手の握力がなくなるまで隅々までマッサージをさせ、とことん尽くし倒させるんじゃあ!」

「やかましいわっ!」

タカシは外に大声で怒鳴りつけると、それが風呂場内に反響する。その怒声に外はまたどたばたと騒がしくなる。

マジでいつまで続くんだ、この生活は……。

魔王が斗葉高校を卒業するまでとして1年と半年。気が遠くなり

そんな道のりに、タカシはぶくぶくと湯船に沈んでいった。

【9月9日】

【9月9日の早朝】

「思ったより殊勝で何よりだ」

「うるせーよ」

タカシは昨日の整理を終わらせるために朝早くから超・生徒会室に赴いた。魔王はまだ家で寝ている。

「ていうか、ここは何時から仕事してんだ」

現在は朝の7時過ぎ。早すぎたかと思ったタカシがここに顔を出した時から既に超・生徒会のメンバーは全員揃って、書類作成と会議をしていた。仕事熱心なのは良いが、こんなに朝早くからやらなければならぬほど、それが溜まっているのだろうか。

「さて、科目資料室を開けてやろう」

「無視かよ」

「わたくしが行きますわ」

書類の束をまとめたセイがかたと立ち上がり、そうカオルに申し出た。

「いいのか」

「はい。こちらは終わりましたので、お確かめください」

カオルが書類の束を受け取ると、速読でばららつとめくって見て、物凄い速さで会長印を押していく。

「……わかった。では、お願いしよう」

了承を得て、セイは生徒会長の机の上に出してある鍵を拾う。

「では、行きましょう」

「ああ」

セイがタカシを促し、率先して前に出で部屋を出て行く。それにタカシも続こうとすると、カオルが声をかけた。

「昨日の件、放課後には決定が下りるだろう。それまで待て」
一種の死刑宣告だろうか。タカシは「へいへい」とつぶやき、後

ろ手で扉を閉めて生徒会室をあとにした。

【なかなか面白いことになっているようですね】

「豊泉院生徒会長狙いですか」

「いや。どういう勘違いだ？」

科目資料室へ向かう途中、セイがタカシに話しかけてきた。早朝の校内には誰もいなく、内緒話には都合が良かった。

「しかし、昨日は一緒に下校した」

「……たまたまだっつーの」

「そうですね。科目資料室の整理は一筋縄にはいきませんから。遅くまでかかるでしょう」

セイが何言いたいのか、タカシにはよくわからなかった。

「あの人の幅広い年齢層から支持されています。夜道には充分気をつけなさい」

「……そっぴや誰かに刺されかけたな」

びっくりしてセイが立ち止まり振り返るとタカシは真顔でいる。

それで嘘だとわかり、セイはあきれた顔でそっぽを向いた。

マジで取れるぐらいやばいってことかよ。

それは魔王とタカシの同棲疑惑以上に問題なのではないのか。しかし、セイはさらにそれを流すようつとめる。

「あの人とあなた達は違います。くだらない望みは捨てることです」

セイはそう言い捨てるのと同時に、2人は目的の科目資料室前に到着した。くるとセイは180度回転し、タカシと向き合う。

「では鍵を渡します。始業の5分前までに超・生徒会室に届けに来ること。良いですね？」

「……わかった」

ちやりと鍵を手渡され、タカシがそれを握り締めた。

「時間は厳守でお願いします」

「へいへい」

タカシは生返事をして、鍵を頭上へ放り投げて、また受け止める。セイはもう一度だけ振り返るが、その後はそのまま生徒会室へ戻っていったようだった。

わっかんねえな……。

果たして、セイの言葉は誰に向けられたものだったのか。タカシか、それとも自分自身に向けて言ったのか。

「まア……どうでもいいけど」

くあつと大あくびをしながら、タカシはそうつぶやいた。確かに豊泉院会長と八鍬副会長の間柄は複雑だということはわかったが、タカシにはどうでもいいことだった。

【激闘の末】

【激闘の末】

なんとか昨日の後始末を終え、鍵を生徒会室に戻したのは8時20分過ぎだった。セイに無言でにらまれ、カオルに「この調子で放課後も頼む」と言われ、シイノに「がんばってください」とはげまされた。どれが一番堪えたかは言うまでもない。

そういや、あと1人いた気がしたが……いたか？

タカシは首を傾げたが、わからないのなら無理に思い出すこともないかという結論に達したようだ。それよりも朝置いてきた魔王の方が気になっているようだ。

「面倒なこと起こしてなきゃいいが」

こういう予感に限ってよく当たるものであり、それが常識とさえ思えるから不思議だった。

【で、教室に来てみたら】

「早く出たというのに遅かったのう。タカシ」

「魔王様……ハアハア」

「ゼエゼエ……魔王様」

「で、なんだこの気持ち悪い連中は」

タカシは来たばかりの教室を今すぐにでも立ち去りたくなった。

魔王の席を中心に異様な密度で人が群がっているからだ。

「キサマ、魔王様を侮辱するかつ」

「許さんぞ、魔王様への侮辱はわれらの侮辱」

「いや、侮辱したのはお前らなんだが……」

いつの間にかすりかえられ、タカシを攻撃対象と見なした集団が各々ポーズを決め始める。それにしてもノリノリだ。

「われらは可憐で妖艶なる魔王様に賛同する者」

「共に世界をわが手に」

「必ずや導きましょう。われらは全力で尽くします」

「そう、我ら」

「魔王様を敬い隊！」

「うるせーよ」

タカシが決めポーズも決めゼリフも一蹴すると、魔王様敬い隊を押しのけて自分の席に座った。そのまだ周りで何かわめいている。

「おのれっ、キサマは何なんだ」

「魔王様の席の前とは羨ましいやつめ！ ハアハア」

「われらを甘く見ると痛い目遭うかもよ！ ゼエハア」

「成敗してくれるかっ」

「他人任せかよ」

的確なツツコミに魔王を敬い隊ひるんだその時、武島イズシ教師たけしまが始業と同時に入ってきた。

「授業を始める。関係の無い生徒は出て行くように」

「くっ、おぼえてろよ！」

「ハアハア……われらは何度でもここに立ち寄るだろう。うざいと言われようが慣れてるからなっ」

「自覚してんだな」

「うつせーやーい。こんの不良めえ……ゼエゼエ」

「早く出て行きなさい。始業時間はとうに過ぎている」

イズシ教師ににらまれ、ずこずこ退場していく魔王様を敬い隊を見て、ミツルがにやにやしている。他人事だと思っただけ面白がっているのかと、タカシは眉をひそめた。

【武島イツシ教師の授業風景のなかで】

【武島イツシ教師の授業風景のなかで】

魔王様を敬い隊が全員出て行くのを見届けてから、その中心にいた魔王とタカシを一瞥する。いちべつそれから何事も無かったかのように、出席簿を開いて出欠をその目で確認する。

「遅刻ゼロ。欠席ゼロ。授業を始めよう。前回、課題を出された者、前へ出なさい」

がたがたと何人かがぴしつと立ち上がり、ぎくしゃくと歩いて黒板の前に立つ。イズシ教師ににらまれながら、おそろおそろ課題の答えを慎重に書いていく。

「……知久瀬わくせ」

びくつとチョークを持つ手が震え、前に出た1人である知久瀬の表情がこわばる。イズシ教師は手元の閻魔帳を開いた。

「手が止まっているな。わからないのか？」

「す、すみません……」

「何故、私のところへ聞きに来なかった」

「すみません」

「あやまるな。意味が無い」

「はい、すみませんでした」

イズシ教師が閻魔帳にまた何か書き込むのを見て、知久瀬がうなだれる。そして黒板前で同じことをしていた生徒達まで萎縮し、それどころか教室全体が縮こまっていた。その空気を魔王は面白そうに見ている。

「これはなかなか」

「で、あの敬い隊は結局何だったんだ？」

タカシが小声で後ろにいる魔王に声をかけた。ふふんと笑って見せ、同じように小声で返してくる。

「うむ」

【魔王様を敬い隊のことか】

「あれはワシを慕い、敬い、そして集いし見る目のある平民共じや。様つけてくれるしのう」

「……お前、あんなのに好かれたいのか。根に持つな」

「まあ、今は質より量じゃな。何をするにも手駒が足りん。悪い」

魔王がぐつと握りこぶしを作る。豊泉院生徒会長を始めとする超・生徒会メンバーのファンクラブに対抗する気だろうか。だが、魔王曰くあの魔王様敬い隊はそういったところから流れて来た者だという。

「来る者は拒まん。魔王たるもの、その器のでかさを率先して示さねばな」

「そういう問題か？」

タカシはいぶかしんだ。魔王のことを尊敬し集ったと言うにしては、タカシのことを異様な敵対心で見えていなかったか。

あれがオタクとかいうやつかね。ていうか、器でかいんなら根に持つなっつーの。

敬い隊などと口では言っているが、どちらかといえば魔王の容姿や何かに萌えを感じて惹かれてきたのだろう。タカシにはその感情や関心がよくわからなかったが、わからないままの方がいい時もある。魔王も恐らく承知の上だろう。

「しっかし、なんであいつらあんなに息切れしてたんだ？ よけいウゼーんだが」

「うむ。ワシがエネルギーを貰ったせいじゃろう」

「オイ待て。それ、あいつら知ってんのか」

「知るか」

魔王はきつぱりと言い捨てた。タカシが思わず立ち上がろうとするのを、魔王が制した。

「……じゃが、場を支配していないにも関わらずそのエネルギー

を貰えるということは向こうがそれを許しているということじゃ」

「許してるわけねーだろ。向こうが知らないだけだ。あんなに息切れするほど吸いやがって」

「じゃから、タカシの言うほど貰ってはおらん」

その言葉が本当なら、魔王様を敬い隊はエネルギーを吸われているのと同時に興奮していただけたのか。それはそれでぞつとするな、とタカシはあきれるほかなかった。

「そこ。うるさいぞ」

イズシ教師の厳しい目が光り、タカシと魔王が同時に舌打ちした。

「反省の色無し。よくわかった」

さらさらとペンをはしらせ、閻魔帳に書き込んでいる。

「気をつけるように」

それだけ言うと、イズシは前回出された課題について、その問題点の解説と指摘を始めた。

【その授業が終わった休み時間】

【その授業が終わった休み時間】

魔王は色々詳しいミツルにイズシ教師について聞いた。そういえば転入したばかりの魔王は今日初めてイズシ教師の授業を受けたのだ。あの授業中の空気、気にならないわけがない。

「武島先生ねー。真面目でいい先生だよ。 ちよつとカタいけどね」

「ちよつとじゃねーだろ」

タカシがツツコむが、ミツルは「そうかな」と首をかしげた。

「ミツルの言う通りだあああああつ！ イズシ先生は厳しいけどいい先生だぞおおっ！」

「朝からやかましいっつーの」

例によつて現れたアンナにタカシは注意するが、聞くわけもない。タカシが幸せが逃げるというため息をひとつ吐くと、また頭痛の種が教室に飛び込んできた。

「麻島とやら、魔王様から離れる！ ハアハア」

「そうとも！ われらの許可なしに魔王様に近づくなつ！」

例の敬い隊が現れると、いっそうやかましくなった。荒い息遣いも暑苦しい。

「あア？」

タカシがひとにらみすると、敬い隊の勢いが急にしぼんだ。それからビシッと姿勢を正し、魔王に向かって敬礼をして見せた。

「で・では、魔王様！ われらは廊下で待機しておりますので」

「いつでもお呼びくださいっ！ ハアハア」

「うむ」

敬い隊が駆け足で廊下の方へ出て行くのを見て、ミツルがにやにやと笑った。

「さっすが不良の眼力。あいつらもうまく逃げたなあ」

「言ってる。魔王の傍に居続けて倒れられても困るからな」

「じゃから、言うほど貰っておらん。それより、イズシとやらの話を聞かせんか」

魔王がそう命じると、ミツルはハイハイと承諾した。

「あの先生の評価は減点式で、加点は一切無し。出来て当たり前だからだつてさ」

【武島教師の成績評価】

【武島教師の成績評価】

仮に入学時にそれぞれ100点ずつ与えられたとしよう。これはその個人の課題提出やテストの点、出席や授業態度などで引かれ続けていくだけだ。それらがきちんと出来ていても引かれただけで後からは一切加点されない。そして、1年の終わりに残った点がそのまま評価となる。これが武島教師の成績のつけ方なのだ、とミツルが簡単に説明した。

「ほうほう。そして、それはあの閻魔帳とやらにすべて書かれておるのじゃな？」

「まおーさんスルドイっ」

ミツルがおどけるようにポージングを決め、魔王の推測を裏付ける。タカシが「相変わらず元ネタがわからん」とぼやいた。

「武島先生が肌身離さず、常に持ち歩く閻魔帳。そこには過去数年間の減点とかのデータが全部詰まってるんだって」

「まあ、素行も勉強も優秀なワシには無関係か」

「さつき減点されてたろ」

イズシ教師から注意勧告をされた後にタカシと同時に舌打ち。間違いなく減点対象に入っているだろう。そのことを思い出した魔王はうぐと詰まり、考えた。

「……いざとなったら、ワシだけ減点を取り消してもらうかのう」

「オイ」

タカシはとりあえずツツコんだというだけで、魔王の発言や減点自体を気にしているようには見えなかった。

「へー、具体的にはどうするのさ？」

「閻魔帳を改竄かいざんするのが簡単で良かるう」

「それはやめた方がいいぞおおっ！ 魔王おおっ！」

眉をひそめ「何故か」と聞く魔王に、アンナに代わってミツルが

意地の悪い笑みで応えた。

「肌身離さず持つてるもんだし、閻魔帳に書いた内容は先生自身がゼーんぶ覚えてるそうだから、すぐ気づかれるっていう単純で凄いな話」

過去に数回ほど、閻魔帳に書かれているデータを改竄しようとして、気づかれ、逆に減点され自滅した生徒がいたという話はあまりに有名だった。その時の話によれば、閻魔帳は高度な暗号がまったく見たことのない外国語で書かれていたそうだった。

【武島教師の心意気】

【武島教師の心意気】

「む、そこまでいくと嫌われそうじゃな」

「そーでもないんだな。これが」

ちちちちと人差し指を横に振り、ミツルはそれを否定した。

「確かに評点は厳しいけど。でも、この学校の授業のなかじゃ一番わかりやすいよ。一度やったところでも何でも、聞けばわかるまで丁寧に教えてくれる。直接聞きづらかったら、携帯電話・メール・ファックスなんかでもオツケーだし」

ミツルの、特に最後の話には魔王も流石に目をむいた。ミツルやタカシ達が1年生の時、その1学期の始めにイズシ教師からそれらの番号やアドレスを渡された時も同様に、学年中で驚いたものだった。

「わからなければいつでも聞きに来い。その代わり、授業やテストで出来なければ必ず減点する。……って言った時には驚いたね。ほんとに」

「すごい先生が来たもんだって驚いたぞおおっ！ ミツルほどじゃないけどなあああああああっ！」

ふうつと息をつきながら、ミツルはアンナの頭を撫でた。ここで引き合いに出される意味はわからなかったが、とりあえず静かにしてもらうには撫でておくのが一番だった。

「大体わかった。ワシの直感通り、愉快的教師じゃのう」

「ちつとも愉快じゃねーよ。融通利かねーから」

ぼそりとタカシがそう口に出すが、ミツルは余裕の表情で笑っている。

「そお？ 真面目に勉強してれば、きちんと評価してくれるじゃん。タカシの場合は自分に問題があるんじゃない？」

面と向かって「質問いいですか？」と言えるようなものなら、そ

ういう苦労はしない。電話などの方法でも、パソコンを持っていな
い人や不得手な人にはやはり敷居が高い。タカシはその両方だった。
「そもそも勉強しねーやつがどんな方法でも教師に質問なんかす
っかよ」

「かといつて、わかんないままだと減点され放題。武島先生も言
つてたろ。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥って」

実際そういうものだが、タカシは聞く耳を持たない。いや、質問
する口を持たなかった。

「あとは……まあ、時間の終わりに必ず出す課題も嫌がらせじゃ
ない、とか。次の時間でそれがどれだけ出来てるかで授業進度を変
えてるみたいだから」

「勿論、課題がわからなければ、次の時間までに武島先生に聞け
ばやり方だけ教えてくれるし」とミツルが付け加えた。イズシ教師
が教えるのは解き方と勉強の要領だけで、あくまで答えを出すのは
生徒達だ。

「教育熱心なのは認めるが、学生としては好みがわかる教師じ
やのう」

魔王がどこにでもいる学生らしくつぶやくが、それはどこがおか
しかった。

「でも、武島先生が好きな人は多いよ。俺も教師のなかじゃダン
トツかもしれない」

ミツルがそう言うのと、撫でられているアンナが突然「ミツルウウ
ウウウウ、浮気はしないでくれええええええええっ！」と叫ん
だ。

「お前が言うのと誤解招くからやめとけ」

アンナが叫べばそれだけ必死にも見て取れるからだ。それにして
もこの大声はイズシ教師減点対象に入っていないのだろうか。

「授業中は静かにしてるぞおっ！」

「嘘つけ」

「まあ、俺が絡んでなければ少し騒がしい程度じゃない？」

確かにそれは言えている。アンナはミツルが絡むとヒートアップするだけで、普段は少し熱い女子生徒だ。

「やかましいんじゃない……」

魔王がそろそろ勇者のなかの戦士の叫び声にぐったりしてきた頃、タイミングよく中休み終了のチャイムが鳴った。ミツルは物凄く寂しそうな顔をするアンナの背を押して、手を振って送り出した。

「ああいう表情されると弱いよなあ。なんていうか雨のなか助けを求める犬みたいな感じ」

「ああ、いるな。ばかでかくて人懐っこくていつまでも離れようとしないやつ」

想像してみるとぴたりだった。そして、つくづく別のクラスで良かったと改めて安堵^{あんど}する。

「うう、あの大声をどうにかしてくれ……かなわんわっ」

ミツルが席に戻ると、急に弱々しくなった魔王が前に座るタカシの背中にべしべしと八つ当たりした。

「ってーな。諦める。おれみたいに耐性でもつけるんだな」

「うぬう……耐性がつかぬから天敵というのじゃ。愚民め」

「そうかい。そいつぁいいこと聞いたな」

魔王がまた何か言ってきたが、タカシは無視を決め込んだ。2時間目の担当教師が出席を取り始めこともあり、背中への攻撃も無くなった。

【お呼び出しを申し上げます・お呼び出しを申し上げます】

【お呼び出しを申し上げます・お呼び出しを申し上げます】

「敬語間違つてねーか、これ」

「どうだっけなあ」

「たぶん合ってるぞおおっ！」

昼休み中に流れた放送にツツコミを入れつつ、タカシは茶を一口飲んだ。今日の弁当は残さず食べられた魔王は敬い隊にジューズを買いに走らせている。

『普通科2年の麻島タカシ。至急、生徒会室まで来るように』

超・生徒会からの呼び出しとあつてざわわつと教室内がどよめき、タカシの方に一斉に注目の視線が集まつた。

「お、呼び出しか。今度は何したんだ？」

「……しいて言うなら、お前らのせいだ」

タカシがミツルと魔王をにらむと、2人は「人のせいにするなよ」と同時に返した。それは何事か察した上で、わかつた上で言っているのだろうか。

「とりあえず行ってくる」

「はいよ。灰はどこにまいてほしい？」

「畑の中心でよかるう」

「お前らなあ……ッ！」

その物言いにタカシがうなるが、更に放送が『ふざけあつていないで、至急来るように』と追い打ちの放送がかかる。まるでどこかで見ているかのようなタイミングの良さだ。

「マジでそうかも」

何か心当たりがありますよと言わんばかりなミツルの疑惑の爆弾発言がかなり気になったが、タカシはこれ以上何か放送されない内に生徒会室へ向かうことにした。

【ところで魔王は】

「文庫本？」

タカシが生徒会室へ行った後、魔王は自らの鞆から一冊の本を取り出した。それを見たミツルの意外そうな一言だった。

「うむ。読書に励むところじゃ」

「へえ」

魔王は嬉しそうにページをめくる。それも速読といっていい程のハイペースだ。

「面白い？」

「つまらん」

笑顔でそう返され、あっけに取られたミツルは返答に困ったようだった。

「……あー、趣味に合わないとか？」

「何を読んでもつまらんのじゃ」

それだけ言つて、魔王は早くも文庫本を鞆のなかへと放り込んだ。読む気が失せたものだすぐにわかった。

「なんでかねえ」

「数を読んでいけばその内わかるじやろ」

魔王はそう言つて、ぐたりと机に突つ伏した。アンナが耳元で「どうしたああつ！」と心配そうに叫んだ。

「少しな。寝かせてくれ」

「わかったああつ！ ミツルウウウウウ、静かにするぞおおつ！」

「コラ」

ミツルは眉をひそめ、一番やかましいアンナの口を押さえこんだ。しかし、耐えかねたのか魔王は眉間を押さえて起き上がった。

「もうよい。授業中に寝るとする」

「それが良いね」

「そうだ、ミツルウウウウウツ、魔王おおつ、ウノしよおおおつ！」

尻尾があればちぎれんばかりに振っているだろうアンナの無邪気で嬉しそうな誘いに、2人は乗ることにした。

【食事中だったか？】

【食事中だったか？】

「いや、食い終わってた」

「そうか。なら、いい」

昼休みの生徒会室にはカオルの他に誰もおらず、タカシと2人きりだった。生徒会長の机には書類が積まれており、カオルは椅子に座ってそれらをひとつひとつ眺めている。

「人払いでもしたのか」

「そういうことになるな。一応、内密な話だ」

カオルは書類を見続け、顔を上げない。タカシは部屋の内装をぼーっと眺めている。

「魔王の処断だが」

「ああ。どーなった？」

豊泉院会長の采配、そしてその実力でどうするかと楽しみな反面恐ろしくもあった。ただこれまでの話の流れだと、悪い方へはいかなかったようだ。

【タカシと魔王の同棲疑惑をどうしたか】

「魔王をヨーロッパからの留学生に、そして遠縁である麻島タカシ家を頼つてのホームステイをさせていることで教職員達を認めさせた」

「おいおい、えらく無難っつか……広まってる噂話そのものじゃねえのか？」

カオルは軽く頷き、タカシを見上げるように顔をあげた。

「違うのはこの問題を学校側が認めたということ。そう魔王は別次元から来たなどという超常的なものではなく、誰もが納得する故郷を設定したという点だ」

このお膳立てで魔王とタカシの家族が一つ屋根の下で生活しても

いいような状況にした。更に血縁関係に留学生でホームステイという設定は若い男女の間違いが起きない、ということ的印象付ける。

「ホームステイという状況そのものがそもそも異質だからな。何か日常や学校生活において不自然な点が見られても、留学してきたということで大目に見られることもある」

噂話では魔王はタカシの母方の叔母の娘の父方の祖父の孫娘の一人娘で身寄りが亡くなってしまった帰国子女ということらしい。今回の処断に関して言えば、新たな捏造にも辻褄合わせにも実に都合が良いものだった。

「少し調べたのだが、この斗葉高校に転入をする際の魔王がした手続きにおいてもそのようなことになっていた」

「そのようなことって……」

「つまり、今回の件は麻島タカシや私よりも先を見越した魔王の思惑通りにことが進んだものと見ていいだろう」

当然といえば当然の、唐突といえば唐突の事実をカオルから聞くと、タカシは自らのこぶしとこぶしを叩き合わせた。本当に魔王は何も話さない。

「ホームステイだけに限らないが、このような状況は互いの信用が第一となる。話やその行動を聞く限りだと、魔王はまだ信用ならないようだ」

勿論、タカシが魔王に対して変な気でも起こせばすべてが台無しになる。それを推し進めたカオルの立場も揺るがされるだろう。

【はかられた重み】

【はかられた重み】

「信用しているぞ。麻島タカシ」

カオルが微笑むと、「またそれか」と、タカシはため息をついた。無敵の生徒会長に言われると、その重みが違う。

【心中知らず】

「誰が、んな気を起こすかよ」

「そうか」

そもそもタカシが魔王に、周りが言うような恋愛感情を持つなどありえないことだった。

「朝来野力ナか？」

「……おい」

「案ずるな。ただの勘だった」

タカシは本当に小さくうなるが、カオルは動揺や心情を表情にも声調にも表さず淡々と語った。

「それだけはつきりと明言出来るということは、恋愛対象外か他に恋愛対象がいるということだろう」

ここまではただの憶測、根拠も薄い邪推^{じゃすい}だった。

「昨日、麻島タカシが朝来野力ナに向けた視線は攻撃的なものではなかった。例えるなら、お前が野球をやっていた時や野菜を見ている時の目だ」

「さっすが生徒会長様。なんでもお見通しってわけだ。尊敬も人望も、人を見る目も確かにあるな」

「ぱちぱちと拍手し、タカシはカオルのことを見下ろしている。その目は尊敬ではなく、軽蔑の目だ。」

「おれは生徒会長様のそういうところが嫌いなんだがな」

「すまない。深く立ち入りすぎた」

カオルが立ち上がり、すつと頭を下げた。タカシはその謝罪をどう捉えたのかはわからないが、それ以上何も言わなかった。その代わり、タカシはまたため息を吐いた。

あぁっ、クソっ。どーしても嫌いになりきれねえっ！

それがカオルの魅力ともいうべきもののなのか。周りに翻弄されてばかりのタカシはうめいた。

「腹立つな、やっぱ」

「そうか」

タカシがひとにらみすると、カオルは頭を上げてすつと席に座りなおした。それから再び書類に目を通し始めると、変わらぬ声調でタカシに訊いた。

「……それで、本当にもう野球はしないのか？」

「いちいちおれに構うなよ。他に仕事や構わなきゃならねー生徒はいるだろ」

「そうか」

少しだけカオルの声調が変化したようだが、タカシにはよくわからなかったようだ。もし気づいていたとしても、タカシは何も言わないだろう。

「話は終わりか？」

「そうだな。終わりで良いだろう」

とんとんと書類の上下端を整え、カオルが話を締めた。くるつと回れ右をし、タカシは部屋の出口の方へ向かう。

「くれぐれも魔王のことを頼む。それと」

カオルはふつと息を漏らし、力強くはつきりと言った。

「科目資料室の整理を早めに終わらせること」

「……りょーかい」

聞こえるか聞こえないか程度の声でタカシは「うるせーよ」とも返事をして、生徒会室を出て行った。

【ご帰還】

【ご帰還】

「おー、帰ってきた帰ってきた」

「なんじゃ、生きとったか」

「ウノオオオオオオオッ！」

「またですか。ハアハア」

教室に戻ってみたら、魔王とミッル達は敬い隊を交えてウノをやっていた。ぎゅうぎゅうにひしめき合っている上、クラス中から確実に奇異の目で見られているだろう状態だ。

「タカシもやる？」

「やらねーよ」

タカシは敬い隊を押し分け、自らの席に座る。ミッルはにやにやとしながら、その肩をたたいた。

「まあまあ、そうスnerなつて。今度お前んち遊びに行つていい？」

「あ？……別に構わねーが」

「何か野菜を買ってけよ」

「私はミッルの為に弁当をつくっているぞおおおおおっ！」

【で、結局生徒会長様と何話してきたんだ？】

「大方、タカシと魔王の同棲疑惑のことでしょ」

ミッルの読みは当たっている。そもそもこの流れを作った原因だから、察していたのだろう。

「……魔王はおれの家にホームステイしてる留学生なんだと」

「それで先生達は納得したわけ？」

「させたそうだ。つつか、魔王、お前また隠してたろ」

「なんのことじゃ？」

「とぼけんじゃねーよ。書類だ書類。最初っからそついう風になるようなもんだったらしいじゃねーか」

「うむ。ワシの所業に手抜かりは無いぞ」

「なら、おれ達にも説明しとけ！」

「聞かれなかったからのう」

はて、と魔王が何のことかととぼけてみせる。流れるような言い争いに敬い隊が乱入してくると、場の収拾がつかない。

「聞いたっつーの。コノヤロウ、あとでおぼえとけよ」

「魔王様に向かつてなんて口を！ 許さんぞお」

「ハアハア……さあ魔王様、こやつに鉄槌を！」

「おお、タカシ、許可が下りたぞ。光栄に思え」

「誰が思うかつ」

「やつちゃってください、魔王様あ！」

「うるせーよ」

「魔王様ばんざーいっ！ ハアハア」

すべてが唐突な会話にタカシはあきれて次の言葉が出てこなかった。そこにミツルが続けて訊いてくる。

【動いた金は5900円也】

【動いた金は5900円也】

うまい具合にすり替えて逃げる敬い隊を見てミッルが苦笑した。取り残されたウノとアンナが話の輪に入れなくなっていることをミッルに嘆き、うまいこと抱きついていていた。

「にぎやかでいいよなー」

「そうだなああああああつ！」

「てめえらはなに部外者ヅラしてんだ」

いつの間にか魔王とタカシが取っ組み合いを始めており、敬い隊が2人を囲んで闘技場を作っていた。この騒ぎにクラスメイトが集まり、楽しそうに野次を飛ばしている。

「はい、はったはったあ。8：2でタカシは不利だけど八百屋で培ったパウワーはあなどれないよー」

「賭けてんじゃねえっ」

「隙だらけじゃぞ」

本当にお金を集めているミッルにタカシが怒鳴っているところに、魔王が抜き手で大きく開いていたわき腹を刺した。これは凶悪なまでに強烈な一撃だ。

「日頃の恨み、思い知ったか」

「どっちかっていうとおれだ……」

ろ、と言葉が続かないままタカシの身体が崩れる。しかし、そこは男の意地と根性があった。

「おらっ」

「うぐっ」

崩れ落ちる勢いのまま、タカシ渾身のげんこが魔王の頭にヒットする。相当効いたらしく、魔王は「ううっ」と涙目でうずくまってしまう。

「魔王様っ！ ご無事ですか」

「濡れタオルを、濡れタオルをつ」

わき腹を押さえぐつたりとしているタカシとうずくまって動かない魔王。闘技場だった敬い隊が慌てて廊下へ走り出す。

「これは……」

「引き分けだなああっ！」

賭けた方は納得いかないとぶうぶうと文句を言うが、両者共に戦闘不能なのだから仕方ない。

「ワ」

「ま、ま、ここは親の総取りでことごとつ」

魔王が何か言うのを無理矢理さえぎり、H A H A H A H A と笑うミツルが動いた金を懐に入れたところで、昼休み終了のチャイムが鳴り響いたのだった。

【逃げ場が無ければ跳べば良いじゃない】

【逃げ場が無ければ跳べば良いじゃない】

賭けたクラスメイトは不満のまま、午後の授業は終わり、放課後を迎える。ミツルが「一緒に帰るか？」とタカシと魔王を誘った。

「おれは用がある」

「ん……生徒会長様か？」

「罰則」

タカシは適当に手を振り、さっさと行ってしまった。ミツルは両手を腰に当て、それを見送った。

「で、魔王さんは？」

「ワシの傍を歩けることを光栄に思え。甲藤」

魔王の素直ではない返答にも慣れ、ミツルは「それじゃ、アンナを迎えに行くか」とうながした。

「ミツルウウウウウウツ！一緒に帰るぞおおおおおおお
おおっ！」

「魔王先輩！つ、陸上部どうつすかねー？」

教室にある前後の扉から飛び込むようにして、騒がしくアンナとハヤミが入ってきた。更に敬い隊がやって来たようで、廊下が一段と騒がしい。

「逃げるか」

「そうしようか」

魔王とミツルの思考が一致したが、肝心の出口がふさがれている。どう切り抜けてみようかとミツルが考えていると、魔王が襟をつかんだ。

「は？」

「道は開かれておるぞ。何を考える必要がある」

そう言っただけ魔王はミツルを引きずり、廊下とは反対側へ歩いていく。その先にあるのは窓しかない。

「……冗談でしょ」

「たまには良からう」

熱烈な出迎えがなだれ込んだ。そのなかでもアンナが誰よりも早く、必死に追いつがった。ハヤミよりも近かったこともあっただろう。何とかミツルの腰元にしがみつくことが出来た。

「ワシがいれば平気じゃ」

「あ……」

「うおおっ！」

魔王は2人を肩に担いで、窓から跳んだ。クラスにいる誰もが、その一挙一動を止めることが出来なかった。声ひとつあげられなかったのだ。

【跳べない魔王は存在しない】

【跳べない魔王は存在しない】

「え」

「おおっ！」

ミツルとアンナの身体は硬直している。それもそのはず、2年の教室があるここは3階だ。3人まとめて落ちて無事ですむような高さじゃない。

「案ずるな。地面はすぐそこ。それより、あまり喋ると舌を噛むぞ」

フッフフと笑い声が漏れる魔王の方がよほど喋っている。そして必死に支えようとしてか、クッションになろうとしてか、アンナがミツルの身体をしつかりとつかんでくる。ミツルも負けじとその役は任せられないと、アンナをかばう体勢を取るうと必死だ。

「熱いのう」

冷静な魔王が2人の様子や動きを感じ取り、そう言った。落ちたら無事ではすまないが、所詮は3階からの落下。走馬灯を見る暇すらなかった。

【見事着地】

その衝撃は驚くほど少なく、無いに等しかった。着地点には誰もいなかったのも幸いだった。

「うむ」

何のダメージも見られない魔王は肩に担いでいたミツルとアンナを放り捨てた。その2人は呆然と、なかなか立ち上がれないでいる。「どうした？ どこか痛めたか」

「はは、腰抜けた……」

「ま、魔王おおっ！ ちょっとやりすぎだぞおおっ！」

流石にミツルもアンナもショックが抜けきれないらしい。魔王が

やれやれと息をつき、教室を見上げてみるとハヤミや敬い隊をはじめとする多くの生徒達がこちらをのぞきこんでいる。

「……手でも振ってやるべきかのう」

「や、そういう問題じゃないって」

ミツルが何とか立ち上がると、アンナの手を引いて立たせてやった。

「何じゃ。逃げることに賛同したのはミツルじゃぞ」

「でもね、普通窓から飛び降りようとは思えないから。いや、魔王さんならやりかね……やっちゃったんだっけ」

誇らしげに胸を張る魔王にミツルは改めて畏怖を感じた。だが、そこに回復したアンナの手刀が魔王の額にヒットした。

「危ないことはしちゃ駄目なんだぞおおっ！」

「うう、魔王には危ないことなんて無いんじゃない！ 第一、おぬしすらも無事だから良かったじゃろ」

「そういう問題じゃなああいっ！」

ずびしつとアンナがもう一撃食らわせると、流石の魔王もおとなしくなった。これが勇者の力、というやつだろうか。

「あうー！ もうわかったわいっ。行くぞ」

憤慨している魔王がすたすたと歩き始めると、ミツルとアンナもその後に続いた。未だに続くこの衰えない視線と注目は、まるで人氣グループのコンサートステージのようだった。

「視線が痛いなあ」

「注目されるのも悪くないじゃろ」

今までにない注目度に魔王は上機嫌だ。これをきっかけにこういった行為に味を占めなければいいんだけど、とミツルが案じる。敬い隊の結成許可といい、奇行に近い派手なパフォーマンスが目立ってきたのが気になるところだ。

「魔王様を敬い隊だっけ？ あれはもう少し節度を持ってほしいね。授業ちゃんと受けてんのかな」

今日一日中、授業終了のチャイムからほぼ同時に魔王のいる教室

へ滑り込んでくるのには閉口した。似たようなアンナは隣のクラスだから良いが、敬い隊のなかには校舎ごと離れた工業科の1年生もいたようだ。

「ぬ。確かに。そのところはワシの恥にならぬよう、きっちりと躡ける必要があるか」

「そうしてくれる？」

「迷惑をかけさせちゃ駄目だぞおっ！」

まともに授業を受けていないだろうこの3人にその筋合いはあるのだろうか。甚だ疑問だった。

【今まで聞きそびれていたが】

「今まで聞きそびれていたが」

「タカシに父親はおるのか？」

3人並んで歩く通学路。魔王の何気ない一言が場の空気を凍らせ、そのままピシッピシッとひび割れた。

「……ああ、そうだよなあ」

「なんじゃ。その態度は」

ミツルの煮え切らない態度に魔王が鞆ではたき、喝を入れた。それをアンナに気づかれ、何か言われたが気にしなかった。

「いやいや。タカシとか話してない？」

「これでも居候の身じゃ。向こうから何も言わぬ時はこちらも立ち入らぬことにしている」

「それにしちや普段の態度はアレだなあ……」

魔王が何か文句あるのか、と目で訴えかけてきた。ミツルは目で何でもありません、と語った。

「とりあえず、ワシが滞在してから一度も会ったことがない。家のなかにもそれらしい写真も飾られていなかった」

単刀直入に、結論だけ魔王は求めた。歩いていればいつかタカシの家に行き着く。少なくともそれまでに、その話を聞けるかどうかはつきりさせたかったのだ。

【あのタカシの父親は死んだのか？】

「いや、死んでない。 と思うよ」

「なんじゃ。それは」

ミツルはなんて話したものと、自らの首筋を軽かいている。慎重に、言葉を選んでいるようだった。

「……タカシの父親は、放浪癖みたいなのがあるんだ」

「ほほう、それはそれは立派な父親じゃ」

魔王の返しに続く言葉が出てこない。当事者ではない赤の他人では何も否定出来ないのだ。ただ、知っていることを伝えるしかない。「正直俺が話すことじゃないとは思っし、本当はタカシの口から聞いてほしい」

少し表情を曇らせたミツルが、魔王相手に言い訳し続けた。アンナはぎゅっとミツルの制服をつかんだ。

「でも、あえて俺の口で語っておきたい。これからあの家に居続けるなら、第三者でしかない俺の口から予備知識として知っておいてほしい」

「……御託は聞いてやった。さつさと話せ」

腕を組み、ミツルの前に魔王が立ちふさがった。アンナと共にその歩みを止め、ミツルが空を見上げて語りだした。

「カッコつけるでない。たかが平民の思い出話じゃろ」

「そうなんだけどね……」

ミツルは懷から『空気』と書いたメモを魔王に見せると、堂々と「読めぬのう」と返された。一瞬でその意図を把握するとは、やはりあなどれない。

【タカシの父親】

【タカシの父親】

「麻島青果店を建てたのはタカシの父親か」

「らしいね。でも、実質守ってきたのは母親のミカコさんさ」

「あの人は同じ女性として憧れるぞおっ！」

「うむ。ミカコはたいしたやつじゃ。料理もうまい」

アンナが力説するのに魔王がうなづく。朝から晩まで殆ど女手ひとつで青果店で切り盛りし、タカシを養ってきた良妻賢母だ。りょうさいけんぼ

「さて、そのツレが話の問題なのじゃが」

「ああ、うん。ツレね。……魔王さんは変な言葉を使っよね」

「そうか？」

論点がずれて話が進まないの、ミツルは構わず続けることにした。

「タカシの父親はもう7年も前に家を出たんだ」

「離婚か」

「いやいや、そうじゃなくて。本当に家を出て、それから7年も戻ってこないんだ」

「行方不明か」

「……うん、まあ」

どんなに言葉を選んでも、魔王は簡潔な答えを口にする。

「もっとわかりやすく言わぬか。それとも、赤の他人をそう言うのは忍びないか？ ん？」

「いや……ん、んん」

ミツルは口ごもり、なんともいえない表情を見せる。恐らく、魔王のほぼ言う通りなのだろう。

「タカシの父親は家に書き置きひとつも残さないで姿を消したんだ。もう7年も前に」

「ほう」

「そうなのかあつ！」

魔王は微塵も動揺を見せないが、アンナはそれを隠しきれていない。どうやら知らなかったようだ。

「7年か。平民の寿命を考えるとそこそこ長いな」

「長期出張とか、会社員ならありえなくもないかな……」

個人商店の店長であり、一家の家主がほぼ無断でそれだけ長く家を空けるというのはそうそう無い話だろう。それに日本では7年も行方不明だと、死亡扱いされる。タカシの父親はリーチがかかっている状態だ。

「それもタカシから聞いたのか」

「ま、色々だね。あるの」

しいつと人差し指をミツルは自らの口元に当てる。学校に一人は必ずいる情報通。超・生徒会メンバーの時といい、ミツルには何かツテがあるようだった。

「前々からそういう風に姿を見せなくなることがあったらしい。夢遊病とかの精神病の類かと近所の人は心配したみたいだけど、ミカコさんはいつも笑ってたって」

聞けば「必ず帰ってくるからね」といつも返したそうだ。それが強がりで、自分自身に言い聞かせていたのかどうかはわからない。

「で、消えてから何日かしたらまた帰ってきてるんだって。本人は散歩とか言ってたらしいけど、近所の人達は浮気だとか何とか騒いだらしいよ」

TVの芸人より近くの他人の方がゴシップにしやすい、またその方が面白い。ありもしない噂が広まり、ミカコは肩身の狭い思いをしただろう。

「でも、タカシの父親は普段は真面目に青果店で働いていたし、そういうことをするような人じゃなかった。むしろ、その人柄で最初は店を繁盛させたんだって」

「ふむ。なのに、突然姿を消すのか」

「そー。んで、タカシの父親がどこに行って、何をしているのか。」

ミカコさんも誰も知らなかった。もちろん、タカシも」

父親の放浪癖はタカシが野菜の分別がつくようになった頃から始まったという。それが原因だったのか、それまで待っていたのかもわからない。とにかく、日中に姿を消して、真夜中に帰ってくることがたびたび起こるようになった。

「いなくなる時間とかも長くなって、小さかったタカシもおかしいつて感じ始めた。そして、とうとうタカシが小学5年生になった頃……それきりらしい」

突然いるはずの父親が帰ってこなくなった。店先でいつまで待っても、ずっと帰って来なくなった。同級生に馬鹿にされいじめられても、タカシは信じて待ち続けた。

「それで態度の悪い、らしからぬ不良になったんじゃな」

「や、それは早急過ぎっていうか短絡的かも」

魔王の言葉にミツルが苦笑する。あながち間違っではないかも知れないが、決定打ではないらしいとだけミツルは付け加えた。

【結局】

【結局】

「タカシの父親が一方的におかしいだけなんじゃな」

「まあ、そうなるのかな……」

「決めつけは良くないぞおっ！」

アンナが注意するが、今回は分が悪かった。

「おかしくないというなら、何故書き置きや伝言を残さぬ。幼いタカシのことを考えれば、何か思うところもあるじゃろう」

「うう……っ！」

「ま、それはそうなんだよな」

男子は父親の背を見て育つといたりするが、タカシはそれがひどく不安定なものだった。片親さえいない境遇の子供と比べれば、まだ良かった方なのかもしれない。それでも特に心身を形成する大事な時から、タカシは置いていかれるようになった。

「……少しだけ、タカシの気持ちかわかるやもしれぬ」

魔王はそれだけ一言、ぽつりと漏らした。ミツルとアンナは目をむいた。そういえば、魔王の祖父については聞いていたが両親については謎のままだった。

「ま、今となつてはどうでもいいことじゃがのう」

「どっちなんだあつ！」

思わずアンナがツツコむが、魔王は無視して再び歩き始めた。

「もうよい。機をうかがい、ミカコかタカシにまた聞いてみることにする」

そう言つて先へどんどん進む魔王をアンナの力で引き止めさせ、ミツルが呼びかけた。

「最後に言つとく」

アンナに押さえ込まれ、動けない魔王がちらりとミツルの方を見た。

「タカシとミカコさんはこれから何もしない。たぶん、ずっと待ち続ける」

毎年、全国からどれほどの行方不明者が出ていることか。警察に搜索願を出したところで、見つかるとも限らない。むしろ、捜さないう方が互いに幸せなことだってあるだろう。

「どんなに唐突に帰ってきてても、あの2人は何事も無かったように受け入れると思う」

それがあの家族だから、と繋げるミツルはむっとしている魔王へ更に笑いかける。

「大丈夫。タカシの父親が帰ってきてても、魔王さんの場所がなくなるなんてないよ」

魔王がふんと肩に力をいれると、つかまえていたアンナが振り飛ばされた。それでもめげずに立ち向かおうとするアンナを、ミツルは止めた。

「何を言うかと思えば、おかしい男じゃ」

「ミツルはおかしくないぞおおおおおっ！」

アンナをどうどうと抑えつつ、ミツルはふつと微笑んだ。魔王は会釈も振り向きもせず、そのまま麻島青果店に帰っていった。

【9月10日】

【9月10日】

登校してきたミッルは珍しく自分よりも早く来ているタカシと魔王に声をかけた。

「おはよう。魔王さん、タカシ」

「ああ、おはよう」

「おお、甲藤か」

魔王の傍でまだ来ていないクラスメイトの椅子を引き、ミッルがよいしょと座った。それとほぼ同時に鞆だけ置いてきたアンナが飛び込んできた。

「おはよおおっ！」

「朝から元気なやつだな」

「耳に響くのう……」

朝から勇者に分類される元気な声に圧され、魔王がうめいた。ミッルは飛び込んできたアンナを突っ張り、抱きつかれるのを阻止した。

「つれないぞおおおおおっ！ ミッルウウウウウウウウッ！」

「はいはい」

じたばたと抱きつこうとするアンナを片手で制し、魔王を感心させた。もう1年以上の付き合いになるアンナの扱いはプロ級だ。

「今日はやけに早いな」

「魔王に起こされた」

「うむ。魔王様を敬い隊と一緒にしつけてやろうと思うてな」

「いらねーんだよ」

【魔王様を敬い隊鉄則】

昨日よりも早い朝6時に魔王に学校へ連れて行かれ、敬い隊のし

つけというものに付き合わされた。タカシにはいい迷惑だが、敬い隊は何かに目覚めたようでやけに張り切っていた。

「もう一度ふくしょーうつ！」

「ひとおつ、魔王様を敬え。ひとおつ、魔王様に従え。ひとおつ、魔王様に迷惑をかけるな。ひとおつ、魔王様に甘いものを差し出せ。ひとおつ、魔王様の名を汚す真似は誰でも許さないっ！」

「おぬしら声が小さいぞ！」

「てか、いつまで続ける気だよ……」

機嫌の良い魔王のあとに続いてグラウンドを走りながら、何百回も鉄則を叫びハアハア言う敬い隊。強制的にタカシも走らされ、散々な目に遭った。

敬い隊を先導する魔王がそう叫んだ。その声に負けじと、敬い隊は力いっぱい復唱を繰り返す。そして、絶妙のタイミングで魔王は満足げにこう宣言するのだ。

「それらをすれば、ワシはおぬしらを守ろう。相応に応えようではないか」

「うおおーっ！」

魔王の言葉に敬い隊の疲労も理性も吹き飛び、歓声が巻き起こる。そうして一致団結する敬い隊と魔王の関係は、限りなく新興宗教に近いものがあつたとタカシは語る。

「んで、朝から生徒会長様にまとめて注意された」

朝から怪しげな集団及びその行動を見過ごすわけがなかった。首謀者の魔王といつの間にかその責任者にされたタカシが連行され、魔王様を敬い隊は実質的な活動は殆どしないまま解散となった。

【開いた口がふさがらないけどとりあえず労う】

【開いた口がふさがらないけどとりあえず労う】

「それはお疲れ様」

魔王がいやそうな表情を見せたので、相当不服かつしぼられたのだろう。朝から問題生徒の指導とはカオルもご苦労なことだ。

「なんで勇者共のファンクラブは良くて、ワシのは駄目なんじゃ」

「度が過ぎてんだよ。もうちつと考える」

現に生徒会長や副会長のファンクラブは一般的な盗撮混じった生写真の交換会やどこが好きかの談義などの活動のほか、忙しい本人達の仕事の補助やボランティア活動でその好意を示そうとする者が多い。それが一番本人たちと触れ合い、話せる機会があるからでもある。

「ま、過激派もいなくもないけどね」

「マジでいんのか？」

タカシが訊くものの、ミツルはただ「夜道は怖いよね」とつぶやいただけで流した。

「で、罰則はすんだのか？」

「……ああ。何とかな。今回の件で追加もされなかったのが幸いだな」

釈然としないタカシがひと息吐いた。

【昨日の下校時刻間際】

科目資料室整理をすませたタカシは鍵を返しがてら、生徒会室へ報告に行った。それから副会長と生徒会長が確認しに行き、タカシの整理具合をチェックと同時に各教科担当の先生に提出する報告書原案が出来上がった。

「麻島タカシ。ご苦労だった」

「お帰りになってよろしいですよ」

それにかかった時間はおよそ10分。あの2人の手際の良さは異常だ。

おれがやるより、生徒会長様達でやった方が手間かかんなくていいだろ。

カオルとセイが原案の推敲すいこうをしている間にタカシはひとつ息を吐いた。

「それでは罰則にならないだろう」

「……」

心を読まれたのか、表情で察したのか。どちらにせよ、タカシはこれ以上いることもないのでそのまま部屋を出るのだった。

【ま、そんなところか】

【ま、そんなところか】

「懲りたら授業サボるのやめたら？ 進路にも響くよ」

「うるせーよ」

「親友の忠告を無視する気か」

「つーか、授業中に寝てるやつに言われたかねーよ」

「H A H A H A H A H A」

笑ってごまかすミツルだが、タカシのように出席を取ってもらえるぶんサボるよりかはいいだろうと主張する。

「ふっ、どちらも違つというのは野暮じゃのう。学生とはいかに勉強を諦め、いかに遊ぶかじゃ」

「不正使つてまで学校来てるやつの台詞じゃねーな」

「何おっ！ 魔王の力は不正ではないぞ」

「じゃあ反則だ」

「反則とは何じゃ、反則とは！」

魔王が反論すると、タカシが負けじと言い返す。

【フェアプレイは望めない】

「あれが反則じゃなくて何だつてんだよ。強制的に人を押さえ込んだり、やりたい放題じゃねーか」

「そんなことはないっ！ 魔王の力でもどうしようも出来んことはあるっ」

「何だ」

「……死の克服や無から命を作る行為じゃ」

ミツルやタカシ達は一瞬何を聞いたのかと、その耳を疑った。しかし、魔王は真剣な表情そのものだ。

「それが出来ておれば、ワシはアルデピマジウムイダを救えたのじゃ……」

「それは普通に、無理だろ。誰にも出来ねーよ」

「ワシはっ、魔王じゃ！　ワシにその力があれば、ここへ来なくても良かったっ！」

思わずタカシが伸ばした手を振り払い、逆上する魔王の脳裏に鮮明にあの時の記憶が浮かんだ。

【フラッシュバック】

【フラッシュバック】

屍しかばねの山、膿うみの川、血反吐ちへどの海、救いを求めるうめき声は決まってひとつだった。

『 助けてください。賢魔王さま 』

本当に何も聞こえなくなるまで、ずっと魔王に囁ささやきかけた。すべての命が死に絶えるまで、ずっと着任したばかりのアルデピマジウムイダの支配者に囁きかけた。

「どうしようもならんのじゃっ！ もう、もう何も言わんでくれえ……っ」

平民の救いを求める声は、常に魔王の力でその耳へと届く。それでも魔王は何もしてやれず、ましてや救うことなど出来やしなかった。

【タカシは再び魔王の腕をつかみにかかる】

「ワシには出来ぬ。出来ぬのじゃっ！」

周りを無視して魔王は泣き叫びながら大きく首を横に振って、強く否定し続けた。

「おいっ！」

見境がつかなくなった魔王はタカシごとと思い切り吹き飛ばし、ミッルにぶつけた。物凄い勢いのまま、支えきれずにミッルは派手な音を立てて机や椅子に叩きつけられる。それでも魔王は収まらず、わめき、当たり散らしてから教室を飛び出した。

「ま、魔王おっ！」

アンナが叫び、呼び止めるが聞き入れなかった。続々と登校してきたクラスメイト達はその騒はかぎに啞然ぼかんとしている。

「……ッっー！」

「ミッルウウウウウウッ！ タカシイッ！」

タカシはごろりと転がり、ミツルの上からどいてから上体だけ起こす。ミツルは駆け寄ったアンナの手を引いてもらい、何とか立ち上がった。しかし、すぐに膝をついてしまった。

「派手にやられたな」

「ああ。どーも、触れちゃいけないことに触れちゃったみたいだ」

「2人とも大丈夫かああああっ！」

アンナが頭打ってないか、血は出てないかと尋ねてはおろしている。遠巻きのなかからカナが3人の傍に慌てて駆け寄って、何も無いところで派手にこけた。それでもめげずに、タカシとミツルに訊^きいてきた。

「な、何があつたの？ 大丈夫？」

「ていうか、そっちこそ大丈夫？」

「う、うん。慣れてるから」

それもどうかと、とミツルは苦笑する。カナがアンナと同様におろおろし、わけもわからず涙目になっている。その間によく気がつく男子生徒が水場まで走り、濡らしたハンカチをミツルに手渡した。

「ありがと。竹迫^{たかば}」

「や、気にしない気にしない」

竹迫は照れ臭そうに笑う。ミツルは濡れたハンカチをあざの出来ているタカシに渡して、自らは頭にこぶが出来ていないか確かめる。

「ん。んー……異常なし」

「バカ言ってんじゃねーよ。お前は保健室行つとけ」

タカシがアンナを促し、強がるミツルを強制連行させる。何しろ投げられたタカシと正面からぶつかり、後ろにあつた机や椅子とともに衝突したのだ。大事を取った方がいいに決まっている。

「おい、タカシ」

「うるせーよ」

「ミツルウウウウツ！ 動くなよおおおおおっ！」

アンナが思うように動けないミツルを担ぎ、最高速度で保健室へ直行する。それを見送ったタカシは竹迫に小さく礼を言つてハンカ

チを返した。

「……さて、と、あのバカはどこ行っただか」

カナが不安げに見つめるなか、タカシは少しふらつきながらアナとミツルのあとを追うように教室を出て行った。それとほぼ同時に、始業のチャイムが校内に鳴り響くのだった。

涙も声も枯れ果てた魔王が倒れ、つぶやいた。

「ワシを殺せ。ワシを殺せ、勇者よ」

生涯現役であり続ける魔王は自ら命を絶つことが出来ない。すべてを負う生に苦しみ、すべてを受け入れる生に疲れ、すぐに死ねる平民を疎み、魔王はそれを妬んで蔑ろにする。自発的に悪政を執ること、この次元に魔王を倒せる勇者を平民のなかから生みださせる。

じゃが、ワシは………おらぬ。平民がおらぬ。

ようやく理解出来たこの次元・アルデピマジウムイダのサイクル。同時にその寿命尽きるまで良き支配者であり続けることを貫いた祖父を、賢魔王の偉大さを改めて知った。

「……………ううっ」

知ったと同時に、魔王のなかで何かが変わり始めた。こぶしに力がこもり、歯を食いしばる。

「なんて、小っぱけなやつじやろうか」

くつくと魔王は自らのぶざまな格好に冷笑した。腹の底に、少しずつ活力が戻ってきた気がした。

「これで終わりか。ワシはこれで終わるタマで、器であったか」

この次元に平民も、眷族もいなくなった。だから、すべてを諦めるのか。もう何もかも廃人のように、すべてを諦める道しか本当に残されていないのか。

受け継いだ魔王の力はそんなものか。数々の眷族よりたった1人だけ選ばれる魔王とはその程度のものか。

魔王は自らの、今までのふがいなさに笑うしかなかった。平民と眷属、支配するべきところに魔王は存在する。存在する意味を持つ。

「ワシは魔王じゃ」

気力を振り絞り、魔王は立ち上がった。目の前の何も無い空間に両手をかざし、その想いと力をすべてぶちまけた。

「ワシは魔王である！」

空間がねじれ、ゆがみ、きしみ、はじける。

ならば、ワシは旅立とうぞ。

支配することの出来ない、存在意味のない次元にいつまでも留まることはない。魔王に支配されるべき平民がいる別の次元へと、その壁を自らの力で乗り越える。それはわずかのかけらもない、ありえない可能性を信じての行為に他ならなかった。

【何もかもぶちまけるような凄まじい波動が次元を揺らした】

そして、魔王はアルデピマジウムイダという次元から永劫に姿を消した。

【ふうっ】

【ふうっ】

「なんじゃ……タカシ、おぬしまたサボリか」

「そりゃねーだろ」

魔王の姿を散々歩き回って探し、タカシはようやく屋上で見つけ出した。じろつと魔王をにらみつけると、ふいつと顔をそらされる。

「すまなかった」

「おれよかミツルの方に言っとけ」

「うむ。そうさせてもらう」

沈黙。しかし、耐え切れないほど重い空気でもなかった。

「……聞かぬのか」

「正直どーでもいい」

屋上へ来ると眠くなんな、とタカシはくあつと大あくびをした。

もう既に条件反射の域に達しているのかもしれない。

「おぬしらしいのう」

「うるせーよ」

ミツルとぶつかった背中がじんじんと痛むのをタカシは感じた。

魔王の華奢な身体きやしゃのどこにあんな怪力が秘められているのか。

どれだけへこんでるかと思ったら、もう立ち直ってやがる。

先程の騒動は恐らく魔王のトラウマか何かだろうと、大方の察しがついている。触れてはいけない過去や黒歴史は誰にでも存在するものだ。

「……」

話して楽になるものでもないし、話して楽になりたいなら魔王の方から切り出してくる。話すきっかけは既に与えているから、あとはいらだけいい。

いてほしくねーんなら、言ってくんだろ。

魔王の性格上、そう言うことには躊躇ちゅうちよわないはずだ。タカシはこ

ろりと寝転んだ。

「ワシに気遣いは無用じゃ。すべて乗り越えてきた」

「そーかい」

「先程は不覚を取ってしまった。過去にとらわれるなぞ情けない限りじゃ」

「そーかよ」

「魔王として、もっと高くあらねばいかんというのにのう」

「そーだな」

寝転んでいるタカシは適当に相槌をうつているのだが、魔王はそれを気にしていない。元々タカシに同意を得ようとも思っていないのだらう。

「……とりあえず次の授業には戻るか」

「そうじゃのう」

それからタカシと魔王は次のチャイムが鳴り響くまで、何も喋らなかった。重く息苦しかったからではなく、ただ2人共これ以上話すことがなかった。

【チャイムが鳴り終わってから】

【チャイムが鳴り終わってから】

タカシと魔王は屋上を出て、教室より先に保健室へ向かった。もしかしたらミツルがいるかもしれない、と踏んでのことだった。

「ちゃんと謝れよ」

「無論じゃ」

1階まで降りて、保健室の前に立ち、タカシががらりと扉を開けた。医薬品の匂いがツンと鼻につく。

「げ」

「う」

なかにいた人物を見て、タカシと魔王の嫌そうな声が重なった。思わず扉を閉めようとしたが、なかから伸びた手がそれを押さえつけた。

「閉めるな。麻島タカシ」

「ぐっ……」

保健室にいたのはミツルでもアンナでもない、生徒会長だった。予想外かつ今一番会いたくない人物だった。

「いつ来たんだ」

「授業中だ。連絡を受けたのでな」

「ミ、ミツルはどこじゃ。まさか捕って食ったか」

「……甲藤ミツルは大事を取らせ、病院で精密検査を受けさせている」

カオルはじろりとタカシと魔王をにらみつけた。

「またやらかしてくれたようだな。今朝の一件に続いて、これが」

「弁明はしねーよ。出来るもんじゃねえ」

「そうか」

保健室へ行くことを勧めたが、無敵の生徒会長の見立てもあつて病院へ精密検査へ行つた。そこまでとは思ひもよらず、魔王も連れ

戻さず、ただのうのうと授業をサボっていた。そんなタカシが申し開きをせずに開き直ると、カオルは静かににらみ続けた。

「待て。タカシはどうでもいい。ワシをどうにかしろ」

魔王がすつとタカシの前に立ち、カオルと向かい合った。互いのその眼をのぞきこみ、腹の底まで見透かそうとしているようだった。

「もし、甲藤ミツルの検査結果に何か異常が見られたら……停学処分を受けてもおかしくはない」

「病院はどこじゃ」

「行つてどうする」

「助ける」

「……魔王の力か？」

「うむ」

そう力強くうなづく魔王に、カオルは冷徹に判断をくだした。

「駄目だ」

「ならば、おぬしを倒して力づくで聞き出そうぞ」

ミシミシと保健室の内部がきしむような音がし、同時にタカシには何かがのしかかってくるような重圧感がした。カオルと魔王の厳しいにらみ合いが、今までにない緊迫した空気の下で火花を散らしている。両者の散らす火花がいつ爆発してもおかしくない。

勘弁してくれっ。

巻き込まれた平民のタカシは息を詰まらせながら、そううめいた。こんな状況は初めてだ。

【誰か助けてくれ】

【誰か助けてくれ】

「おおーっ、リアル三角関係っ」

タカシの声にならない叫びが届いたのか、緊迫した保健室へ空気の読めないナエ女医がひよっこり顔を出した。ぷつんと糸が切れたかのように、保健室の空気が一変して元に戻る。

「やー、やー、やー、やっぱりいゝ何かあるとしか思えないわよお。生徒会長さん」

「生方ナエ先生。やめてください」

「どういう勘違いをしとるんじゃ」

きつぱりと言い捨てられるタカシも哀れだが、強烈な2人の矛先をいきなり向けられたナエ女医も同じぐらい哀れなものだった。

「大体、生徒である私を校内放送で呼ばないでください」

「や、ま、だつてえゝ」

ぶつぶつと何か愚痴るが、そもそも授業中に呼び出すナエ女医の神経が信じられなかった。頼られすぎるのも考えものだ。

「あ、そうそう、甲藤くんから連絡あつたよ。特に大事はなさそうだって」

「そうですか」

ナエ女医の知らせを聞き、安堵したカオルは同じようにほっとしている魔王とタカシの方を向いた。

「……停学処分は免れたかもしれないけれど、以後気をつけるように」

「ぬ」

「あつらあゝもう、ヤキモチしてるからってそんな当たり方はまズいんじゃない？」

「生方ナエ女医」

カオルの静かで圧倒的な眼力がナエ女医を抑え込み、黙らせた。

魔王はそれを聞いてにやにやしている。

「では、また」

床を滑るように水平移動し、カオルが保健室の扉に手をかけ、そのまま退室した。

「逃げたか」

ほうほうと魔王とナエ女医がうなずきあい、タカシの方をにやにやと見る。その気色悪い視線に悪寒を感じるのと同時に、逃げ出すのにも都合よくチャイムが鳴った。

「つて、おい！」

「しまった。カオルめ、謀りおつたなっ」

「あゝあ、先生は知りませんよう？」

ナエ女医は余裕ある悪戯っぽい笑みでタカシと魔王を見た。チャイムが校内に響き渡り、その余韻が保険室内に残った。

「言っておくけど、どうもしてあげないからねえ？」ズル休みの片棒なんて」

「期待してねえっ」

「期待しとらんわっ」

タカシも魔王も振り向きもせず、慌しく保健室を飛び出して行った。その後に残され、冷たく突き放され、「そう……」とナエ女医が小さくつぶやく。

「いいもん。……別に」

ひらりと白衣のすそをたなびかせ、扉に向けたその背には哀愁が漂っていた。

【昼休みの終わりに】

【昼休みの終わりに】

「よっ」

ミツルが包帯を全身に巻いたミイラ状態で病院から戻ってきた。タカシと魔王に手を振るその横でアンナが腕を絡め取って離さないでいる。

「……連絡も帰還も早すぎねえか？」

「あ、そっちなんだ。ツッコむの」

苦笑しながらミツルがよっこらしよと言いながら、自分の席に座った。タカシと魔王が自らの席から立ち上がり、その傍まで寄る。

「病院で検査って言ってもすぐそこ、歩いて15分ぐらいのところです。ま、学生としましては午後の授業をサボるわけにはいきませんし」

「う、すまぬ。甲藤」

魔王が素直に頭を下げると、ミツルは気にしない気にしないと手を振った。

「ミイラ姿なのはアンナの所為だから」

「心配だったんだあああああつ！」

「はいはい。でもこれはやりすぎだから」

すり傷や切り傷、打ち身があちこちに見られたので、アンナが良かれと思ってシップや包帯をありったけさせたのだという。確かに傍にミツルの近くにいただけで鼻の通りが良くなるどころか、目にしみる。

「流石に病院は大きだと思ったんだけど、生方先生は頼りないし、アンナは保健室じゃなくて病院行こうって騒ぎだすし」

「しまいにや生徒会長様を呼び出して？」

「そー。流石の生徒会長もあきれてたと思うよ」

タカシと魔王は屋上にいたのでその放送が聞こえなかった。もし

聞こえていたら、たとえミツルがいても保健室には行かなかったかもしれない。

「面倒なことになりそうだったんで、診察室入る前に電話しました」

にやりと不敵に笑うミツルの、その要領の良さにタカシは閉口した。検査を受ける前から嘘の報告を学校にすると、大した度胸だ^{タマ}。

「ま、一応検査も受けてきたから。頭痛もしないし、吐き気もない。だいじょぶだいじょぶ」

「なら、いーけどな」

ほれ、とタカシがぐいつと魔王の頭を押してミツルの前に無理やり立たせた。

「な、なんじゃ」

「もう一度謝つとけ」

「いーよー、別に」

ひらひらと手を振るミツルだが、タカシは頑として聞かない。アンナが非難するわけでもなくじーっと魔王を見つめているので、当の本人は非常に居心地が悪そうだった。

「……すまなかった」

「よし」

ふんと押さえつけていたタカシの手を振り払い、魔王は無然としている。一度謝ったのに二度したのがシャクに障ったか、もう一度謝るつもりだったのに他人に強要されてやったように見えたのが嫌なのか、その表情では判断出来なかった。

「タゝカゝシィ、あんまりいじめるなよ」

「うるせーよ。いじめられてんのはむしろおれだろーが」

「いや、あれはみんなタカシへの愛だから」

爽やかな笑顔で両手を広げるミツルだが、タカシの「うるせーよ」とアンナの「浮気はしないでくれえええええええっ!」との懇^{こん}願で一蹴された。愛と信用があれば何をやっても許されるというわけではないのは確かだ。

「モテる男はツライねえ」

「誰がだ」

つきあつてられるか、とタカシは自分の席に戻った。ミツルがおどけて引きとめようとすると、昼休み終了のチャイムが鳴った。

【毎度思っんじゃが】

【毎度思っんじゃが】

「あのチャイムとやらはタイミング良く鳴りすぎではないか？」

「これでも読めるんだろ」

些細な疑問を口にする魔王に、タカシはノートの切れ端を放り投げた。くしゃくしゃに丸められたそれを、魔王は少し浮かれた気持ちで広げて見た。

「……流行つとるのか？」

タカシから渡されたそれには乱雑な字で『空気』と書かれていた。

【9月10日の放課後に】

「やはり授業とは退屈なものじゃのう」

魔王がすべてを悟ったようにつぶやく。

まあ、言うだけあつてよく出来るんだよな。

学校成績の悪いタカシが羨うらやまんでいるわけではないが、魔王の知能は確かに相当のものだった。転入初日にタカシから借りた教科書を一目見ただけで丸暗記し、一言一句間違えることなく朗読出来る記憶力は賞賛に値した。日本語を3日ほどで完璧に使いこなせていたのだから、記憶力にとどまらない応用力も大したものだといえた。

「今日はさつさと帰ってミカコの手伝いでもするか」

「毎日やれよ、居候」

「勉強、部活、課外活動、華の学生生活は何かと忙しいのじゃ」

「嘘つけ」

「陸上部入る気になりましたかつ、魔王先輩」

ハヤミがこれ以上ないというタイミングで教室に飛び込んでくるが、それを無視してタカシと魔王はすれ違うように出ていった。その後を追うようにミツルとアンナも同じようにハヤミを無視して続くのだった。

「負けませんよお、魔王先輩！」

完全に見捨てられたハヤミがぐつと握りこぶしを固め、そう決意した。しかし、それさえ誰も聞いていないのだった。

【偶然なのか狙っているのか】

「偶然なのか狙っているのか】

「……そこを通るはカオルか」

あれからタカシの家に帰り、店番を任された魔王の前を横切ろうとしていたのは豊泉院生徒会長だった。魔王の声に気づき、カオルはゆっくりと振り向いた。

「あなたですか」

「おぬしは何をしておるんじゃ」

カオルはあの制服姿のまま、その腕に編みカゴをぶら下げている。魔王のエプロン姿を見て、微笑んだ。

「見ての通り、夕食の買い物です」

「意外じゃな。勇者くせに」

「それは関係無いですよ。母に頼まれたので」

「ふーむ。何ゆえ、制服姿のままなのじゃ？」

「放課後といえど、学生らしい振る舞いと装い（おそ）を忘れてはならない。勿論、帰宅してから出向いていますけれど」

そう丁寧に説明すると、カオルは魔王自身も制服のままなのに気がついた。訊けば「着替えるのが面倒じゃから、放課後はいつもこれじゃ」と単純明快な答えが返ってきた。

「魔王の力で滅多に汚れぬしのう」

「便利だね」

常に微弱ながら魔王の力を放出し、魔王を汚す埃（ホコリ）や泥などを寄せつけないそうだ。バリアーとはまた違うぞ、と得意げな魔王にカオルは応え、それから麻島青果店の看板を見上げた。

「そうか。ここは麻島タカシの家だったな」

「丁度いい。何か買うつていけ。しからは早々に去れ」

しっしつと追い払う手振りをする魔王が適当に店頭に並んでいる商品をカオルに勧めてみた。

「そうか」

ずっと店に一歩二歩と近づき、魔王と対峙したかと思うとおもむろに商品であるピーマンに手を伸ばした。

【百聞は一見に如かずという】

【百聞は一見に如かずという】

「でも、まずは商品の状態と値段をしつかり吟味してからだ」

「けちけちしとるのう。この生徒会長は。同級のよしみ、同校の生徒の家計を助ける気でどーんと買わんか」

「それを言ったらこの町に点在する斗葉高生の店すべてで買い物をしなくてはなくなるな」

カオルが苦笑しながら、野菜をひとつひとつ手にとって見ている。その眼差しは赤子を見る母親のように穏やかで優しいものだった。

「……どれを選んででも変わらんとと思うが」

「そうでもない。見た目は良くても中身が駄目ってこともある。その逆もしかりだ」

「わかったような口をききおるのう」

「だから、こうして自分の目で確かめているんだ。野菜も人も、何事も同じです」

「おやおや、ずいぶん厳しいお客様だね」

その魔王とカオルのやりとりが聞こえたのか、奥からミカコが笑いながら顔を見せた。タカシの母とわかったのか、カオルはぺこりと頭を下げた。

「斗葉高校の生徒会長を務めさせてもらっています、豊泉院カオルと言います」

「これはご丁寧に。こちらこそ、愚息がお世話になってます。とどうか、あんたの無敵な噂は商店街の連中から色々聞いてるよ」

「そうですか」

和やかな会話に魔王は眉をひそめ、心なしかイライラしていた。カオルとの今日一日の接触（こつと）を考えればわからなくもないことだ。薬品の臭いが充満する保健室とは違って、勇者のなかの勇者において多少は弱るものかと思っただが、そうでもないようだった。

「で、生徒会長様は何かお買い上げになるのかのう！」

「こら、魔王ちゃん、接客態度がなつてないよ」

「ああ、私はい向に構いません」

やんわりとカオルが制し、更に続けて言った。

「魔王と勇者は対立するものだそうですから」

口には笑みを浮かべながらもその眼差しは凛々しいカオルと対抗意識丸出しの魔王の言葉にミカコは肩をすくめ、やれやれとひと息を吐いた。

「それで、何をお買い上げになってくれるのかのう？」

「そうだな……このじゃがいもを2kg貰おうかな」

「あいよ。重くないかい」

ミカコがそう気遣うが、カオルは大丈夫ですと返す。魔王は何故かにたりと笑う。

「どうじゃ？ ついでに今この家におる男も貰っていかなか？」

【貰う貰わない以前に意味不明】

【貰う貰わない以前に意味不明】

魔王のおかしな提案にカオルは少しだけ眉をひそめた。

「それはどういう意味かな」

「おぬしが隠したところで、どうにもならんぞ」

「……何か勘違いしているのかもしれないけれど、別に麻島タカシと私はいち生徒といち生徒会長以上のものではないよ」

「そうかそうか」

魔王がしたりという顔をするのを、カオルが見つめる。その時、店の奥から何かが勢いよく飛び出してきた。

「ミツルは渡さんぞおおおおおっ！」

がしつと魔王の首を取り、後ろから羽交い絞めする。ミカコはびつくりしてそれを見ている。

「日向アンナ？」

カオルが「じゃあ、今いる男というのは……」と店の奥に目をやった。アンナが飛び出した障子戸の向こうで申し訳なさそうに顔をのぞかせているのはミツルだった。

「こらアンナ、店に迷惑だからちよつと黙つ」

店の奥でくつろいでいたミツルと店の外にいるカオルのぱちつと目が合い、申し訳なさそうにミツルが目をそらした。

「甲藤ミツル……」

魔王はしてやったりと言わんばかりに笑っている。

「ワシはタカシがなかにいるとは言っておらんのう」

「本当に何を考えているのかな？　これが引っかけに値するとも？」

確かにこの家の一人息子がタカシが不在で、アンナとミツルが遊びに来ていたということはわかるわけもない。この2人が遊びに来るという約束は昨日したばかりで、決行も今日の帰り道でと急なも

のだった。カオルは憮然^{ぶぜん}としていて、魔王は嬉しそくに小躍り^{こおと}する。

「ワ―シーは―ターカーシーが―な―か―に―い―る―とは―ひ―と―こ―とも―」

「……魔王、本当に何を考えて」

「騒^{さわ}がしいぞ。お前ら」

カオルの言葉をさえぎるように、配達から帰ったと一目見てわかるタカシが現れた。愛チャリを押して、店の前にそれをとめた。このタイミングに帰ってきたタカシを見て、ミカコは大笑いをする。

【もののあはれな】

【もののあはれな】

「おおー、帰ったか」

「いちいち騒ぐなっつの……って、なんだ、生徒会長様が来てたのか」

タカシが帰ってきたことに驚いたのか、カオルは表情も崩さないが何の反応も示さない。

「おれに説教か？ それとも魔王の様子を見にか？ 話があんなら、あがつてけよ」

「いや、買物だけだ。気遣いは無用。では、また学校で」

カオルは若干早口でそれだけ言うと、ミカコがじゃがいもを受け取ってさっさと行ってしまった。タカシは状況がつかめずにいるように、アンナに取りつかれている魔王に訊いたが、鼻歌を口ずさむようなで声でごまかされた。

「いやいや、別に……のう」

「んだよ」

はつきりしない。

「なあーに、やはり勇者も平民の内とわかったただけじゃ」

魔王が意地の悪い笑みを浮かべると、タカシは「なんだそりゃ」と言いながら愛チャリをしまいに裏へ行った。

「……と、おぬしはいい加減離れんか！」

「ミツルは渡さんぞおおおおおおおおおおおつ！」

しつこく涙目でしがみつくアンナに対し、魔王が身体を大きく震わせる。その勢いで振り払われてしまったアンナはきれいな放物線を描き、店の外に出て行くべきか迷っていたミツルに嬉しそうな表情で愛の……フライング・ボディアツタクを食らわしてしまったのだった。

【むしろタカシとぶつかった時より痛かったね】

「ていうか、技に発展する必要は無いよな」

「飛んだまま抱きつこうとしただけなんだあああああああ
っ！ ごめんなさいいいいいいっ！」

「包帯巻いたまま抱きとめられるわけないだろ」

えぐっえぐつと泣いてわびる加害者のアンナを、何故か被害者であるはずのミツルが慰めていた。人生とはそういうものじゃと魔王が大げさに語った。

「ていうか、俺達ってお邪魔かな」

「まあ、店が忙しい時は相手してやれねえな」

麻島青果店の奥、家の座敷に上がりこんでいるミツル達にタカシがそう告げる。週末の今日の入りはいつもより多いぐらいだった。

「なんか手伝おうか？」

「いや、ま、流石に……やらせるわけにはいかねーな」

「無料奉仕だよ」

「表出る」

タカシがケンカをふっかけるような声を出し、無造作にエプロンをつかんでミツルとアンナに投げつけた。

【エプロンデビュー】

【エプロンデビュー】

「意外と現金だよね、タカシって」

「うるせーよ」

ミツルは学生服のまま後ろ手でエプロンのヒモをきゅっと縛り、支度をする。アンナも同様に制服にエプロン姿となり、「なんかミツルの若奥様みたいだああああああつ！」と喜んでいる。

「でも、正直萌えないよね」

「もとがアレだからな」

男2人が正直にものを告白すると、ショックを受けたアンナがふくれた。そんな中でも、魔王は「ワシは何を着ても似合う」とさげに同性と勇者への対抗意識を見せていた。

「で、何すりゃいいの」

「お前はその愛想で接客つーか売り子、アンナは魔王と引かれなような客引き頼む」

魔王とアンナが引かれないうにとはなんじゃ、この魅力に惹かれて今まで客が云々と叫んでいる。魔王と勇者は天敵だというのに、しっかりと意気投合している。

「あれ、てことは会計とかも任せられちゃっていいのか？」

「ああ。任せた」

タカシがミツルに値引きの交渉やパーセンテージなどの細かい要領を簡単に説明し、扱いに文句を言うアンナと魔王を店の外へと突き出した。

「おぬしには魔王を見る目がないのじゃあつ」

「ミツルがやるなら私もやりたいいいいいいいつ！」

「お前らにしか出来ない仕事だから頼んだんだが……」

ふうとひとつため息を吐いたタカシがそつと魔王とアンナから離れると、その2人が顔を見合わせた。それからアンナはミツルの方

を見ると、につこりと微笑み返してくれた。

「わ、私はやるぞおおおおおつ！」

「ふむ。確かに粗暴なタカシでは客が逃げてしまうからのう。店のためにもここはワシが一肌脱いでやるう」

「な……っ、ま、負けるかああつ！」

魔王の言葉を勘違いしたアンナが恥ずかしそうに、おそろおそろ制服とエプロンを脱ぎだそうとするのを周りがとめた。確かにそれは別の意味での客引きにはなるかもしれないが、客がドン引きしてしまう。

【2人が客引きに離れた時に】

「2人が客引きに離れた時に】

「単純だなあ」

「聞こえるぞ」

「つと、こりや失礼」

うまく魔王とアンナをのせたことを小声で褒め、くすくすと笑うミツルをタカシは無視した。プライドの高い魔王が機嫌を損ねるおそれがあるので、これはミツルが迂闊だった。小声だったのと、客引きに熱中していたおかげで2人に聞こえることはまぬがれたようだ。

「でもさ、なんだかんだ言っても仲良くやってるよね」

「あ？」

「魔王さん。あの性格とかプライドとか何でも出来ちゃうとことが勇者への対抗意識とか、他人と孤立しがちなものをたくさん持つてる。なのに……どうしても周りは嫌いにならない」

それどころかこちらの次元で生きるための味方をつくり、少しずつその数を増やしている。魔王様効果かな、とミツルがおどけた。

「その周りにいんのが単に変人なだけだ」

「くだらん」と一蹴するタカシだが、「自分も含めて？」と反論してきたミツルの言葉に詰まった。

「うるせーよ。無駄口たたく暇があんなら電卓たたけ」

「あつは、了解」

その後が続けて「ま、ま、この程度なら暗算で充分だけどね」とそれが出来ないタカシをからかうように、軽口をたたいた。

「にーさん、これいくらにまかる？」

新顔のミツルにおばさんが値引き前提で声をかけてきた。魔王とアンナの呼び込みのおかげで客足が増え、また忙しくなってきた。

【うーむ】

【うーむ】

「忙しくなってきたのは良いが、ワシらは呼び込むだけか」

魔王が両手を腰に当て、タカシ達の方を振り返り見る。呼び込みとは違って、客との接触があって熱気がある。

「それだけでも大変だぞおおっ！」

アンナが「のどがかれそうだああっ！」と言うが、魔王にはそれが冗談の類にしか聞こえなかった。

「ミツルへの愛の叫びは別のなんだああああああっ！」

別腹に対抗してのものと言いたいのだろうが、そんなことは魔王にはどうでもいいことだった。「もう少し労働の喜びを感じたいのう」と、ぽつりともらした。

「……そうじゃ。対抗戦でもしようではないか」

「なにいいっ？」

「安いよ安いよおおっ！　だが、私のミツルへの愛は安くないぞおおおおおおっ！」という呼び込みをアンナは中断し、魔王の方を向いた。

「ルールは簡単。ワシとおぬしのどちらが多くの客を呼び込めるかじゃ」

魔王が口の端をつり上げ、ニィツと笑ってみせた。

「ワシはタカシの方へ客を流す。おぬしは甲藤へ回せ。より忙しく接客させた方が勝ち。どうじゃ」

いきなりの提案にアンナは戸惑っているが、魔王は一向に気にしていないようだ。

「ごく小規模とはいえ、これは魔王と勇者の戦いでもある。避けられんぞ」

「そ、そうなのかああっ」

ぐっと握りこぶしを固め、その気になってきたアンナだが今ひと

つ意気込みが足りないらしく、承諾しきっていない。どうしても巻き込みたい魔王は更なる挑発を試みた。

「それともアレか。ワシはタカシをどうとも思っておらぬが、実はおぬしも口だけでそれと同様なのか。おぬしは愛する男のために戦えぬと申すのか」

「違うぞおおっ！ 私はミツルの為なら何だってするぞおおおおおお！」

「決まりじゃな」

売り言葉に買い言葉という結果により、勝負が決まってしまった。

【アンナは思考のなかでも叫んでる】

【アンナは思考のなかでも叫んでる】

魔王は淡々と客を呼び込んでうまい具合にタカシの方へ流しているが、アンナは依然ファイティングポーズを取ったまましている。

どうしようおおおおっ！ ミ、ミッルに客を回したら忙しくなりすぎて死んじゃうんじゃないかなあああああっ！

頭を抱え、アンナが悩む。

きよ今日はお客さんが多いって言ってたなああっ！ でも私はミッルの為にも勝ちたいiiiiiiiiiiiっ！

身体をひねり、アンナは更に悩みぬいた。

だけどその為にミッルを過労死させるわけにはあああああああああっ、どうしたらいいんだあああああああっ！

そのアンナの思考が手に取るように読める魔王は呼び込みを続けながら、したりと笑った。

ふっ、愛するが故の葛藤。まだまだ青い。呼び込みの音が途切れておるぞ。

魔王は後ろに忍び寄る影が何なのか考えもせず、ぽつりとつぶやいた。

「勝ったな」

「客で遊んでんじゃねえよ」

ごつんとタカシのこぶしが魔王に落とされた。不意打ちに魔王は痛がるよりも先に驚いたようで、それに連鎖するように思考が飛んでいたアンナも我に返ったようだ。

「真面目にやれ」

「ぐう……のせられた返礼をしてやろうと思ったのに」

そう愚痴る魔王にミッルが「あ、しっかり聞こえてたよ。やつぱり」と苦笑した。

「んなことだろうと思った。閉店までしっかりやれ」

タカシは2人にはっぱをかけ、自らも持ち場に戻っていく。

「ったく、しょーもねえやつらだ」

それでも、のせられていることを知ったのに魔王は自らの持ち場は放棄しなかった。自らのプライドより責任感が勝ったのだ。それは当然のことだが、評価するべき事でもあった。

ああ、こういうところかな。

魔王が人を惹きつけるのは有言実行を体現しているからかもしれない。責任を持って、自らの立場から出来ることをきちんとやる。ひねくれた実行や返礼はあるが、言って何もしないことはない。誰もが一応納得出来る形まで無理やりにも持っていく。

「まあまあ。タカシも……あつ、奥さん、ついでにそれひと山持つてきませんか？ 安くしますよ。そっちは、ええいまとめて500円です」

タカシをなだめつつミツルはテキパキとハキハキしながら動き、客と談笑し楽しんでいるように見えた。お釣り計算も早く、元来の愛想と要領の良さも活かされていた。

「甲藤の方がタカシより向いているのではないか？」

「うるせーよ」

「流石だああああああああつ！ ミツルウウウウウツ！」
アンナがミツルに惚れ直し、客で出来た人だから、その頭上を飛んで抱きついた。今度はうまく受けとめてみせ、周りから歓声と拍手を貰っていた。

【マジで魔王さんがいるし】

【マジで魔王さんがいるし】

「ていうか甲藤こうたけと日向ひむかいまで働いてんの？」

だるそうに人だかりをかきわけてくるその聞き覚えのある声に、

魔王が「む」と声をかけた。

「おお、乾ぬきか」

「あ、名前おぼえてくれてんだ」

「もちろんじゃ」

タカシもミツルもクラスメイトである乾に気づいたものの、接客と作業で手が離せないようだ。その盛況っぷりに乾は棒付きキャンディをなめながら感心している。

「へー、繁盛してんじゃん」

「今日は珍しいぐらいじゃな」

「そーなの？」

「うむ。閑古鳥が例年巢を作っておる」

「勝手なこと言ってんじゃねーよ」

どげしつと魔王に蹴りツッコミをいれ、タカシが乾の前に立った。その行動にばかんとしている。

「いーの？」

「まーな」

「ならいいや」

「おいっ」

クラスメイトによる同性暴行と取れる行為をどうでもよさそうにクールに流す乾に魔王が思わずツッコんだ。

「んで、何か買うもんでも」

「ないね。ただほんとに一緒に住んでんのかなーって見に来ただけ」

魔王を無視して乾はちゅぽんと棒付きキャンディを口から出し、

指でくるくると回した。

「学校公認？」

「ホームステイだからな」

「へー」

自分から聞いてきた割に大した興味は無さそうだったが、深くツッコまれると困るのでそれにこしたことはなかった。

「麻島の家ってこんなところにあったのか。知らなかった」

「高校のクラスメイトだったらそんなもんだろ」

「まーね。つか、どうでもいいんだけどさ」

だるそうに乾は前髪をかきあげつつ、タカシから顔をそらした。

「甲藤達以外で誰か来た？」

「一応、生徒会長様が視察にな」

「ふーん。あ、そう。他の連中は来てないの」

乾はクラスメイト達が魔王が本当にタカシの家にいるのか、その店で働いているのか見に行こうと騒いでいたそうだ。今朝の騒動も含めた話題性に、思春期真っ盛りで野次馬根性に溢れた者達が放っておくわけがない。

「あー……ま、来たって別に構いやしねーけどな」

「そ」

タカシの反応に何の興味の色を示さず、乾は棒付きキャンディをくわえたまま立って店の看板や盛況ぶりを見ていた。タカシも話すことは話したといったところで、さっさと店の方に戻るとその入れ替わりでミツルが乾に挨拶してきた。

【千客万来】

【千客万来】

「どーも。いらっしやい」

ミツルが愛想良く会釈をするが、乾はにこりともせずにはに訊いてきた。

「あんたはバイト？」

「や、無料奉仕」

「金にがめついあんたがねー」

くつくつと小さく、ここではじめて笑う乾にミツルも爽やかな微笑みで返した。

「乾さんこそこつやつて来るの珍しくない？」

「ウザッ」

笑顔も消えて「たまたま通りかかっただけ」とドライに続くが、それでもキツイ言われようにミツルが肩をすくめた。背後から無言で、アンナが何か羨んだような目で乾とミツルを見てくることもあっただろう。

「んー、あれ？ 甲藤と乾さんじゃね？」

「……」

「うそー、冗談かと思ってたのにイ」

「麻島の家ここ？」

「なんか先客いるよー」

同じクラスでよくつるんでいる月本つきもとと蒔田まきたと椎橋よしはし、仲島なかしまと西桐さいとうのグループまで現れた。騒がしい団体客に乾が露骨に嫌そうな顔をするのを見て、ミツルは小さく吹き出した。

「帰るわ」

「そうだね」

言うよりも早くさっさと乾はそのグループの間をわざわざ強引に通って帰っていった。避けたり、別の道を行こうとしないのが実に

乾らしいとミツルが妙に感心していた。

「あれえ、乾さん帰っちゃった」

「なんでだろー」

「……」

「それよか麻島はどこだ？」

「甲藤も何してんだよ」

「んー、お手伝い」

口々に、騒がしく興味や質問が飛んでくるのにはミツルは閉口していた。しかし、それも魔王の姿を確認すればそちらへと流れていった。

「魔王さんがマジで働いてるー。呼び込み？」

「おお、おぬしらも来たのか」

「八百屋なんだ。へー」

「あれ、アンナちゃんもいる」

「制服にエプロン。だが萌えん！」

「……」

「こらああつ！ 失礼だぞおおつ！」

タカシはやれやれ、とひと息つくともミツルもあの場から離れて戻ってきた。しかし戻れば、それ以上に元気で騒がしいおばちゃん達との戦いが待っている。

「千客万来だねえ」

「ま、学校のやつらが来るのは初めてじゃねーけどな」

どっこいしょ、とタカシが段ボール箱を抱えて裏へ運んでいった。ミツルはおばちゃんからお金を受け取り、ゴーヤをビニル袋に入れて手渡した。

【家計は大丈夫なのか】

【家計は大丈夫なのか】

冷やかしの月本達が帰った頃、ちょうど閉店の時間となった。ミツルがエプロンを脱ぎ、汗をぬぐった。

「やー、忙しかったね」

「そうだな。助かった」

タカシがシャッターを下ろしながら、つぶやくように礼を言った。ミツルが意地悪く「聞こえない」と言つと、それきり黙ってしまった。アンナが両手をわきわきさせながら「ミツルウウウウウッ！ 疲れたかあああああつ、肩揉んであげるうううううううッ！」と言つのをミツルは華麗に避けた。

「ご苦労さん。悪かったね。いきなり手伝ってもらっちゃって」

「いえいえ、なかなか楽しかったです」

表の片づけを終えたミカコが笑顔でねぎらうとミツルも丁寧に返答した。その隙をつかれ、アンナがミツルの肩を揉むつもりで握り潰した。ぐかつ、と声にならない悲鳴をあげてミツルが転がった。

「うおおおおおおお！ ミイッウウルウウウウウウウウウウッ！」

「やかましいっ」

「まあ元気があつていいよ」

騒々しいと怒りを見せるタカシだが、大らかなミカコは笑ってますませた。魔王は軽くうなずき、「タカシは器が小さいのう」と小さくつぶやいた。それでタカシと魔王が口喧嘩するのをスルーして、ミカコがミツルに提案した。

「手伝つとくれた礼だ。ウチで夕飯食ってきな」

「いいんですか？」

「構わないよ。ウチは」

アンナは元気よく「家に電話してくるううッ！」と携帯片手に表

へ飛び出し、ミツルはミカコに深々と頭を下げ、再度礼を言った。
一応タカシと魔王にミカコは同意を求めるが、特に断る理由もなく満場一致と相成った。

「じゃ、すぐ出来るからね」

「すみません」

ミカコが台所へ向かうと、タカシは2階へ上がった。それを目で追った後、魔王は許可を貰ったアンナとミツルを居間へ誘導した。

「ところで、甲藤はアンナのように家に電話しなくていいのか？」

「ああ。必要ない」

「そうか」

魔王は深く追求せず、からりと居間の障子戸を開けた。それから魔王が自らとミカコが上座になるよう、ミツルとアンナの座布団を引いた。その意図が読め、ミツルは苦笑した。

「……おいおい、先に座布団引くなよ」

座布団だけ敷いてくつろいでいる魔王にタカシが注意した。その脇には今にあるのと同じ折りたたみ式のちゃぶ台があった。居間のものだけでは足りないかもしれないと思い、2階からもうひとつ持ってきたのだ。

「うむ。くるしゅうない」

「ミツル、ちょっとそこどいてくれ」

「あいよ」

その場からあくまで退く気のない魔王の態度にあきらめたようだ。客人に手伝ってもらい、ちゃぶ台を2つ居間に並べた。それからタカシはまた出て行くと、アンナがその後続いた。

「座つてろよ」

「手伝うぞおおっ！」

「……じゃ、ここで待つててくれ」

「了解したああっ！」

タカシに言われ、アンナは素直にちゃんと座った。それから、あれ、と首をかしげてミツルを見つめる。そのアホの子の所業を見

て、こらえきれずに笑っていた。

【今夜はゴーヤチャンプルでした】

【今夜はゴーヤチャンプルでした】

「ごちそうさまでしたああっ！」

アンナが満面の笑みを浮かべ、手を合わせてそう言った。その明るさと元気のよさには笑うしかなかった。

「魔王、また野菜残してんな」

「うっ、今食べるとこじや」

「食べきれなかったら甘いもの抜きだぞ」

「卑怯じゃ！」

ゴーヤに悪戦苦闘する魔王がタカシをにらむが、当然のごとく無視された。脇からアンナに励まされ、ちびちびと食べる姿に威厳というものがなかった。

「ごちそうさまでした。美味しかったです」

ミツルも手を合わせ、ミカコへ丁寧な礼をした。そういう応対を繰り返されると、逆に困ってしまうとミカコが苦笑した。

「……ッ、食べた！ 食べたぞ！」

ばちんと箸をちやぶ台に勢いよく押しつけ、涙目の魔王がそう言った。野菜のなかでも特に苦いゴーヤは野菜嫌いであっても敬遠されがちだが、栄養価は非常に高い。夏バテ気味な人にはぜひ、と青果店でも勧めているものだ。

「口直しにアイスッ！」

「冷凍庫」

力強く声を出す魔王にタカシがつとめて平静に返した。いつもならば駆け足で台所へ向かう魔王だが、ぐっところえていた。

「その前に風呂じゃ！ 苦いものの後、それに風呂上がりとくれば最高じゃろっ」

「好きにしろ」

同じ屋根の下、年頃の男女の前でも何の恥じらいも見せず、互い

にその相手にもしていない。ミツルは改めて、タカシと魔王の間に本当に何も無いことに驚いた。

「甲藤とアンナもついでに、一緒に入っていかなかぬか？」

確かに恥じらいのない魔王の突然の提案に驚くものの、動揺して何も答えられなくなるわけでもない。アンナが何か言う前に、ミツルは魔王に丁重に断ることを述べた。

「ま、そこまで厄介になるわけにもいかないからね」

「なんじゃ。泊まってけばいいじゃろ」

「勝手に話進めんな」

タカシが会話の流れをさえぎり、ツツコんだ。明日から週末で学校もないのだが、そこまでする準備はお互いに整っていなかった。

「今日のところはおいとまさせてもらいます」

「うむ。そうか」

ミツルが立ち上がれば、アンナも立ち上がる。当然のようにアンナは嬉しそうにミツルの腕を絡め取り、タカシや魔王達に見せつけた。

「お邪魔しました」

「今度は私の家に遊びに来いよおおっ！」

アンナのお誘いに魔王は一瞬だけうつ、とたじろいだ。勇者の住む家には上がりがたいのдарう。それでも「機会あればな」と何とか返した。

【高校生にもなつて】

【高校生にもなつて】

「送る必要は無えよな」

「私はミツルがいるから大丈夫だああああああっ！」

「うん。俺には勇者がついてるから」

ミツルという愛の前には無敵を誇り、魔王ですらしりぞけるとい
う、これ以上ないボディガードウーマンだ。

「そりゃそうだな」

「じゃ、また学校で」

「おやすみなさいいつ！」

アンナが元気よくブンブンと手を振り、ミツルと一緒に居間を出
て行った。そのかけられた挨拶の音量は寝起きには良さそうだが、
安眠を促すものではなかった。

「さて、タカシよ、一緒に風呂に」

「入らねえつつてんだろ。いい加減あきらめろ」

まだミツル達が家から出てないのに、堂々と誘いをかける魔王に
タカシはうなり声をあげた。ミカコはその2人を眺め、何事も無い
ようにお茶をすすった。

【ははっ】

「苦労してるなあ、タカシ」

アンナと揃って靴を履いている玄関先まで聞こえてくる言い争い
に、男女関係よりも大変そうな関係にミツルは苦笑した。

「喧嘩するほど仲がいいってことだなああっ！」

「そうだね」

目の前の扉を開け、外に出た。それでもまだ聞こえてくるのに、
再び苦笑した。

「私達は喧嘩しなくても最高に仲いいけどなああああああ

あぁっ！」

「はいはい」

腕を取るアンナをミツルは更にぐいっと自らの方へ引き寄せ、寄り添って歩いた。今夏の終わりを月夜の外気で、その肌で感じ取った。

【9月11日】

【9月11日】

「ヒマじゃ」

朝から店先に立つ魔王が簡潔にそう言った。休日でも制服にエプロンというスタイルは崩さない一方で、タカシはラフなTシャツとGパンに首にタオルをかけて作業している。

「じゃ、手伝え」

「イヤじゃ」

段ボール箱を抱えて運ぶタカシをあっさり見捨てて、再び「ヒマじゃ」と言った。

「ま、土曜の午前中だからな」

「昨日はやりがいがあったのう」

魔王がほうとため息をつくとき、タカシは眉をひそめた。毎日があなればこの上なく嬉しいことだが、今となってはあれだけ客が来るのは珍しいことなのだ。

「そうなのか」

「ああ、厳しいな」

しかし、魔王は呼び込みしかやっていない。実際に客をさばき、忙しく働いていたのはタカシとミツルにミカコ3人だ。それでも魔王側は充実感があつたと言うのだから、タカシ側の方からは何も言うことはなかった。

【日常会話をいちいち覚えてる方も凄いよな】

「それはそうと、どうじゃ、ワシの言う通りになったじゃろ」

「？」

その言葉は唐突で何のことかわからず、タカシは無視することにした。魔王は更にそれを無視して胸を張り、続けた。

「タカシの友人がこの店に来ることになるだろう、と」

「……いつ言ったよ。それ」

「ついこの前、ワシが転入する前日じゃ」

「日曜かよ」

確かに魔王はそんなことを、「では明日以降からは誰か来るであろう」と言っていた。その後は「魔王の勘」とぼやかしていたが、あれは魔王なりのサプライズ、そして月曜日への伏線だったのだ。

「タカシは学友が家に来るのは嬉しくないのか？」

「ま、多少はな」

「どっちじゃ」

魔王がいぶかしむのを適当に流し、タカシは店の裏手へ段ボール箱を運び入れに行った。

今更なんだってんだ。

クラスメイトが何人店に来ようと常連になつてくれようと、タカシの生活は変わらない。魔王がいる今も、根本から変わったとは思えなかった。

【閑古鳥はどう鳴くの】

【閑古鳥はどう鳴くの】

「しかし、ヒマじゃのう」

裏手でも聞こえてくる魔王のため息に、タカシは「うるせーよ」とツツコんだ。まだ昼前の時分、人通りもまばらで呼び込む客がない。

「これならまだ授業とやらに出ていた方が身の為じゃのう」

「勤勉なこつて」

タカシが皮肉るが、魔王に鼻で笑われ「妬みか？」と返されたのでこづいた。すぐに魔王の力でやり返してこない辺り、この頃になつて魔王も成長したのだろうか。

「魔王の力の節約じゃ」

「そうかい」

魔王の力は魔王が生きていくことに必要な支配している平民から得るエネルギーを消費する。無駄や多用は避けていくべきなのだろうが、今までの行動からではその説得力は皆無だった。

「しかし、こつも野菜が売れぬと困るのう」

「まーな」

珍しく平民側に立つての魔王の発言にタカシは同意した。資金を出して仕入れた野菜が売れなければ店や生活は貧窮する。^{ひんきゅう}麻島青果店は食い扶持が1人増えたのだから、それは切実な問題だった。

「何故売れぬ？ 検証したか。売れる努力はしとるのか」

「してるさ。出来る限り値段を安くしたり、野菜を使った惣菜レシピを教えて・その材料を勧めたりな」

地道な努力をつみ重ねて、地元との交流を深めていく。それがこの客商売の基本といえた。

「ま、今じゃ地元のおばちゃん達との付き合いで保つてるところが大きいな」

「そんなことでは売り上げ増加はのぞめんぞ」

「……そうだな」

タカシがひと息ついてから、何かぶつぶつとつぶやいている魔王に語りかけた。

【個人商店の行く末】

【個人商店の行く末】

「どうしてウチの野菜が売れないのか。わかるか？」

「ぬ」

今度はタカシから訊かれ、魔王はわずかに首をひねってみせた。

「売る努力はしておるのだろうか？」

「ああ」

「なら、その努力がなかなか実らぬ何かがある」

魔王が「違うか？」と返すと、タカシが少し寂しげに微笑んだ。

「正解。ウチがどれだけ野菜を安くしても、おまけしてもなかなかかわない相手がいる」

「もしや、それはコンビニとやらではないか？」

「半分正解」

「ではスーパーマーケットか」

「それもさっきの半分に入ってる」

タカシにそう言われてしまうと、魔王が答えに詰まってしまった。まだ教科書や参考書、辞書などを丸暗記すれば出来る勉強に入らないことに魔王は弱かった。それでもタカシに「わからぬ」と言いたくないらしく、押し黙って考えていた。

「信用だよ」

「ほう」

魔王が答えを見つけるよりも先にタカシがそれを言ってしまった。しかし正答としては予想外だったのか、魔王は少し驚いているような表情を見せた。

「この店は腐ったものでも売りつけたことがあるのか？」

「違いーよ。なんつーか、知名度つーか安全つーか」

どう言うものか頭で理解していても、うまく口に出せないらしかった。がしがしと頭をかいて、それでも思っていることが伝わるよ

うに言葉をつむいだ。

「全国チェーンしてたり企業がついてるコンビニやスーパー相手じゃ、まず資金力が違う。仕入れの量が変われば原価も変わる。値段競争じゃかなわねえ」

「そりやそうじゃ。沢山仕入れればそのぶん安く出来る。そこに利益を乗せたら差は格段じゃろうて」

資金力がある企業は他のライバル企業や店舗に勝つために赤字覚悟、採算を捨てての大安売りを打って出すこともある。戦略としては決して卑怯なものではなく、その前には個人商店など相手にならない。しかし、企業の脅威はそれだけではないのだ。

「もしウチが仮に……ほぼ毎日のようにスーパーマーケットと同じ値段に出来たとしても、だ。まず個人商店で買おうっていう人は殆どいない。理由は知らねーんだ」

それは知名度を上下させる広告や宣伝の為だ。タカシの家のような店ではせいぜい地元商店街と共同でのチラシ一枚だが、企業付きのスーパーはそれ以上の大々的なものを刷ってくる。全国展開しているコンビニはチラシも呼び込みが必要ないほどにその知名度と利用頻度が高かった。

「知らないだけじゃねえ。同じ値段なら、ウチみたいな小さい店で買うよりも大きな店で買った方が安全だって・間違いないって周りは思っちゃう」

値段でも知名度でも決定力に欠ける個人経営に厳しい世の中なのはその経営者自身がわかつている。だから、選択は諦めるか続けるかなのだ。それ以外に選択肢はない。諦めればゴーストタウンのような商店街が生まれ、打開策もなく続けられいずれ潰れるだろう。

「ま、今までののはなんとなくやってきたおれの意見だから、実のところはもうちつと見込みがあるかもしれないかもしれないかもねえ」
タカシはぐつと背伸びをしながら、遠くを見た。

【目を凝らしても行く末は見通せない】

【目を凝らしても行く末は見通せない】

「じゃが、タカシは続けていくんじやろう？」

「まあな」

魔王に応答しつつタカシは肩をぐるぐると回してから、自らの肩を揉みつつ首を鳴らした。立って話していただけたが、身体の重心がなっていないと案外疲れるものだ。

「今んとは何とか食ってけるが、その状況に甘んじちゃいけない」

「いつそ潰して駐車場かコンビニにすれば良からう。金があるならビルでも建ててテナントか家賃収入を狙え」

「シビアだな」

そういった話はよく聞くが、生活がそれで良くなるという保証は誰もしてくれない。企業と提携して、コンビニを営業してもその名前の使用料が取られるらしいと魔王に説明した。

「それ以前にタカシには金儲けの才能が無さそうじゃのう」

「うるせーよ」

痛いところをつかれ、タカシは苦しまぎれに強がってみせた。自覚はしていたらしく、またその方面の才能ならばミツルの方があつた。

「何故そうまでして続ける？ 父親に店を守ってくれ、とでも頼まれたか」

ふいにタカシの動きが止まり、魔王の方をゆっくりと顔を向けた。魔王の表情はいたって涼しげなものだった。

「……ミツルか」

「かもしれんのう」

魔王はわかりやすく庇護したが、タカシは別に何も言っただけだった。少しばかり拍子抜けしたのう、などと勝手なことを魔王が思

っている、タカシが何か言いかけた。

「聞こえんぞ」

「いや。……いい」

歯切れの悪さを魔王が気にし、とりあえず後ろからタカシを蹴り上げた。おうツと驚きと悲鳴の混じる声をあげると、店の奥からちよつと出てきたミカコと通行人の注目を浴びることとなった。

「くくっ」

この視線のなかではタカシはこぶしをふりあげることも出来ず、ただ歯ぎしりして魔王をにらむだけとなった。そんな硬直状態のなか、笑うミカコが魔王を昼食に呼んだ。土日の昼飯は空いている時間に交代で取るのだ。

ゆかいそうかいそうがきんかい
「愉快痛快爽快欣快」

けたけたと笑う魔王にタカシは「あとでおぼえてるよっ」と小さくうなり、叫ぶしかなかった。

【魔王の心配事】

【魔王の心配事】

「……この野菜が売れてくれぬと、ワシの食事や弁当が野菜だらけになってしまふからのう」

昼飯のサラダと梅おにぎりをつまみ、そうめんをすすりながら、魔王は1人居間でそうつぶやくのだった。

【暇人共め】

タカシが昼飯を食べ終えた頃、ミツルとアンナが2人揃って店の方に顔を出した。暇を持て余していた魔王は絶好の力モが来たことに喜んだ。

「おぬしらはデートか」

「そうだぞおおおおおつ！」

「タカシと魔王さんの様子を見にいくかって誘った」

アンナはこの上なく嬉しそうにミツルと腕を組み、はしゃぎまわっていた。

「おれ達はパンダじゃねーぞ」

「お、タカシ、経済用語なんて知ってたんだ」

ミツルが微笑むが、タカシには皮肉やいやみにしか聞こえない。そもそも客寄せパンダという言葉も、経済用語ではなかった。

「でもさ、客寄せにはなってみるたいだよ」

「何を」とタカシがミツルの指差す方を見ると、そこにはまた見覚えのある顔ぶれが歩いていった。

「あー、あれだあれだ」

「いたなあ」

同級生でサッカー部の丹下と迫だ。あかしだ さし丹下はタカシと魔王達、迫はアンナのクラスメイトでもあった。

「日曜日なのに暇な奴らだ」

「まー、そういうなって」

「とりあえず客だから」

丹下と迫は値段を見てはいちいち驚いたり、ガムやチョコいくつ分だの、高いの安いのを連発した。普段は自分達でこういった買い物をしたことがないのがすぐにわかった。

「にしても、驚いたよなあ」

「あー、マジで魔王さんと同棲してる」

休日でも制服にエプロン姿をしている魔王をじろじろと見てから、2人同時に「これって麻島の趣味か？」と聞いてきた。魔王はさも「そうじゃったのか」と驚きの表情を作って見せ、非難と興味の対象に仕立てあげられたタカシはげんなりとした。

「間違った噂は広まるのが早えーのに正しい話はどうしてこうも伝わりにくいんだ？」

「さあ」

ミツルは肩をすくめた。タカシは同棲についての弁明が面倒になつてきたようだが、今後の身の安全の為に欠かすことは出来ない。それと制服に関しては単に魔王の偏ったこだわりとしておいた。魔王から何か言いたいことがあったようだが、「どれだけ着ても魔王の力で絶対に汚れない」という説明が出来るわけもないのでタカシはそれを黙殺した。

【伝家つってもまだ麻島青果店は2代目までで浅い】

【伝家つってもまだ麻島青果店は2代目までで浅い】

「でもさー、結局は同棲じゃん。ホームステイとか言っても」

「親の監視があるじゃん」

「親公認とか。実は許嫁とか」

「あー、あったあつた」

「ワシとタカシが？　ありえるか、愚民め」

「呼び捨てだし」

「外国にいたからファーストネームで呼ぶくせがあるんだよ」

魔王の地や性格が誤解を生み、やはり一筋縄では納得してくれない。納得しない内は丹下と迫はどんどん勝手な想像を続け、話を膨らませていく。仕方なしにタカシは使いたくも言いたくもなかったとっておき、すべてを収める宝刀を抜くことにした。

「……。ウチの生徒会長様公認つってもか」

たった一言で、丹下も迫も2人の世界と会話をやめて「そうなのか」と納得したようだ。

「あの生徒会長が言うならなー。そうなんだろ」

「麻島をかばっても仕方ねーしな」

丹下や迫は納得はしてくれたが、逆にタカシや魔王は納得出来なかった。特に魔王は不満げな表情を隠さずあらわにしていた。

「これが信頼の差だよ」

と、ミツルがタカシの耳元でささやいた。この2人を納得させられたのは、紛れもなくあの無敵の生徒会長に寄せられる絶対的な信頼だ。

「もし裏切ったら、過激派に何をされるか」

「……いや、だからマジでいんのか？」

ささやくミツルにタカシは尋ねるが、やはりH A H A H A H A H Aと笑ってごまかされた。副会長といい、ミツルといい、これでは

生徒会長の信頼と人望の裏には暗躍があると勘繰りたくなる。しかし、ミツルはそれを読んだかのように言った。

「大丈夫。彼女は本物だから」

タカシは肩をすくめ、気にすることをやめた。話や事情を知らない者がどれだけ語っても、その真実を知る者にはかなわない。ミツルや副会長が知る者かはわからないが、タカシにとってはどうでもいいことだった。

【店側としてはおまけや値引きはしたくないから強要は無し】

【店側としてはおまけや値引きはしたくないから強要は無し】

「麻島あ、このキユウリとナスさ両方買うから安くしてくんね？」

迫が手招きし、ひとやまいくらのそれらを指差していた。タカシが近づき、手に取り、損得勘定計算を頭のなかでした。どんぶり勘定だけでやっていけるはずもない。

「あー？ …… 550円かな」

「ケチくせー。そんだけしかまけらんねーの？」

「こつちも商売だからな」

「ちえー」

眉をひそめながらも迫が千円札を財布から1枚抜くと、その横におつりを乗せた手のひらを突き出す魔王がいたのでそれと交換した。タカシは手早くビニル袋にお買い上げのそれらを入れ、それからさつと商品の値踏みし検討した上でオクラをおまけした。

「サンキュー。お前ってツンデレ？」

「変な言葉使ってんじゃねーよ」

萌えだの何だのと一緒にされて心外だ、という顔を見せるタカシにミツルと魔王はにやにやと気持ちの悪い笑みを向けていた。それに気づき、タカシがひとにらみするとさつと逃げた。

「じゃ、俺らはこれで」

「またなんか買いに来るわ」

「どーもーありゃつとしたア」

タカシや魔王達に見送られ、丹下と迫がビニル袋のなかを見ながらふらふらと店から離れていった。それに続くようにアンナがミツルを引っ張り、急かし始めた。そろそろデートの続きと行きたいのだ。

「じゃ、また学校で」

「おう。生きて帰れよ」

冗談のつもりでタカシがそう励ますと、ふっとミツルが微笑んで見せた。

「たぶん大丈夫だから」

それだけタカシと魔王に告げて、ミツルはアンナに引きずられていった。

多分なのか。

生存が断定出来ないデートの想像がつかず、タカシと魔王はなまぬるい視線でミツルとアンナを見送ることにした。それ以外に何もしようとはせず、また出来なかった。

【9月12日】

【9月12日】

「そろそろお昼にしたいけど」

「うむ。そうじゃのう」

魔王とミカコが互いに首をかしげ、ねーっとうなずきあった。そこにすかさずタカシが怒号をあげた。

「っつーか、仕事しろっ」

日曜日の昼過ぎという時間帯で、麻島青果店は大勢の客でにぎわっていた。この時分では珍しく、タカシとミカコではその客達をさばききれなかったので呼び込みの魔王にも勘定に回ってもらうほどだ。

「これもワシの呼び込みのおかげかのう」

「そうだね。きつと。魔王ちゃんのおかげで福も呼び込んでくれたのさ」

ミカコはカラカラと笑って褒めると、魔王は照れもせず得意げにふふんと笑った。

「タカシもそう思うじゃろ？」

「調子に乗んな」

つれなくそう言いながら、タカシは客につり銭と商品を手渡した。ま、それは大きいだろうが。

魔王の存在が色々な噂となってこの繁盛につながったのだろことは、タカシでも見ればわかった。客の半分が魔王の前に行き、買い物しようとしているからだ。しかし、野菜の名前と値段を把握しようとしてない魔王では対処しきれなかった。

「いい加減、商品を覚えろよな。頭いいんだろ」

「嫌じゃ。そりゃタカシより数百段上の頭脳は持つとるが、野菜はおぼえる気にならんっ」

「そーかい。じゃ、今晚は肉抜き野菜炒めでじっくりお勉強だ」

その反撃に「イーヤーじゃー」と魔王が絶叫するが、タカシは聞く耳を持たなかった。客がなまぬるくも微笑ましい視線と慰めの言葉をかけ、魔王の背筋にぞっと悪寒のようなものがはしった。

「……むう」

「どうした？」

「いや……いい。しかし、腹が減ったのう」

「ったく、少し我慢しろ」

ぶうぶうと文句を言う魔王にタカシはため息を吐き、ミカコと目配せした。時計を見れば１時半過ぎだが、この客はしばらく引きそうになかった。

「……しゃーねーな。冷蔵庫から適当になんか食ってこい」

「そうさせてもらう」

悠々と魔王が店の奥に引つ込むと、客側から何か不満のような声が聞こえてきた。タカシは頭をかき、首をひねった。

「どうなってんだ、こりゃ」

「モテモテだねえ、魔王ちゃんも」

【不法侵入】

「不法侵入」

「ないっ」

冷蔵庫を開けての開口一番、魔王が口を尖らせた。

「何もないではないか。タカシのやつめ」

もう一度冷蔵庫のなかを覗き込むが、そこには食べられるものが何もなかった。昨日の残りものも今朝の朝食の残りもなく、冷凍庫のすみで霜がついていた食パンだけだった。

「これだけとは……魔王たるものが情けないぞ」

がつくりとうなだれ、冷蔵庫からバターといちごミルクを取り出した。魔王はバターを電子レンジで柔らかく溶かし、いちごミルクに砂糖を入れた。

「食べないよりかはマシじゃな」

自らの手で料理することなど考えもせず、深くため息を吐いて魔王は居間へ向かった。本来ならば魔王に食事是要らないのだが、支配平民からのエネルギー徴収が思うように出来ない現状ではそうも言ってられなかった。

おかしいのう。

今朝方、魔王が朝食の後片付けを少し手伝った時には冷蔵庫のなかには様々な残り物やおかずが入っていたはずだ。しかし、昼過ぎた今では何もなくなっていた。これは魔王以外の誰かが食べてしまったのに違いなかった。

「タカシのやつめ。あとで思い知らせてやらねば」

お盆にのせた食パンといちごミルクをにらみつつ、魔王はてくてくと居間まで歩いて、足で障子戸をがらりと開けた。

「……」

表情を崩さず魔王は障子戸を閉め、お盆を床に置いてから腕を組んだ。それから首をひねって、考え込んだ。

「？」

見たことのない男が居間のちゃぶ台で飯を食べていた。しかも、その上にのっていたのは魔王の求めていた冷蔵庫のおかずだったように思える。

「ぬう、ワシの昼飯を横取るとはいい度胸じゃ」

「つーか、お前は何やってんだ」

ぬつと背後に現れたのは、ご立腹のタカシだ。魔王が帰ってこなかったのも、わざわざ呼び戻しに来たらしかった。

【売れない八百屋の闖入者】

【売れない八百屋の闖入者】

「おお、ちょうどいい。タカシ、なかにいる者をつまみ出せ」

「ああ？」

いきなりわけのわからないことを言われ、タカシが何を言っただと置きも兼ねて魔王の頭をぐりぐりした。こめかみを押さえられ、じたばたと魔王が痛そうにもがいた。

「大体いつまで飯食ってんだ、お前はッ」

「まだ食うておらぬ、食うておらぬう！」

まだ10分も経っていない、いくらなんでも早すぎるどころえながら魔王が抗議した。しかし、タカシは店の込み具合を考慮に入れるとしごくまともな反論でそれを抑え込んだ。

「くう……！ 盗人があるんじゃ、ワシの昼食を盗ったやつがあるんじゃあ」

「んだよ、そりゃ」

「嘘だと思うなら居間をしてみるがいいわッ」

「……。そうさせてもらっ」

タカシは魔王のことを信用していないのではない。魔王がこまで言うのだから、嘘ではないことも察した。しかし、居間の静けさから物盗りである可能性も低いともならんでいた。

開けりゃわかるか。

ため息を吐きながら障子戸をがらりと開け、居間のなかを見た。

「……」

居間のなかにいた男は変わらず、魔王が一度障子戸を開けたにもかかわらず食事を続けていた。そして、その男の顔を見てタカシは絶句した。

「知り合いか？」

魔王の問いにも答えず、タカシは居間に踏み込み、その男の胸ぐ

らをいきなりつかんだ。それから男の顔を凝視した。魔王は後ろで
いいぞ、やれえつとはしゃいでいた。

「オヤジ……ッ？」

【感動とは程遠い再会ってレベルじゃねーぞ】

【感動とは程遠い再会ってレベルじゃねーぞ】

胸ぐらをつかまれていても、箸を手放さないその男がタカシの父親だというのに今度は魔王が絶句した。

「ただいま。……大きくなったな、タカシ」

タカシも魔王も未だに信じられない、という表情をしていた。

「ミカコの味つけは変わらん。うまい」

「どこ行つてたんだ」

「店の方も繁盛してるようで何よりだ」

「今までどこに行つてたんだっ」

息子の怒号にもタカシの父親は平然としていた。それは冷たくも感じられる。

「用があつた。それだけだ」

「な……」

「ごちそうさん。店の方にミカコがいるんだろ？　ちょっと行つてくる」

魔王の存在もタカシの言葉もすべて無視して、タカシの父親は居間から出て行ってしまった。残された2人は無言でそれを見送るしかなく、姿が見えなくなったところで魔王がぼつりとつぶやいた。

「人として何か間違つてないか？」

「……そうだな」

人じゃねえ魔王やっが言うな、いつものタカシならツッコんでくるかと思つたが、それはなかった。ただタカシは頭をがしがしとかいて、ため息を吐いていた。

【タカシらしくない】

「どうした？」

「いや……」

「父親が帰ってきて嬉しいか？」

「いや……」

煮え切らないタカシの反応に魔王が少しイラついているようだ。先程もつかみかかったかと思えば、殴りもせずそのまま終わった。

「正直、わかんねーな。どうすりゃいいのか」

数年間も父親に会えなかった子供にしては感動も反応も淡泊だが、それは大人にはなりきれないが分別はついてしまっ高校生だからかもしれないかった。

「わからん？　そういう時は一発殴っておけば間違いないぞ？　子を放つたらかしにする親などろくでもないからのう」

魔王がシュツシュツとジャブをしながら言った。そのシンプルで力強くわかりやすい言葉に、ククツとタカシが小さく笑った。

「とりあえずおれ達も店の方に戻んぞ」

「いや待て。ワシはまだ飯を食うておらぬ」

「あきらめろ」

「ワシの辞書に思い通りにならぬという言葉はないのじゃ」

【いつもの調子で】

【いつもの調子で】

だだをこねる魔王に手を焼き、蹴りを入れられながらもタカシは店へと引きずっていった。それに敬意でも表したか次第に魔王も暴れることをやめた。それでも、身体のアチコチにあざが出来ていた。

「……コノヤロウ、手加減しろよな」

「充分しとるわ。ワシが本気を出したら、タカシの身体なぞ微塵に引きちぎれるぞ」

「そうかい」

タカシは痛みとあきれでまゆをひそめ、魔王を引きずった。そういえば似たような会話を以前にもしたかもしれない、とタカシはふと思った。

そんだけやられてるってことかよ。

魔王の手の早さもそうだが、いいようにやられている自身にタカシはため息を吐いた。見た目は小学生なのに、力は大人以上だから困りものだ。

【まだ聞いてなかった】

「そういえばタカシの父親の名は何じゃ？」

「ああ。キミヤ。麻島キミヤ」

「そうか。キミヤ。キミヤというのか」

感慨深そうに魔王がそう繰り返し、つぶやいた。

「？」

「タカシには関係ない」

ぼそりと「今はな」とタカシには聞こえないよう、魔王は小さくつぶやいた。そして含み笑いをする魔王だが、体勢的に間抜けなままタカシに引きずられていくのだった。

【店先に】

麻島キミヤの姿はなく、代わりに上機嫌なミカコが張り切っていた。

「ああ、夕食前には帰るって」

「おいおい」

「首に縄でもくくりつけとかと、またどこかへ消えるぞ」

物騒なことを言うものだが、実際そうでもしておかないとまずいような気がす魔王は真面目な顔でそう言うが、ミカコはそれでも笑っていた。

「大丈夫さね。むしろ、何も言わない時の方が怖くて仕方ないよ」

「もつとガツンと言つてやれ。ミカコは有無を言わさず、その権利がある」

「権利かい」

魔王の言葉にミカコは苦笑した。

「私はあの人が生きて、帰ってきてくれるだけでいいさねえ。それ以上は望まないよ」

「慎ましすぎやせぬか？ 身勝手を許せば男は駄目になるぞ」

知ったような口を偉そうにきく魔王にミカコは困ったように、照れを隠すように眉をひそめた。

「1組きりの夫婦じゃないか。他に誰があの人を信じて、待ってやるっていうのさ」

ミカコはそうはかなげに微笑んでみせると、つくづくキミヤは罪作りの男だと魔王はなげいた。

「フン。やつが浮気などしていたら神の罰が当たらなくても魔王の裁きをくらわせてやるわ」

「物騒だねえ」

からからと笑うミカコの様子から魔王の言うことを本気にしていないのがわかった。

【珍しくてめでたい時は】

【珍しくてめでたい時は】

「ま、今日はごちそうだね。たっぷり作るよ」

嬉しそうに腕をぐるぐると回し、ミカコは奮起した。

「そこでタカシ、魔王ちゃんは買い物行ってきとくれよ」

「む。店の方はいいのか？」

「まあ、大丈夫だよ。だいぶひけてきたしね」

先程まで押し寄せていた客の大波が干潮のようにひき、これから夕方のピークまでは忙しくはならないと踏んだようだった。

「なら、おれが代わりに店番すつから、魔王と行ってくりゃいーだろ」

「まだあんた1人に店は任せられないよ」

厳しい一言だった。今までもミカコはタカシ1人に店番を頼んだことはなかった。

「そうそう魔王ちゃん、お祝いだからケーキ買ってきてく」

「ケーキとなっ」

ミカコが言い終わらない内から魔王はタカシの襟首をつかみ、店を飛び出していった。

【とつとと買い物終わらせてケーキ屋に向かうぞ】

「さつきは失敗したのう。ついはいやぎすぎた」

「ったく、何を買うのかぐらい聞けよ」

タカシはぶつぶつと言いながら、自らの首元をさすった。そこには魔王が襟首をつかんだ時に首が絞まり、出来たあざのようなあとが残っていた。

「しかし、つくづくおぬしは頑丈じゃのう」

「うるせーよ」

襟首をつかまれ、魔王に飛び出された時にはタカシの足は地面に

ついでになかった。意識の方も一瞬か数秒はとんでいたかもしれない。

「ところで買い物はもう終わりじゃな？」

「ああ、とりあえずな」

「ではケーキ屋に行くぞ」

「おい、コラ待てっ」

【ケーキショップ猪熊】

【ケーキショップ猪熊^{いのくま}】

「おおよそケーキ屋らしくない名前じゃのう。せめてI N O K U
M Aと横文字にせんか」

魔王は看板を見ながらそうつぶやいた。しかし、周囲にはぱつち
りと聞こえていた。

「ああ、ここは」

タカシが何か言う前に魔王はさつさと自動ドアをくぐった。どう
やら店に充滿し、あふれ出る甘い香りにはかなわなかったようだ。

「いらつしやい」

洋風でかわいらしい飾り付け、色とりどりのケーキのショーケー
スの後ろに立っていたのはこの空間に最も似つかわしくない毛深い
青年だった。

「えーと、麻島だっけ？」

「なんじゃタカシ、この熊と知り合いか」

魔王は青年に対する率直な外見の感想を言うと、タカシはとりあ
えず殴っておいた。青年はその評価に慣れているのか怒らず、苦笑
している。

「一応、同級生なんだけど。クラス離れてるけどサ」

「見えんのう」

「よく言われる。名は体をあらわすって本当だな、ケーキより毛
皮売ってる方が似合ってるってサ」

「フルネームは？」

「猪熊^{いのくま}ゲンタ」

「ふむ。納得じゃ」

「だろー」

困り顔で微笑む青年は、その外見とのギャップを自虐ではなく悲
壮感を感じさせない笑い話にしていた。それかゲンタはタカシの方

を見る。

「それよりウチのケーキ買いに来てくれたのか？」

「まーな」

「ふーん、麻島はあんまし甘いもの好きそうじゃないけど」

「硬派っぽいし」とゲンタも見た目で判断したが、間違っていない。

「おれはな」

タカシが視線を落とし、ショーケースの下方を見る。その先にはべつたりと額をはりつけ、鬼気迫りくる表情でケーキを見ている魔王がいた。

【高校生には見えない】

【高校生には見えない】

「……そうみたいだね。で、何買う？」

「あー、つとシュークリームひとつ。それとあんま甘くねーの」
こういう洋菓子を頼む時、ミカコはいつもシュークリームを選んだ。なにか思い出深いものがあるのか、それとも安くすませようとしているのかはわからないのだが、タカシはそれをおぼえていた。甘くないケーキは間違いなくタカシ用だろう。

「ウチのケーキはどれもすっかり甘いよ。こーいうシフォンケーキも生クリームをたっぷり塗ってるし」

「そうか」

生クリームと聞いて、タカシは少し胸焼けを感じた。魔王の甘味暴食っぷりを生々しく思い出してしまったからだろう。

「ま、無難にチーズケーキがいいかも」

「それにしてくれ。それと、そうだな。そのクラシックショコラつーのもひとつ」

「毎度っ」

好みがわからないキミヤにタカシは適当にチョコ系のケーキを選んだ。

「オイ、魔王決めたか？」

残るは魔王のケーキだけだが、当の本人はまだショーケースにはりついたままだった。

「まだ……みたいだね」

「早くしろよ。つーか、恥ずかしいっつーの」

「ううっ、迷うのう」

猪熊という暑苦しそうで似つかわしくない店名の割にケーキは見事なもので、本気で選ばうとすればあれかこれかと目移りしてしまう。魔王は真剣な表情、声調でタカシに言った。

「タカシ。財布にいくら残っておる？」

「ケーキは1個だけだ」

あっさりと返され、思い切り落胆した顔で魔王はケーキから目を離してタカシを見た。そして、力強く訊いた。

「全財産でこの店ごと買い占めることはっ」

「最初から無理だろ」

「っう、1個は1個でもホールで」

「ピースで1個な」

「ぐう……っ」

ことごとく打ち返され、魔王は齒を食いしばる。タカシからすれば、何故ケーキごとここでここまで真剣に燃え上がれるのかわからないだろう。

【人間ならちょっと異常なくらいだが、魔王という基準ならひかえめ】

「人間ならちょっと異常なくらいだが、魔王という基準ならひかえめ」

「本当にケーキが好きなんだ」

「うむ。甘いものは大好きじゃ」

何度もうなずく魔王に、ゲンタは小首をかしげ、それから奥の冷蔵庫から白い紙箱を取り出した。

「こんなんでもよければあげるけど？」

「む」

ゲンタがそのふたを開けて見せると、魔王の目の色が変わった。タカシものぞきこんでみると、紙箱のなかにはフルーツののったケーキが入っていた。

「俺の試作ケーキなんだけどな。味見したから正確にはホールじゃないけどサ」

確かに1ピースぶんほど欠けているが、魔王は一向に気にしていないようだった。

「これを与えるのかつ、タダで」

「もちろん。売り物じゃないからお金なんて貰えないし」

「うむ。おぬしはなかなかわかっておるな！ 気に入ったぞ」

「どういたしまして」

魔王はゲンタから紙箱をひったくるように貰い受け、ぴよんぴよんととびはねた。そのはしゃぎっぷりにタカシはあきれるばかりだった。

「いいのか、本当に？」

「ああ。いいよ。マジであげる」

シヨーケースに手のひらを乗せ、ゲンタは目を細めた。

「ま、俺の親父のケーキに比べたら失敗作もいいところだけど」
ゲンタはシヨーケースのなかのケーキを見つめ、つぶやくように

言った。

「どうしてなんだろうなあ。パリで修行してきたわけでもないし、有名ホテルでパティシエを勤めてたわけでもない。なのに、親父のケーキはうまいしみんなから愛されてる。一口食えば誰だって笑顔になる」

ふうとひとつ息を吐き、ゲンタはまじまじと喜びまわる魔王を見つめる。

「マジで言うとなんのケーキであそこまで喜んでくれたのは魔王さんが初めてだ」

「あれはどうかと思うがな」

「だよな」

わかってるけどサ、とゲンタは苦笑いした。

【子は親を見て育ち学ぶ】

【子は親を見て育ち学ぶ】

それからまたつぶやく。

「俺の目標なんだ。親父の味は」

「もちろん、超えることが前提だけどサ」というゲンタの言葉に、タカシは表情を変えることはなかった。

「麻島だつて、なんかあるだろ？ やっぱ親父の背中とか追ってるのか？」

「……。ケーキ、ありがとな」

魔王に代わつて礼を言つと、ゲンタは口の両端をつり上げた。

「それと会計」

「あつ、いけね。シュークリームとクラシックショコラとチーズケーキで690円になります」

慌てたゲンタがレジにつき、タカシは商品と引き換えに1000円札1枚を渡した。

「おつりは」

「いらねーよ。ホールケーキのぶんだ。取つとけ」

「いや、でも」

「取つとけつってんだよ」

言葉をさえぎるようにタカシがにらみつけると、ゲンタの顔が引きつり、それをおとなしく受け取った。

「毎度ありがとうございます。魔王さんに俺のケーキの感想をサ、明日にでも店に来て教えてくれるようお願いしてください」

「またケーキをせがまれるぞ。いいのか？」

先程までタカシとため口だったゲンタだが、ここにきていきなり敬語になっていた。ひとにらみがきいて、萎縮してしまっているようだ。

「そしたら俺も感想をせがみますっ」

いつか親父の味を越えるために、とゲンタが宣言をした。タカシは何も言わず、はしやぎまわっていた魔王を回収して店を出た。

【帰ってきてみたら】

【帰ってきてみたら】

「タカシ、また来てくれてるよ」

ケーキシヨップ猪熊から帰ってきた2人を見て、ミカコがそう言
った。

「また？……ああ」

タカシには何か心当たりがあるようだが、魔王にはさっぱりわ
からないようだ。ミカコの口ぶりや家の静けさからしても、ミッルや
アンナではないようだった。

「なんじゃ、客か？ 手土産は」

「ねーよ」

即答するところから、既にあがって待っているのはそういう客ら
しい。魔王はつまらなさそうな顔をした。

「お茶だけ出してるから」

ミカコの言葉に魔王は「ケーキは渡さんぞ」と威嚇いかくを見せるが、
タカシは元から相手にしないといった感じでスルーした。

「せんべいあったつけか？」

「戸棚の奥」

「ありがちじゃのう」

「うるせーよ」

どこかと乱暴に店の奥へタカシは上がりこみ、戸棚からせんべ
いの入った袋を手にとって、客の待つ部屋へ入っていった。魔王も
なんとなく、といった様子でその後続いた。

【部屋で待っていたのは暗い青年】

それも鬱陶うつとうしいまでの陰気をまとい、彼がいるだけで部屋の湿度
が上がり、きのこが生えてきてしまうのではないかと思うぐらいの
ものだった。

「やあ、帰ってきた」

「呼んでねーぞ」

「呼ばれてなくてごめんね。で、でも、そろそろじゃないかって
思っで」

彼は恐縮し、へこへこと地に額をこするような土下座を何度もくり返した。その様がこれほど似合う者もないだろう。魔王は哀れや同情を飛び越えて、感心している。

「もういいっつーの」

おもて
「面を上げい」

タカシは何もしていないのに疲れたような顔で、持っていたせんべいを適当に放り投げる。魔王はノリノリで命令した。彼は逆らわず、素直にその顔を上げた。

「ところでおぬしは何をしに来たんじゃない？」

「うん。あのね……」

【それは一瞬の出来事だった】

【それは一瞬の出来事だった】

「がっ」

「おとなしくしてねえ。ゆがんじゃうから」

「ッ！」

土下座の体勢から蛙のように飛び跳ねたかと思うと、そのままタカシに覆いかぶさるように組み敷き、四肢を抑えて鮮やかに関節を締めあげた。魔王はあっけに取られている。

「はい、これが海老固め」

「いきな」

「脇固め」

タカシは為すすべもなく、豹変した彼にされるがままに連続して技をかけられている。それを見て、魔王は淡々とつぶやいた。

「楽しそうじゃのう」

「そお？」

誰が見てもその通りだろう。彼はタカシに技をかける瞬間から今までまどついていた陰気は吹き飛ばし、生き生きとした表情を見せている。

「おぬしとタカシは友人か？」

「今はそんなようなものかも」

「昔は？」

彼は爽やかな笑顔で、魔王に告げた。

「いじめっこといじめられっこの関係」

「ほう」

「あ、ボクがいじめられっこで、麻島くんがいじめっこね」

そう言うものの、今の2人の状態や体勢からはそうは見えなかった。今現在、明らかにいじめられているのはタカシの方だった。

「誰にだってあると思うよ。見て見ぬふりとか、ささいなことじ

やんと思つものみんなそうだし」

物憂げな表情で、彼はしんみりとそう言った。その時に出来た傷は早々に癒えるものではないだろう。

「タカシがいじめか。不良らしいのう」

「でも、おかげで今はこんな関係」

ぐいっとタカシの腕を引き、更にきつい体勢へともっていく。タカシの表情がゆがみ、必死で堪えているようだ。

「逆転したのか」

「ううん。恩返ししてるんだ」

「それはいいことじゃのう」

「だよねえ」

彼と魔王ははははと笑った。笑ってないのはタカシだけだ。

【思慮に欠けた子供のすること】

【思慮に欠けた子供ガキのすること】

「役に立たねーな、お前」

それは中学1年の2学期の終わりのことだった。性根から暗かった彼は早くもいじめの対象として目をつけられ、身も心もぼろぼろになっていた時だった。

「何にも出来ねーのか？」

シンプルで、明確な指摘だった。自覚はしていたはずなのに、彼がいつまでも目を背けていたかったことだった。

「テメー、だからいじめられんだよ」

声をかけてきたのは素行が悪いと評判の不良、目つきの怖い男子生徒だった。彼は関わり合いを持ちたくない一心で、不良が何を言っただけとも黙り続けることにしたようだ。

「シカトは出来んだな、テメー」

不良は舌打ちし、彼の胸ぐらをつかみながらそう言った。

「なんか役に立ってみせろよ」

それはただ彼をいじめるだけの言葉だったのかもしれない。

「やってみろ」

不良に胸ぐらをつかまれ、彼は怯えた。それでも何かを奮い立たせるには充分だった。

「見返せるもんならな」

【決していい話ではなく】

「でも、結局なあんにも出来なくてね。いじめは続けました」

彼はあっけらかんと言うが、魔王がのぞきこんだその目の奥には複雑な思いが見えてくる。下になっているタカシは何も言わないのと言えないのか、あれこれと技をかけられ続けている。

「……その後ぐらいに、麻島くんがケガをしたっていうんです」

喧嘩か事故か、タカシは誰にも語ろうとはしなかったと彼は言う。
「もちろん、いじめられてるボクをかばってとかじゃないけど。
ひじを少しね」

「ひじ？」

「うん。まあ爆弾とか後遺症とまでは言わないけど、クセみたいなのが残っちゃったんです」

上に乗ったままの彼がタカシの左腕を取り、背中へ回した。その腕を押さえたまま、ひじに何かマッサージのようなことをしている。

「ほほう、それは初耳じゃ」

「言えるか」

タカシはぶつきらばうに、短くそう答えた。詳しく話す気もないらしく、魔王は組み伏せられているタカシの顔を踏んづけてやった。

「日常生活には、ま、問題ありませんけどね」

完全優位に立った魔王とそれを気にすることなく技を遂行し続ける彼にタカシは低い声でうなった。

「あの時のボクに声をかけてくれた麻島くんに、何かしてあげたかった」

ほうと、どこかうつとりとしたため息を彼は吐いた。

「思いついたのが、これなんです」

彼は得意げにタカシに、自らの足を絡めて腕を固める腕ひしぎ十字をかけた。

「これとは」

「プロレス技による整体」

魔王はおお、と感心した様子を見せた。しかし、抵抗することを許されていないタカシは面白くなさそうだった。

「色々と間違ってるがな」

「えい」

小声でうなるのが聞こえたのか、彼は少しか意地悪をしたようだ。タカシが技をかけられたまま動かなくなった。

「面白そうじゃな」

「でも、結構力いるんです。最初は抵抗されましたけど、関節技マスターしたらおとなしくなってくれました」

「おかげでいらんめにあってる」

「えい」

堪え、復活したタカシの顔が再びゆがむ。それを見ている魔王は本当に楽しそうだった。

【気が済んだのか治療が終わったのか】

【気が済んだのか治療が終わったのか】

技をかけられ始めて15分を過ぎた場合に、彼はゆっくりとタカシの四肢を解放した。その時、魔王が舌打ちしたのを2人は聞き逃さなかった。

「具合はどあ？」

「どうってことねえよ」

ようやく解放されたタカシは肩をぐるぐると回してみるが、どこもきしんだり痛んだりすることはなかった。手加減なしに見えたものだが、絶妙な力加減がなされていたのだろう。

「アマチュアにしてはやるのう」

「良い子は真似しちゃ駄目です。危険だからね」

彼がふふんと得意げに言っているらしいが、再び陰気をまとい始めたのでそうは聞こえない。むしろ「だから、自分は悪い子なんです」と、してもいない謝罪に聞こえてくる。

「あんまり重いものとか持ってひじに負担かけちゃ駄目ですからね。腰も若い人でもクるんだから」

「八百屋やってんだ。かかって当然だ」

激しい二面性の持ち主というよりも別人格といっても差し支えない彼にタカシは惘然として答えた。

「それと首の辺りもゆがんでたけど、なにかありましたか？」

「……」

「気をつけねばな。タカシ」

いけしゃあしゃあと言うのがその原因なのだが、注意を促す彼の横に立ってちゃっかり便乗している。

「あれ」

そこでようやく気づいた、いや聞くタイミングと思ったのか彼がタカシの傍まで寄り、耳打ちして聞いてきた。

「ところで、あの子は誰なの？ 妹はいなかったし、麻島さんの彼女？」

「いや全然」

素っ気ないタカシの返答に、彼は「聞いてしまつてごめんなさい」と言わんばかりに腰を引かせた。

「そ、そうですか。いや……いい骨格してるなあって思いまして。ゆがみもないし、理想の女性ですねえ」

「思い直せ」

両手の指を絡め、不気味かつ乙女チックにもじもじとする彼をタカシは追撃の「うぜーからやめろ」で一蹴した。

「……あ、でも、骨も筋も真っ直ぐすぎます。整体のしがいがな
いや」

「そこかよ」

「で、料金なんだけど」

あきらめるのも早ければ立ち直るのも早かった。いじめられっこ時代は彼を少しだけ強くしたようだった。

「100円やる」

「ひどい」

口ぶりや手のひらを返すような料金請求から、彼はすっかりタカシ専属の整体師気分でいるようだ。

「頼まれもしねーのに無理やり来て技かけて金をぶんどるってのはどういいういじめだ」

「がきのおつかいじゃないんだよー。せめて1000円」

泣き言のように言う彼の姿はタカシに技をかけていた時とは違ってかわって、本当に情けないものだった。これで同一人物というのだから、信じがたいものがある。

「もう勝手にやっておれ」

つきあうのに飽きたのか、魔王は2人を見捨ててさっさと部屋から出て行った。

【折り合いは税込みの84円で決着】

【折り合いは税込みの84円で決着】

「帰ったのか」

「まーな」

魔王が声をかけた時、タカシは店の裏口から出て行く彼を見送っていた。振り返らず、タカシは愚痴った。

「ったく、よく来るもんだ」

「おかしなやつだったのう」

愉快そうに笑う魔王は、無様にはいつくばるタカシを思い出しているのかもしれない。ばつの悪そうな顔をして、タカシは首を少しだけ傾いだ。

「いじめられて、性格が変わるやつはいるけどな。アイツは特別おかしいんだ」

彼の姿が見えなくなるとくるりと向きを変え、タカシは後ろ手で扉を閉めた。

フツーは構ってこねえよ。

いじめられっこがいじめっこの怪我を気にして、何年も治しに通ってきてくれるなどありえない。彼はタカシに奇妙ながらも特別な友情、無理やりながらも治療する立場という優越感を抱いているのだろう。

「タカシ」

「んだよ」

「おぬし、そのひじが原因で野球をやめたのか」

ぴたりとタカシの動きが止まり、魔王の方をゆっくりと見た。真摯で真っ直ぐな目が、タカシをにらみつけている。

「……」

「黙秘は肯定とみるぞ」

腕組みをし、魔王は目を閉じた。まるですべてを悟ったかのように

に、静かながらも威厳を感じ取れた。

「んなようなもんだ」

適当に受け流そうとするタカシの返答に、魔王は眉ひとつ動かさず、再び聞いた。

「ひじは原因か理由か」

「んだと？」

「ひじが原因でやめたのか、ひじを理由にやめたのか」

「どっちも同じだろ」

バカバカしいと手のひらを返すタカシだが、魔王は一向に気にしない。

「若干異なる。原因なら仕方なし、理由ならば逃げじゃ」

「……おい」

荒いタカシの声をさえぎり、魔王の声は響く。

「タカシがやつに付き合ってやっているのも、ひじはまだ治っていないとしたいからじゃ」

魔王はタカシから背を向け、構うことなく言い続けた。

「でなければ、あんな思いあがったやつにタカシが言いようにやられるものか」

何も言わなくなったタカシを置いて、魔王は階段の方へ向かう。

「おぬしはひじを理由に野球をやめ、八百屋を理由に野球から逃げておるようじゃ見えぬ」

とんとんとんと軽やかに魔王は階段をのぼっていく。それをタカシは足でも目でも追おうとはしなかった。

「何があつたか知らぬ。じゃが、未練がましい言い訳などは聞きたうない。ワシは逃げるやつが嫌いじゃ」

そう言い捨ててタカシを1階で1人にさせ、魔王は2階にある自分の部屋のドアを開ける。

「自分も含めてな」

魔王は小さく、本当に小さな声でぼつりとつぶやいた。

【店の閉店時刻頃】

【店の閉店時刻頃】

「今帰ったぞー」

「アンタ、おかえり」

キミヤがきちんと家に帰ってきた。そのことに目を細めるミカコが笑って、出迎えた。

「ケーキ買ってきた」

「猪熊のとかい。さつきこつちでも買ってきたとこだよ」

「そりやまずかったかな」

長年離れていたが、夫婦そろって考えることは変わっていないらしい。どうしようか、とキミヤがミカコに聞こうとした時だ。

「よい。気にするな」

キミヤの手にあった紙箱は横から、ミカコと2人の間からひよいと取られた。

「ワシがすべて食う」

魔王だった。キミヤはあっけに取られているようだが、ミカコは苦笑している。

「こらこら、そんなの食べる予定でいると夕飯が入らないだろ？」

「心配されんでも別腹じゃ」

得意げに笑う魔王は、紙箱を抱えてそのまま持つて行ってしまった。

「やれやれ」

「あの子は？」

キミヤは去っていく魔王の背中を見つめ、つぶやいた。そのことにミカコはビックリしている。

「て、アンタは気づいてなかったのかい」

「ケーキは3つしか買ってこなかった」

ミカコは「そうかい」と笑って、キミヤに教えた。

「……あの子は魔王ちゃん。ちよつとわけあつてウチで面倒見るんだ」

「魔王？」

首を傾ぐキミヤだが、ミカコは気にせず答えた。

「そついう名前なんだつて」

「なるほど」

キミヤは腕を組み、自らのあごの辺りをさする。

「似てるな」

「ああ。なんかタカシと兄妹みたいだろ」

面白そうにミカコが笑うと、キミヤも「なるほど」と微笑んでみせた。それからミカコがキミヤの背を軽くたたいた。

「さつ、久々に家族全員そろつての夕飯だよ。たつぷり食べとくれ」

「そうだな」

靴を脱いで上がるうとするキミヤに、ミカコは凄みをかけて言った。

「それと話、たつぷりと聞かせてもらつからね」

「わかつた」

キミヤはミカコの目の奥をのぞくように見つめ、それから自らの目を閉じた。

【家族そろいました】

【家族そろいました】

まったく会話がなく、ちやぶ台を囲んでいるというのに黙々とはしだけを進めている。団欒だんらんというには程遠く、場の空気は重苦しい。
「……」

この空気を作った一端の魔王が耐え切れずに口を開こうとした時、キミヤがようやくタカシに話しかけた。

「タカシ、学校の方はどうだ？」

「ぼちぼちだ」

愛想のない息子からの返答に、キミヤはめげずに続ける。

「野球は、続けてるか？」

しかし、その話題はまづかった。タカシがキミヤの方をちらりと視線をやり、またすぐに自らの手元に戻した。

「やめた」

「そうか」

特に追求することなく、キミヤはお茶を一口すすった。また気まぐずく、重苦しい雰囲気になってきた。

「さて、ケーキじゃな」

魔王が立ち上がり、場の空気を読まずに台所の冷蔵庫の前まで歩いていく。ガチャンと扉を開けると、他のものを押しのけてケーキの紙箱が3つも詰め込まれている。よく入ったと思うものだが、昼飯時にキミヤがなかに入っていたおかずを食べ尽くしてくれたおかげで、そのスペースが出来たのだろう。

「うむ」

少し考え、魔王はゲンタのホールケーキの箱を選び、取り出した。それからフォークとナイフも手に取り、居間の方へ戻っていく。

「マジでホール食う気か」

「やらんぞ」

タカシが「いらん」と一蹴すると、魔王は安心しきった表情で紙箱をちゃぶ台の上に置いた。

「魔王ちゃんやタカシの同級生が作ったんだって？」

「そうじゃ。ケーキ職人を目指しとるらしくての、ワシの確かな味覚を見込まれ試食を任されたのじゃ」

「嘘つけ。駄々こねて貰っただけだろーが」

注目が集まるなかで魔王が紙箱を開けてみると、大きさが7号くらい、のケーキがあった。その表面は生クリームと色とりどりの果物でデコレートされている。

「見た目は悪くないのう」

魔王はナイフでケーキを3分の1ほど豪快に切り分けてみると、その断面からスポンジで黒いあんこをはさんでいる和洋折衷的な代物だとわかった。

「へえ」

「では、いただくとしよう」

【特に大口を開けているわけでもなしに】

【特に大口を開けているわけでもなしに】

魔王は切り分けたそれをまるで吸い込んだかのように、一口でおさめた。それを間近で見たタカシは気持ち悪くなった。

「果物は安物の缶詰ではないが値が張る一級品でもない。生クリームの味はまあまあ。カステラに似たスポンジは正直いまいちじやが、なかのあんこは絶品じやな」

一息にそれだけ言うつ、魔王はふうとひとつ息を吐いた。ミカコその食べっぷりに感心している。

「毛の生えた素人が作ったにしては上出来じやが、売り物にはまだならぬかもな」

魔王は残りもきれいにたいらげ、いれたばかりの緑茶を飲んだ。

「しかし、洋菓子職人としてあんこが一番うまいのは微妙じやないつそ和菓子職人への転向を勧めようかのう」

「辛口だねえ」

ミカコがすると、魔王は緑茶を味わいながら返す。

「褒めるところは褒めておる。それ以上に何かいるか？」

きつぱりと言い捨てる魔王に「ないかもねえ」とミカコが苦笑しつつ、席をはずした。それでも魔王は言葉を続けた。

「世辞か。真に上を目指そうと思うものには妨げにしかならぬぞ？」

ちらりとタカシの方を見て、魔王は湯飲みをちゃぶ台の上に置く。「ましてや明確な目標を持つなら尚更のこと。それを越えることでしか満足は出来ぬよ」

魔王は席から立ち上がると、ミカコが入れ替わりでタカシ達の分のケーキを入った紙箱と皿を持ってきた。

「ごちそうさま。先に風呂へ入らせてもらうぞ」

そして「風呂上りに残りのケーキを食うかのう」とつぶやいた。

それを聞いて食べすぎじゃないか、明日に回したらどうかとミカコが提案すると魔王は力説した。

「ワシは自分の体調管理が出来ない子供ではないし、何より生菓子じゃぞ。その日の内に食わねば味も質も低下してしまうではないかっ」

「そうかい」

ミカコは苦笑するしかなく、魔王は駆け足で風呂場へと向かった。タカシもその後が続くように立ち上がった。

「タカシ。ケーキは？」

「明日食う」

それだけ短く言って、タカシは本当に自分の部屋に戻っていった。

【居間に残されたミカコとキミヤ】

【居間に残されたミカコとキミヤ】

「随分としつかりとした考え方を持っているな」

キミヤはミカコからガトーショコラののった皿を受け取り、フォークでつついて口に運ぶ。誰のことを指しているのか、ミカコは聞かずとも察した。

「あれでもタカシと同年だもの。魔王ちゃん」

「そうなのか」

「言つたろ。事情あつて預かつてんのさ」

ミカコがシュークリームを嬉しそうに、大口を開けてほおばる。猪熊のシュークリームは大きく一口で食べることは難しいのだが、それが出来ないとなかにたつぷり詰まったクリームが手のひらにあふれ出てしまうのだ。

「それで同じ屋根の下か」

あふれ出たクリームを見て、キミヤはミカコにティッシュを何枚か渡そうとする。しかし、勿体ないのでミカコは指からそれをなめとってしまった。

「問題は？」

「ないね」

自信を持つて即答するミカコに、キミヤは物憂げに微笑んでみせる。

「なら、いいか」

父親として注意することもなく、あっさりとキミヤは引き下がった。

「家にいなかった俺に言えることはない」

無表情のまま、キミヤはフォークを置いた。ミカコは何も言わずに、キミヤの皿と自らのと重ねた。

「ごちそうさん」

両手を後ろに回し、キミヤはよりかかるようにして、アイスの棒が刺さったままの天井を見上げた。

「寝るところはあるのかな」

「ちゃんとあるよ」

ミカコがそう返すと、キミヤは「それは良かった」と明るく微笑んだ。

【9月13日】

【9月13日】

「へえ、タカシの父親が」

「帰って来たのかあつ！」

「やかましい」

魔王がミツルとアンナに昨日のことを話してしまった。別に隠すことでもないのだが、口うるさくなる。

「いやいや、ぜひ一度そのご尊顔を拝見したいね」

ミツルはお手手のしわとしわを合わせ、ナームーとしてみせた。

「仏像じゃねえっつの」

タカシの突っ込みにH A H A H A H Aとオーバーアクションでミツルが笑った。朝からアンナにも負けないハイテンションだ。

「ま、これで麻島青果店も一安心だな」

急に真面目な顔になったミツルは魔王、タカシの順に目を向けた。

「タカシも少しは楽になれるんじゃない？」

「……どーだか」

今まではミカコが実質1人で麻島青果店を切り盛りしてきたが、不在の父親が帰ってきたのだ。タカシの負担も軽減されるはずだろうが、当の本人は浮かない顔をしていた。

「またどっか行っちゃうさ」

その言葉は静かで重かった。

「タカシ……」

ミツルがぼんとタカシの肩に手を置き、ゆっくりと首を横に振った。

「意外とかわいいな」

「うるせーよ」

タカシは肩にのせられた手を邪魔そうに振りはらった。

【親の顔を見てみたいが見てもどうしようもない】

「そういえばおぬしらの親はどんなのじゃ？」

魔王の疑問は若干失礼なものだったが、アンナは気にせず答える。
「わたしの家族は普通だぞおおっ！」

アンナがそう言うのと、ミツルが魔王に耳打ちした。

「ペットの犬も含めて全員アンナそっくり。ご近所の名物家族」

うえ、と魔王が嫌そうな顔をした。それだけですべて察せられる。

「今度遊びに来ないかああ！」

「遠慮させてもらう」

魔王はすっぱりと断った。アンナは「遠慮などするなああっ！」

と残念そうに叫んだが、そうは聞こえない。

「甲藤は？」

とりあえずアンナを無視して魔王は話をミツルに振った。

「おれ？ 両親いないから1人暮らし」

「死んだのか？」

「オイ」

直球な魔王にタカシが突っ込むが、ミツルは気にしてはいないようだった。むしろ笑っているようにさえ見えた。

「死んでない。けど、どうでもいいかな」

至極あっさり、高いところから突き落とすように言っただけ。

「感謝はしてるけど、礼を言う気はない」

その言葉には何のためらいも悔いるところもなかった。

「冷めてるのう。タカシの家とは大違いじゃ」

「うん。全然違うね」

わずかに微笑みを残したまま、ミツルは腕を組んだ。

「ミツルの部屋に行ったことあるかあああああああっ！」

唐突に話を振ってきたアンナに魔王が「いや、ないのう」と返してやった。

「大声で言うな」

「何にもないんだあああああああっ！ あ、あのエ、エエエ

口本も無いんだあつ！」

「だから大声で言うなっつーの！ 少しは恥じらいを持て！」

タカシに怒鳴られ、アンナが「す、すまんっ！」と大声で言った。しかし、既にそれは遅くクラス中に響いてしまったようだった。

「で、本当なのか？」

若干小声になった魔王の問いに、ミツルは腕を組んだまま答えた。

【不要なものを持とうとするのが貧しい】

【不要なものを持とうとするのが貧しい】

「まあ、ね。寝るところがあれば他はいらない」

安物のパイプベッド、小さな机と冷蔵庫があるだけだと自ら付け加えた。

「読んだ本は捨てるか売って、高い本は図書館で借りる。雑誌は立ち読みで充分」

言葉に詰まることもなく、すらすらとミツルは言つてのける。

「服も古着でいいし、あとは学生服で事足りるでしょ。あとはCDラジカセが1台あればいい。テレビは見ないしね」

笑うところでもないがH A H A H A H Aとミツルは笑つてみせた。

「金がないのか？」

「いや、単に物があるのがうつとーしいだけ」

「つまらなくはないか？」

「そーでもないよ。やることなきやラジオ聴くか勉強すればいいじゃん」

さらつと言うミツルに魔王はわざとらしく驚いたような顔をしつつタカシの服のすそを引っ張った。

「タカシ。聞いたか。勉強と言つたぞ。勉強」

「うるせーよ」

「流石だあああああつ！ ミツルウウウウツ！」

「まあまあ」

「見習え。タカシ。でないと生徒会長様にしかられるぞ？」

「しつけーな、オイ」

「全くだ」

そのネタはもう飽きた、もういいと言わんばかりにタカシは手のひらを返す。それから、いきなり背後から聞こえた声の方を振り返

つてみた。

「……で、なんでここにいるんだ？」

噂をしたからか、タカシと魔王達の後ろに豊泉院会長が立っていた。その神出鬼没っぷりには恐怖さえおぼえる。

【忙しい身の上】

【忙しい身の上】

「んだよ」

カオルが人の心を射抜き、見抜くような目でタカシをにらみ、すぐに視線を魔王に移した。魔王はカオルが来た時点で臨戦態勢に入っている。

「少しまるくなったか」

「は？」

「問題なければいい」

特に用件もなかったらしく、カオルはその場からすぐに立ち去った。場の空気も緩み、タカシは迷惑そうに首を傾げた。

「わけわからん」

タカシはひとつ息を吐くと、ミツルと魔王がしみじみと言った。

「あれが揺れる乙女心か」

「表情に出ないからわかんないな」

「お前ら表出る」

いい加減、相当に頭にきているタカシの肩を華奢な指先で力強くがしつとつかんでとめた。

「問題は起こすなと言ったのだが」

「口出してくんなよ、生徒会長様は」

立ち去ったと思ったカオルはぽんぽんとタカシの頭をなでるようにたたき、ミツルや魔王達を少しだけにらんだ。

「あまり麻島タカシをいじめるな」

それだけ言っつて、カオルは再び教室を出て行った。魔王がひよいと廊下に出てのぞいてみると、今度は確かに立ち去っていったようだ。

「愛じゃな」

「素晴らしいね」

「ほんとだなあつ！」

3人が口々に言っていると、タカシはがたと席から立ち上がった。それから今まで座っていたイスを手に取り、わずかに浮かせるように持ち上げた。

「お前ら、やっぱ表出るやコラアツ！」

今までたまるにたまっていたものすべてをぶちまけるような怒鳴り声が教室に響いた。流石のミツルも少し青ざめている。

「きれた！ タカシがきれた！」

「だから何のネタかわからねえつつうの！」

手に持っていたイスを床にたたきつけ、魔王とミツルをにらみつけた。

「おお、不良らしいぞ！ タカシ」

クラスメイト達は久し振りに切れたタカシを恐れて逃げ出し、標的にされたミツルがなだめようとするが面白がる魔王は更に怒りをあおるような真似をし、アンナはミツルを守るためにタカシに戦いを挑むという、もはや收拾がつかない状況にまで陥った。

【騒動後の放課後】

【騒動後の放課後】

「いやあ、タカシをからかうのは面白いのう」

「あそこまで切れたのは本当に久し振りだったなあ。少し自重しよ」

通路路を並んで歩いている2人だが、ケラケラと笑う魔王の横でミツルは反省し苦笑している。

「それで当の本人様は？」

「知らぬ」

おそらく暴動の件で生徒会か職員室に・昼休みから続いて呼び出しでも食らったのだらう、と魔王は推測した。昼休みにはミツルや魔王、アンナも呼び出しを食らって、こつてりとお説教をもらってしまった。

「そうかー。こつちもアンナが掃除当番でね」

「羽を伸ばしているというわけか」

くくつと笑う魔王にミツルは照れるように微笑んだ。

「でも、あれに慣れちゃうと結構どうってことないんだよね」

「そういうものかもしれぬが、ワシは受け入れられぬよ」

「仕方ないか」

ミツルは少し残念そうに言うが、日常的にこれだけ接触が出来るのなら上出来と言える。ゲームであれば勇者と魔王は出会えば確実にどちらかが消える運命なのだ。

「あーあつ。なんか静かでないーな」

「うむ。何か開放的な気分じゃ」

ミツルが伸びをしながら言うと、魔王も同意した。今日の午後は少し天気がぐずついたのだが、今はよく晴れていて空気も清々しい。

「まっすぐ家に帰る気にはならんな」

「少し遠回りしてみようか。や、制服じゃマズイかな」

制服を着替えに家に戻ったのでは意味がない。しかし、制服姿のままでは行動が制限されてしまう

「ふむ。では、おぬしの部屋に行ってみようぞ」
「え」

魔王の提案にミツルの足が思わず止まった。

「構わぬだろう?」

「うーん。……。ま、いつか」

ミツルからすれば魔王の提案は少々気分的に合わなかったが、反対する気にもなれなかった。

「決まりじゃな」

【場面はとんでミッル自宅へ到着】

【場面はとんでミッル自宅へ到着】

ミッルの家は小奇麗でオートロック付きの20階建てマンションにある一室だった。魔王にそういった相場はわからないが、雰囲気的には高級マンションに近いものがありそうだった。

「んじゃ、あがつて」

「そうさせてもらう」

遠慮も何もせず、魔王は靴を脱いでずかずかとミッルの家へあがりこむ。そのあとにこの家の主であるはずのミッルが追った。いつの間にか魔王が主導権を握り、その立場を逆転させていた。

「割と広いのう」

きよろきよろと周囲を見渡し、魔王がつぶやいた。

「物がなからね」

「確かに。ざぶとんもない」

単に物がなただけではなく、2LDK+Sという間取りは1人暮らしには広すぎるほどだ。しかし、他人を出迎え、もてなそうという意思をミッルの部屋からは一切感じ取れなかった。

「お茶ぐらいは出せるから」

ミッルが台所に立っている間、魔王は好き勝手に物色を始めつつ訊いた。

「この部屋は親が金を出してるのか」

「そうだよ。1人暮らしする時に用意してくれた」

「贅沢者め」

「そうだね」

少量の湯を沸かし、いれた紅茶を持ってミッルが台所から出てきた。魔王がそれを受け取ると角砂糖を4つほど欲しかったので、ミッルはまた台所へ戻ることになった。

「でも、俺が本当に欲しいものは何もくれなかった」

魔王の所望する角砂糖はなく、普通の砂糖も切らしていたので代わりにと蜂蜜を持ってきた。直に床に座るのが嫌だったのか、パイベッドに腰かけている魔王がそれを入れると紅茶の色が真っ黒になった。

「愛か」

「みたいなもん」

「金も愛ぞ」

「かもしれない」

ふうつと息を吹いて紅茶を冷まし、ミツルは一口飲んだ。

「親が子に注ぐのは愛と金だから」

【紅茶を注ぐように】

【紅茶を注ぐように】

ミッルは自らの部屋を見回し、ひとつ息を吐いた。

「特にこれだけ注いでくれるんだ。少しくらい感じるころがあるんだろうつてわかるよ」

「だから贅沢者め、と言ったんじゃ」

「ははッ」

紅茶のカップを置き、魔王は蜂蜜を更に足した。もう溶けきらずに底の方で沈殿している辺り、蜂蜜入りの紅茶ではなく紅茶風味の蜂蜜といった方が近いだろう。

「しかし、これだけの部屋をぽんと出すとはミッルの両親は何をしておるんじゃ」

「マンシヨン経営。ていうか、この部屋もそう」

ミッルが床をなで、魔王の方を見た。その視線に気づいているのかいないのか魔王はパイプベッドに腰かけたまま、のんびりと茶をすすっている。

「富豪か」

「貧民と二極化させるなら、その分類に入るね」

その言葉はいやみつたらしくもなく、ミッルは微笑んでみせた。

「これだけ格差があるのか」

「そういうものだよ。世の中って」

「知ったような口をききおるのう」

「魔王さんこそ、世の中を甘く見てるでしょ」

ミッルがカップを床に置き、よいしょと小さく言って立ち上がった。

「両隣と真下の部屋も俺のもの。ていうか、あえて空き室のままにしてくれてる」

左右と下方に指を差し、魔王にわかりやすく示した。

「なんでわかる？」

一歩だけ、ミッルは魔王に歩み寄った。

「俺が何しようとか、誰にも聞こえないようにって配慮だよ」

魔王が紅茶を飲み干し、カップを床に置いた。その瞬間にミッルは魔王に迫り、押し倒した。

「こんな風に」

【抵抗もしないままに】

【抵抗もしないままに】

「1人暮らしの男の部屋にあがるなんて無防備すぎない？」

ミツルは魔王を下に、組み敷いたまま笑った。

「魔王の力も、ここじゃ使えないでしょ？」

「うむ。そうじゃな」

あくまで冷静に、動揺もすることなく魔王はそう返した。元来の怪力も魔王は振るおうとしなかった。

「このままいつてみる？」

「……」

ミツルの目は真剣そのものだったが、魔王は笑った。たったそれだけのことだったが、主導権を握っていたはずのミツルは呑み込まれてしまった。

「冗談冗談」

パツと素早く魔王から離れ、ミツルは降参のポーズを取って謝罪した。その間も、身震いが止まらなかった。下にいた魔王に見下され、負けてしまった。

「タカシにバレたら殺される」

「アンナは？」

魔王がゆっくりと起き上がると、真っ先に出なかったミツルの彼女の名前を告げた。しかし、ミツルは首を傾げている。

「さあ。泣くかなあ」

腕を組み、真面目に考えているようだが答えられないようだ。

「……何も言わないかもしれないなあ」

「ひどい男じゃ」

真っ直ぐにそう言う魔王を見て、ミツルは笑った。

「そうだね。ひどい男だ、俺って」

「アンナをもてあそんで楽しいか？」

鋭く胸に、心に突き刺さるような言葉をミッルに向かって魔王は吐き捨てた。それでもミッルは割と平然とし、肩をすくめてみせている。

「人聞きの悪いこと言うね」

「事実じゃ。おぬしはタチが悪い」

魔王は腕を組みながら、ミッルを指差した。

「自分から突き放して、自分から謝る。まるで他人を試してるように」

人差し指と親指を立てて銃に見立て、魔王はミッルをバーンと撃つてみせる。

「そんなに信じられぬか？」

ミッルは両手をあげて、再び降参のポーズを取った。それからミッルはふいつと顔を横にそらした。

「あー、自覚はしてたかな。でも、普通に接するのも無理くさいや」

諦めたかのように、ミッルは自嘲した。

「だって、それが俺だもん」

【あんなに直情的な愛だから、試さずにはいられない】

【あんなに直情的な愛だから、試さずにはいられない】

「突き放しても、突き放しても、寄って来てくれるんだ。バカみたいだろ……」

自嘲するミツルが右手の親指を自分の心臓につき立ててから、両腕を大きく広げる。

「こういう俺と付き合ってくれる他人より親しい友人がいれば、他にいらないもの」

高校でアンナやタカシという時と違って、ミツルは朗らかに自虐している。魔王は何も言わず、静かにそれを見ていた。

「俺に付き合いきれなくなったら離れてくれればいいし、その方が気が楽だよ」

「難儀なやつじゃ」

魔王はあきれた顔でひとつ息を吐くと、ミツルが右手の平を魔王の方に突き出した。

「あ、でも、家庭環境のせいにする気はないから。親は関係ないビシッと牽制し、魔王の次の言葉を制止させた。

「そんなことまで親と関係付けられたらたまらない」

ミツルがもの悲しげに笑うと、魔王も似たような表情を取る。それから再び魔王はパイプベッドに腰かけた。

「哀れじゃのう」

「どつちが、かな？」

「その答えは、とうに知っておるじやろっ」

「だから聞いたのに」

いつもの調子に戻ってきたミツルがおどけると、魔王は床に置いたカップを見た。

「おぬしのいれた茶はなかなかのものじゃった」

カップに注いでいた視線をミツルへと移し、それから天井を仰ぎ

見た。

「人柄だの評価だのとはその様なもので充分じゃと思うがのう」

「サンキュ」

ミツルが床のカップを拾い上げると、魔王にウインクしてみた。

「ティーパックだけだね」

魔王がくくつと笑うと、ミツルもいつものようにH A H A H A H A H Aと笑った。異様な緊張感、雰囲気が一気にほぐれていった。

【飲み干してしまった紅茶をいれなおす】

【飲み干してしまった紅茶をいれなおす】

「……そういえば、魔王さんの親はどんな人？」

お湯入りのカップにティーパックを浸しながら、思い出したようにミツルが尋ねてみた。高校ではアンナがミツルの部屋の話へ転換^{シフト}させてしまったため、訊きそびれていたことだった。

「どうでもよい」

答えにならない答えであっさりと返されたが、それはミツルも同じようにごまかしたので文句は言えない。

「あ、そう」

ミツルが再び紅茶を持ってくると、魔王は既に蜂蜜を片手にスタンバイしていた。ミツルは予め湯の量を減らしておいた紅茶を魔王に渡す時、つぶやかれた。

「少し参考になった」

「何の？」

「答える必要はない」

「はいはい」

魔王が今度は蜂蜜が足りない、甘い茶菓子を出せと要求してきた。苦笑しながら、ミツルはそれを探しに立ち上がることとなった。

「いくらなんでも甘いものの食べすぎじゃない？」

「でなければやっていけんわ」

それから30分ほどミツルと茶菓子をつまみながら談笑して、魔王は帰路についたのだった。

【ミツルの部屋を振り返り見ると】

画一された箱のような部屋のなかに住んでいるミツルや他の住人は、タカシの家に住む魔王にとっては驚きだった。

「わからんのう」

住人以外に違いを持たないそれは、まるで檻^{おり}だ。

「囚人とはよく言ったもんじゃな」

家は住人^{その}そのものだ。傷をつけ、直すことを繰り返し、大事と愛着を持って自分をそのものに作り上げていく。

「笑えるわ」

それなのに他と同じであることに安心と喜びをおぼえ、他と違うことを恐れる。だから、住人が画一された家に合わせていつている。好きこのんでそれらに、囚われていく。

「ワシは魔王じゃしのう」

周囲、平民と同じであつてはいけない。甘んじてはいけない。

「と・いうわけで、この野菜は食わぬ」

「ひとりごとでもわがままもいい加減にしろ」

キミヤを囲んだ2度目の夕食時にタカシにご飯を取り上げられ、ちやぶ台をひっくり返さない程度に抵抗する魔王の姿があった。

【9月14日】

【9月14日午前1時19分】

「どこにおる」

魔王は街灯に照らされ、ぼんやりと明るい車道の真ん中で周囲を見渡した。

「どこにおるんじゃ」

そうつぶやきながら、魔王は夜の街を駆け抜けた。その速度はこの地上にいるどんな生物より速かった。

「また繰り返すのか、キサマは」

軽やかに地面を蹴って跳び宙返りをする、高い電柱の上に立った。そこで目を凝らす。

「見つけてやるぞ」

【午前1時3分】

「むう」

魔王はがばつと起き上がり、部屋に置いてある時計を見た。時刻は1時を回ったところだ。

「いかな。目が冴えた」

元いたアルデピマジウムイダ次元とこの次元では時間のサイクルがかなり違っている。もう慣れたものと思っていたが、まだ感覚にズレが生じているようだった。

「……腹も減ったのう」

夕飯はたらふく食べたのだが、元より魔王には食事は平民からのエネルギーの代償行為にしか過ぎない。どれだけ穀物や肉、菓子を食べようとも満たされないところがある。

「仕方ない」

代償行為とはいえ、何かつまみ食いしてくれば少しはマシだろうと思い、魔王は布団から抜け出した。

「少し肌寒くなったか」

夏から秋へ移り変わっていく兆候を肌で感じ、そうつぶやく。それから魔王は部屋から出る前に、自身の威厳が損なわれないように、つまみ食いがバレないようにと、念のために他の者の気配を探ってみることにした。

「……ない」

気配を感じ取れなかった。まだ寝ぼけているから、魔王の勘違いというわけでもなさそうだった。

「やつはどこじゃ」

魔王は小さく舌打ちをした。

【そして魔王は自らの部屋の窓から外へと飛び出した】

【そして魔王は自らの部屋の窓から外へと飛び出した】

「どこじゃ。どこに行く気じゃ」

ふわりと地面に降り立ち、魔王は左右を確認した。

「キサマが居場所は、今はここじゃろう」

魔王は何度もそう言ってから、走り出した。

「またか。またなのか」

ぎり、と歯ぎしりをした。少しばかり肌寒く感じた初秋の空気も、魔王の周りでは熱く感じられそうだ。

「許さぬぞ」

十字路に出たところで、魔王は足に力をこめてブレーキし走るのをやめた。

「まだ遠くへは行っておらぬじやろう」

直感で道を選び、魔王は再び走り出す。途中で自動車を抜き去り、歩道橋をハードルのように飛び越えた。

「見つけてやるぞ」

【午前2時11分】

「……ふう」

河川敷の横、土手の上を歩く男がひとつ息を吐いた。それからまた前を見ると、その道をさえぎるように立っている者がいた。

「どこへ行く気じゃ」

男の目を見据えているのは魔王だった。

「よくわかったな」

「ふん。ワシから逃れられると思ったか」

「大したもんだ」

肩を落としながら、男はそつつぶやく。そして魔王から数歩ほど離れたところで男が止まり、正面から見合った。

「逃さぬぞ。キミヤ」

ひとつ、ふたつ、みつつの間を置いて、魔王が静かに低くうなるように言った。

「いや、この次元の魔王よ」

【魔王キミヤ】

「この次元の魔王？ 俺が、か」

プツと小さく吹き出し、キミヤは笑った。

「冗談はよしてくれ」

「ワシがそんなものをつくとも？」

「いや、それはわからないな」

口調ではふざけながらもキミヤは真面目な表情で、魔王に返した。

「いつまでもとぼけられると思うな」

魔王はきつぱりと言い捨てると、キミヤは腕を組んでみせる。

【考えてもみよ】

【考えてもみよ】

「おかしいとは思っていた。この次元で勇者と出会った時点で」
この次元の勇者と出会ったのは魔王が通い始めた高校で、しかも同級生かつタカシの友人の彼女という近しい繋がりだった。

「その時は魔王と勇者は離れがたき存在同士なのだと、切れぬ因果にあきれたものじゃった」

ゆつくりと首を横に振り、魔王はわざとらしくため息を吐いた。
キミヤは腕を組み、目を閉じて聞いている。

「しかし、それにしても勇者が早く生まれすぎている」
十数年も前から魔王がこちらの次元に来ることが運命、または確定事項とされていたわけもない。

「この次元とアルデピマジウムイダは類似した点が多く見られる」
それでも時間の流れ以外でも相違する点はいくらでも見つかった。
特に酸素濃度や重力の違いは元から強い魔王とタカシをはじめとする一般的な平民との身体能力を更に引き離れた。

「たどり着いた結論として、この次元にワシの知る平民と近しい種族があるならば、同じように魔王の眷属も存在するのではないかということ」

図書館で得た知識ではあるが古くから神などとあがめられた人間の一族は世界各地に記録が、存在が今もなお残っていることを魔王は知った。

「アンナやカオル達はワシではない魔王に対した勇者なのではないか、と」

それが魔王の出したひとつの、今一番高い可能性^{こたえ}だった。

「そのような勇者が生まれ、恐れた魔王は勇者が住む同じ街から出て行くようになり……そして帰らなくなった」

はずれているかもしれない憶測だが、魔王は自信たっぷり^{こたえ}に聞い

た。

「違うか？ キミヤ」

しかし、問われたキミヤの表情は芳しくなかった。

「とぼけようとしているわけじゃないが、俺はそういう存在じゃない」

「麻島キミヤ」

魔王が言葉をさえぎり、更に続けた。

【名に負うもの】

【名に負うもの】

「キミヤ、か。どの字を書くのかのう。王と矢か」

きみと読ませることは少ないが、魔王は辞書などから日本語をおぼえた為に記憶していた。大王^{おおきみ}という言葉^{ことば}を、魔王に似た言葉^{ことば}をよくおぼえていた。

「それで麻・王、魔王か。笑えるな」

ここでキミヤがくすりと笑った。ここまですれば、ただのこじつけでしかない。

「根拠には乏しいか。では、タカシ。あれは降矢と書いたかのう」
タカシの名を出され、キミヤの表情や雰囲気^{ふくみ}が少しだけ変化した。

「……もし、おぬしがこちらの次元の魔王でないならば、考える可能性はもうひとつだけある」

魔王は自らの胸の上に手を置き、指し示した。

「自らの誇りである名を同じ血の通う子に託す」

それは新たに生まれてくるその魂と存在を認める儀と宣誓であり、それ破ることは自らの魂と存在をも破ることに等しい。

「そう、賢魔王が祖父イエルフアニエジクーよりイエルア、ミヤメーアの名を託された父のように」

こぶしを握り固め、そして開いた。

「そして、ワシは父よりクツトヤメーアの名を託った！」

魔王が魔王になった時、今まで繋がっていた血や魂や存在^{しんぞん}こそその名を自ら捨てた。

「互いに面識はなくとも覚えがあらう？」

それがもうひとつの可能性としたものの、魔王自身が一番否定したいことだった。

「顔も姿も見えぬ胎児に名だけ与え、ワシを孕んでいた母を見捨て、全てを無視して姿を消したおぬしとてな」

【つまりは】

【つまりは】

麻島キミヤこそ失踪した魔王の父親であり、タカシはこちらの次元で生まれた腹違いの弟だということ。それならば魔王の力に耐性が生まれたのも、勇者に囲まれた生活環境に合わせてなら納得がいくと魔王は考えたのだ。

「答えよ」

キミヤに今までにない明らかな動揺が見られた。

「まさか……本当にそうなのか？」

「くどい」

じつと魔王を凝視し、キミヤはつぶやいた。

「驚いた。まさかこんなところで会えるなんて」

「ワシもじゃ」

魔王は憎々しげに吐き捨てた。

「まさか、このような次元でのうのうと生きておったとは！」

周囲の空気がビシバチとはじけ、魔王の足元から砂煙が立ち上った。傍にいただけで息が詰まり、呼吸の仕方まで忘れてしまいそうだった。

「いや待て。何か勘違いをしているようだ」

キミヤは今の状態の魔王に臆することなく、制止を求めた。

「魔王。君が言うイエルア^{アミヤ}ミヤメーアは、おそらく……雨矢は俺の祖父だ」

「祖父……じゃと？」

その言葉に魔王が少しでも落ち着きを取り戻すと、キミヤは土手に滑り込むように座った。

「ああ」

ゆっくりと魔王の顔を見て、それから夜空を見上げてからうながした。

「座って話そう」

【2人は土手に並んで座った】

「……そうか。どうりで雰囲気似てると思ったよ」

キミヤは柔らかな笑みを見せるが、魔王は切羽詰ったように訊いている。

「その前にイエルア、ミヤメーアがおぬしの祖父というのは本当か」

「ああ。間違いないと思う」

「信じられん」

胎児だった魔王は話に聞いただけで直接の面識はなく、またキミヤにもないという。しかし、キミヤは古ぼけた写真を1枚だけ持っていて、更に魔王とキミヤが聞いた話というものはその殆どが符合した。

「何か感じるころはあるかな」

キミヤは懐から大事そうに、シートで包んだものを取り出して魔王に見せた。

【これが……】

【これが……】

「麻島雨矢。麻島は祖母の姓だ」

擦り切れ、ボロボロになっている写真に写っている男は渋みのあるたくましい壮年だった。魔王はその姿を見るのは初めてだったが、どこか懐かしく感じられた気がした。

「君の話を総合すると、こちらとそっちの時間の流れが違うせいで年代に差がついたのだろう」

「それはわかるがのう。信じがたい」

「まあ、そうだろう。俺もだ」

いぶかしむ魔王にキミヤはあっさりとそう返し、ごろりと土手に寝転んだ。

「そもそも俺と祖父の間に血縁関係があることも疑わしい」

「どういうことじゃ」

「俺の父が、君の父親の子かどうかってことさ」

血が繋がっているかいないかは重要だ。タカシと魔王はもはや親戚という関係からは逃げられないが、血縁関係ではなくなる。

「祖父は俺の父に、祖母と一緒になる前のことは殆ど何も語らなかったと聞いている。俺の父が成人してまもなく祖母が亡くなった時に姿を消したそうだから」

「いけ好かんやつじゃ」

魔王が憤慨するのをキミヤは諭すようになだめた。

「君もまだお腹にいる時にいなくなったそうだね」

「うむ。おかげで顔もおぼえておらぬ」

「母親は？」

「難産だったそうじゃ。その後、魔王を放棄した父に代わって再び魔王となった祖父の元で育った」

魔王はひざを抱え、ふつと星の見えない明るい夜空を見上げてみ

た。

「ワシには両親というものの記憶がないのじゃ」

「そうか」

ただ、と魔王はキミヤをにらんだ。

「別にそのことを負い目に思ったことはない。実の両親より素晴らしい祖父に育てられたのじゃからな」

【血名の繋がり】

【血名の繋がり】

「それはよかった」

キミヤがつぶやくように、魔王に微笑んだ。

「うむ。祖父は立派な方じゃった」

「1人でも尊敬出来る大人がいるということはいいことだ」

キミヤは嘆くように、自嘲するようにそう言つてのけた。

「……じゃが、イエルア、ミヤメーアにも感謝していないこともない」

「うん？」

魔王がふんと鼻息荒く、少しだけ感慨深そうに言つた。

「ワシがこうしてこの次元に来られたのは、同じようにイエルア

ミヤメーアが成功したからやもしれぬ」

キミヤにはそれがどういふことかわからない。魔王は偉そうに、かつ認めたくないように空を見上げた。

「名を受け継いだワシだからこそ、成功したのやもしれぬ」

その名を分け与えるということは眷族や魔王にとってはただそれだけのものではない。確かに親子であるという共通の何かを、名と共に魂に与えることでもあるらしい。

「いいな。そういうの」

「あくまでもついでじゃがな。成功したのは祖父の日頃の教えが良かったからじゃ。そうに決まっておる」

あの時は魔王もすべてを尽くした上で必死だったが、それでも成功するかなんてわからなかった。それでも、唯一の成功例は、魔王に名を分け与えた魔王の父親だけだ。

「……魔王になってから、何もかも捨てたんじゃからイエルア、ミヤメーアなどという者は関係ないんじゃない」

「そうかな」

「そうじゃ！」

そう力強く断言し、意地をはる魔王にキミヤは暖かな視線をやった。

【ソロモンや獣医に出来て魔王に出来ぬわけがない】

「ところで、俺はどうやって見つけ出した？」

「簡単じゃ」

魔王はすつと上に向けて、指を差してみせた。見上げてみても何も無いが、聞き覚えのある何かがいる。

「まさかとは思うんだが」

「うむ」

バサバサツと羽音とともに黒い体を持った都会の鳥が魔王の肩に舞い降りた。その様はまさに絵に描いたような魔王降臨の図だった。

「カラスじゃ」

夜目は利かないし夜行性でもないが、その数は多い。人海戦術ならぬ鳥空戦術で、それらしい人影を探させたのだ。

「知力も高い。意思疎通はなかなかたやすかったぞ」

ぎゃあぎゃああと鳴くカラスは当然だ、と言い張っているようでおかしかった。しかし、それだけでは見つからないだろう。

「それと街中の監視カメラものぞかせてもらった。どちらも賭けじゃったが、平民より御しやすかったのだな」

「どうやってハッキングを？」

「パソコンというものでな。普段は図書館のものを使っんじやがのう」

魔王はしみじみと、カラスにしばまれながら自らの機転の良さと功績を語った。

【こんな時間なので今回は】

【こんな時間なので今回は】

「もしもし」

公衆電話から魔王は電話をかけた。最近では携帯電話の普及でその姿を消しつつあるが、携帯電話を持たない者や緊急時などにはやはり重宝する。

「ワシじゃ」

コール音数回で向こうと繋がり、魔王は振り込め詐欺並みの呼び出しから話す。相手も応答に少しだけ詰まった。

「生徒ならばクラスと名前を言いなさい」

「魔王じゃ」

他にない名前なので電話の相手もすぐに特定出来たようだ。

「こんな時間にどうした。何かわからないところでもあったか」

魔王が電話をかけた相手は数学の武島教師だった。数学の授業においてわからないことがあれば、あらゆる通信手段を通しての24時間質問を受け付けると言う堅物教師だ。

「パソコンを貸してくれ」

「……何を考えている」

この時間に電話がかかってくるのは受験生などで珍しくないそうだが、パソコンを貸してくれというのは初めてだったようだ。武島教師でなくてもいぶかしむだろう。

「時間がない」

「漫画喫茶などにあるものでは駄目なのか」

「金がない」

「……。次の数学の時間、あたることをおぼえているな」

「無論、やってある」

一拍置いてから、魔王は武島教師が上着を羽織る音をその耳に聞いた。

「事情を話せ」

「貸すか貸さぬか」

魔王の言葉は単刀直入で簡潔だ。それ故、時間や嘘がないことをひしひしと相手に伝えさせられる。

「……どこにいる」

「物分りが良くて助かるぞ」

今かけている公衆電話の位置を魔王は武島教師に伝えたと、7分で行くと返ってきた。

「わかった」

そこでちょうど10円玉が切れた。確かに魔王には時間がなかった。

【教師をパシリにするとは】

【教師をパシリにするとは】

「無茶をするものだ」

それだけではない。武島教師のパソコンのスペックがどれほどのものかはわからないが、それで出来る限りの街中の監視カメラの映像管理をしているところへのハッキングすることもそうだった。

「バージョンアップはワシの身体を通せば何とかなったしのう。」

平民より支配の境界線がはっきりしているぶん、楽だったぞ」

「まあ確かに、プログラムに心や感情の概念はないからね」

しかし、監視カメラの映像を盗み見たとしても、その殆どが建物内部しか映していないはずだ。殆ど労力の無駄だったろう。

「じゃから屋外はカラスに、屋内は監視カメラと分担したのじゃ」

「……そんなので見つかるとは思わなかった」

起き上がりながらキミヤは少し落胆した声でつぶやいた。ぞんざいで穴だらけな作戦だったので余計に屈辱的だったのだろう。

「タカシのいる高校への入学もそれでやったのか」

「そうじゃ」

どこかの中学校と役所の情報管理へハッキングし、ありもしない魔王の在籍データをでっち上げる。それから高校への入学テストを通して、みごと転入してみせたわけだ。

【違法行為を自慢するわけでも肯定するわけでもなく】

「戸籍を持たない人間がいらないわけではない。しかし、どんな理由をつけようと不法行為だ」

キミヤの言葉は冷たい。

「入学金は株取引で得たものじゃが、確かにそれはどうしようもなかった」

「年齢的には株もアウトだが」

「う」

情報管理をパソコンにほぼすべてを任せつつある現代社会において、どんなハッキングでも情報改竄でも可能とする魔王の力は相当な脅威だ。

「まあ、しごく全うな手段で生きようとしてることはわかった」
それでも、魔王は違法行為に触れなくても何とかなることは自らの手できるように努めてきた。それは今までの話からうかがえた。

「許されるわけでもないが」

「重々に承知しておる。たとえ、もし他の者が同じことをやっているからといって、ワシもやっていいという道理にはならぬ」

それはアルデピマジウムイダにおいても通じる道理じゃ、と魔王は言う。

【知るも知らぬも幸せの道】

【知るも知らぬも幸せの道】

「……じゃが、ワシはあそこから追い出されなくなかった」

次元の壁を跳び越した先で初めて触れたぬくもりを、一度自らを受け入れてくれたぬくもりを、魔王はどうしても手放したくなかった。今ここでそれを逃がして、次にまた触れられるものとは限らない。

「君はまだ子供だ」

キミヤは魔王の心中を察したように、それをすくい上げるように言葉をつむいだ。

「大人に頼りなさい。もう一度すべて話せば、きっとわかってくれる」

ほんと魔王の肩にキミヤは手を置くと、魔王が真っ直ぐな目で見らみつけてきた。

「おぬしはどうしてあそこから離れようとする？」

【愛妻子からひのき風呂や土地まで】

麻島青果店には今の世の中で思うように手に入れようとしても、なかなか手に入らないものばかりが置いてある。魔王でなくても、羨ましくもまぶしい。

「守るべき家族なんじゃろ」

キミヤは魔王の肩から手を離し、その目を見据える。

「ほぼ毎月、仕送りはしている。自動的に送金してもらえるようにしている」

あくまで淡々と、感情を露にせず答えた。

「でなければ、あの店はやっていけないだろうから」

「ミカコはその金に一切手をつけておらぬぞ」

ケーキショップ猪熊で危うく口を滑らせかけたが、魔王は一度だ

け魔王の力を駆使したハツキングで麻島家の貯金総額などを調べたことがあった。

「……そうか。やっぱりか」

「おぬしのやっていることは自己満足にしか過ぎぬ」

魔王は昨日の、ミツルとその両親のことを思い出した。

「金を与えればいいというものではあるまい」

「そうだな」

キミヤの視線は見据えていた魔王の目の後ろを、遠くの方へと移っていた。

「それでも、離れなければならぬ理由とはなんじゃ」

すつと魔王から視線をはずし、キミヤは流れる川を見た。

「俺の祖父、雨矢を捜してるんだ」

【運命と錯覚はきっと同じところで感じるのだろう】

【運命と錯覚はきっと同じところで感じるのだろう】

「ワシの父をか」

ややこしいな、とミキヤは真顔でつぶやいた。

「そう。ずっと捜してる」

「音信不通にしてまですることか」

「することなんだ」

魔王の鋭い言葉にキミヤも同じように、強く返した。それから特に同意を求める口調ではなく、諦めたような口調で続ける。

「わからないだろうな。きっと」

他人には理解出来ない。そう言いたいのがすぐにわかる言葉だった。

「……ワシの父もそうじゃったんだろうか」

キミヤが探す雨矢も胎児だった魔王と母、現魔王の地位や故郷である次元を顧みずに捨てた。少しでもためらいがあれば、踏みとどまることも出来たはずだろう。しかし、それは事実ではなかった。「かもしれない。そしたら、俺は間違いなくその血をひいているんだろうな」

その魔王のつぶやきにキミヤが応え、川の流れを視線で追いかけて、そのまま吸い込まれるように夜空を見上げた。

「星が見えないな。ここは」

夜明けにはまだ遠い。それでもネオンや排気ガスで、何億光年もかけて届く星の明かりを台無しにしていた。

「7年。世界を見て回るにはあまりに短かった。それでも、世界を知ったかぶるには割と十分な時間だった」

明るい夜空を見上げながら、キミヤは立ち上がった。

「今も世界では戦争や内乱が絶えないし、飢餓で亡くなる子供も大勢いた」

右手で作ったこぶしを左胸に当て、キミヤは目をつぶり感慨にふけた。その感情が自己満足でしかないのも理解している、そう小さくつぶやいた。

「何もしてあげられないわけじゃない。それでも、個人で出来ることは限られている」

個人では救えないものも組織や大勢なら救えることの方が多い。しかし、大がかりな組織や大勢になれば意識がまとまらず・方向を見失うなどして、救いまでの行動が遅くなるか移せなくなるという事態にも陥りやすい。

「ツライ世の中だ」

思うようにいかないのは当然だから、歯がゆかった。それでも無力さをなげいたところで、何も始まらない。

「それと比べると俺が祖父を捜す意味なんてないに等しいね」

キミヤは肩を落とすと、魔王が切り返した。

「では何故」

「わからない」

自信を持って言う言葉ではないが、それには迷いもなかった。

「本当に衝動的だった」

ふと突然、自分がしなければいけないことを見つけてしまったのかもしれない。

「もうよい」

魔王はつまらなさそうに、悲しげにそう言った。キミヤもまたほんの少しだけ眉をひそめ、微笑んだ。

【そしてキミヤは】

【そしてキミヤは】

「行くのか」

「ああ」

キミヤは土手をのぼり、再び道の方へと歩いて戻っていった。魔王もそのあとを追うが、止める気配はなかった。

「……止めないのか」

「わからん」

魔王は正直にそう答えた。タカシやミカコのことを考えれば力づくで止めるべきなのかもしれないが、それがタカシやミカコが望む・正しいこととは限らなかった。

「いつだって正しかったのはお金も権力も持たず・思わぬ、世間を知らない子供と童心にかえった老人だ」

キミヤは魔王に背を向けたまま、その言葉を贈った。

「そして子供には老人にはない可能性と未来がある」

振り返らず、キミヤはその先へ歩みを止めなかった。魔王はただ立ちつくし、それを見送っていた。

「魔王である君には気の遠くなるほど長い未来が待っている」

左足に重心をのせ、キミヤはくるりと回って一瞬だけ魔王と向き合った。

「それに腐らず、思うように生きるといい。それが正解だろうか」

魔王は再び歩き出したキミヤに追いつかない程度に歩き始め、そのあとに続く。キミヤは静止を求めるわけでもなく、ピンと右手の人差し指を立てて後ろの魔王に見せた。

「それともうひとつだけ。もし君の知る者達が勇者というなら……それは魔王ではなく、今のどうしようもない世の中に対し立ち上がろうとする者だと思う」

キミヤは声に出さず、表情だけで笑った。それは後ろを歩く魔王にでも、その雰囲気でわかった。

「嬉しいことだ」

それと同時にキミヤは肩を落とし、少しだけ視線を上にした。その先に何が見えているのか、魔王とは違った景色が見えているに違いなかった。

「今を変えようとし、変えるだけの力と思考を持つ子供を若者へと育み、導いてやるのが大人の役割だというのに……情けない限りだ」

子は親の背中を見て育つとよく言うが、最近ではろくな親がいない。キミヤは俺がその最たるものだが、と自嘲した。

「そう悲観することではない。良い教師はいないこともなし、おぬしらだって立派なものじゃぞ」

「反面教師でか」

魔王は子は親がいなくても勝手に育つものじゃ、と微笑する。

キミヤはそれもそうか、と同意した。

【移り行く世代が時代の節目】

「……いつからだろうな。子供の語る正義が大人の騙る正義になってしまうのは」

キミヤがそう語りかけると、魔王の足が止まった。構わず、キミヤは歩き続ける。

「また寄るよ」

「次からはこまめに連絡を入れろ」

魔王の言葉に、別れに手を振っているキミヤは淡々とした口調ではっきりと言った。

「それは難しいな。音信機器のないところも多いから」

もう魔王のことを振り返ることもなく、キミヤの姿は明るい闇夜にまぎれつつあった。

「タカシとミカコのこと、よろしく頼むよ」

「ケーキ3つぶんの礼だけ、よろしく頼まれてやろう」

それ以上のことになれば、あとで請求を回すぞと魔王はおどけて脅した。キミヤは笑うような高い口調で、短く返した。

「充分だ」

それからキミヤの姿を見た者はいない。魔王も、誰1人として見るものはいなくなった。

【9月15日】

【9月15日】

「死んだか、ワシの目にも届かぬところへ消えたか。さては本当にイエルア^{ミヤメーア}だったのやもしれぬ」

魔王は残念そうでもなく、ただ思いついただけの可能性を口にした。

「今となつては、もうわからぬ」

「そうか……」

「ただ『私』ではなく『おれ』という辺り、口調だけはおぬし同様なかなか若々しかったぞ」

「そこかよ」

タカシはひとつ息を吐いて、自らの足元を見つめた。それから店先の横に置いてある2代目の長イスに座って、緑茶と猪熊の和菓子^{ワガシ}を食べている魔王へと視線を移した。

「あれから12年か」

【矢のごとく歲月過ぎて】

「タカシはだいぶ老けたのう」

魔王は壮年から中年に移りかけているタカシを見て、しみじみとつぶやいた。口調はともかくとして、青春盛りの高校時代と比べ、肉つきから顔までだいぶ変化したものだ。

「それは普通だ」

「そうじゃな。タカシはどこまでいっても平民じゃった」

「喧嘩売ってんのか」

タカシが高校時代の調子でそう返すと、不敵に笑う魔王は軽く応えた。

「おお、売るぞ。天下の魔王様^{カエル}に買えるものならな」

魔王の、高校時代の調子で返され、タカシは少しだけ悔しげで諦

めたような表情を見せた。

「……12年前なら、確実に買ってるがな」

「じゃな。今は本当にワシの天下じゃ」

くくつと愉快そうに、魔王は笑った。

「今年でちょうど10年。ワシがこの地球を支配してからのう」

【魔王による地球支配】

【魔王による地球支配】

「嘘みてーな話だ」

ふうっとタカシは肩の力を抜き、魔王に構わず一服した。今は味も香りもそのまま依存性ゼロの無害な煙草が出回っていて、喫煙も禁煙もたやすくなった。しかし、それ以前の喫煙者はどこか味気ないものがあると不評をもらしている。

「事実じゃ」

ただの真実を、魔王は語っている。そこに改竄の、誇張する余地はどこにもなかった。

「そもそも魔王のワシに支配出来ない方がおかしいじゃろ」

「核ミサイルを素手でとめたよな」

「アレが平民の最終兵器じゃったとは思ってもよらなかったぞ」
人類の最後の抵抗とされた事件を、魔王はアレ呼ばわりだ。その時点で、既に明確な力の上下関係がわかる。

「魔王にあの程度の武器が効くものか」

あつさりとそう言う魔王に、当時の人間は身震いしたものだ。魔王を接してその破天荒さに耐性がついたと自負していたタカシやミッルでさえ、その映像を見た時には腰を抜かした。

「この世の終わりが来たもんだと思っただが」

頭の悪いタカシでさえ、地球全土の政権が人類から魔王に移った時のニュースで語られた言葉やテロップを一字一句覚えていた。それだけ衝撃的なものだったが、今となってはひとつの思い出や歴史の通過点になりさがっている。

【魔王による地球支配10周年の感想は？】

「ま、お前が支配してから……少しは住みやすくなったかもな」
タカシは正直にそう告白した。おそらく、今地球にいる人類から

生物の9割9分は強制も圧力も無しに同じ答えを言うだろう。

「ワシは賢魔王の魂を継いだ魔王ぞ。この程度の統治なぞたやすいわ」

そう言えるのも魔王自らの足で出向き、各地で起こっていた内戦や戦争を鎮め、飢餓に苦しむ地域を飽食の国から援助させ、はびこっていた不正を一からすべて正す。誰もが一度は思い描き、夢に見ただけだった平和に近づけた結果だった。

「なに、ただワシの食い扶持を無用なことで減らしたくなかっただけのことよ」

【平等の基本を最初から始めただけ】

【平等の基本を最初から始めただけ】

「頭や幹部をすげかえたところで何も変わらん。未だに国境や領地で仕切りを作るような人が人を裁けるか」

人が人である限り、人に対する心を持つ限り、人は同じ人には平等になれない。感情を持たないロボットのプログラムを組むのも人間であり、自然物でなければどこかに必ず人の手が介入する。

「変えるには、もっと根本から改めねばならないのじゃ」

体裁や体面、面子や矜持を守るために不正を隠蔽し、露見したら謝罪と解雇だけで済ます組織ほど長く保つ。そこに国家が絡んでくれば尚更のことだ。

「根本から組織改革。それが出来るのはワシだけじゃ」

魔王の超寿。それは平民を導いていくためにはそれだけの時間を要し、それを可能にするための進化といえた。

「ワシ一人がすべての抑止力になって、戦争も不正も一応は止まった。あとは人自身が自らの手でそれを当たり前と思う世界へと変えていかなくてはな」

人はやれば出来る。だから、その為に世界は一度、今まで人々が何をなしえてきたのかを振り返り、見直す必要があった。魔王の支配はその猶予だ。

「それが、ワシがここに来た意味になればと思う。ワシがこの次元で生きることを許された礼になればと思う」

「なるもんかね」

その理想は魔王が支配者になった時に世界中に発信された言葉だ。それでもタカシはいぶかしんだ。

「人間に自由を、っていうのもいるぞ」

「仕方ない。所詮、ワシはよそ者じゃ」

魔王はふと寂しげに、少しだけ背中を丸めた。高校時代から変わ

らず小さい背丈なのにやけに大きな背中を持つもんだと、タカシは微笑した。

「ワシがもし万一、いや兆一、道を踏み外した時は勇者が使命と意志を持って殺しに来るじゃろう」

「それもどうか」

タカシは煙草を常備している携帯灰皿のなかで潰して消した。魔王の前でポイ捨てしてみせる勇氣はないし、常備している時点でその気もないのがわかる。

「大人になっちまったから」

「それも関係ないぞ」

ふっと、魔王は不敵に微笑んでみせた。

「魔王を殺しても、殺人罪にはならぬから」

「そうだな」

高校時代ならいざ知らず、人外であることを世界に公表した魔王を守ってくれる法はどこにも存在しない。魔王は一代限りと決め、その自身の為に新たに創る気もなかった。おかげで暗殺未遂は今も絶えない。

「ワシはまだその方が気が楽でいい」

【罪は罪】

【罪は罪】

魔王は高校を卒業し、地球支配にかかる前に警察へ今までのハッキングなどの罪を告白しに行った。すべての罪を償ってから、この地球支配と向き合いたかった一心の決意だった。

「……やりきれなかった」

今までの経緯を警察に話してみれば嘲笑され、ろくに対応することなく追いつ返された。拳句の果てに、どうしても証明したいなら今の場でやって見せろと言うのだ。

「新たに罪を犯せ。そう言われたのじゃ」

魔王は拒否した。もうそのような目的で使わないことをはっきりと言つと、警察は丁寧に精神病院の連絡先を教えてくれた。

「やりきれなかった……」

それと同時に、またひとつ指し示さなければならぬことも見えた。魔王はそう語った。

【気を取り直して振り返る】

「しかし、おぬしとこう話すのは何年ぶりか」

魔王が楽しそうにそう訊ねると、タカシは首をかしげた。

「2・3年つてとこじゃないか。こっちはお前を新聞記事でよく見るけどな」

タカシは店を休み、ミカコ達を連れて久々に温泉へ行つた時、偶然に周辺調査をしている魔王と出くわしたのだった。示し合わせたわけでもなく、互いに驚いたものだが、その時の魔王の方は多忙で4分しか話していられなかった。

「遠く離れてしまったようで寂しかったか？」

「別に」

多少は感じるところはあったが、寂しいとか懐かしいというよう

な感情が出てこなかった。魔王は口を尖らせた。

「つまらん男じゃ。昔も今もその中身は変わらん」

「うるせーよ」

「その口癖も」

魔王は何故か嬉しそうに、タカシに愚痴った。

「最後までお前、呼び捨て。一度たりとも様を付けてはくれんかったしのう」

「だから、いつまでも根に持つんじゃねーよ」

「そのくせ、生徒会長には様付けするし」

「まさか、それだけでおれに絡んできたのか」

「その通りじゃ」

魔王が胸張って言うと、タカシは盛大なため息吐き、自らのこめかみを押さえた。

「……これが地球支配してる魔王かよ」

「悪いが」

ふんと鼻息を荒く出す魔王に、タカシは苦笑した。

「お前も変わらないな」

そこまで言って、タカシははたと気がついた。

「だから、こうしてられるのか」

「その通りじゃ」

魔王は高校時代と変わらぬ表情で微笑んでみせた。

【事実は小説より奇なり】

【事実は小説より奇なり】

「そうそう、もうひとつ思い出したぞ」

「んだよ」

子供のようにはしゃぎながら、魔王はタカシに言っただけだ。

「何故、ワシは小説がつまらなかったのか」

「はあ？」

今まで座っていた魔王が立ち上がり、改めてタカシの方を向いた。
「小説は作家が生み出した登場人物から成り立ち、それらに合わせたような話が進んでいく。伏線も出来る限り回収されていくのう」
それはどんな作品にでも言えることであり、基本中の基本だ。魔王が読んできたものの殆どがそれに当てはまった。

「しかし、現実には生きるもののように気まぐれや変化を殆ど見せない。出てくるものの今までのすべてが語られることはまずない」

魔王は眉を少しだけひそめ、つまらなさそうに言い張った。

「予定調和。どんな結末であれ、終いには必ずよく出来た話になる」

いかに話をうまく、きれいにまとめるかでその作者の技量と売り上げが決まるといっても過言ではない。更に日本人は娯楽の他に感動が読者が知りえなかった情報や為になる何かを求める傾向にあり、作家に責任感を持たせるものじやと魔王は長々と分析する。

「しかし、作家の思い通りになる小説とワシ達の現実とは違う。登場人物も展開にも終わりが無い。意味があるものだけとは限らず、いつまでも先が見えない」

楽しそうに、雄弁に語る魔王をタカシは面倒臭くて止める気が起きなかった。そういった長話のなかで眠くならなかっただけ、高校時代から成長したといえる。

「結末を先にのぞくことも出来ない。自分自身を置いて勝手に先

へ進む。誰かが死んでも、現実には止まらない」

魔王はにやりと笑った。

「誰にも文句がつけられない。現実は無責任じゃからのう」

結局、理不尽も不条理も納得して進んでいくしかないのだろう。

何が起こっても、最後に決めて実行するのは自分自身であり、その自らは詰まるところ作家でもあり登場人物でもあるのだ。

「じゃから現実面白い」

小説は決して現実を越えることなく、どれだけ趣向や設定を凝らしても現実の域を出ない。現実以上に面白くは決してなりえない。

「そう思うワシには小説がつまらなくて当然じゃったというわけじゃ」

そこまで聞いてやったタカシは、ぼつりとつぶやくように言った。

「というより、異次元人に地球を支配されたなんていつのSF小説だ」

「今時、もうはやらんな」

「お前が言うな」

「そうじゃった」

これが現実というのだから、なるほど、事実は小説より奇妙でどうしようもなかった。

【他に話すことは】

【他に話すことは】

「あつたか？」

「ねーよ。こっちの都合も考えねーで、いきなり来やがって」

タカシがぶつぶつと文句を言っていると、魔王は反省の色を見せることなく胸を張った。

「ワシは魔王じゃからな」

結局、そういう魔王自身も根本は変わっていなかった。タカシはため息さえ出なかった。

「第一、暇そうにしてるではないか」

「うるせーよ」

考えてみればおかしな話だ。この地球を支配している存在がただの八百屋にいるというのに、誰１人として集まってこなかった。それとも、もう魔王の珍しさはパンダ以下なのだろうか。

「ま、それもワシが少し人の流れを操作したからなんじゃが」

「営業妨害じゃねーか」

通りで客が来ないわけだ。魔王はゆっくり話がしたかったからじや、と言うが麻島青果店としては死活問題だ。

「ミツル達にも会いたかったのう」

相変わらずマイペースに好き勝手ばかり言ってくる魔王に、大人になったタカシは自らを抑えた。

「私以外、他のヤツらは今はいねーよ」

「そういえば、そうじゃったのう」

魔王は残りの緑茶を飲み干し、底にたまった茶っ葉の苦さに顔をしかめた。

「懐かしくは思えんがな。なにせ、ワシの寿命は１０００年じゃ」
超寿のぶん、１０年前以上の記憶もそれだけ鮮明におぼえていられるのだろうか。それでも魔王の目は少し遠くを見ていた。

「……お前はあの時間を過ごすことに意味があつたのか？」

高校を卒業して、魔王はおよそ4ヶ月足らずで日本を制圧した。その後、1年と半年ほどで世界の8割の国々を支配下に置いたのだから恐ろしい。

「意味、か」

そんな魔王だから、高校に行く意味などなかったのではないかとタカシは思う。逆にタカシやミツル達のような行動を制限する足かせを作ってしまっただけのようないふかしの気がしてならなかったのだ。

「あつた。確かにあつた」

「そうは思えん」

魔王は確かにそうつぶやき返したが、タカシはいぶかしんでいる。事実、そのおかげで何十回も殺し屋やその類の者に殺されかけ、そのぶんだけ魔王達に救われたのだ。そう思わない方がおかしい。

「それは心外。人を行動で判断するな」

「普通は外見だろ」

タカシの突っ込みを無視して、魔王は店の壁をなでるように触れた。

「しかし、まあ」

魔王が触れることで、壁のひび割れていた箇所が修復されていく。今や世界全土で魔王は、平民からのエネルギーを受けてこの魔王の力を使うことが出来る。

「一時は潰れかけた店を、よくまあ立て直したものだじゃのう」

触れていた箇所だけ新築同然の色合いや状態になり、なんとも目立つ。タカシが全面的にやれ、と言ったが「平民からの税金を無駄遣いすれば怒るのに、平民からのエネルギーは良いのか」と返されてしまった。

「ま、大したものじゃ」

「まーな」

「おぬしは褒めてないぞ」

「殴るぞ」

タカシが真顔で握りこぶしを固めると、魔王は「冗談じゃ。気にするな」とあっさり流した。

【随分と話し込んだ】

【随分と話し込んだ】

「さて、帰るとするか」

魔王が何の末練もなく、さっさと麻島青果店から歩いて離れていく。勝手に現れたかと思えば、今度は別れもぞんざいに立ち去る気らしかった。

「お前、本当に何しに来たんだ？ 営業妨害か」

「少し昔話をしたかっただけじゃ。茶をすすつてな」

タカシの方を振り向きもせず、魔王はそう応えた。タカシは微笑した。

「年寄りくせえなあ」

「ふん。平民のおぬしに言われたくないわ」

あの頃とまったく変わらない姿で魔王が言う。むしろ魔王の年をとった姿が想像つかない程だ。

「……わざわざ親父の話、ありがとな」

「おぬしは消えてくれるなよ」

左足に重心をのせ、魔王はくるりと回って一瞬だけタカシと向き合った。

「では、ツレとミカコによろしくな」

「ああ。伝えとくよ」

高校卒業とほぼ同時期にタカシが結婚すると決まった時には、誰もが驚いていた。不良にありがちな出来ちゃった結婚ではないが、子供はもう2人もいるところにまた歳月を感じる。

「大事にしるよ。タカシには出来すぎた、不相应な相手じゃからな。いつ愛想つかされてもおかしくはないぞ」

「うるせーよ」

タカシは口を尖らせ、そう返した時には……魔王の姿は往来のどこにも見えなくなっていた。

「無駄な力使ってんじゃないか。自重しろよ」
悪態をつくように、タカシはそうばやいた。そして、何故か客足は戻らないままだ。

【夏野菜の季節が終わり】

【夏野菜の季節が終わり】

見送りのままならぬまま、タカシは再び煙草に火をつけた。それから魔王が座っていた長イスに腰をかけ、視線を店先に注いだ。多忙か別の理由があつてかタカシ以外の誰とも会わず、待たずにして帰ってしまった。

「もうすぐ秋か」

季節が移り変わって、これからもつと茄子がうまくなる。サツマイモも仕入れ時だ。そうしたら裏手からドラム缶を出して、許可を取って、焼き芋を路上で売りに出すことにしよう。

「……変わらねえなあ」

魔王がこの次元に来てからも、あの時のタカシの生活は変わらなかった。朝起きて、学校に適当に行つて、帰ってきて、寝るとまた朝が来る。その繰り返しだった。地球の人口がたった1人増えただけに過ぎなかった。

「タカさん、これいくらー」

常連のおばさんだ。魔王が帰ったせいか、ようやく客足も戻ってきたらしい。

「さて、今日を続けるとすつか」

日常という繰り返しだったのは変わらないけれど、その中身は良くも悪くも変わったように大きく動いた。慣れない内は戸惑いもあった気もするが、1ヶ月もしたら以前と同じように・当たり前のものでしょうか思えなくなった。10年以上経った今では、記憶と経験のひとつとして処理されている。

「へい、らっしやい」

大人になって、世間を見て、知ったことがある。人間は慣れていく生き物で、変わっていくことが変わらないことになっていく。そして結局、変わらないことが当たり前前に思えることが一番であるこ

とだ。

「毎度どーもっ」

何も変わらない日常を生きられる幸せと喜びをタカシは店頭に並んだ旬の野菜を見て、しみじみと思うのだった。

【夏野菜の季節が終わり】（後書き）

これでひとつの話は終わりです。

今まで読んでくださって、本当にありがとうございます。

この後、少しだけ番外編を書いていきます。

読みたい登場人物のリクエストなどがありましたら、感想・批評と共にメッセージお願いします。

『タカシと愉快な学友共めひれ伏すがいい。徒然なるままに。』

<http://ncode.syosetu.com/n59111d/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2566d/>

タカシと愉快的な学友共めひれ伏すがいい。

2010年10月14日12時03分発行